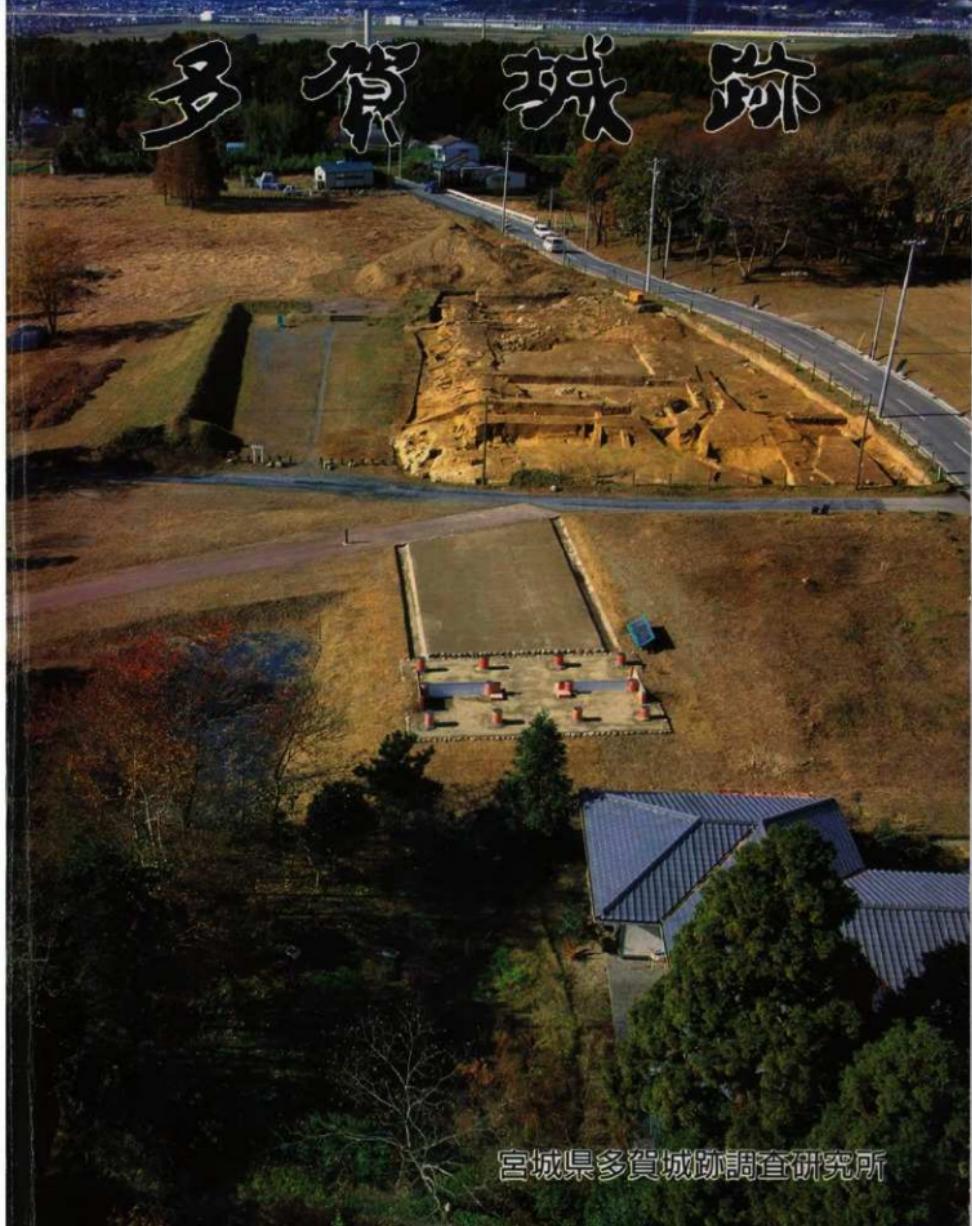


宮城県多賀城跡調査研究所年報1994

多賀城跡



宮城県多賀城跡調査研究所

序 文

当研究所では広大な特別史跡多賀城跡附寺跡を効率的に解明かつ活用するため、学術的な課題と史跡公園化事業とを整合させた発掘調査 5 カ年計画を立て、これを積み重ねる方法で調査してきている。

これまでの調査で、政府や外郭区画施設の構造と変遷をはじめ、政府を取り巻く外郭地域の丘陵上の平坦地には実務官衙の建物跡が広く分布することが確かめられていた。そこで、平成元年を初年度とする第 5 次 5 カ年計画からは、外郭東門の西南に展開する城内最大の平坦地である大畠地区のうち東半部の地域を対象として、国府研究では必ずしも明らかでなかった実務官衙の構成と変遷を解明することにした。その結果、9 世紀初め頃を契機に官衙建物が充実し、建物配置が定型化することが知られるようになった。

平成 6 年を初年度とする第 6 次 5 カ年計画では、大畠地区西半部の解明を目的とした。大畠地区では奈良時代と 9 世紀以降の東門が位置を異にして存在する。また、東門から通ずる城内道路に面する大畠地区官衙の北門や材木塀も過去の調査で判明していることから、この官衙は城内でも重要な役割を果たしたことが推定されていた。

本年度は平安時代の東門から延びる築地の北半部を対象に調査した。東半部、西半部を含めた大畠地区官衙全体の構造変遷の鍵となる地点であるからである。この地点については昭和 46 年に調査したことがあったが、当時、民家が存在していたため部分的な調査に止めざるを得なかつたという経緯もあった。調査の結果、奈良時代の城内道路跡と平安時代の築地塀跡を層位的に検出し、また、北東隅の櫓跡の構造と変遷なども明らかにすることができた。

現状変更に伴う調査も多々あった。内容は住宅の増改築、浄化槽の設置など生活改善に関わるものや史跡整備地の事前調査などもある。民家が集中する地域では遺構・遺物の残存状況の把握が難しい。住民の生活改善と遺構の保存との調整をはかり、新たな管理・活用・調査計画の立案に向けての資料を得るために、必要に応じて積極的に調査を実施した。

史跡の環境整備事業も 5 カ年計画に基づいて実施している。今回は昭和 60 年から平成 6 年度までの第 4 次及び 5 次 5 カ年計画の整備目的・理念及び実績を掲載することにした。

本書は計画調査と現状変更に伴う調査、および環境整備事業の成果の一切をとりまとめたものである。

調査の全般にわたりご指導を頂いた多賀城跡調査研究指導委員会の諸先生や文化庁をはじめ、ご協力を頂いた多賀城市など関係各位に心から感謝申し上げる次第である。

本報告書が古代史とくに国府解明の資料として広く活用され、遺跡の保護と活用に寄与できれば幸いります。

平成 7 年 3 月

宮城県多賀城跡調査研究所
所長 進藤秋輝

目 次

I. 調査の計画	1
II. 第 65 次調査	3
1. 調査の目的	3
2. 調査経過	5
3. 発見した遺構と遺物	6
4. 第 13 次調査成果との比較・検討	42
5. 考察	49
III. 現状変更に伴う調査	55
五万崎地区	57
金堀地区	100
奏社地区	105
IV. 環境整備	111
1. 多賀城跡環境整備事業の概要	111
2. 第 4 次 5 カ年計画	113
3. 第 5 次 5 カ年計画	118
4. 地区別の整備計画・実施状況	122
5. まとめ	150
V. 付章	153
1. 関連研究・普及活動	153
2. 研究成果刊行物	155
図版	

例 言

1. 本書は平成 6 年度に実施した多賀城跡第 65 次調査・現状変更に伴う調査とともに、環境整備第 4・5 次 5 カ年計画の成果を収録したものである。
2. 発掘調査の測量原点は政府正殿跡 (SB150B) の身舎南側柱列の中央に埋設してある。原点と政府南門のほぼ中心を結ぶ線を南北の基準線、原点を通りこれに直交する線を東西の基準線に定めた。南北の基準線の方向は真北に対して $1^{\circ}04'00''$ 東に偏している。
3. 政府跡の遺構期と瓦の分類基準については、宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡—政府跡』図録編・本文編 1980・1982 による
4. 土色については『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄:1976) を参照した。
5. 本書の作成にあたっては進藤秋輝・丹羽茂・阿部恵・佐藤和彦・柳澤和明・白崎恵介の協議・検討を経て、執筆・編集は I を丹羽・柳澤、 II を柳澤、 III を丹羽、 IV を白崎、 V を丹羽が担当した。このうち、 III の奏社地区は丹羽・三浦幸子が共同で執筆した。
鉄製品の X 線写真・鋸落としは、東北歴史資料館保存科学研究科手塚均氏による。
6. また、本書の作成については、多賀城市教育委員会・矢本町教育委員会にいろいろ協力をいただいた。
7. なお、これらの作業を三浦幸子・管野礼子・佐藤良江・千田玲子・高橋由華子・酒井亜希子・千葉朱実・阿部笑子・柏倉尚子・鈴木敬子・鈴木文子・佐藤友子・小幡悦子・高橋幹子・齊藤篤が援けた。

I. 調査の計画

平成6年度の調査は、第30回多賀城跡調査研究指導委員会（1993）に基づく第6次5ヵ年計画の初年度に当たる。本年度は外郭東門地区と大畠地区北西部の2箇所を調査する予定であった。しかし、外郭東門地区の築地塀跡・櫓跡は立体的な遺構であること、平安時代に2度の改修が行なわれ、構造的にも複雑であることが調査を進めるにしたがって明らかになってきた。そこでその解明に全力を擧げることにし、大畠地区北西部については次年度に調査を実施することにした。

大畠地区は東西約200m・南北約300mと最も広い平坦地が確保できる城内最大の官衙と見られ、官衙の構成・性格・変遷がわかれれば、城内の他の官衙の究明にも役立つという意味で、第4次5ヵ年計画の第53次調査から、外郭東門を含めた大畠地区全体の解明に主眼を置いた面的な継続調査を実施してきている。

今年度の第65次調査は、平安時代の外郭東門に「コ」字形に取り付く築地塀跡の北側に調査区を設定し、奈良時代の道路、築地塀跡の構造・変遷、築地塀跡北側の状況などの解明を主な目的として実施した。

本年度の調査地区・面積・予算、および第6次5ヵ年計画は表1のとおりである。

年 次	発掘調査次数・対象地区	調査面積		予 算
平成6年度	第65次調査外郭東門北部	1,800 m ²	2,320 m ²	36,000千円
	現状変更に伴う調査	520 m ²		
平成7年度	第66次調査大畠地区北西部		3,000 m ²	37,000千円
平成8年度	第67次調査大畠地区西部		2,000 m ²	36,000千円
平成9年度	第68次調査大畠地区南部		2,000 m ²	36,000千円
平成10年度	第69次調査大畠地区南部		2,000 m ²	36,000千円
合 計	5地区		11,320 m ²	181,000千円

※ 平成6年度は実績

表1 多賀城跡発掘調査第6次5ヵ年計画



第1図 多賀城跡調査実施区

第6次調査区

II. 第 6 5 次 調 査

1. 調査の目的

外郭東門地区は多賀城の北東部にあり、平安時代の最大規模の官衙が展開する大畠地区の北側に隣接する（第1・2図）。

外郭東門地区については、「城門」（外郭東門跡）と奏社宮との位置関係が近世末の『仙台金石志』に述べられ、1889年に刊行された木版の『多賀城古址の図』にはS B 307 外郭東門跡と「コ」字形に曲がってそれに取り付く S F 300 外郭東辺築地塀跡の高まりが図示されていた。この地区で多賀城の東辺区画施設が「コ」字形に折れ曲がることや数個の礎石が存在することが古くから知られ、この地区は「東門跡」と通称されてきた。

外郭東門地区については、これまでに第1次5か年計画の第13次（1971年）、第4次5か年計画の第53次（1987年）、第54次（1988年）の3次にわたる調査を行なってきている。

第13次調査では、平安時代のS B 307 外郭東門跡と「コ」字形に曲がってそれに取り付く S F 300 外郭東辺築地塀跡の南側部分、および北側部分の北東屈曲部を主に調査した（『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1971）。S B 307 外郭東門が八脚門で掘立式→礎石式に建て替えられたこと、築地塀に3時期の変遷があること、S F 300 外郭東辺築地塀の北東・南東屈曲部に櫓があることなどが判明した。この東門については、多賀城創建期からこの位置で存続するものと当時は考えた。当時は築地塀の北側の地域については公有地化されていなかったため、この地区的様相はわからなかつた。また、北東屈曲部の調査も部分的な遺構検出にとどまらざるを得なかつた。

第53・54次調査では第13次調査区の東側を発掘し、新たに門跡を発見した。これには第50次調査で検出した奈良時代の外郭東辺築地塀が取り付くため、奈良時代と平安時代で外郭東門・外郭東辺区画施設は大きく位置を変えていると推定した（『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1988）。

この調査が契機となって、第5次5か年計画では大畠地区を主な対象として、第56・58～60・62～64次調査を実施してきた。その結果、以下のように大畠地区の官衙の規模・年代・変遷など、多くの事柄が明らかになった（第2図、付図）。

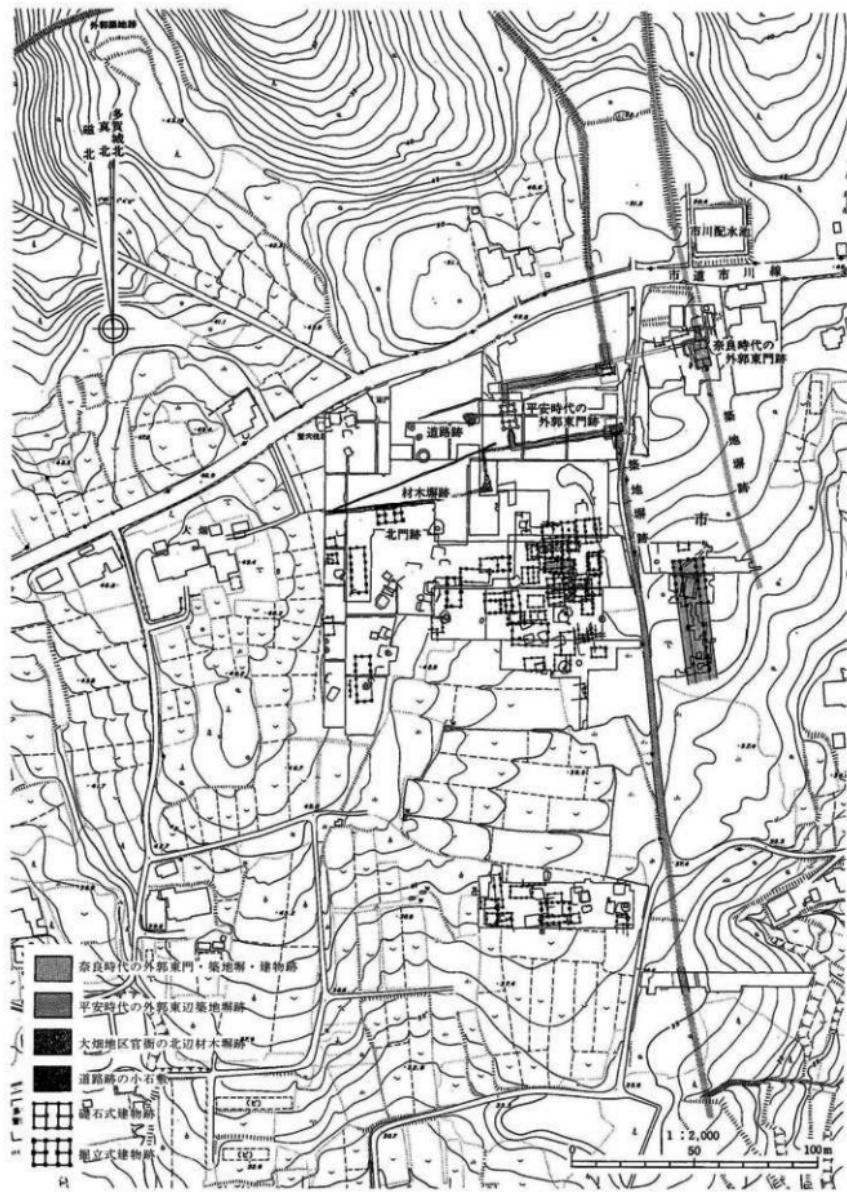
①約100棟の掘立式建物跡が検出され、これらの多くは9～10世紀のものであることが判明した。そして官衙が8世紀中頃から10世紀にかけて7段階に変遷し、奈良時代にはきわめて希薄であり、9世紀初頭以降に整備充実していることが把握された。

②平安時代の大畠地区官衙の北端と南への延びが押さえられた。官衙を構成する建物の北端は平安時代のS B 307 外郭東門に「コ」字形に取り付く S F 300 外郭東辺築地塀から南に約30m離れて始まり、そこからさらに南へ約170m以上延び、城内最大の官衙であることが明かとなつた。

③平安時代、特に9世紀前半の大畠地区官衙は北辺を塀で区画され、S B 307 外郭東門と「コ」字形に取り付く S F 300 外郭東辺築地塀を基準に造営されている。

今年度実施した第65次調査では、以下の諸点の解明を主な目的とした。

①SF 300 外郭東辺築地塀跡・櫓跡の規模・構造と変遷の解明。第13次調査でも今回調査した S F 300



第2図 外郭東門・大畠地区官衙の主要遺構

外郭東辺築地塀跡の中央部と北東屈曲部を調査したが、築地塀・櫓跡の規模・構造と変遷について不明確な点があった。

②S F 300 外郭東辺築地塀跡よりも古い奈良時代の S X 1772 城内道路跡の検出。第 53・54 次調査で検出した S X 1772 道路跡の延長上に今回調査した S F 300 外郭東辺築地塀跡があり、築地塀跡の下から S X 1772 道路跡の路面と S D 1773 道路北側側溝を検出できる可能性があった。

③これまで未調査であった S F 300 外郭東辺築地塀の北側地域の使われ方の解明。

以上のような問題点を解明するために、S B 307 外郭東門に「コ」字形に取り付く S F 300 外郭東辺築地塀跡の北側築地塀跡部分、およびその北側地域を対象として、既に調査を行なった第 13 次調査区の一部を含めた約 1700 m²の範囲に調査区を設定して調査した。

2. 調査経過

4月 26 日に器材搬入を行ない、5月 19 日に第 65 次調査区を設定し、調査の準備を行なった。6月 1 日より表土除去を開始した。調査区の西端にしか土捨て場を確保できなかつたため、調査区の東側から西側に向けて表土を除去した。7月 18 日までには表土除去をほぼ終え、S F 300 外郭東辺築地塀跡の北側から遺構検出と精査を開始した。

S B 307 外郭東門に「コ」字形に取り付く S F 300 外郭東辺築地塀は、「コ」字形の北側部分では、S B 307 外郭東門の北妻から北へ 9 m 延び、そこで東に屈曲して約 45 m 延び、さらに北に屈曲して北に延びている。S F 300 築地塀跡については、基礎整地・築地塀本体・積み手の違い・寄柱穴・添柱穴・工事穴・崩壊土など、築地塀の構築・崩壊に関わる諸痕跡を検出するように努めた。

その結果、本体は北西屈曲部から東に約 8 m、北東屈曲部の西側約 10 m と北側約 12 m まで残存すること、東西方向の築地塀では本体の残存部分の間は基礎整地のみ残存すること、北東屈曲部の本体残存部分の北側は基礎整地がわずかに残存するのみで、多くは基礎整地の下まで削平されていることがわかつた。また、築地塀本体の新旧関係が残存部分で検出され、S F 300 築地塀に A・B の新旧 2 時期あることがわかつた。

積み手の違いは S F 300 A 築地塀跡では北西屈曲部、北東屈曲部の西側で各 1 箇所、北側で 2 箇所検出され、S F 300 B 築地塀跡では北東屈曲部の北側で 2 箇所検出された。S F 300 A 築地塀跡の積み手の違いが北西屈曲部のすぐ東側で南北方向、北東屈曲部のすぐ北側で東西方向であることから、S B 307 外郭東門に接続して折れ曲がる築地塀がまず築かれ、そこからほぼ直角に折れ曲がるように東西方向の築地塀が築かれ、さらに北側の築地塀が築かれたことがわかつた。

また、北西屈曲部の東側と北東屈曲部の北側で両側に規則的に並ぶ柱穴を検出し、位置関係の検討から寄柱



穴・添柱穴・工事穴と推定された。

また、北東屈曲部の西側約 9 m の箇所に築地塀を横断する S D 2256 暗渠を検出した。この暗渠は 2 番目の時期の S F 300 B 築地塀の崩壊土よりも新しいことから、痕跡は認められないものの 3 番目の S F 300 C 築地塀に伴うものであることが推定され、S F 300 外郭東辺築地塀に新旧 3 時期あることがわかった。

北東屈曲部付近で S B 310・311 槽跡と S X 2255 土壙跡を検出し、槽跡に新旧 3 時期、土壙跡に新旧 2 時期あり、新旧 3 時期の S F 300 築地塀の北東屈曲部にそれぞれ槽が取り付くことが判明した（この槽跡は第 13 次調査では S A 310～312 としたものだが、今回の調査で規模・構造が判明したので S B に訂正する）。

南北方向の S F 300 築地塀跡の東側（城外側）でこれに伴う S D 2257 外郭東辺外側大溝、東西方向の S F 300 地塀跡の北側と南北方向の S F 300 築地塀跡の西側（城内側）でこれに伴う S D 2258 外郭東辺内側大溝を検出した。

また、S F 300 築地塀の基礎整地・S B 310 槽跡よりも古い溝を検出した。方向と位置関係から奈良時代の S X 1772 城内道路の S D 1773 北側溝にあたることが判明した。この結果、位置関係からみて東側に位置する S B 1762 外郭東門・S F 380 外郭東辺築地塀が奈良時代のもので、西側に位置する S B 307 外郭東門・S F 300 外郭東辺築地塀が平安時代のものである、とこれまでみてきたことを証明できた。これ以外の遺構の多くは多賀城廃絶後の新しい時期の溝・土壙・ピットなどであり、S F 300 築地塀の北側には官衙が広がらないことがわかった。

これらの遺構精査と併行しながら、断ち割り箇所の断面図作成を随時行なった。また、10 月 31 日～11 月 4 日には平面図作成のための測量基準杭を設置した。11 月 7 日から平面図作成を開始し、11 月 15 日までにはほぼ終えた。平面図のレベリングは 11 月 21 日より開始し、11 月 24 までには終えた。

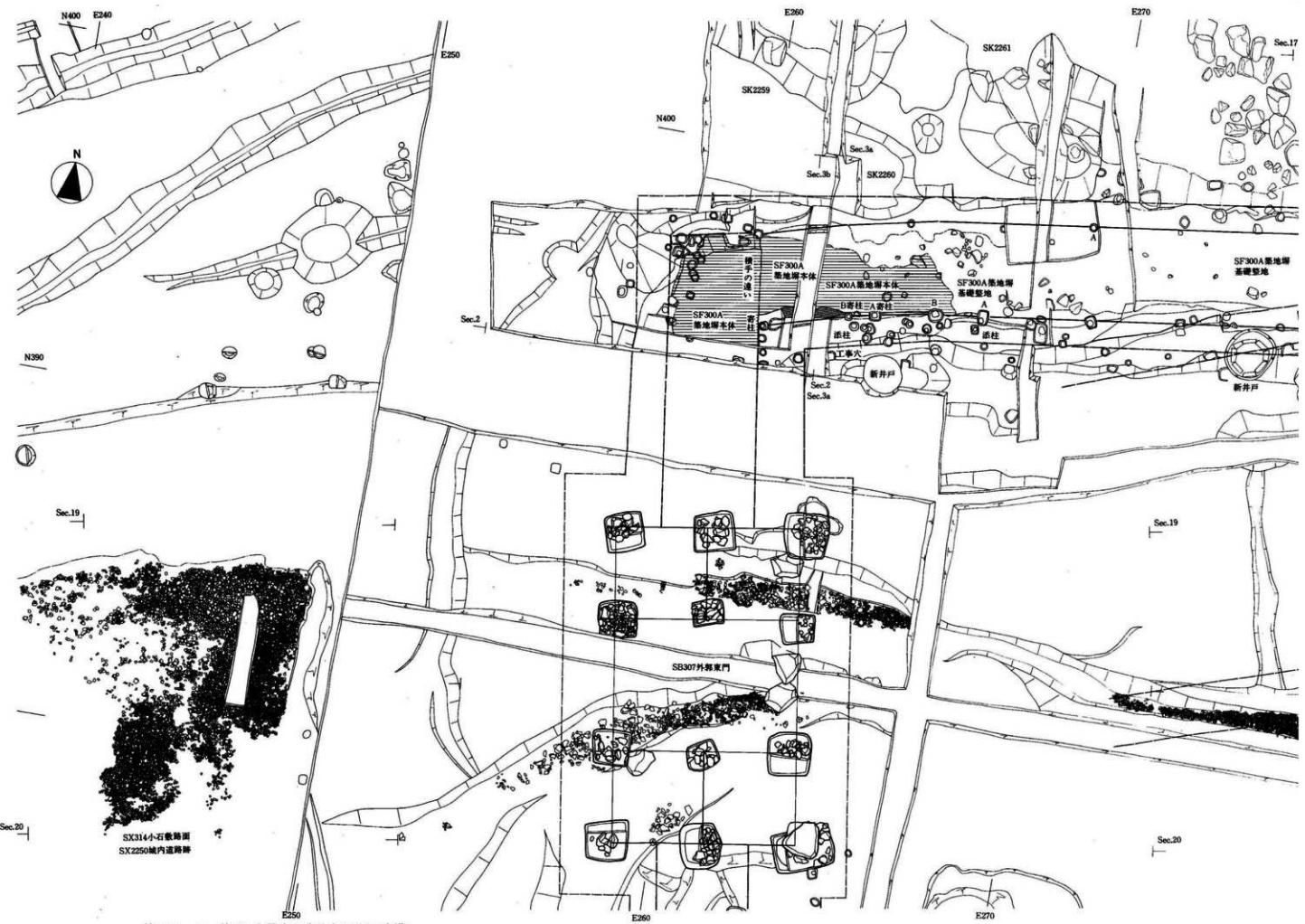
なお、9 月 5 日には多賀城跡調査研究指導委員会の現地指導を受けた。そして、11 月 17 日に第 65 次調査の成果を報道機間に對して公表し、11 月 19 日にラジコン・ヘリコプターによる写真撮影、現地説明会を行なった。また、築地塀・槽跡・暗渠など主要部分については土嚢を積み上げて遺構の保存に努め、埋め戻した。

3. 発見した遺構と遺物

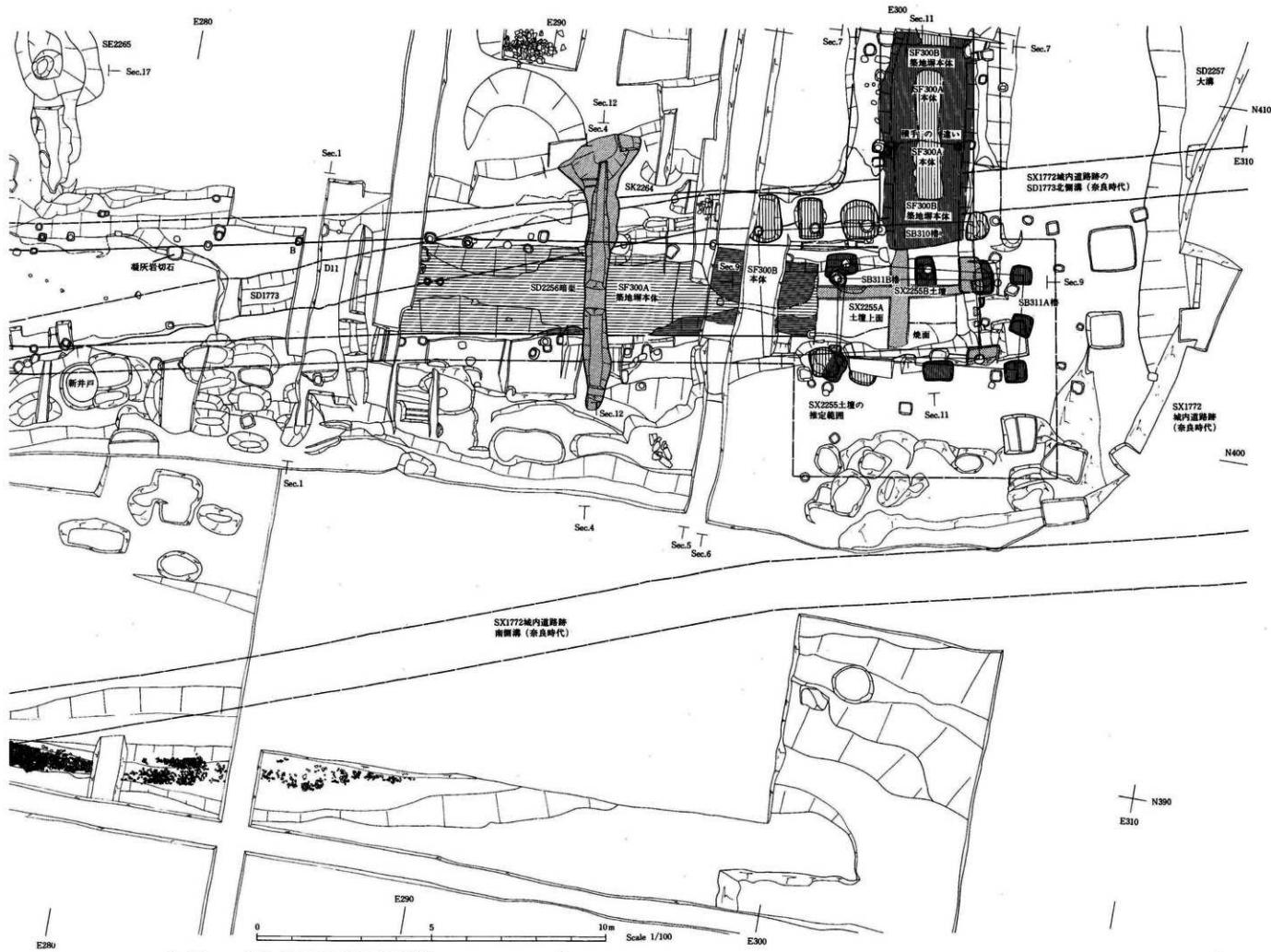
検出した主な遺構には、奈良時代の道路側溝と路面、S F 300 築地塀跡（本体・基礎整地）とその造営に關わる諸痕跡（積み手の違い、寄柱穴、添柱穴、工事穴、土取りを兼ねた大溝）、およびこれに伴う諸施設（槽跡・土壙跡・暗渠）、S F 300 築地塀崩壊土、多賀城廃絶後の石敷道路跡などがある。

（1）奈良時代の S X 1772 城内道路跡

奈良時代の S X 1772 城内道路の S D 1773 北側溝と路面を S F 300 A 外郭東辺築地塀跡の基礎整地直下で検出した（第 3・4 図、付図）。S D 1773 北側溝は幅約 90cm、深さ約 30cm で（第 5 図）、調査区では長さ約 22m にわたり検出した（第 3 図）。奈良時代の S B 1762 外郭東門から西に約 54m 分にわたり検出したことになる。方向は S B 1762 外郭東門から約 43m までは西で 13° 南に偏り、さらに西では約 15° と南により偏る。道路側溝の堆積土は自然堆積した灰色土である。



第3図-1 第65次調査区南半部の主要遺構



第3図-2 第65次調査区南半部の主要遺構



第4図 SF300 外郭東辺築地塙北東屈曲部周辺的主要造構

S D1772 城内道路の路面は南にごく緩やかに傾斜し、S D1773 道路北側溝よりあふれた灰色土が上面に約2cmの厚さで堆積していた（第6・7図）。

今回の調査では南側溝を検出していないが、第53・54次調査の成果によると、路幅は約9.6m（32尺）と推定される（『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1988）。

S F300A外郭東辺築地壠を構築する際に、S D1773 北側溝の上面に平瓦を敷いて整地している箇所も検出された（第4図）。平瓦は政府第II期の平瓦II B類である（第9図5・6）。

これまで位置関係と軒瓦から西側のS B307 外郭東門が平安時代のもので東側のS B1762 外郭東門よりも新しいとみてきたが、今回の調査でこのことを遺構の重複関係から証明できた。

（2）S F300 外郭東辺築地壠跡とその関連施設

平安時代のS B307 外郭東門は、S F300 外郭東辺築地壠跡が西に約45m（150尺）「コ」字形に入り込んだ位置にある（第2図・付図）。

今回調査した北側部分のS F300 外郭東辺築地壠跡は、S B307A 外郭東門の北妻から北に約9m（30尺）の所で東に直角に曲がり（以下、「北西屈曲部」と称する）、約45m（150尺）東に延びてそこで再び北に曲がる（以下、「北東屈曲部」と称する、第3図・付図）。方向は東西のS F300 外郭東辺築地壠跡が東で北に約9°、南北のS F300 外郭東辺築地壠跡が北で西に約9°偏る。

S F300 外郭東辺築地壠跡にはA・B・C 3時期あり、S F300B 外郭東辺築地壠跡は全面的な改修と推定される。S F300C 外郭東辺築地壠は檐跡・土壤跡・暗渠からその存在が推定される。

瓦の出土点数が少ないとから、S F300 外郭東辺築地壠は瓦葺きではなかったと推定される。ただし、第13次調査ではS B307 外郭東門、S F300 外郭東辺築地壠の北東・南東屈曲部に取り付く檐跡の周辺からは瓦が多く出土した（表4）。したがって、S B307 外郭東門と檐は瓦葺きと推定される。

【S F300A外郭東辺築地壠跡】

西に位置を移した当初の外郭東辺築地壠跡で、基礎整地・築地本体・崩壊土を検出した。

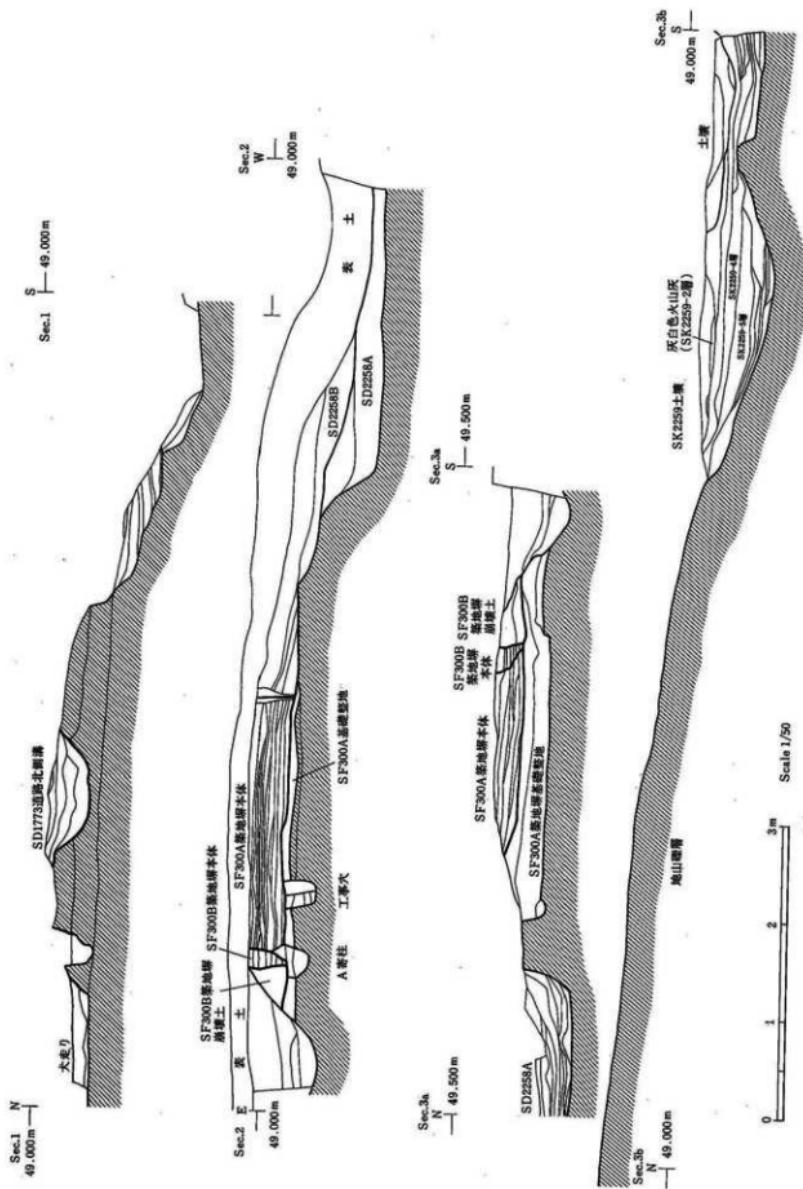
築地壠本体は北西屈曲部から東に約8m、北東屈曲部の西側約10m、北側約12mまで残存し、その間は基礎整地のみ残存する（第3・4図）。

築地壠の基礎整地・本体は旧表土の黒褐色土と地山黄色粘土とが混ざった土層である。築地本体の基底幅は約2.7m（9尺）で、高さは最大約60cm残存し、版築で硬く搾き固めて3cm前後の互層となっている（第5～7図）。

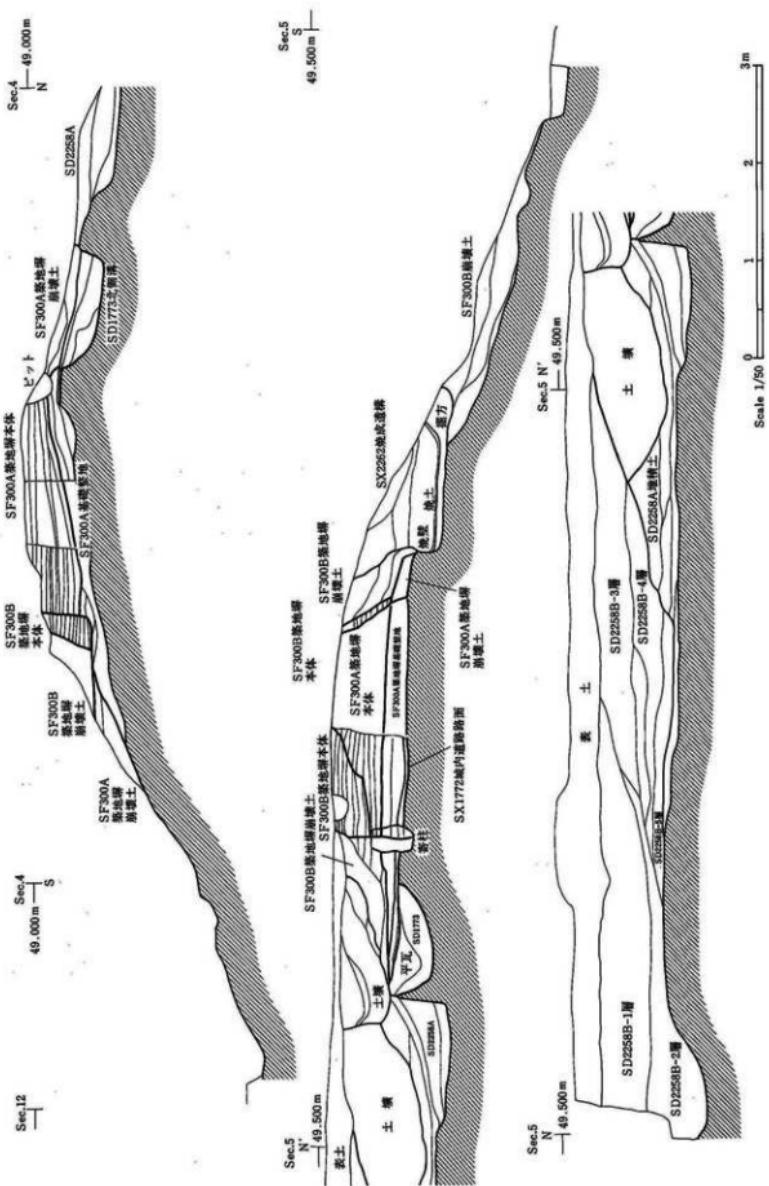
築地壠の造営に関わる痕跡として、積み手の違い・寄柱穴・添柱穴・足場穴を検出した。

積み手の違いは東西方向の築地壠跡で2箇所、南北方向の築地壠跡で2箇所検出した。東西方向の築地壠跡では、北西屈曲部とS D2256 暗渠の東側約2m付近の2箇所で積み手の違いを検出した（第3・4図）。両者の距離は34.5m（115尺）である。南北方向の築地壠ではS X2255A 土壙上面とそこから3.2m北の2箇所で積み手の違いを検出した（第4図）。

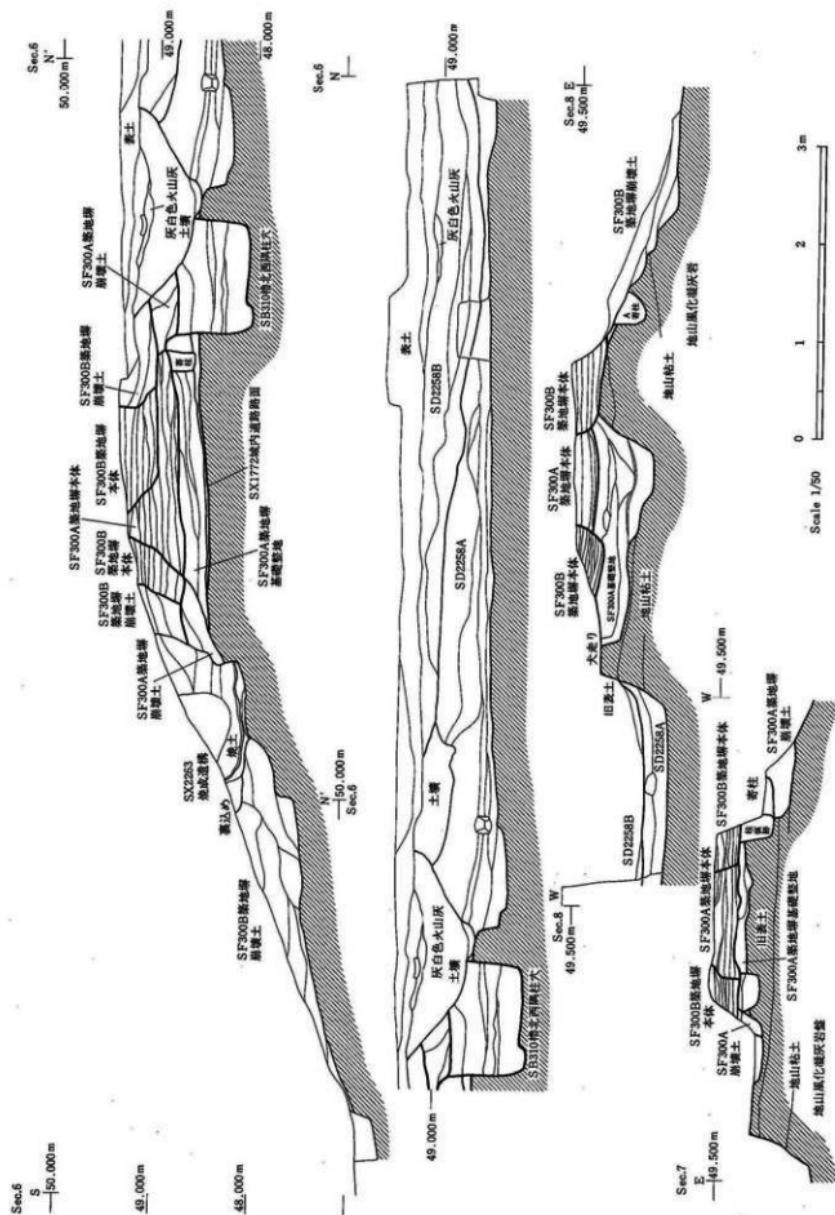
また、東西方向のS F300A 築地壠跡の南側では、北西屈曲部から3間分まで桁行柱間が約3.1mとなる位置で寄柱穴を検出した。北側では南側の寄柱穴と対応する位置やその並びで寄柱穴と思われる柱穴をいくつか検出した。



第5図 SF300外郭東辺築地壌の断面(1)



第6図 SF300外郭東辺築地塀の断面(2)



第7図 SF300外郭東辺築地塀の断面(3)

また、東西方向の S F 300 A 築地塀跡の南側では、北西屈曲部に近い部分で寄柱穴の外側に添柱穴が検出された。さらに外側で各 2箇所、本体の下で 1箇所の工事穴が検出された。

寄柱穴は一辺 30cm 程の隅丸方形で、深さは 30cm 程である。残りの良い部分でみると、柱痕跡は一辺 10~15cm 程の方形である。寄柱穴の桁行柱間は、東西方向の築地塀では約 3.2m (10 尺) である。

添柱穴は一辺 25~30cm 程の隅丸方形か円形で、柱痕跡は 10~15cm 程である。

工事穴は一辺 25~30cm 程の隅丸方形か円形である。

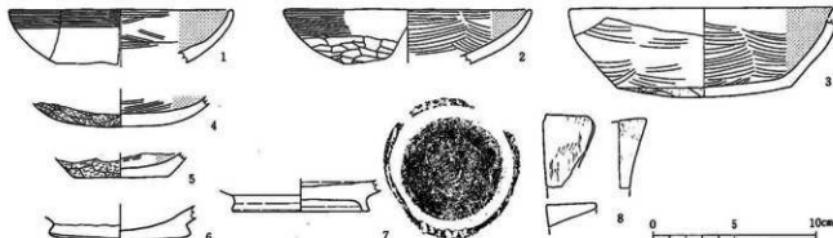
以上のことから、S F 300 A 外郭東辺築地塀は外郭東門が造られた後、そこに接続する南北方向の築地塀がまず築かれ、そこで東に曲がる築地塀が東に向けて築かれ、さらに北に曲がって南北方向の築地塀が築かれていること、その工事単位は約 3 m (10 尺) 前後であること、築地塀は寄柱を持つことが判明した。

また、外郭東門と接続する北西屈曲部、櫓の取り付く北東屈曲部付近では掘込地業をして整地し、この付近では特に入念に築地塀が作られたことも判明した (第 3 図、第 5 図 Sec. 3、第 7 図 Sec. 8)。

遺物は基礎整地・築地塀本体・寄柱穴・崩壊土からそれぞれ少数出土した (表 2 ~ 4)。基礎整地からは土師器坏・甕、須恵器壺、八葉重弁莲花文軒丸瓦 (政庁第 I 期の型番不明)、平瓦、丸瓦、築地塀本体からは土師器坏・甕、須恵器甕、平瓦、丸瓦、有茎石鐵 (縄文時代)、寄柱穴からは土師器甕、須恵器坏、崩壊土からは土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・甕、平瓦、丸瓦、砾石が出土した。土師器坏・甕はいずれもロクロを使用しないもの (以下、「非ロクロ」と略称する) である (第 8 図 1 ~ 4・6)。平瓦は政庁第 II 期の平瓦 II B 類 (第 9 図 5・6) を主体し、政庁第 I 期のもの (第 8 図 2・3) は少ない。基礎整地には政庁第 III 期の平瓦 II B 類 a タイプ (第 9 図 8 ~ 11) も含まれる。

【S F 300B 外郭東辺築地塀跡】

外郭東門と接続する北西屈曲部付近、および櫓の取り付く北東屈曲部の西側・北側で築地本体・崩壊土を検出した (第 3・4 図)。崩壊した S F 300 A 築地塀本体の上部と両側の壁を削り取り、S F 300 A 築地塀の崩壊土を基礎として、同位置で全面的に改修している (第 5 ~ 7 図)。



番号	種類	種類	分類	特徴	登録	年	番号	種類	種類	分類	特徴	登録	年
1	基礎整地	土師器	舟ロクロ甕	外面：ナマ・手待ちケズリ。内面：ミガキ・黒色板理	R2	12341	2	基礎整地	土師器	舟ロクロ甕	外面・底面：手待ちケズリ。内面：ミガキ・黒色板理	R36	12341
2	築地塀本体	土師器	舟ロクロ甕	外面：ナマ・手待ちケズリ。内面：ミガキ・黒色板理	R9	12341	6	基礎整地	土師器	舟ロクロ甕	底張板片	R5	12341
3	基礎整地	土師器	舟ロクロ甕	外面：ミガキ・手待ちケズリ。内面：ミガキ	R9	12341	7	崩壊土	須恵器	高台坏	高台坏表面に瓦残	R15	12341
4	基礎整地	土師器	舟ロクロ甕	外面：ミガキ・手待ちケズリ。内面：ミガキ	R30	12341	8	崩壊土	瓦製品	砾石	繩織紋灰骨	R17	12340

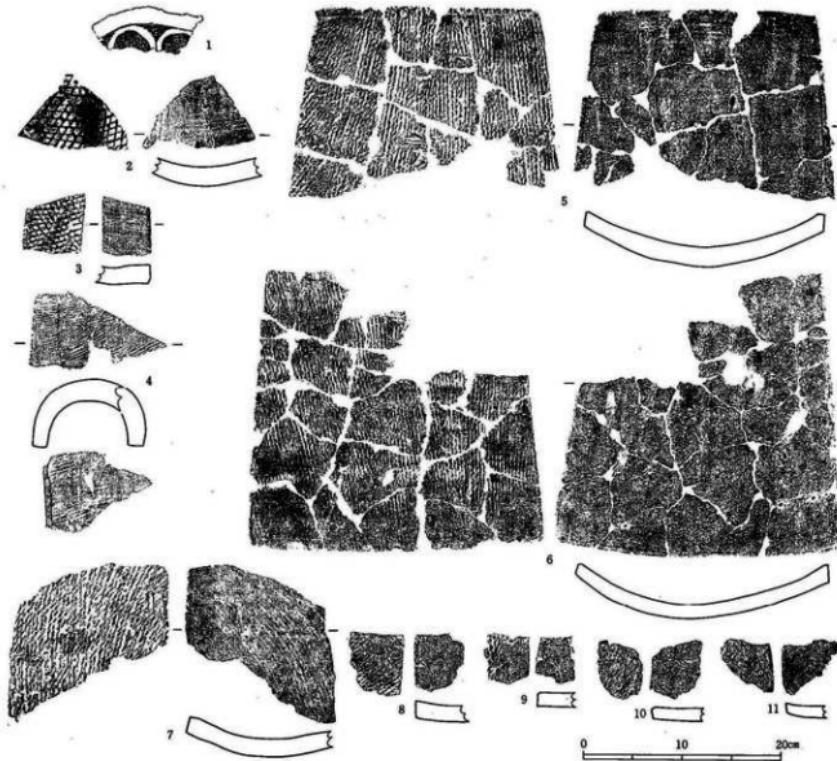
第 8 図 SF300A 外郭東辺築地塀跡出土遺物 (1)

S F 300 B 築地塀本体の基底幅は S F 300 A 築地塀と同じく約 2.7m (9 尺) で、高さは最大約 60cm 残存し、版築で硬く焼き固めて 3cm 前後の互層となっている (第 5 ~ 7 図)。

築地塀の造営に関わる痕跡として、積み手の違い・寄柱穴・添柱穴を検出した。

積み手の違いは北東屈曲部の S X 2255A・B 土壇との接続部を起点として、北に約 3.0m (10 尺)、さらに北に約 2.7m (9 尺) の 2 箇所認められる (第 3・4 図)。また、最初の積み手の違いは S F 300 A 外郭東辺築地塀の積み手の違いと一致している。

寄柱穴は一辺 30cm 程の隅丸方形で、柱痕跡は一辺 10~15cm 程の方形である。残りの良い東西方向



番号	層	地質	分類	物 理	形 式	平 積	面 積	番 号	層 位	地 質	分 類	物 理	形 式	平 積
1	基礎整地	粘土	型孔不明	八葉葉型蓮花文、政令第1種	R18	12269	7	積磚上	平仄	Ⅲ C 種		E13	12263	
2	築地本体	平仄	DC 種	縫合作り、凸面：椎子叩き目、政令第1種	R27	12263	8	基礎整地	平仄	Ⅱ B 種タイプ	一枝作り、凸面：溝叩き目、因此充目一ナガ	E21	12263	
3	基礎整地	平仄	DC 種	縫合作り、凸面：椎子叩き目、政令第1種	R32	12263	9	基礎整地	平仄	Ⅱ B 種タイプ	一枝作り、凸面：溝叩き目、因此充目一ナガ	E22	12263	
4	築地本体	平仄	II A 種	粘土鉛帶作り、凸面：椎子叩き目、政令第1種	R31	12263	10	基礎整地	平仄	Ⅱ B 種タイプ	一枝作り、凸面：溝叩き目、因此充目一ナガ	E23	12263	
5	基礎整地	平仄	Ⅲ B 種タイプ	一枚作り、凸面：溝叩き目、凹面：充目一ナガ、政令第1種	R29	12263	11	基礎整地	平仄	Ⅲ B 種タイプ		E24	12263	
6	基礎整地	平仄	Ⅲ B 種タイプ		R28	12263								

第 9 図 SF300A 外郭東辺築地塀跡出土遺物 (2)

の築地塀の西側と北東屈曲部の北側では、やや寄柱穴の桁行柱間は 2.7m 程のものが多い。ただし、部分によっては 2.5~3.0m の間での多少のばらつきはある。また、北東屈曲部の北側では積み手の違ひの延長上に寄柱穴が位置する。

添柱穴は一辺 25~30cm 程の隅丸方形か円形で、柱痕跡は 10~15cm 程である。

崩壊土は築地塀両側と築地塀に伴う大溝に堆積している。

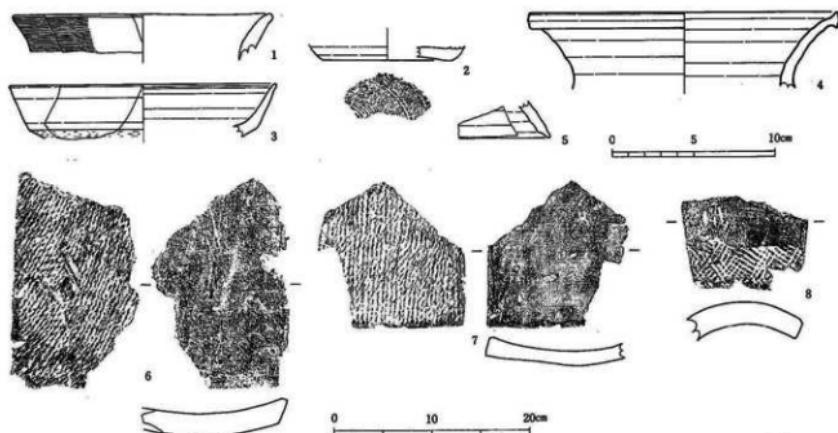
以上のように、S F 300 B 外郭東辺築地塀は S F 300 A 外郭東辺築地塀をほぼ全面的に同位置で改修したもので、S F 300 A 外郭東辺築地塀と同様に寄柱をもつことが判明した。

遺物は築地塀本体・崩壊土からそれぞれ少数出土した（表 2~4、第 10 図）。築地塀本体からは土師器坏・甕・須恵器坏・蓋・甕、平瓦、丸瓦、崩壊土からは土師器坏・甕・須恵器坏・稜・甕・壺、円面鏡、平瓦、丸瓦、メノウ製剥片（縄文時代？）が出土した。土師器坏・甕はいずれも非クロコである。本体出土の須恵器坏には底部が回転糸切り無調整のもの（第 10 図 2、図版 13-2）が 1 点あり、これが出土遺物の中では最も新しい様相を示す。平瓦は政府第 II 期の平瓦 II B 類を主体し、政府第 I 期のものは少ない。崩壊土には政府第 III 期の平瓦 II B 類 a タイプも含まれる。

【S F 300 C 外郭東辺築地塀跡】

築地塀本体は残っていないが、後述する S D 2256 暗渠、S B 311 B 構造とそれに伴う S X 2255 B 土壙跡の存在から想定される築地塀跡である。

遺物は出土していない。



番号	層位	種類	分類	特徴	登録	番号	層位	種類	分類	特徴	登録	平瓦
1	崩壊土	土師器	非クロコ甕	口縁：ヨコナゲ	E12	12341	6	築地塀本体	平瓦	Ⅱ B 類 a タイプ	R19	12363
2	築地塀本体	須恵器	坏	底部：回転糸切り無調整	E3	12341				一枚作り。凸面：調叩き目。凹面：有目→ナゲ。		
3	崩壊土	須恵器	縦塊	体下部：回転ハケズリ	E9	12341	7	崩壊土	平瓦	Ⅱ B 類 a タイプ	R17	12363
4	崩壊土	須恵器	甕	口縁部破片	E16	12341	8	崩壊土	丸瓦	Ⅱ B 類 c タイプ	R18	12363
5	崩壊土	甕	円面甕	脚部小破片	E15	12341				粘土磁器作り。矢羽根伏叩き目。政府第 I 期		

第 10 図 SF 300B 外郭東辺築地塀跡出土遺物

なお、寄柱穴・添柱穴の他に、築地塀跡に沿って、両側に多数の柱穴が認められる。時期の対応はできないものの、築地塀の構築や改修に関わる工事の柱穴と見ておきたい。

【S B310・311 槽跡とS X2255 土壇】

東西方向のS F 300 外郭東辺築地塀と南北方向のS F 300 外郭東辺築地塀とが接続する北東屈曲部で、S B310 槽跡→S B311A 槽跡→S B311B 槽跡と変遷する3時期の槽跡を検出した(第4・11図)。このうち、S B311A・B 槽跡にはS X2255A・B 土壇跡がそれぞれ伴う。

S B310 槽跡

S F 300A 外郭東辺築地塀に伴う東西棟の槽跡で、S F 300A 築地塀崩壊土に覆われる(第7図)。東妻棟通り柱穴をもとに再検討すると、築地塀をまたぐ構造の槽で、桁行は南側柱列で4間、梁行は東妻で2間と推定される(註)。西妻と北側柱列では築地塀をまたぐ部分に柱穴がなく、柱間は2間分と推定される。

南東隅柱穴・南側柱列の東より1間目柱穴・南西隅柱穴を除く7箇所の柱穴を検出した。掘方は約0.6×1.2mの長方形または一辺約0.8mの方形で、深さは北西隅柱穴で約80cmある。柱痕跡は北側柱列の3箇所の柱穴で検出し、径約30cmである。また、柱はいずれも切り取られている。

柱位置を北側柱列でしか検討できなかったため、槽の規模・柱間寸法については不明確であるが、掘方・柱痕跡の大きさをもとに検討すると、桁行は総長約6.0m(20尺)、梁行約3.6m(12尺)と推定される。柱間寸法は北側柱列で西より1.6m(5尺)、1.5m(5尺)、3m(10尺)と推定される。また、梁行は東妻では約1.8m(6尺)等間、西妻では約3.6m(12尺)と推定される(第11図)。方向は北側柱列でみると、東で北に約12°偏する。

遺物は北側柱列西2間目柱穴の柱痕跡より菲ロクロの土師器甕体部破片1点が出土したのみである。

S B311A 槽跡とS X2255A 土壇跡

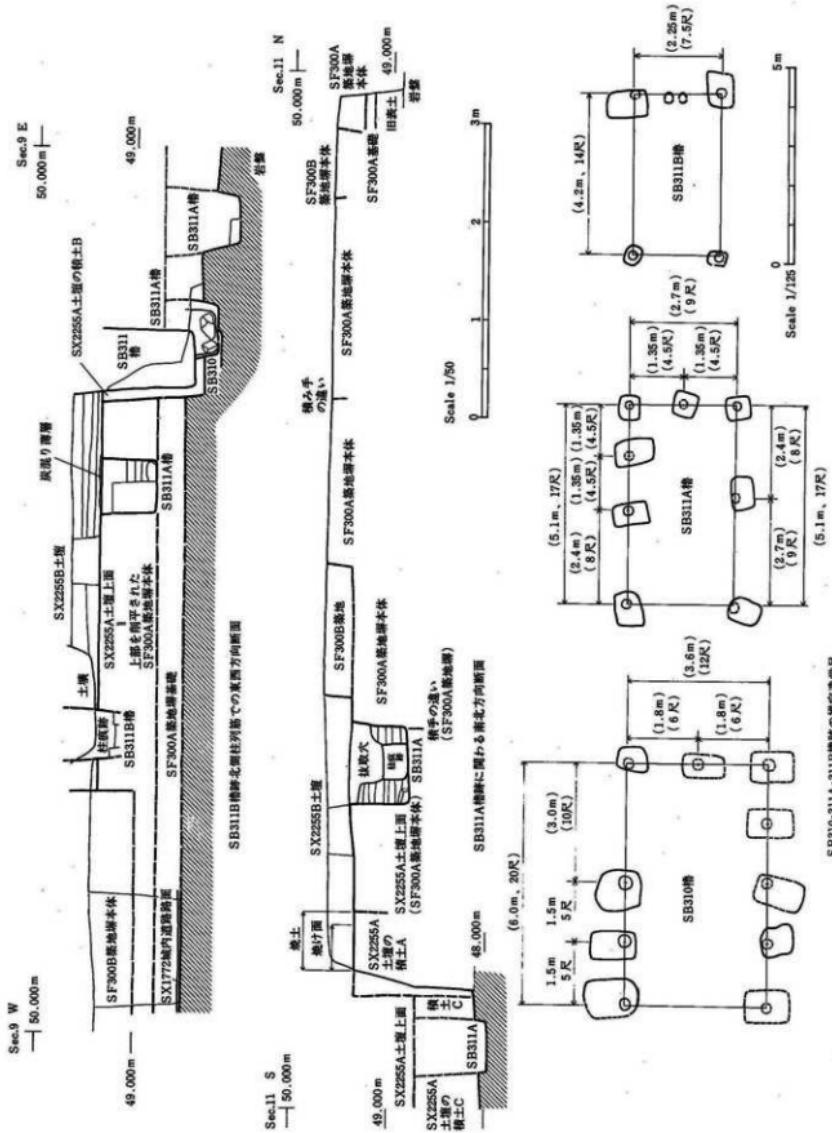
S F 300B 外郭東辺築地塀に伴う槽跡で、S B310 槽の柱を取り取り、S F 300B 外郭東辺築地塀の外側に張り出すようにS X2255A 土壇を築き、その上に槽を建てる(第4・11図)。

8個の柱穴を検出し、北側柱列で3間、南側柱列で2間、東妻で2間と推定される。掘方は約0.6×0.9mの長方形または一辺約0.6mの方形で、深さは北側柱列西1間目柱穴で約0.6mある。北側柱列の東より2・3間目柱穴で径約30cmの柱痕跡と柱切取穴、1間目柱穴で柱抜取穴を検出した。

桁行は総長約5.1m(17尺)、梁行は総長約2.7m(9尺)、柱間寸法は北側柱列で西より2.4m(8尺)、1.35m(4.5尺)、1.35m(4.5尺)、東妻で1.35m(4.5尺)等間と推定される(第11図)。方向は北側柱列でみると、東で北に約5°偏する。

S X2255A 土壇は東西約5.4m、南北約3.7m残存する。土壇上面の南側には80cmの幅で焼け面があり、その北側には炭化物層が分布することから、土壇の高さは築成基部の岩盤から約1.2mと判明した(第4・11図)。なお、平面規模は南東屈曲部のS X304A 土壇跡の残存状況(第35・36図)を参考にすれば、東西約7.5m、南北約6.5mと推定される(第4図)。

後述するように南東屈曲部のS X304A 土壇はS X2255A 土壇と同時期であり、2層に重成された土壇であることが確かである。道路を挟んで対称の位置にある屈曲部の土壇の構造は同様と考えられる。



第 11 図 SB310・311A・311B 槽跡の断面と規模

実際、S B 311A 棚の柱穴の底面レベルは、S X 2255A 土壇上面を掘り込み面とする北側柱列の東から2間目柱穴よりも南・東側柱列の柱穴では約 75cm 低く（第 11 図）、南・東側柱列の位置では S X 2255A 土壇は階段状をなして一段低まっていた可能性が高い。

岩盤からの高さが約 1.2m まで S F 300A 築地壠本体の上部を削平し、その南側では犬走りを取り去って岩盤より褐色土の積土 A を丁寧に積み上げ、さらに東側から褐色土の積土 B を岩盤より丁寧に積み上げ、土壇上面としている。積土 A・B を積み上げた位置はそれぞれ S F 300A 築地壠の南端・東端で、天端は S F 300A 築地壠の削平面である。また、残存する幅は積土 A が最大約 1.0m、積土 B が約 1.5m である（第 4・11 図）。

積土 A の外側には間層を置かずには灰褐色～褐色土の積土 C がある（第 4・11 図）。積土 C の北端は S B 311A 棚の南側柱穴の北側約 15cm の位置に位置し、棚の方向と一致する。残存する高さは岩盤から約 60cm と積土 A・B の高さの半分で、色調も積土 A・B とは異なる。

この積土 C については、① S X 2255A 土壇に伴う積土、② S X 2255B 土壇に伴う積土の両者の可能性がある。

①の場合には、S F 300A 築地壠の上部を削平し、南側から積土 A、東側から積土 B を積み上げて土壇上面を造成し、さらに南側から土壇上面の天端の半分の高さの積土 C を積み上げて、重層の S X 2255A 土壇を造成したことになり、土壇造成の工程差ということになる。

②の場合には、S X 2255B 土壇を嵩上げする際に、南側の低い土壇を全面的に取り去り、新たに低い段の土壇を積み直して、重成の土壇を造成したことになり、土壇の時期差ということになる。

①の場合には積土 A・C とも岩盤から積み上げているのに、低い積土 C を先に積み上げて、その上に積土 A を積み上げる手法を取っていないという不自然さがある。

また、②の場合には、棚の規模が縮小し、かつ土壇の嵩上げがわずかと考えられるのに対し、土壇の南側を全面的に削平して造り直すことになり、不自然さがある。

ここでは、積土 C は S B 311A 棚の南側柱穴の北側約 15cm の位置で棚の方向と一致して積土 A・B の半分の高さが残存すること、積土 C が S X 2255B 土壇と同様の嵩上げではなく、積土 A・B と同様の積み方であることをより重視して、重成と推定される S X 2255A 土壇の造成時における工程差（①）の可能性を考えておきたい。

なお、S X 2255A 土壇上面の焼け面・炭化物層は、炭化物層が北側柱列東側 1 間目柱穴の抜取穴上面を覆っていたので（第 11 図）、棚の建て替えに伴い、廃材を土壇上面で燃やしたものと推定される。

遺物は柱穴掘方より須恵器甕、S X 2255A 土壇跡より土師器甕、須恵器坏、平瓦、土壁の破片が少数出土した（表 2・4）。このうち平瓦には政庁第 II 期の平瓦 II B 類が 1 点ある。

S B 311B 棚跡と S X 2255B 土壇跡

東西 1 間、南北 1 間の棚跡で、S X 2255B 土壇の上に建てられている（第 4・11 図）。すべての柱穴を検出し、北西隅・南東隅柱穴で柱痕跡を検出した。柱穴は一辺 80cm 前後で、柱痕跡は径約 30cm である。

S X 2255B 土壇跡は S X 2255A 土壇を 30cm 以上嵩上げしているため、土壇の高さは 1.5m 以上とな

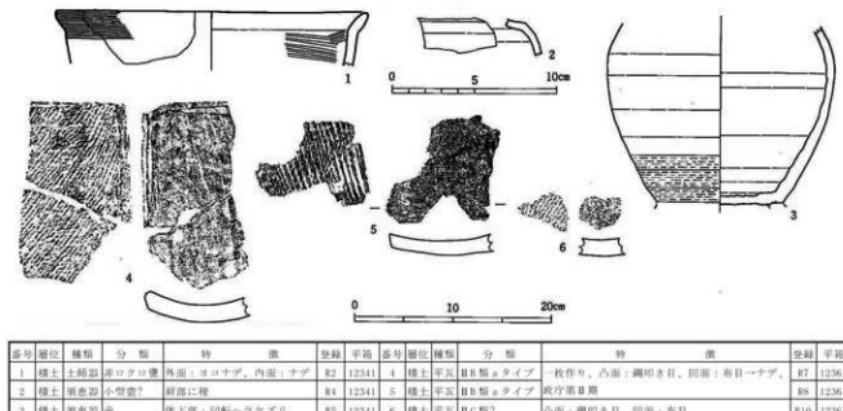
る。土壇の平面規模は当初とほぼ同様と推定される。

建替え前の S B311A 槽跡・S X2255A 土壇跡が S F300B 外郭東辺築地壠跡に伴うことから、S F300C 外郭東辺築地壠に伴うと考えられる。

柱痕跡と柱穴から見て、柱間寸法は北側柱列で 4.2m (14 尺)、東妻で 2.25m (7.5 尺) と推定される (第 11 図)。方向は北側柱列でみると、東で北に約 7° 傾いている。

なお、東妻には新旧関係から見て S B311B 槽跡に伴うと思われる小ピットが 2 箇所ある (第 4 図)。これらは槽を支えた間柱のような性格のものと考えられる。

遺物は S B311B 槽跡の柱穴掘方より須恵器甕、平瓦・丸瓦、S X2255B 土壇跡より土師器坏・甕、須恵器坏・甕・壺、平瓦・丸瓦の破片が少数出土した (表 2 ~ 4、第 12 図)。土師器甕にはロクロ調整のもの、須恵器坏には回転ヘラケズリのものが含まれる。



第 12 図 SX2255B 土壇跡出土遺物

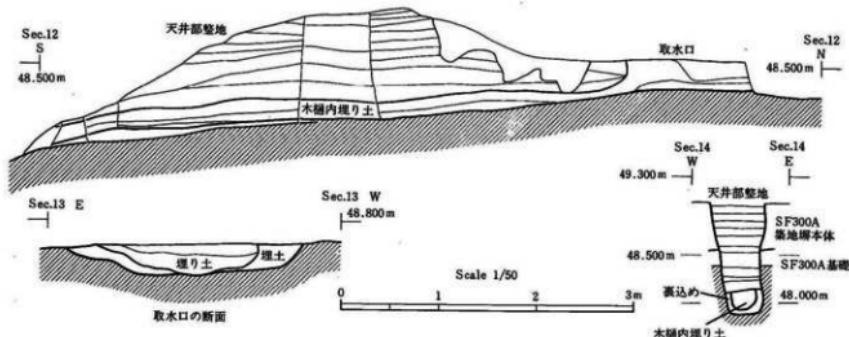
【S D 2256 暗渠】

S F300 外郭東辺築地壠の北東屈曲部から西に約 11m の位置に S F300 外郭東辺築地壠と直交して設けられている (第 4 図)。縱状に広がる取水口が北の城内側の溝にあり、南の道路側に向て排水している。木質部は残っていないが、堆積土の状況から見て長さ約 7m、幅約 25cm、高さ約 20cm の木樋と考えられる。幅約 50cm、深さ約 1.2m 以上の据え方を掘り、その下部に木樋を設置して、その上を丁寧に捣き固めている (第 13 図)。S F300B 外郭東辺築地壠跡の本体・崩壊土よりも新しいこと (第 6 図 Sec. 4) から、S F300C 外郭東辺築地壠に伴うものと考えられる。

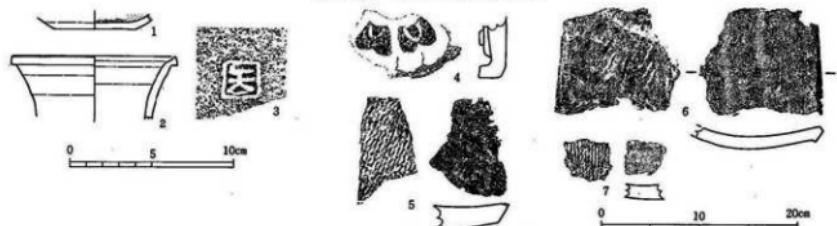
暗渠の堆積土は木樋内埋まり土の下部が砂質粘土、裏込めが細かい地山粒を多く含み、しまりのある黄褐色土、木樋の上の天井部埋土が地山ブロックを含む褐色土と黄褐色土を交互に捣き固めた土層である。

遺物は裏込め、天井部整地、暗渠内埋まり土、取水口埋まり土から破片が少数出土した (表 2 ~ 4)。裏込めからは土師器坏・甕、天井部整地からは土師器坏・甕、須恵器甕・壺、政府第 IV 期の宝相花文

軒丸瓦 420 (第 14 図 4、図版 15-7)、政庁第 I 期の平瓦 I A 類、政庁第 II 期の平瓦 II B 類 (第 14 図 5)・刻印「矢」 A 平瓦 II B 類 (第 14 図 3)、丸瓦、凝灰岩切石 (第 31 図 1・2、図版 18-9・10)、暗渠埋土からは土師器坏 (第 14 図 1)・甕、須恵器坏・甕、政庁第 II 期・第 III 期の平瓦 II B 類 (第 14 図 6)、政庁第 IV 期の平瓦 II C 類 (第 14 図 7)、丸瓦、取水口埋まり土からは土師器坏・甕、須恵器甕・壺 (第 14 図 2)、政庁第 I 期の平瓦 I A 類、政庁第 II 期の平瓦 II B 類、丸瓦が出土した。



第 13 図 SD2256 窓渠の断面



番号	場所	種類	分類	特徴	登録	平基	番号	場所	種類	分類	特徴	登録	平基
1	木桶	土師器	ロタリ押	底面：ケズリ、内面：横々ガケ＝黒色粘土	R1	12341	3	木桶内	平瓦	ⅡB類Aタイプ	政庁窓II期、焼け瓦	R7	12863
2	陶水口	須恵器	甕	口縁部破片	R1	12341	6	木桶内	平瓦	ⅡB類Bタイプ	内面に凹塑正角、外片葉巻形	R11	12863
3	天井部整地	刻印平瓦	ⅢB類	底面に刻印「矢」A、政庁窓Ⅱ期、焼け瓦	R6	12361	7	木桶内	平瓦	ⅢC類	政庁窓Ⅱ期	R10	11863
4	大井戸整地	軒丸瓦	平板瓦文420	政庁窓Ⅱ期	R5	12361							

第 14 図 SD2256 窓渠出土遺物

【SD2257 外郭東辺外側大溝】

S F 300 外郭東辺築地塀に伴う幅約 3 m、深さ約 60cm の外郭東辺外側大溝で、南北方向の S F 300 外郭東辺築地塀に沿っている。長さ約 28m 検査出した (付図)。S F 300 外郭東辺築地塀からは S X 2255 土壇付近で約 5 m 離れ、調査区北東部では約 9 m 離れると推定される。S K 2263 土壇、S X 2266 石敷道路、S D 2267・2268 溝と重複していざれよりも古い。埋り土は自然堆積層で、3 層に分かれ、上部に灰白色火山灰が堆積していた (第 15 図)。

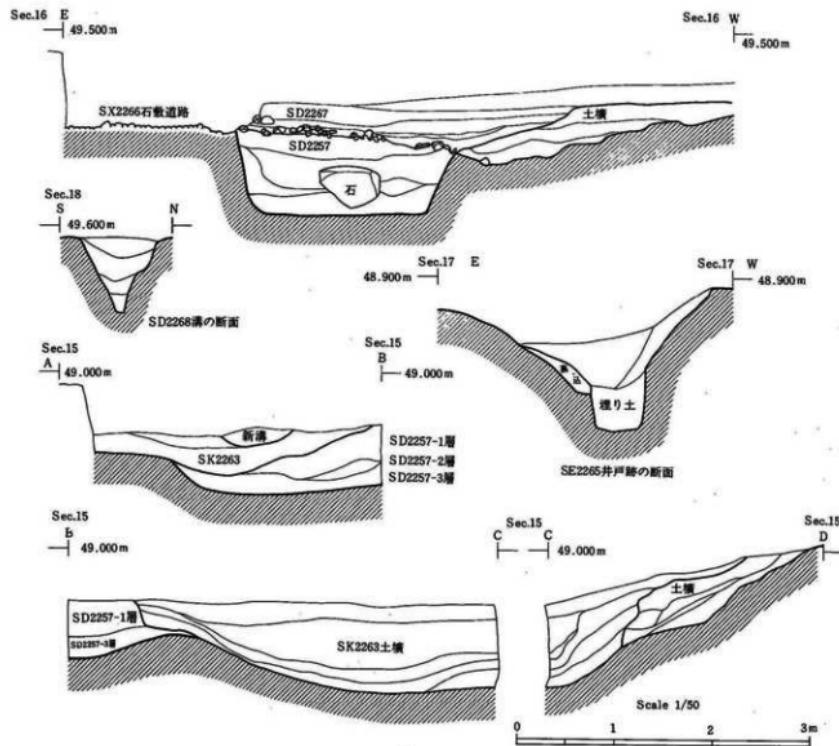
出土遺物には少数の土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・甕・壺、軒用硯、軒丸瓦、軒平瓦、漆紙、鉄釘、鉄滓と比較的多くの平瓦・丸瓦があり (表 2~4)、いざれも破片である。平瓦は 1 層から多く

出土し、政庁第II期の平瓦II B類が主体を占め、政庁第IV期の平瓦II C類も多く含まれる。政庁第III期の平瓦II B類は3層から、政庁第IV期の平瓦II C類は2層から少數含まれる。

このうち須恵器壺には体部に「人」と墨書きされたもの（第16図1）、転用硯には近江系綠釉陶器・を転用して内面を硯面としたもの（第16図3、図版13-4）、軒瓦には政庁第I期の八葉重弁蓮花文軒丸瓦120番台（第16図7）、政庁第II期の単弧文軒平瓦640（第16図6）が各1点、刻印平瓦II B類（政庁第II期）には「物」 A（第16図4・5）が3点ある。漆紙は1層から4点出土した（図版17-1）。1~3cmの小破片で、漆皮膜の遺存状況や表面の色調などから見て、接合しないが同一個体と考えられる。漆面を内側に折り畳まれており、2点には墨痕が認められる。漆皮膜が厚い2点は、その断面で黒漆が確認できたことから、これらの漆紙は黒漆を入れた漆容器に使用されたことが知られる。

【SD2258 外郭東辺内側大溝】

S F 300外郭東辺築地塀を構築する際の土取りを兼ねた溝で、東西方向の築地塀の北側、南北方向の築地塀の西側に沿っている（第3・4図、付図）。S F 300外郭東辺築地塀の際の立ち上がりはきつ



第15図 SD2257・2267・2268溝、SK2263土塙、SX2266石敷道路の断面

としているが、反対側の立ち上がりはだらしなく、溝の幅が取りにくい。深さは約90~100cmある(第5~7図)。調査区北西部から中央部に疊層(塩釜集塊岩層)が分布し、それを避けて掘っているため、幅がかなり広くなったり、土壤が連続したりするような不整な形状をなす。

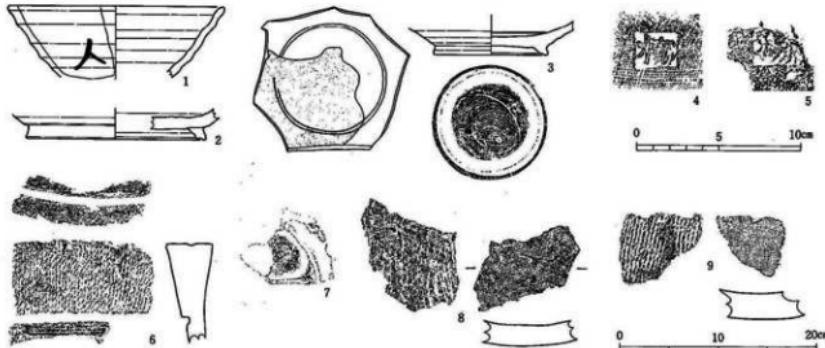
新旧2時期あり、古いSD2258A大溝にはS.F.300外郭東辺築地壠の崩壠土、新しいSD2258B大溝にはその後に自然堆積した褐色土が堆積し、築地壠近くでは上部に、中央部ではやや低い部分に10世紀前葉に降灰した灰白色火山灰が堆積している。両者の間に土壤や、部分的に掘り返した部分もあるが(第6・7図)、両者の堆積環境は連続していたと見られる。

SD2258A大溝の出土遺物には土師器壊・甕、須恵器壊・甕、平瓦、丸瓦の破片が少數ある(表2~4)。このうち土師器壊・甕には非クロのものとクロ調整のもの、須恵器壊には底部手持ちヘラケズリのもの、平瓦には政府第III期の平瓦II B類(第16図8)などがある。

SD2258B大溝の出土遺物は比較的多く(表2~4)、須恵土器小型壊・壊・高台壊、土師器壊・甕・瓶、須恵器壊・高台壊・双耳壊・稜・蓋・甕・壺、灰釉陶器壺、綠釉陶器壊・皿、転用硯、円盤状土製品(須恵器甕体部破片転用)、軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、丸瓦、砥石、鉄釘、鉄滓、漆紙文書がある(第17~23図)。多くは破片である。

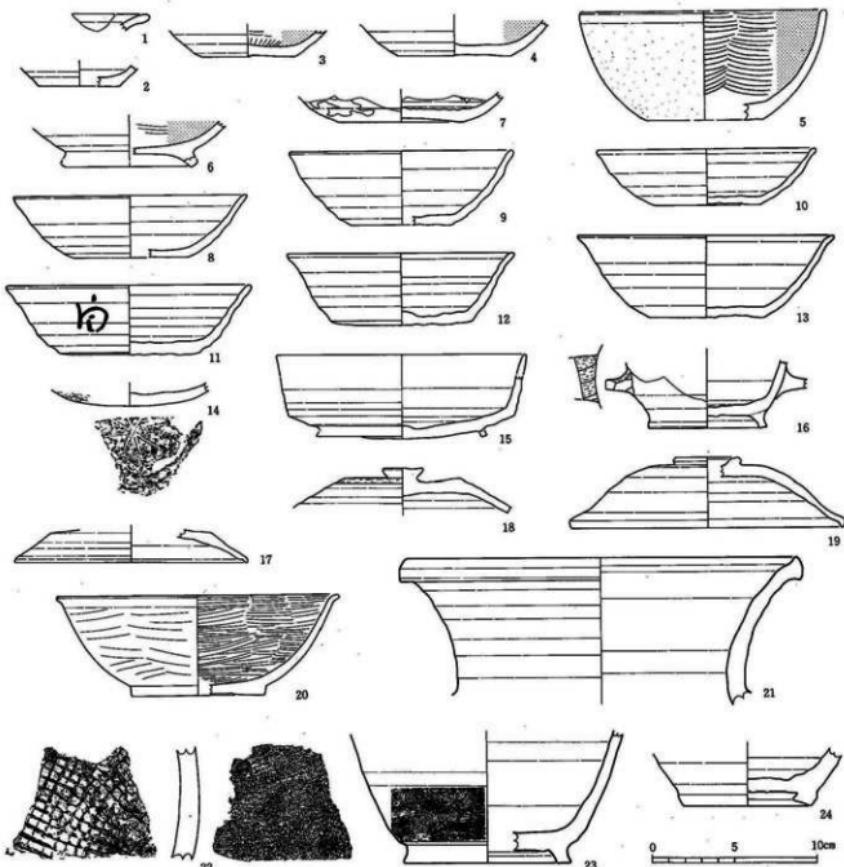
このうち須恵土器小型壊・壊・高台壊はいずれも1層より出土し(第17図1・2)、2層以下からは出土していない。政府第IV期の平瓦II C類は5層より多く認められ、各層を通じて政府第II期の平瓦II B類に次いで多い(表4)。

また、第17図20(図版13-3)の綠釉陶器壊は両面をヘラミガキし、全面に施釉された洛北系の優品、第17図15の須恵器稜壊は丸底気味の底部が高台接地面よりも外側に張り出し、湖西窯跡の影響



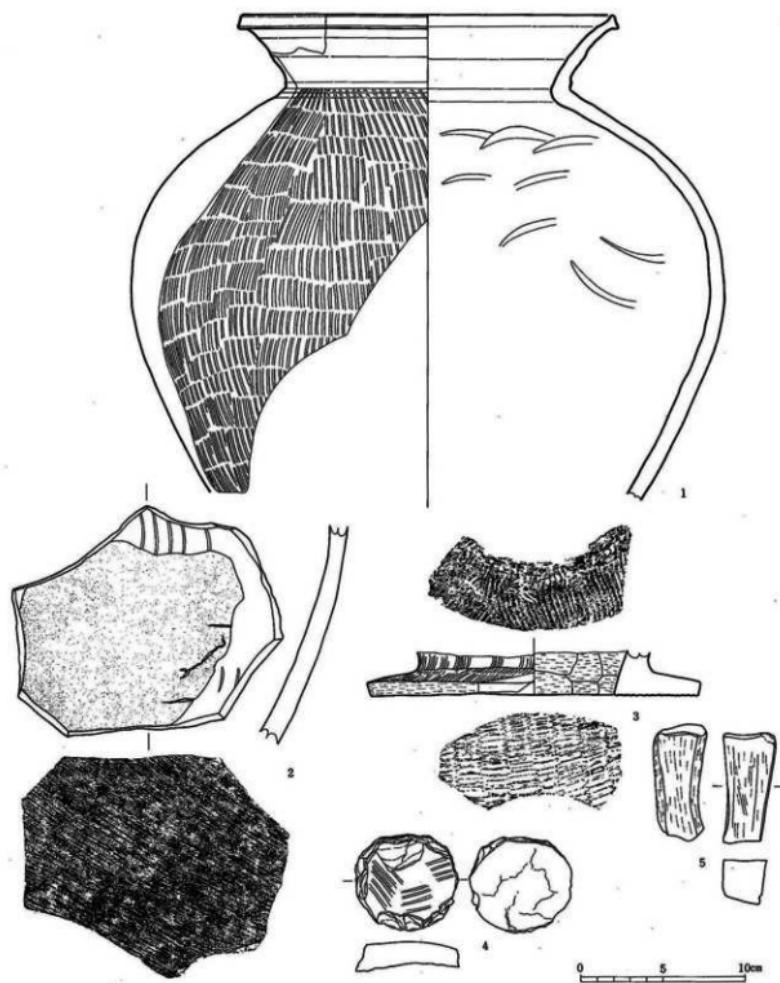
番号	種	段	種	分	類	物	登録	年	段	種	分	類	物	登録	年
1	SD2257-2層	須恵器	壊	新	体面: 葉書「人」		H1 12341	6	SD2257-1層	軒平瓦	新	乳頭文	610	須恵器壊	H1 12300
2	SD2257-1層	須恵器	高台壊	高台基盤部	高台基盤部: 深腹状		H20 12341	7	SD2257-2層	軒丸瓦	八葉垂井唐草文	120	高台	H2 12300	
3	SD2257-1層	綠釉陶器	壊	(軒平瓦)	赤江系、内面見込みと西行埋置に底面、内面が研磨		H20 12341	8	SD2258A-1層	平瓦	II B類	須	須恵器壊	H1 12300	
4	SD2257-2層	須恵器	平瓦	Ⅱ B類	表面に刻印「物」3、政府第Ⅲ期		H16 12361	9	SD2258A-1層	平瓦	II C類	須	須恵器壊または第Ⅱ期	H3 12300	
5	SD2257-1層	須恵器	平瓦	Ⅱ B類	表面に刻印「物」3、政府第Ⅲ期、焼け瓦		H7 12361								

第16図 SD2257・2258A大溝出土遺物



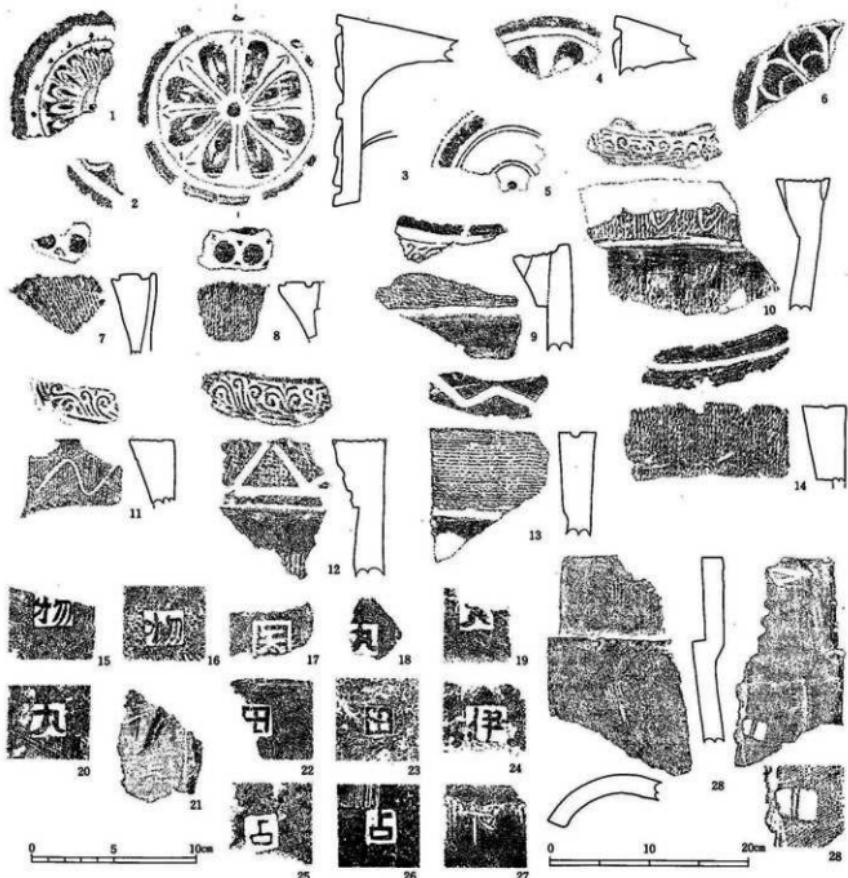
番号	種類	種類	分類	外観	壁厚	半径	番号	幅	高さ	種類	分類	外観	壁厚	半径
1	SD2258B-1種	漆器系土器	高台形?	口縁部破片。約部分復原。	0.76	12342	13	SD2258B-3種	漆器系	漆	横断面: ヘラキリ	0.47	12343	
2	SD2258B-1種	漆器系土器	漆	底部: 回転赤目切無調整	0.22	12342	14	SD2258B-4種	漆器系	漆	横断面: 大底高脚。手のりカタリ。施淡青ヘーフ漆と記載。	0.15	12343	
3	SD2258B-1種	土師器	漆	底部破片。底部: 回転赤目切無調整	0.09	12343	15	SD2258B-5種	漆器系	漆	横断面: 漆和ヘラキリ。大底高脚で底がより平らに見える。	0.17	12344	
4	SD2258B-1種	土師器	漆	底部破片。底部: 回転赤目切無調整	0.79	12343	16	SD2258B-6種	漆器系	漆	横断面: 手跡カタツリ。ナゾ	0.17	12345	
5	SD2258B-2種	土師器	漆 (漆ペレット)	底部: ナメリ。内腹: 漆地刷付漆。外腹黒化。	0.147	12342	17	SD2258B-1種	漆器系	漆	口縁部: 壁くびれ有り	0.09	12346	
6	SD2258B-2種	土師器	漆	裏面: 朱色刷付漆。内腹: ナメリ一黄色地。	0.25	12342	18	SD2258B-1種	漆器系	漆	低い扁平塊状つまみ。回転ヘラキリ	0.09	12347	
7	SD2258B-1種	漆器系	漆	底部: 回転赤目切無調整。底面: 行削物	0.16	12343	19	SD2258B-3種	漆器系	漆	サンダ状つまみ。口縁部: 別々折り面有り	0.10	12348	
8	SD2258B-1種	漆器系	漆	底部: 回転赤目切無調整	0.97	12343	20	SD2258B-1種	漆器系	漆	底部系、板の直角行。画面: ヘフミガタ・無輪	0.16	12349	
9	SD2258B-1種	漆器系	漆	底部: 回転赤目切無調整	0.94	12342	21	SD2258B-2種	漆器系	漆	横断面: ヘフミガタ	0.07	12346	
10	SD2258B-3種	漆器系	漆	底部: ハラキリ	0.05	12342	22	SD2258B-1種	漆器系	漆	外面: 平行帯き。内腹: 鮫目状当具底	0.07	12343	
11	SD2258B-2種	漆器系	漆	底部: ハラキリ。体部: 漆書「白」	0.02	12342	23	SD2258B-1種	漆器系	漆	体アラメ: 赤かい朱江板	0.02	12345	
12	SD2258B-3種	漆器系	漆	底部: ハラキリ	0.05	12342	24	SD2258B-1種	漆器系	漆	高台部内腹面が漆地面より上に上がり。様なず	0.04	12344	

第 17 図 SD2258B 大溝出土遺物 (1)



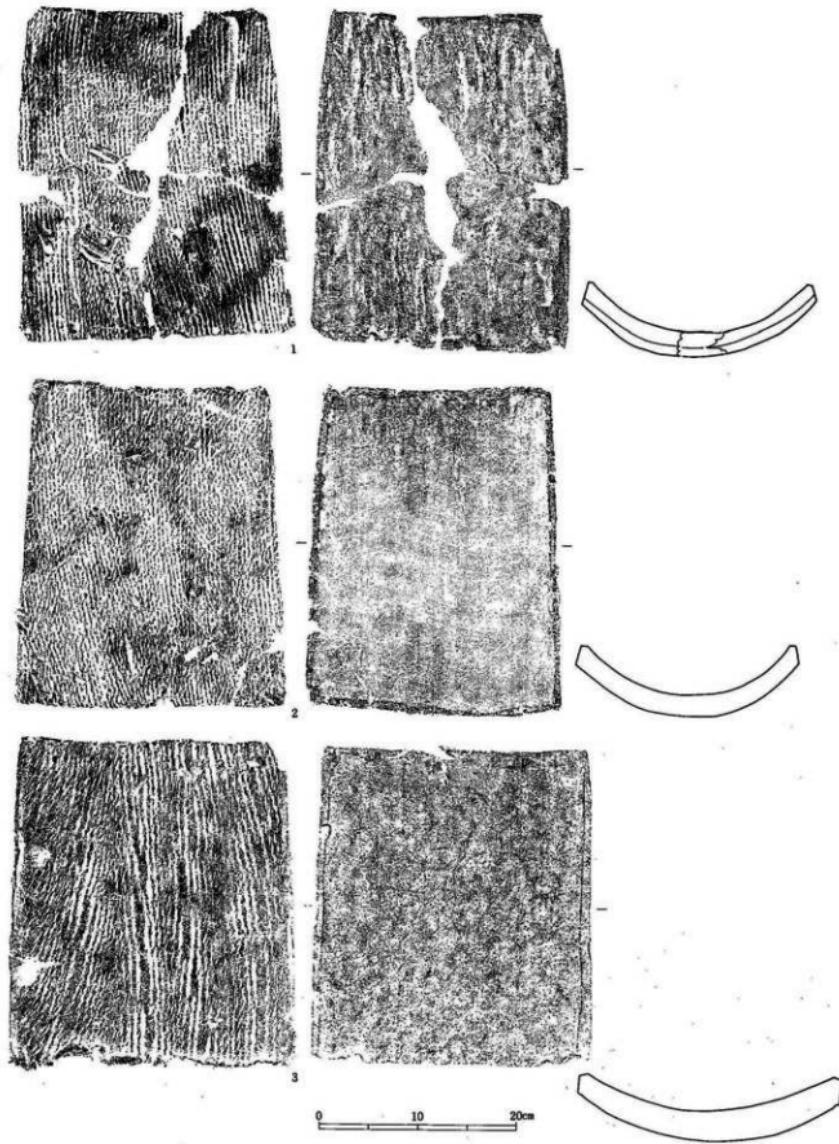
番号	種 類	種類	分 類	物 像	世 史	年 代	番号	種 類	種類	分 類	物 像	世 史	年 代
1	SD2254B-3層	陶器	便	外面：平行帯き。内面：無文当て道具板	856	12346	1	SD2254B-3層	上製品	円盤状上製品	無文無施釉無孔一輪盤生目丸矢矢列盤狀に成形	863	12347
2	SD2254B-2層	陶	便	無文無帶狀特徴 外面：平行帯き。内面：無文当て道具板、斜切	879	12342	5	SD2254B-2層	下製品	圓盤狀下製品	無文無施釉無孔一輪盤生目丸矢矢列盤狀に成形	863	12348
3	SD2254B-1層	陶器	便	外面：平行帯き・手取もつぎ。内面：手持しレリフ	881	12342					無文無施釉無孔一輪盤生目丸矢矢列盤狀に成形	863	12349

第 18 図 SD2258B 大溝出土遺物 (2)



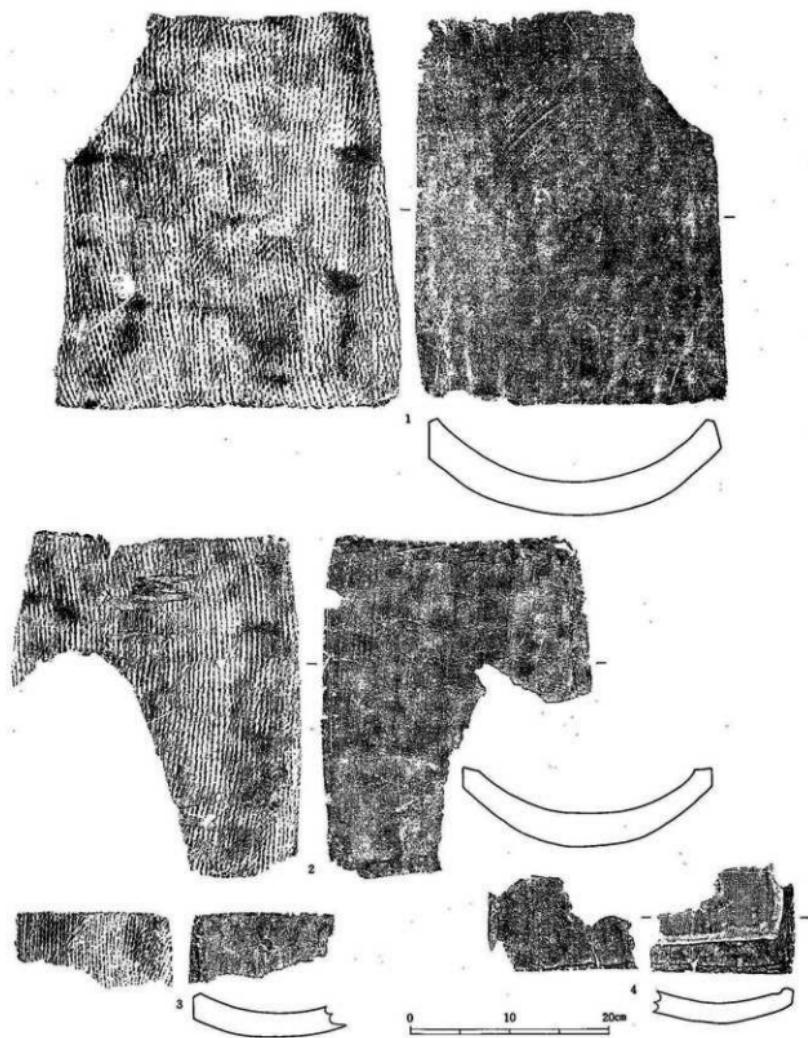
番号	種類	種類	分類	物	形	鉢底	平底	面部	種類	種類	分類	物	形	鉢底	平底		
1	SD2258B-2 磁器丸瓦	董作華文	218	政府調査局		R101	12359	15	SD2258B-2 磁	頭印平瓦	日式	頭面に刻印「物」a、政府調査局		R123	12283		
2	SD2258B-2 磁器丸瓦	董作華文	217	政府調査局		R107	12359	16	SD2258B-2 磁	頭印平瓦	日式	頭面に刻印「物」a、政府調査局		R124	12284		
3	SD2258B-3 磁器丸瓦	董作華文	219	八重山作華文		R105	12359	17	SD2258B-3 磁	頭印平瓦	日式	頭面に刻印「物」a、政府調査局		R125	12285		
4	SD2258B-3 磁器丸瓦	董作華文	220	政府調査局		R106	12359	18	SD2258B-3 磁	頭印平瓦	日式	頭面に刻印「物」a、政府調査局		R126	12286		
5	SD2258B-3 磁器丸瓦	董作華文	242	政府調査局		R111	12359	19	SD2258B-3 磁	頭印平瓦	日式	頭面に刻印「物」a、政府調査局		R127	12287		
6	SD2258B-1 磁器平瓦	董作華文	126	八重山作華文	126	政府第1種		R108	12359	20	SD2258B-1 磁	頭印平瓦	日式	頭面に刻印「物」a、政府第1種		R128	12288
7	SD2258B-1 磁器平瓦	董作華文	831	ルイイズ（董作華文）		R123	12360	21	SD2258B-1 磁	瓦瓦	日式	日式ルイイズ		R129	12289		
8	SD2258B-3 磁器平瓦	董作華文	831	ルイイズ（董作華文）		R117	12360	22	SD2258B-3 磁	頭印瓦	日式	内面に刻印「物」a、政府第1種		R130	12290		
9	SD2258B-1 磁器平瓦	内面董作華文	218	ルイイズ（董作華文）		R113	12360	23	SD2258B-1 磁	頭印瓦	日式	内面に刻印「物」a、政府第1種		R131	12291		
10	SD2258B-1 磁器平瓦	内面董作華文	218	ルイイズ（董作華文）		R114	12360	25	SD2258B-1 磁	頭印瓦	日式	日式ルイイズ		R132	12292		
11	SD2258B-1 磁器平瓦	内面董作華文	218	ルイイズ（董作華文）		R112	12360	25	SD2258B-1 磁	頭印瓦	日式	内面に刻印「物」a、政府第1種		R133	12293		
12	SD2258B-1 磁器平瓦	内面董作華文	218	ルイイズ（董作華文）		R113	12360	26	SD2258B-1 磁	頭印瓦	日式	日式ルイイズ	内面に刻印「物」a、政府第1種	R134	12294		
13	SD2258B-1 磁器平瓦	董作華文	620	頭印に横線の有り		R118	12360	27	SD2258B-1 磁	一ツカリ瓦	日式	日式ルイイズ	瓦縫にヘラ書き「下」、政府第1種	R135	12295		
14	SD2258B-1 磁器平瓦	董作華文	620	頭印に横線の有り		R118	12360	28	SD2258B-1 磁	頭印瓦	日式	日式ルイイズ	頭面に刻印	R136	12296		

第 19 図 SD2258B 大溝出土遺物（3）



番号	層位	種類	分類	物 理	登録 番号	平野 番号	番号	層位	種類	分類	物 理	登録 番号	平野 番号
1	SD2258B-1層	平瓦	Ⅲ-C類	内面溝切き・端上板塗瓦→内面溝切き。波打葉裏面	E106	11260	3	SD2258B-4層	平瓦	Ⅲ-B類レタイ グ	一枚作り。凸面：溝押き目、凹型打痕端部压痕 凹面：波打→ナメ。寸詰まり。波打葉裏面の少 量剥離	E109	11260
2	SD2258B-2層	平瓦	Ⅲ-C類	一枚作り。凸面：溝押き目、凹面：有目。波打葉裏 面	E136	11260							

第 20 図 SD2258B 大溝出土遺物 (4)

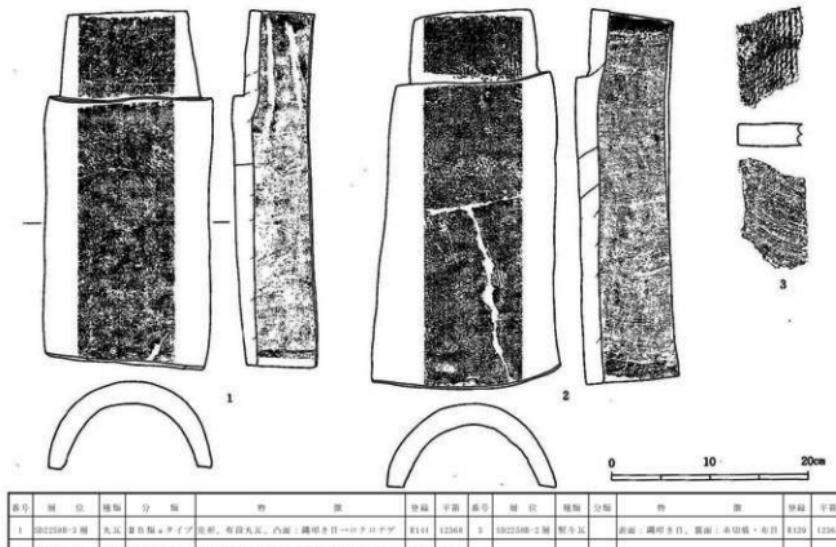


第 21 図 SD2258B 大溝出土遺物 (5)

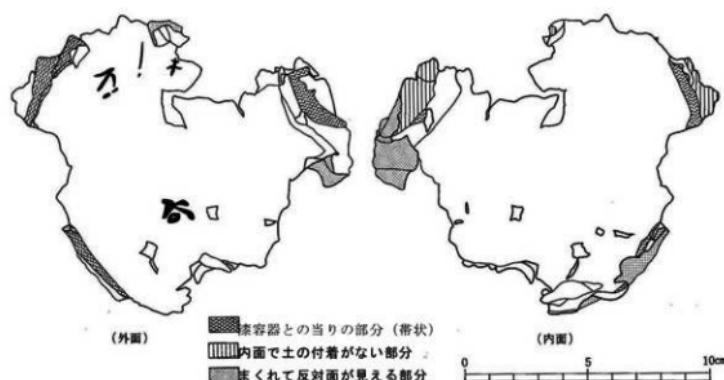
番号	層位	種類	分類	特徴	世紀	半径	基部	層位	種類	分類	特徴	世紀	半径
1	SD2258B-1層 瓦	Ⅱ C 帯	一枚作り。凸面：溝切き口。凹面：丸口。波打帯有無	E135 12.0 2	SD2258B-5層 瓦	Ⅱ C C	一枚作り。凸面：溝切き口。凹面：丸口。波打帯有無	E137 6.0					
2	SD2258B-2層 瓦	Ⅱ B 帯ナタイブ 凹面：丸口→チヂ。波打帯無無	一枚作り。凸面：溝切き口。中央上下2ヶ所ヨコナナ	E161 12.0 2	SD2258B-2層 瓦	Ⅱ A A	一枚作り。凸面：ナタ。凹面：一枚作り。波打帯1層	E132 3.0					

を受けたと推定される器形で、第 17 図 22 (図版 13-4) の須恵器甕は内面に格子當て道具痕、第 17 図 23 (図版 13-15) の須恵器甕は外面体下部に細かい布压痕、第 18 図 3 (図版 14-1) の須恵器甕は底部に網代圧痕が認められ、第 18 図 4 (図版 18-1) は須恵器甕体部破片の周囲を打ち欠いて円盤状に成形したもので、いずれも多賀城跡では希少な例である。

第 19 図 28 (図版 15-10) は丸瓦 II B 類 a タイプに凹面に刻印 III を押してある。同種の刻印は政府



第 22 図 SD2258B 大溝出土遺物 (6)



第 23 図 SD2258B 大溝出土遺物 (7)

第IV期の平瓦II C類にわずかに認められるものの（『多賀城跡 政府跡 図録編』、PL. 104-12）、丸瓦としては多賀城跡初出例である。また、第20図3の政府第III期の平瓦II B類bタイプ、第20図1・2の政府第IV期の平瓦II C類はいずれも長さ約32~33cmと寸詰まりで、同タイプに長さ35~38cm程のものが多い中で、少数例に属する。また、第20図1の政府第IV期の平瓦II C類は、凸型台の上に載せた粘土板が薄いのに叩き締め過ぎて仕上がり不良となり、凹面にさらに粘土板を足して作り直したことがわかる稀な例である（図版15-12）。また、第21図2（図版16-3）の政府第III期平瓦II B類aタイプは、凹面の中央上下2箇所を指状のものでヨコナデしている。これも多賀城跡では初出である。

漆紙文書（第23図、図版17-1）は、直径14cmほどの漆容器の口にかぶせる蓋紙として使用されたものである。20数点の破片で出土したが、接合の結果、第23図のように復原できた。接合できなかつた破片も数点あるが、状況から見て同一個体と思われる。文書の表面は漆が染み込んでいるが、傷みが激しく紙の纖維が浮き出ている状態である。文書の裏面は、直径約14cmのほぼ円形に土が付着しており、漆液に接していた面であることが分かる。その周縁部は漆面のままで、そこを境として内側に折れ曲がっている。周縁部の折れ曲がり部分は外側につまみ出すように折れ曲がっており、漆容器としては、口縁上部を外反させて鋭く挽き出しているロクロ土師器甕などが考えられる。文書の内容は、文字と墨界線の一部を確認できるのみで不明である。

【S K2259 土壙】

調査区南西部に位置する長さ約9m、幅約5m、深さ約1.2mの大土壙で、SD2258外郭内側大溝に連なる一連の土壙の一つである（第3・5図、付図）。埋まり土は自然堆積層で、5層に分けられ、1層上部に10世紀前葉に降灰した灰白色火山灰が堆積している。

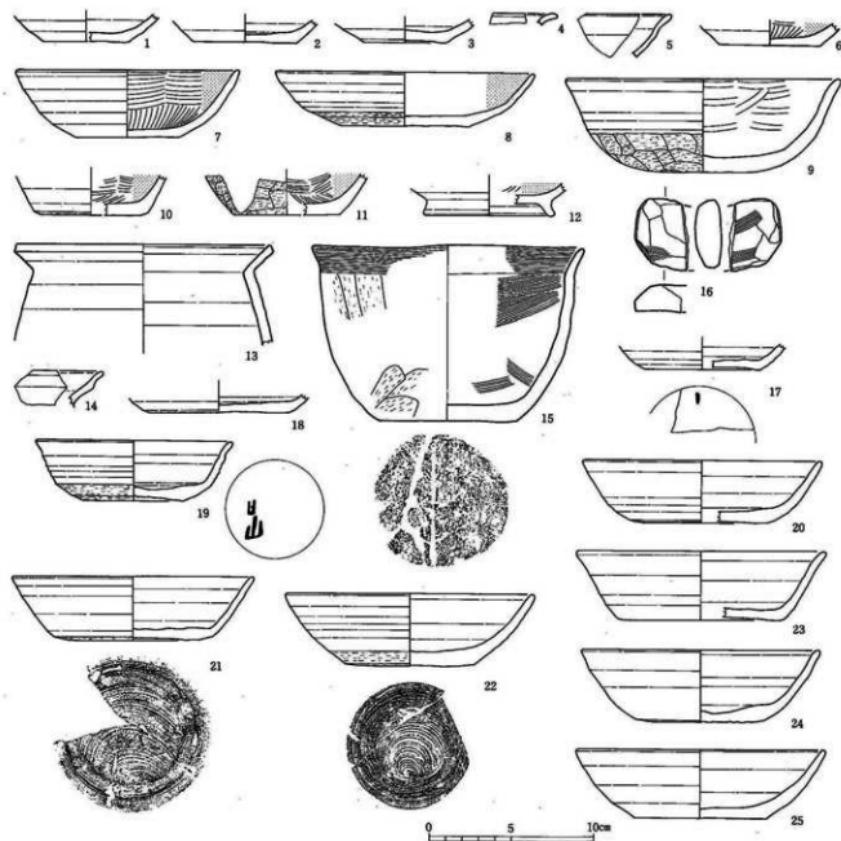
出土遺物は比較的多く、土師器坏・高台坏・塊・甕・瓶、須恵器坏・高台坏・蓋・甕・壺・鉢・横瓶、須恵系土器坏・小型坏・砾石、石製筋錘車、勾玉、雲母片、軒丸瓦、平瓦、丸瓦がある（表2～4、第24・25図）。このうち須恵系土器は1層に主に含まれ、政府第IV期の平瓦II C類は4層より含まれる。第24図9（図版14-4）の丸底のロクロ土師器坏、第24図16（図版14-6）の土師器瓶、第25図9（図版14-11）の須恵器横瓶は稀な器形で、須恵器横瓶は多賀城跡で2例目である。また、第25図13（図版18-9）の雲母片は5層から出土したもので、確実に古代に属するものとしては多賀城跡初出例である。3辺は損なわれているが、1辺がカットされ、約0.5mmと薄い。

【S K2260 土壙】

調査区南西部に位置する長さ約4m、幅約2.5m、深さ約0.5mの土壙で、SD2258外郭内側大溝に連なる一連の土壙の一つである（第3・5図、付図）。埋まり土は自然堆積層で、5層に分けられ、第1層上部に10世紀前葉に降灰した灰白色火山灰が堆積している。出土遺物は少なく、土師器坏・甕・須恵器甕、平瓦、丸瓦などの破片がある（第26図、表2・4）。平瓦には政府第IV期の平瓦II C類が含まれる。

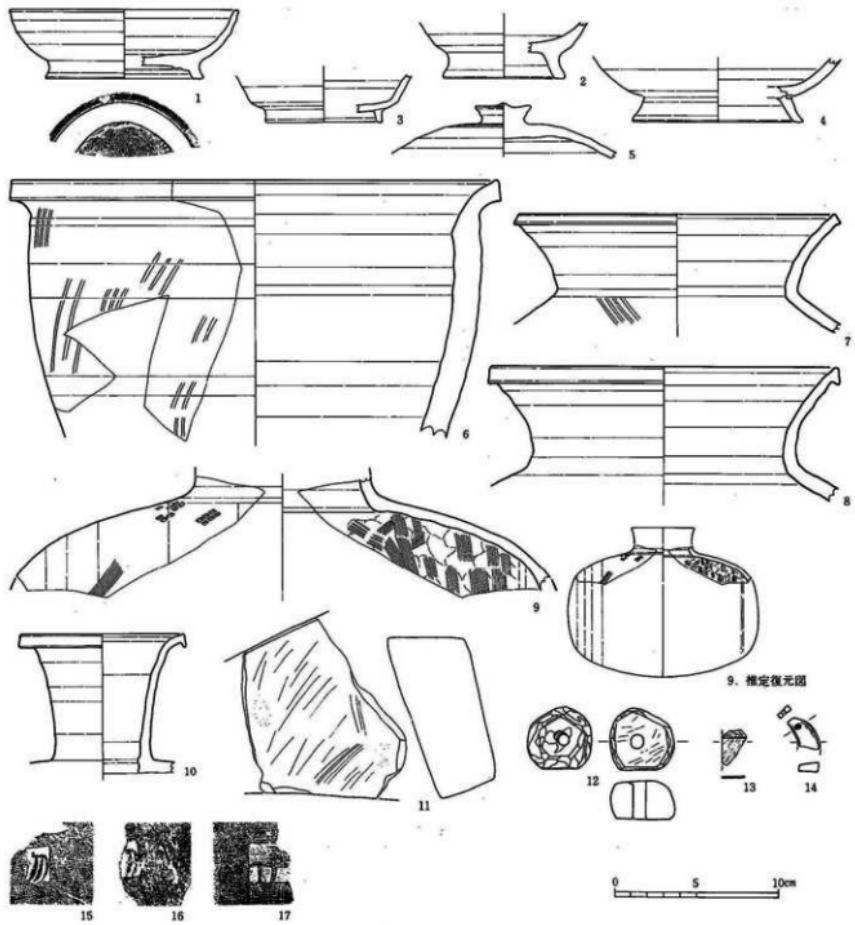
【S K2261 土壙】

調査区南西部に位置する長さ約5m、幅約4m、深さ約1.2mの土壙で、SD2258外郭内側大溝に連なる一連の土壙の一つである（第3・5図、付図）。埋まり土は自然堆積層で、5層に分けられる。



番号	層	種類	分類	特徴	番号	平面	番号	層	種類	分類	特徴	番号	平面
1	SK2259-1層	鐵器上器	片	直腹・四軸・切り無調整	R43	1/2/3/4/5	14	SK2259-1層	鐵器	ロクハ型	口縁部が「S」字形に變せやで・民曲	R10	1/2/3/4/5
2	SK2259-1層	鐵器上器	片	直腹・四軸・切り無調整	R42	1/2/3/4/5	15	SK2259-0層	鐵器	直腹	内底・ナメ・直腹・小量裏	R6	1/2/3/4/5
3	SK2259-1層	鐵器上器	片	直腹・四軸・切り無調整	R41	1/2/3/4/5	16	SK2259-1層	鐵器	直腹	内底・ナメ・ナメ・ナメ	R22	1/2/3/4/5
4	SK2259-1層	鐵器上器	小片	口縁部鋸歯	R45	1/2/3/4/5	17	SK2259-1層	鐵器	直腹	口縁・四軸・切り無調整・直腹	R17	1/2/3/4/5
5	SK2259-1層	鐵器上器	小片	口縁部鋸歯	R39	1/2/3/4/5	18	SK2259-2層	鐵器	直腹	口縁・四軸・無切無調整・先端付丸頭	R38	1/2/3/4/5
6	SK2259-0層	土師器	片	直腹・四軸・切り無調整	R2	1/2/3/4/5	19	SK2259-0層	鐵器	直腹	直腹・ナメ・口縁・ナメ・ナメ裏付	R32	1/2/3/4/5
7	SK2259-3層	土師器	片	直腹・四軸・切り無調整	R3	1/2/3/4/5	20	SK2259-0層	鐵器	直腹	直腹・口縁部ナメ・直腹・直腹・口縁ナメ	R11	1/2/3/4/5
8	SK2259-1層	土師器	片	直腹・四軸・切り無調整・直子腹・鋸歯ナメ	R24	1/2/3/4/5	21	SK2259-5層	鐵器	直腹	直腹・口縁部ナメ・直腹・直腹・鋸歯ナメ	R10	1/2/3/4/5
9	SK2259-1層	土師器	片	大底丸弧・直腹・直子腹・鋸歯ナメ・内底・ナメ	R38	1/2/3/4/5	22	SK2259-5層	鐵器	直腹	直腹・口縁部ナメ・直腹・直腹・鋸歯ナメ	R9	1/2/3/4/5
10	SK2259-3層	土師器	片	直腹・直腹・口縁・直子腹・鋸歯ナメ	R32	1/2/3/4/5	23	SK2259-5層	鐵器	直腹・切子・鋸歯・直子・持手・ナメ	R14	1/2/3/4/5	
11	SK2259-1層	土師器	片	直腹・直腹・ナメ・口縁・直子腹・鋸歯ナメ	R66	1/2/3/4/5	24	SK2259-5層	鐵器	直腹・ヘラキリ	R13	1/2/3/4/5	
12	SK2259-1層	高台器	片	直腹・直腹・ナメ・口縁・直子腹・鋸歯ナメ	R46	1/2/3/4/5	25	SK2259-3層	鐵器	直腹・ヘラキリ	R35	1/2/3/4/5	
13	SK2259-5層	土師器	ロクハ小型器	口縁部が「S」字形に變る直腹	R7	1/2/3/4/5							

第24図 SK2259 土壤出土遺物（1）



第25図 SK2259 土壌出土遺物（2）

出土遺物は少なく、須恵系土器坏・大型台付鉢、土師器坏・甕、須恵器坏・甕、平瓦、丸瓦などの破片がある（第26図、表2・4）。平瓦には政庁第IV期の平瓦II C類が含まれる。

（3）その他の遺構

【SK2262 焼成土壙】

S F300 外郭東辺築地壙の北東屈曲部の西側約7mに位置する土壙で、S F300B 崩壊土を壙してS F300 築地壙上に作られている（第4・6・7図）。径約1.5mの円形と推定され、深さは約90cmある。

遺構	土器部					須恵器部					須恵系土器部					灰陶器	縫合陶器	規制陶器	現代陶磁器	計		
	环	高台环	培	便	瓶	环	高台环	被	双耳环	盖	便	新	鉢	横瓶	瓶	环	小型环	高台环	台环	林		
SF300A築地壙	基礎整地	4		2	2						1											9
	本体	4																				4
	崩壊土	1		1			1				1											4
	計	9		3	2	1					2											17
SF300B築地壙	本体	2		2	1					1												6
	崩壊土	1		2	1		1			2												1
	計	3		4	2	1		1		2												14
SK2255B土壙		1		1	1						2											5
	天井整地										2											2
	本舗内	2		1																		3
	取水口										1											1
SD2257	計	2		1						2	1											6
	SD2257-3層										1											1
	SD2257-2層						1															1
	SD2257-1層									1	2											4
SD2258A	計					1				2	2											6
	SD2258A-6層								1	1												2
	SD2258A-5層	1					3		1	1												6
	SD2258A-4層	4		5	9	1				1												20
SD2258B	SD2258B-3層	12		1	10	27	2			4	8	5				2		1				72
	SD2258B-2層	1		1	3	7	2			5	1	1										3
	SD2258B-1層	22	3	7	18	2			2	22	12				1	8	1		1	1		97
	計	49	4	1	25	65	7	2	1	6	36	18	1		1	7	1	1	1	2		219
SK2259	SK2259-5層	5	1	5	11	3			1	7	1	1	1									36
	SK2259-4層	10		9	11	4	1			1	1											27
	SK2259-3層	13		6	10	2			1	3	1											36
	SK2259-2層	1		1	3					2												2
SK2259	SK2259-1層	3	2	5	4	1			2							7						24
	計	32	2	1	26	1	32	7		3	15	2	1	1		7						136
	SK2260																					2
	SK2261																					6
SK2263																						2
	SK2265																					2
	SK2266																					22
	SD2267-2層															7	6		3			18
SK2267	SD2267-1層	7		3	6	2				11	1								1			32
	計	7		3	6	2				18	7						3	1				56
SK2268																						5
	合計	99	7	2	69	11	18	17	3	1	11	96	36	2	1	1	14	3	1	2	1	494

表2 主要遺構出土土器の集計

東・西・南の立ち上がりは不明確だが、北壁の立ち上がりは急で、焼き縮まっている。掘形を厚さ約20cm整地して、底面としており、底面も焼け、焼土・炭の薄層が堆積している。

出土遺物は少なく、土師器甕、須恵器甕、政庁第Ⅳ期の平瓦II C類（第26図3）の破片がある。

【S K2263 土壙】

調査区北東部に位置する径8m以上、深さ約1.2mの大土壙で、SD2257外郭東辺外側大溝よりも新しく、SD2268溝よりも古い（第15図、付図）。

種類	時期	S F 3 0 0 A	S B 2 2 5 6	S D 2 2 5 7	S K 2 2 5 8	S K 2 2 5 9	S K 2 2 5 1	S K 2 2 5 6	S K 2 2 5 6	未登録	表 土	計
		基 礎	整 地	3 個	2 個	1 個	5 個	2 個	1 個	5 個	2 個	
八葉 重井蓮花文	126 政府第Ⅰ期						1					1
	320 政府第Ⅲ期					22						2
	4317 政府第Ⅳ期					1						1
	不明 政府第Ⅰ期	1		1								2
	不明 政府第Ⅰ・Ⅱ期					1	1	1				4
	3104 政府第Ⅲ期											1
	3108 政府第Ⅳ期					1						2
	240 政府第Ⅲ期											1
	242 政府第Ⅳ期					1						1
	宝相花文 420 政府第Ⅳ期		1									1
重圓文	車輪状文 427 政府第Ⅳ期								1			2
	不明 不明	本明					1	1		1		6
	計	1	1	1	3	3	2	1	1	1	1	25
	二重弧文 511 政府第Ⅰ期							1				1
	単弧文 640 政府第Ⅱ期			1	1							2
軒 平 瓦	浪文 不明 政府第Ⅱ期				1							1
	輪行唐草文 620 政府第Ⅱ期											1
	均整唐草文 720 政府第Ⅲ期					1						1
	721A 政府第Ⅲ期						1					2
	721B 政府第Ⅳ期						3			1		4
	網目文 630 政府第Ⅲ期					1						1
	蓮珠文 831 政府第Ⅳ期			1	1			1		1		4
割印瓦	不明 不明 不明				1							3
	計	1	1	3	6			1	1	1		19
	丸瓦II B類 物A 政府第Ⅱ期	1	2	1	1		2		1	2	1	19
	丸瓦II B類 矢A 政府第Ⅱ期		1				1					2
	丸瓦II B類 矢B 政府第Ⅱ期			1	1				1	1		1
	丸瓦II B類 矢C 政府第Ⅱ期				1				1	1		4
	丸瓦II B類 伊 政府第Ⅱ期						1					1
	丸瓦II B類 伊 政府第Ⅱ期					1				1	1	4
	丸瓦II B類 古 政府第Ⅱ期				1	1			1			1
	丸瓦II B類 田A 政府第Ⅱ期				1	1						2
丸瓦II B類	丸瓦II B類 不明 政府第Ⅱ期				1							1
	計	1	1	2	1	6	2	2	2	1	1	40
	丸瓦II B類 政府第IV期						1					1
	毛 政府第Ⅰ期											1
	上 政府第Ⅰ期											1
丸瓦II B類	下 政府第Ⅰ期					1						1
	木 政府第Ⅰ期											1

表3 主要遺構出土の軒瓦・文字瓦の集計

遺構No.	層位	平瓦												丸瓦											
		政府第Ⅰ期				政府第Ⅱ期				政府第Ⅲ期				政府第Ⅳ期		不明		計	I	II	丸 瓦	合 計			
		IA	IB	IC	II A	計	II B	II C	II	II B	II B	II C	II	B c	B C	不明	計		I	II	大 明	計			
SH1773 北 壁溝	埋土																		1	0	0	0			
SH3004 地溝	築地基礎	1	1	7	14	1	22	7	4	11								34	7	1	42				
SH3006 地溝	本体	1	1	1	1	1												1	0	4	5				
	崩土	1		1	2	1	2											2	4	5	11				
	計	1	2	9	15	2	29	7	4	11								59	11	5	66				
	本体	1	1	7	10	1												18	9	4	27				
	崩土	4		4	5	11	16	1	7	8								28	19	7	54				
	計	4	1	5	12	21	33	1	7	8								28	7	3	81				
SH311A 横 樋取穴																			12	2	2	2			
SH311B 横 樋取方							2	2										3	3	0	6				
SH2254 土塁							1	1										0	0	0	0				
SH2255B 土塁							3	4	7									8	5	0	13				
	天井整地	1		1	3	10	13											14	15	15	29				
SH2256 取 水口	取水口	2		2	2	1	3											5	0	0	5				
	排水渠内					3	8	11	1	1	1	1						13	6	4	19				
	井	3		3	8	19	27	1	1	1	1						32	26	2	58					
SH2257-3 層							3	1	1	3	5			3	3	1	4	1	1	1	15				
SH2257-2 層	1	3	5	10	15	2	2	4	6								26	0	30	30	55				
SH2257-1 層	2		2	44	64	108	2	8	23	34	77		28	28	25		191	19	456		226	525			
	計	3	3	52	74	126	6	11	26	43	83	3	28	41	29	0	225								
SH2258A	1		1	2	5	7	1	1	1								9	13	15	22					
	SH2258B-5 層	1	1	2	11	11	22	4	2	8	14	18	4	4	6	50	50	5	116						
SH2258B-4 層	1		1	11	10	21	2	1	3	14		39	0	60	60	60	60	99							
SH2258B-3 層	15	2	17	62	112	174	20	22	14	56	104	1	15	16	367	0	325	329	693						
SH2258B-2 層	14	2	2	16	51	98	1	156	18	5	19	42	20	17	17	266		250	25	516					
SH2258B-1 層	22	5	1	28	163	261	364	68	47	59	174	158	26	36	766	4	666	10	680	440					
	計	53	10	3	66	238	492	1	731	112	76	101	289	327	1	72	73	1496	0	1551	10	1360	2852		
SK2259-5 層	1		1	21	17	38	5	1	6								47	42	42	87					
SK2259-4 層	2	1	3	5	9	14	7	1	1	9	4						39	18	18	48					
SK2259-3 層	3	1	4	9	23	32	8	7	2	17	6						50	0	59	60	119				
SK2259-2 層	1		1	2	8	16	2	1	1	5	2						15	16	16	34					
SK2259-1 層				1	10	11	1	1	3	4	4						19	0	16	17	36				
	計	7	2	9	38	67	105	24	9	8	41	16					17	25	151	153	324				
SK2260				1	2	3	1	1	1	1	1						6	0	0	1					
	SK2261-7 層	1		3													1	1	1	2					
SK2261-6 層																	1	1	1	1					
SK2261-5 層				6	9	15	3	2	6	2	2						27	6	29						
SK2261-4 層	1		1	5	3	8	4	1	5	4	4						18	9	9	27					
SK2261-3 層	1		1	1	1	1	1	2	3								5	2	2	7					
SK2261-2 層				2	2	4	2	2	1	5	2						1	19	19	26					
SK2261-1 層	1		1	4	7	11	2	3	8	5	5						23	29	29	54					
	計	4		6	17	22	39	12	7	8	27	13					83	67	67	156					
SK2262														1				0	2	2	2				
SK2263				5	10	15	6	5	7	18	14			47			26	28	73						
SK2264				1		1	1							1			3	1	1	2					
SK2265				1	2	2	2	5						1			7	3	2	10					
SK2266				1	1	2	6	20	26	5	4	12	21	41			35	35	123	86	213				
SK2267				12	3	15	21	76	97	46	24	49	119	106			57	57	29	203	303	697			
SK2268				1		1	2	10	12	2	1	1	3	4			6	6	28	44	46	70			
未登録の土塁				2		2	3	2	1	1	2	2	2	1	1		6	0	0	6	16				
未登録のピット				2	9	11	9	1	2	12	4	1	1	2			22		22	25					
未登録の構				17	3	21	40	110	7	157	54	25	85	164	142	1	14	15	59	494	32	496	997		
崩土				46	5	14	2	67	167	415	582	166	75	217	453		480	166	166	1769	5	1595	4	1660	3373
	計	156	29	26	3	205	627	1379	10	2016	451	239	525	1215	1237	6	410	416	509	14	4680	28	4722	8813	
SB307 外部東門周辺																		3978				1592	575		
北東曲輪周辺																		732				530	266		
南東曲輪周辺																		1093				992	2085		
三 四 五 次																									

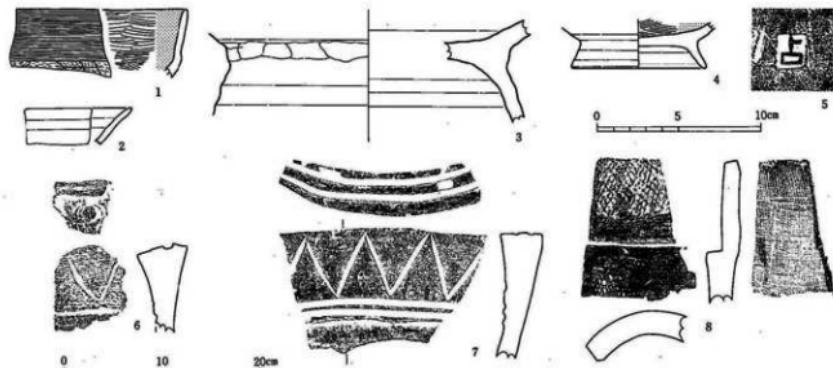
表4 主要遺構出土の平瓦・丸瓦の集計

出土遺物は少なく、土師器壺・甕、須恵器壺・甕・壺、平瓦、丸瓦の破片がある（表2・4）。このうち平瓦には政府第IV期の平瓦II C類（第26図4～6）が多く含まれる。

【S K2264 土壙】

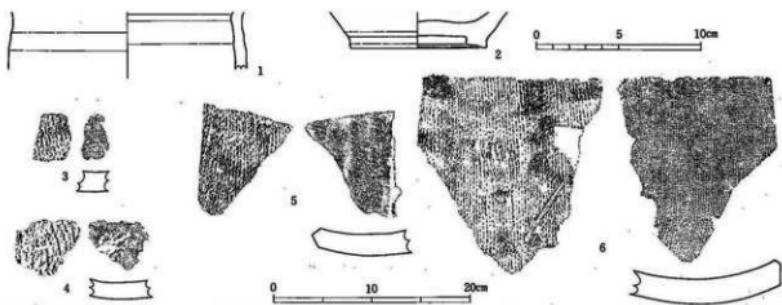
調査区南東部のS F 300 外郭東辺築地塀の北側犬走り面上に位置する径約1.2m、深さ約20cmの土壙で、S F 300B 築地塀よりも新しい（第4図）。埋まり土は自然堆積層で、上部には灰白色火山灰が厚さ10cm程堆積している。

出土遺物は少なく、土師器甕、政府第II期の平瓦II B類の破片が各1点あるのみである。



番号	施設	種類	分類	性	形	寸法	分類	施設	種類	分類	性	寸法	分類
1	SK2260	土師器	壺	横口	内面：ヨコテナリ。外底：ヘラヒビ有。黑色地	81 12345	5	SK2261-5層	斜印瓦	B8型Aタイプ	内面に刻印「吉」。政府第II期	81 12361	
2	SK2261-2層	須恵器	壺	口縁當小健所		88 12345	6	SK2261-1層	斜平瓦	連珠文831	△タイプ(腰面に連珠文)。政府第Ⅳ期	81 12368	
3	須恵器	壺	大型高台	高台くびれ面、直オサヌ。他ヨコテナリ		86 12345	7	SK2261-1層	斜平瓦	二重弧文311	△タイプ(腰面に刻印文・平行波状文)。政府第I期	82 12369	
4	SK2261-1層	土師器	瓦	高台面	「ル」字形に開き高台高が15mm高い	87 12345	8	SK2261-5層	丸瓦	B8型Bタイプ	内面：株子叩き+ヨコテナリ。政府第I期	81 12368	

第26図 SK2260・2261 土壙出土遺物



番号	施設	種類	分類	性	形	寸法	分類	施設	種類	分類	性	寸法	分類
1	SX2262	須恵器	甕	口部裏面「K」字形に強く擦痕		81 12345	4	SX2262-4層	平瓦	B8型C類	一枚作り。内面：溝切き目。周面：有目。政府第IV期	81 12367	
2	SX2263	須恵器	甕	輪高台		82 12345	5	SX2263	平瓦	B8型	一枚作り。内面：溝切き目。周面：有目。政府第IV期	81 12367	
3	SX2263	平瓦	平C類	一枚作り。内面：溝切き目。周面：有目。政府第IV期		83 12345	6	SX2263	平瓦	B8型	一枚作り。内面：溝切き目。周面：有目。政府第IV期	83 12367	

第27図 SX2262 焼成遺構、SK2263 土壙、SX2266 石敷道路跡出土遺物

【S E 2265 井戸跡】

調査区ほぼ中央部に位置する素掘りの井戸で、平面形は長径約2.3m、短径約1.2mの梢円形で、断面形は漏斗状で、深さ約0.9mある（第15図、付図）。

出土遺物は少なく、土師器壺・甕、須恵器壺・甕、須恵器壺転用硯、平瓦、丸瓦の破片、漆漉し布などがある（表2・4）。このうち土師器甕にはロクロ調整のもの、須恵器壺には底部ヘラキリのもの（第28図1・2）、須恵器甕には球胴丸底のもの（第28図4）などがある。第28図3（図版14-13）の須恵器壺転用硯は肩部破片の内面を硯として再利用している。この壺の肩部は強く張る珍しい器形で、外面はカキ目で調整されている。漆漉し布断片（図版17-3）は目の細かい布である。

【S X 2266 石敷道路跡】

調査区北東隅で石敷の路面の一部を検出した（第15図、付図）。側溝をもたない幅約6m程の東西道路と推定され、礫・瓦片を敷き詰めている。調査区北壁付近には大きめの石を並べてあり、路肩と考えられる。重複状況からみて、SD 2257 外郭東辺外側大溝よりも新しく、SD 2267 溝よりも古い。灰白色火山灰よりも新しく、南北方向のSF 300 外郭東辺築地塀を削平して西に延びると推定されることから、多賀城廃絶以後の道路と考えられる。

出土遺物は少なく、土師器壺・甕、須恵器壺・甕、平瓦、丸瓦の破片がある。平瓦の多くは摩滅しており、政庁第IV期の平瓦II C類が多い（表2・4）。

【S D 2267 溝】

調査区北東部に位置する幅8m以上、深さ約50cmの東西大溝で、SX 2266 石敷道路、SF 300 外郭東辺築地塀と重複して、これよりも新しい（第15図、付図）。

出土遺物には現代陶磁器の他、古代の遺物では須恵系土器小型壺・壺・大型高台壺、土師器壺・甕、須恵器壺・甕・壺、平瓦、丸瓦、凝灰岩切石などがある（第29～31図）。

【S D 2268 溝】

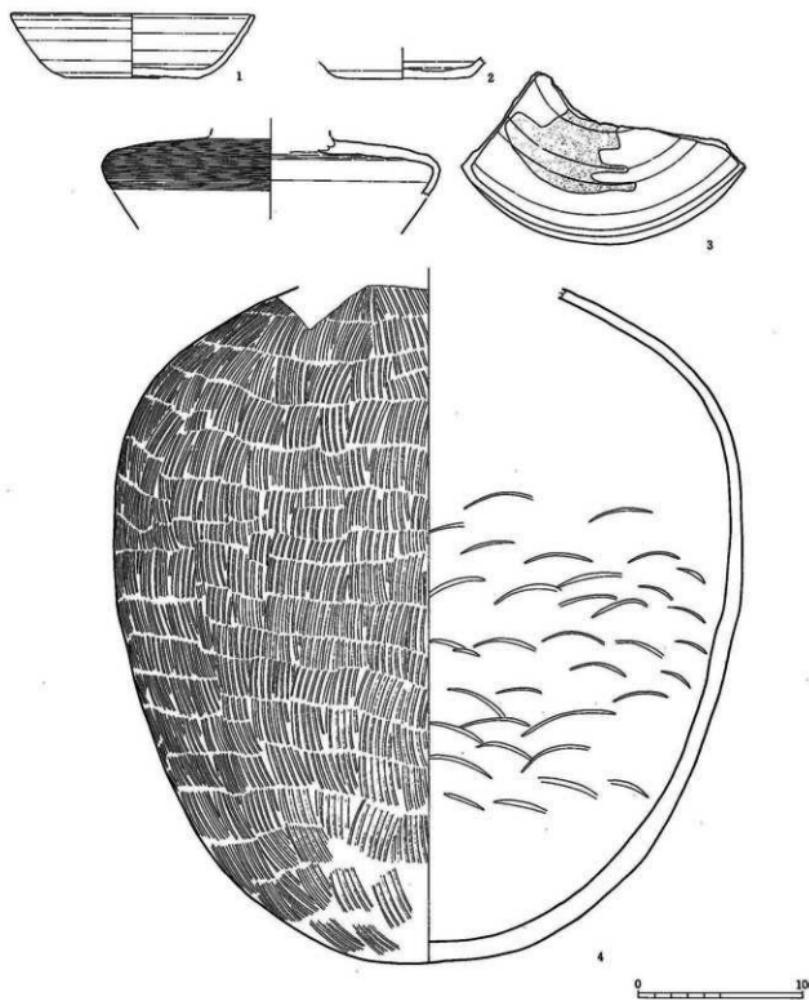
調査区北東部に位置し、西から東に流れる幅約80cmの断面形V字状の東西溝で、長さ約30m検出した（第15図、付図）。重複状況からみてSF 300 外郭東辺築地塀、SD 2257 外郭東辺外側大溝、SK 2263 土壙よりも新しい。

出土遺物は少なく、土師器壺・甕、須恵器壺・甕・壺、平瓦、丸瓦の破片がある（表2・4）。

【その他、多賀城廃絶以降の遺構出土の遺物】

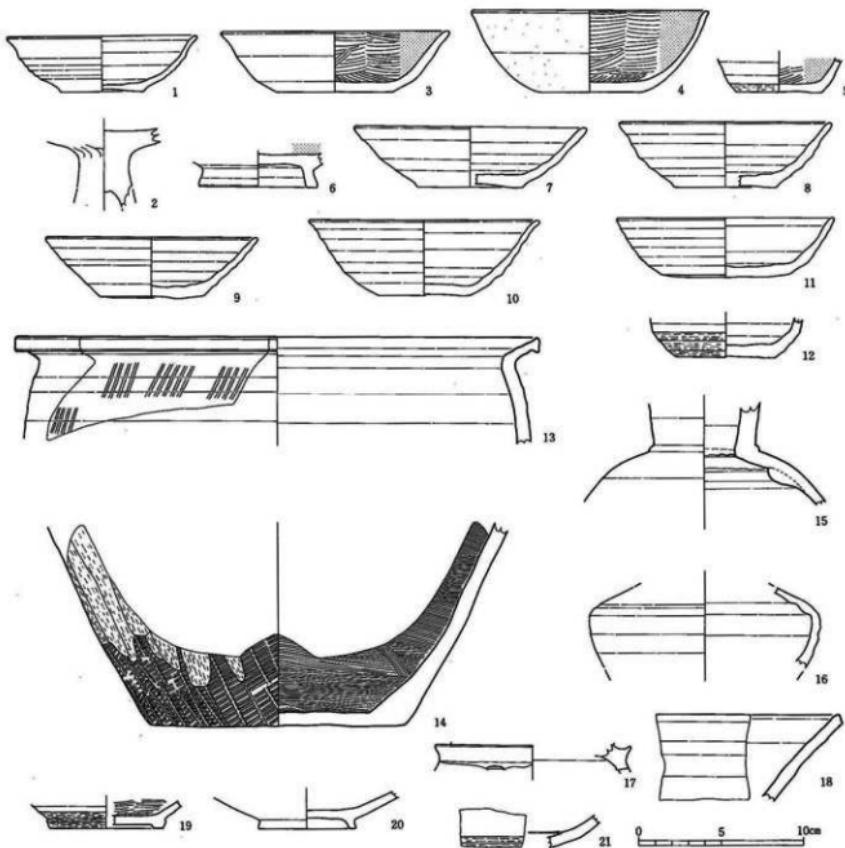
その他、遺構の重複状況や出土遺物からみて、多賀城廃絶後の溝・土壙・ピット・井戸と判断される遺構や堆積層、表土からも比較的多くの古代の遺物が出土した。そのうち主なものの中から抽出して第29・30図に示した。

このうち第29図14（図版15-6）の須恵器甕は体下部に横長の格子状叩きが残され、こうした叩きはあまり例がない。また、第30図14（図版16-6）の政庁第IV期の平瓦II C類の凹面には、無文叩き板による叩きが認められる。叩きは位置をずらしながら6回行われ、叩き目の痕跡から叩き板は幅約3.3cm、長さ7cm以上と推定される。こうした叩きの例は多賀城跡の平瓦では初出例である。また、第30図15（図版16-7）の丸瓦II B類aタイプは玉縁部を幅約3.5cmの小口でZ字状に3回ヨコナデして



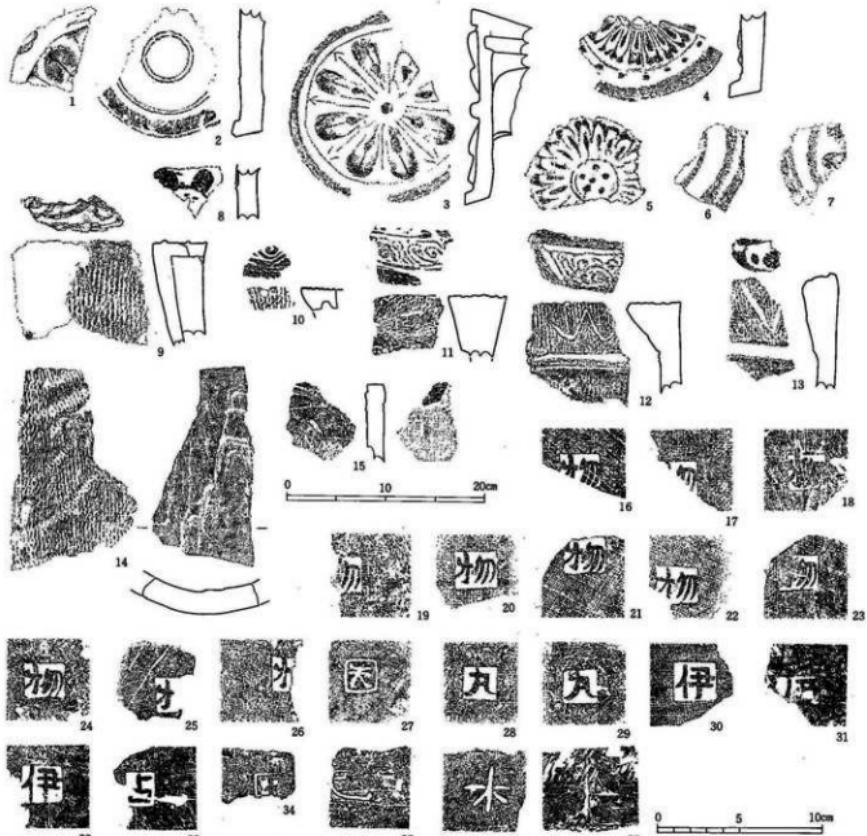
番号	層位	種類	分類	特徴	登録	平箱	番号	層位	種類	分類	特徴	登録	平箱
1	SE2265	研磨器	环	底面: ハラキリ	R6	12345	3	磨达上面	現	研磨器前輪用環	斜部: 力斗目、内面: 研磨面、墨痕	R3	12345
2	磨达上面	研磨器	环	底面: ハラキリ	R5	12345	4	磨达上面	現	環	底鋼头底、外面: 平行凹条、内面: 斜文凸丁道其痕	R1	12346

第28図 SE2265 井戸跡出土遺物



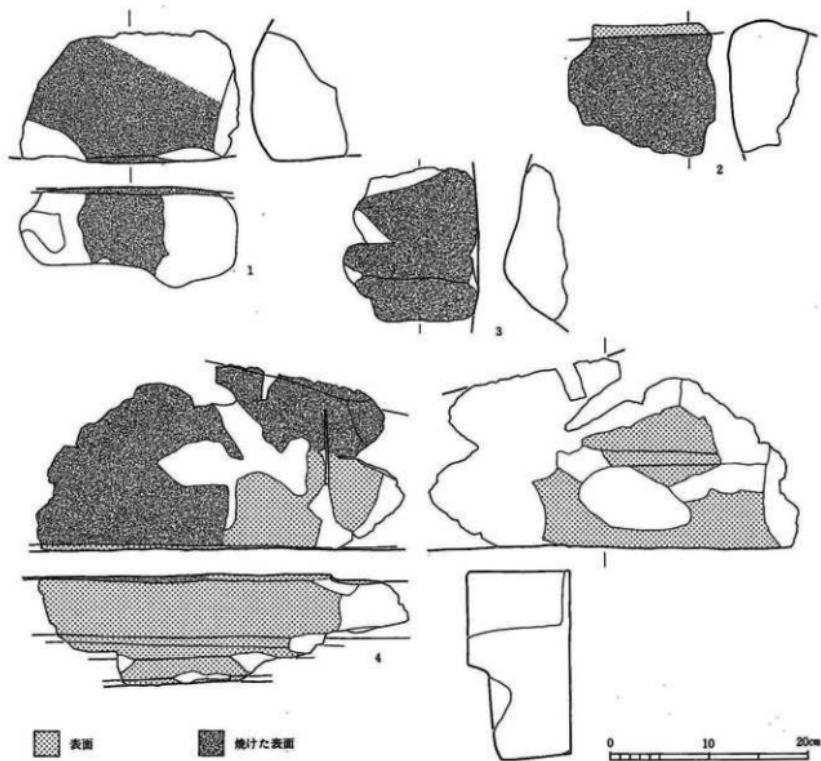
番号	種別	種類	分類	物語	基盤	平底	名号	層位	種類	分類	物語	基盤	平底
1	1402287	板唐茶上器	小笠形	底面：回転角切り無調整	R1	122457	12	011	浅色器	坪	底面：回転角切り一底面・体下部：回転ケブリ	R1	122457
2	表土	板唐茶上器	底耳	脚鉄削片	R14	122457	12	002287	浅色器	壁	外側：平行切欠き一ヨコナギ、内面：ヨコナギ	R7	122457
3	030	土解器	坪	底面：カブリ、内面：縦方向ミガキ一黒色均処理	R2	122457	11	030	浅色器	壁	内面：縦長様子切きり一ケブリ、内面：ナゲ	R8	122457
4	030	土解器	坪	底面：カブリ、内面：縦方向ミガキ一黒色均処理	R2	122457	15	092287	浅色器	黄褐色	底面：シングル内窓	R3	122457
5	030	土解器	坪	底面：回転角切り一底周・体下部：回転ケブリ	R4	122457	16	011	浅色器	壁	底面が強く張る	R4	122457
6	030	土解器	高台坪	高台底被片	R5	122457	17	009	塗	川碌面		R4	122457
7	1402287	板唐器	所	底面：回転角切り無調整	R10	122457	18	011	灰釉陶器	大型壺		R3	122457
8	1402287	板唐器	所	底面：回転角切り無調整	R11	122457	19	011	磁釉陶器	壺	外側：回転ケブリ、内面：ミガキ、縁は消失?	R3	122457
9	099	板唐器	所	底面：ヘアキリ、両面：油滑	R3	122457	20	011	磁釉陶器	壺	底面系、両面：ミガキ・施釉	R2	122457
10	030	板唐器	所	底面：回転角切り無調整	R7	122457	21	011	青釉	瓶?	外側：回転ケブリ、内面：底面	R45	122457
11	016	板唐器	所	底面：ヘアキリ	R2								

第29図 多賀城廃絶後の遺構・堆積層・表土の出土遺物（1）



番号	種類	分類	特徴	体積	平面	断面	堆積	分類	特徴	図版
1.	瓦上	軒丸瓦	繩文櫛目瓦文, 不規	小量の瓦を有する、割合不明。瓦の裏側に「物」の字が刻まれる。	811.	12358	19	0-267	輪印瓦片	0-267
2.	瓦上	軒丸瓦	繩文櫛目瓦文249	中量を有する。底面は削り取られた。	86	12358	20	0-270	輪印平瓦	0-270
3.	瓦上	軒丸瓦	繩文櫛目瓦文1326	底面削り取られ、表面は粗面	87	12359	23	0-270	輪印平瓦	0-270
4.	瓦上	軒丸瓦	繩文櫛目瓦文1103	底面削り取られ、表面は粗面	88	12359	22	0-270	輪印平瓦	0-270
5.	瓦上	軒丸瓦	繩文櫛目瓦文1108	底面削り取られ、表面は粗面	89	12359	23	0-270	輪印平瓦	0-270
6.	瓦上	軒丸瓦	繩文櫛目瓦文1109	底面削り取られ、表面は粗面	90	12359	23	0-270	輪印平瓦	0-270
7.	瓦上	軒丸瓦	繩文櫛目瓦文427	底面削り取られ、表面は粗面	91	12359	23	0-270	輪印平瓦	0-270
8.	瓦上	軒丸瓦	繩文櫛目瓦文427	底面削り取られ、表面は粗面	92	12359	20	0-270	輪印平瓦	0-270
9.	瓦上	軒丸瓦	繩文櫛目瓦文428	「物」(無柄圓筒型)、底面削り取られ、表面は粗面	93	12360	27	0-1	輪印平瓦	0-1
10.	瓦上	軒丸瓦	繩文櫛目瓦文270	底面削り取られ、表面は粗面	94	12360	28	0-16	輪印平瓦	0-16
11.	瓦上	軒丸瓦	繩文櫛目瓦文7215	「物」(無柄圓筒型)、底面削り取られ、表面は粗面	95	12360	29	0-267	輪印平瓦	0-267
12.	瓦上	軒丸瓦	繩文櫛目瓦文7216	「物」(無柄圓筒型)、底面削り取られ、表面は粗面	96	12360	30	0-16	輪印平瓦	0-16
13.	瓦上	軒丸瓦	繩文櫛目瓦文821	「物」(無柄圓筒型)、底面削り取られ、表面は粗面	97	12360	31	0-16	輪印丸瓦	0-16
14.	瓦上	平瓦	繩文櫛目瓦文C種	内面：輪印櫛目、外面：直角明文櫛目 内面：輪印櫛目、外面：直角明文櫛目 内面：輪印櫛目、外面：直角明文櫛目	98	12367	32	0-16	輪印丸瓦	0-16
15.	瓦上	平瓦	繩文櫛目瓦文D種	内面：輪印丸瓦、底面削り取られ、表面は粗面	99	12370	33	0-16	輪印丸瓦	0-16
16.	瓦上	平瓦	繩文櫛目瓦文E種	内面に輪印「物」、底面削り取られ、表面は粗面	100	12370	34	0-16	輪印丸瓦	0-16
17.	瓦上	平瓦	繩文櫛目瓦文F種	内面に輪印「物」、底面削り取られ、表面は粗面	101	12370	35	0-16	輪印丸瓦	0-16
18.	瓦上	平瓦	繩文櫛目瓦文G種	内面に輪印「物」、底面削り取られ、表面は粗面	102	12370	36	0-16	輪印丸瓦	0-16
19.	瓦上	平瓦	繩文櫛目瓦文H種	内面に輪印「物」、底面削り取られ、表面は粗面	103	12370	37	0-16	輪印丸瓦	0-16

第30図 多賀城廢絶後の遺構・堆積層・表土の出土遺物（2）



番号	道 槽	層 位	種 類	特 値	登録	平箱	番 号	道 槽	層 位	種 類	特 値	登録	平箱
1	SB2256 線堀	天井部整地	凝灰岩切石	2面焼け	R11	12489	3	SB2267	2層	凝灰岩切石	2面焼け	R16	12489
2	SB2256 解堀	天井部整地	凝灰岩切石	1面焼け	R13	12489	4	TN57-P36		凝灰岩切石	断面L字形、1面焼け、基壇化粧?	R1	12489

第31図 各遺構出土の凝灰岩切石

いる。これも多賀城跡では初出である。また、第31図4（図版18-12）の凝灰岩切石は、断面L字形で、広い平坦面とそれに直交する1面が焼けている。門などの基壇化粧に使用された可能性がある。

4. 第13次調査成果との比較検討

前述したように、第13次調査でS B307外郭東門、およびこれに「コ」字形に取り付くS F300外郭東辺築地塀の南側部分、南東屈曲部周辺を調査した（『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1971）。これらは今回の調査で検出した遺構にも関連するので、この部分を再発掘はしていないが、今回の調査結果を踏まえて、検討しておきたい。

【S B307 外郭東門】

南北3間、東西2間の三間一戸の八脚門で、棟通りにS F300 外郭東辺築地壇が取り付く（第32～35図）。新旧2時期あり、古いS B307A外郭東門は掘立式、新しいS B307B外郭東門は礎石式である。後世の破壊で基壇は削平されているが、S B307A・B外郭東門とも基壇上に建てられていたと推定される。

S B307A外郭東門の掘方は一辺約1.2mの方形のものが多い。南東隅柱穴は $1.8 \times 1.2\text{m}$ と大きく、残存する深さも1.05mと最も深い。また、棟通り中央間の柱穴は $90 \times 70\text{cm}$ と他の柱穴よりも小さく、底面レベルも他よりもやや高い（第32・33・35図）。「掘方内には地山の凝灰岩片、黄色粘土、褐色粘土がやや粗く、互層に詰め込まれている。」

S B307A外郭東門のすべての柱穴には柱抜取穴が伴う。「柱のあたりの中心を測定して得た柱間の平均距離は桁行 9.378m ($2.70+3.926+2.752\text{m}$)、梁行 5.48m ($2.74+2.74\text{m}$) であり、 0.30m 強を1尺とした計画尺による桁行 31.0 ($9+13+9$) 尺、梁行 18 ($9+9$) 尺の建物と考えられる」（第32・34図）。

S B307B外郭東門はS B307A外郭東門の柱抜取穴に「径 $10\sim30\text{cm}$ の玉石を灰褐色土と共に詰め込んだ一種の掘込み地業を行ない、その上に礎石を置いている。」礎石は南東隅にのみ原位置で遺存し、東側柱列の他の3つの礎石と西側柱列の南から1間目の礎石は近くに転落していた。すべての据方には $5\sim30\text{cm}$ 程の根石が詰められている。「規模はS B307A門とほぼ等しいと思われるが、東南隅の礎石を観察すると礎石の据方がS B307門の掘方よりもやや東に偏しているので、S B307Aに比べて少し東に寄るか染行が広まる可能性がある。」

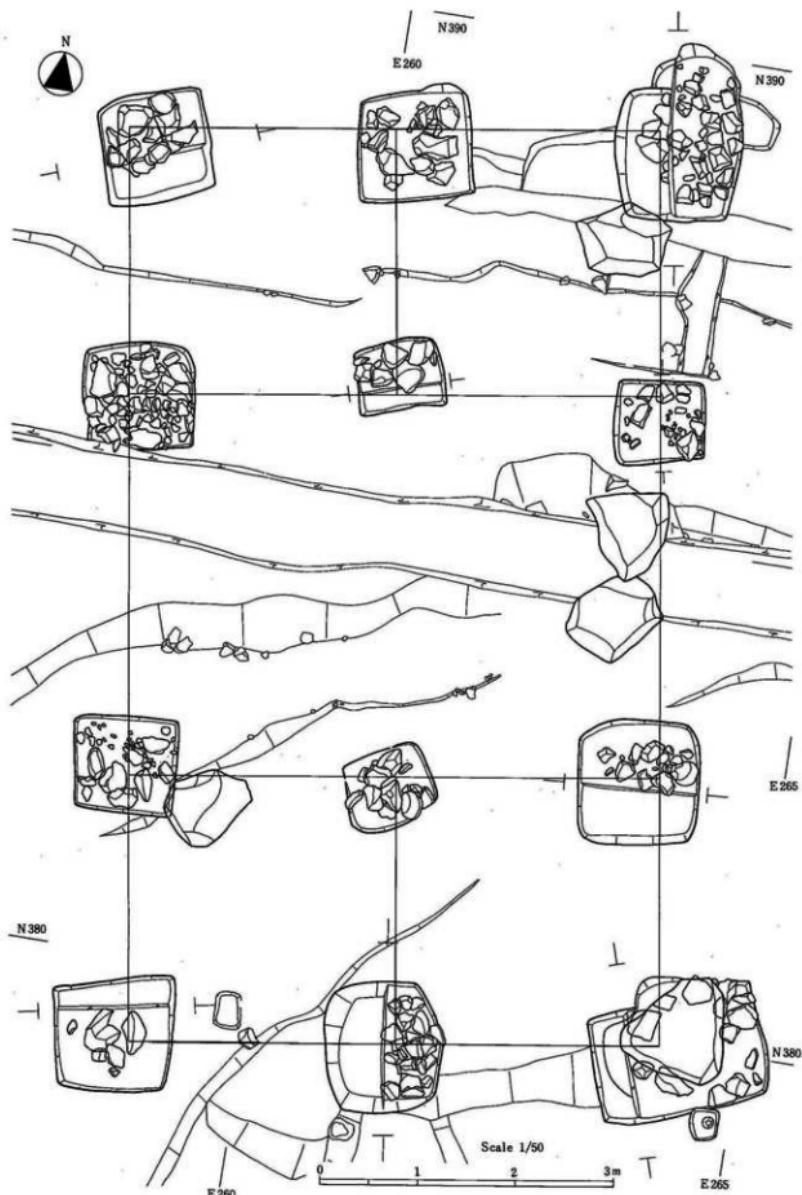
S B307A・B外郭東門とも遺物は出土していないが、周辺からは多量の瓦が出土した。（表4）

基壇の規模・化粧は不明だが、S B307外郭東門と同形式で規模も類似する法隆寺西院東大門の基壇（奈良六大大寺大觀刊行会編、1971）を参考にすると、東西約 12.3m (41尺)、南北約 7.8m (26尺)と推定される（第34図）。また、基壇の高さはS X2250城内道路（S X314小石敷路面）と南東隅礎石の天端との比高差を検討すると（第35図）、城外側の中央間が約 80cm 、城内側の中央間が 110cm 、最も高い南西隅で約 170cm の高さがあったと推定される（第34図）。したがって、この基壇には階段が付いたと推定される。

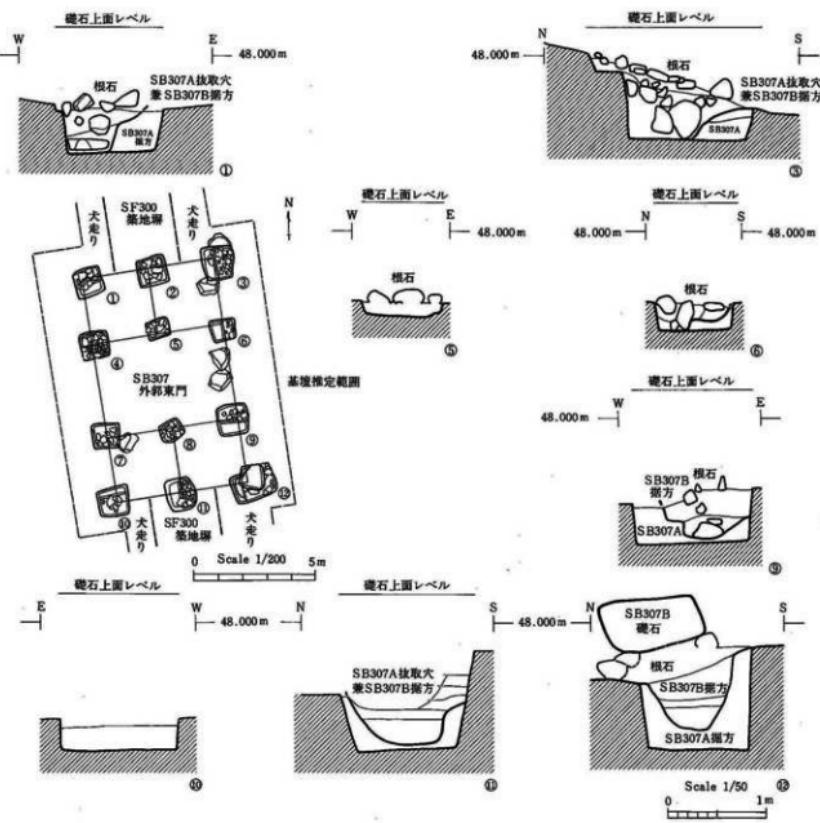
S B307外郭東門は後述するように政府第III期に相当する。同じ政府第III期のS B150C政府正殿の基壇の階段では、蹴上げは階段の最上段が 15cm 、それ以下が $20\sim23\text{cm}$ である（『多賀城跡 政府跡 本文編』）。この数値で中央間の推定基壇高を換算すると、S B307外郭東門の基壇には城外側で4段、城内側で5段の階段があったと推定される。

【南側の東西方向のS F300外郭東辺築地壇】

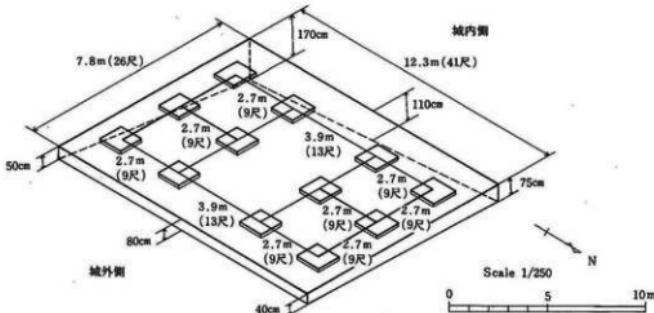
南側の東西方向のS F300外郭東辺築地壇は、築地壇本体・犬走り・寄柱穴・添柱穴の残りがよい。基底幅については北側と同様に約 2.7m (9尺)で、寄柱穴をもつ構造であること、寄柱穴の柱間寸法は約 $2.7\sim3.0\text{m}$ (9~10尺)で、寄柱穴にも新旧があること、犬走りは北側が約 1.8m (6尺)、南側が約 1.5m (5尺)であることなどを指摘できる（第36・37図、付図）。



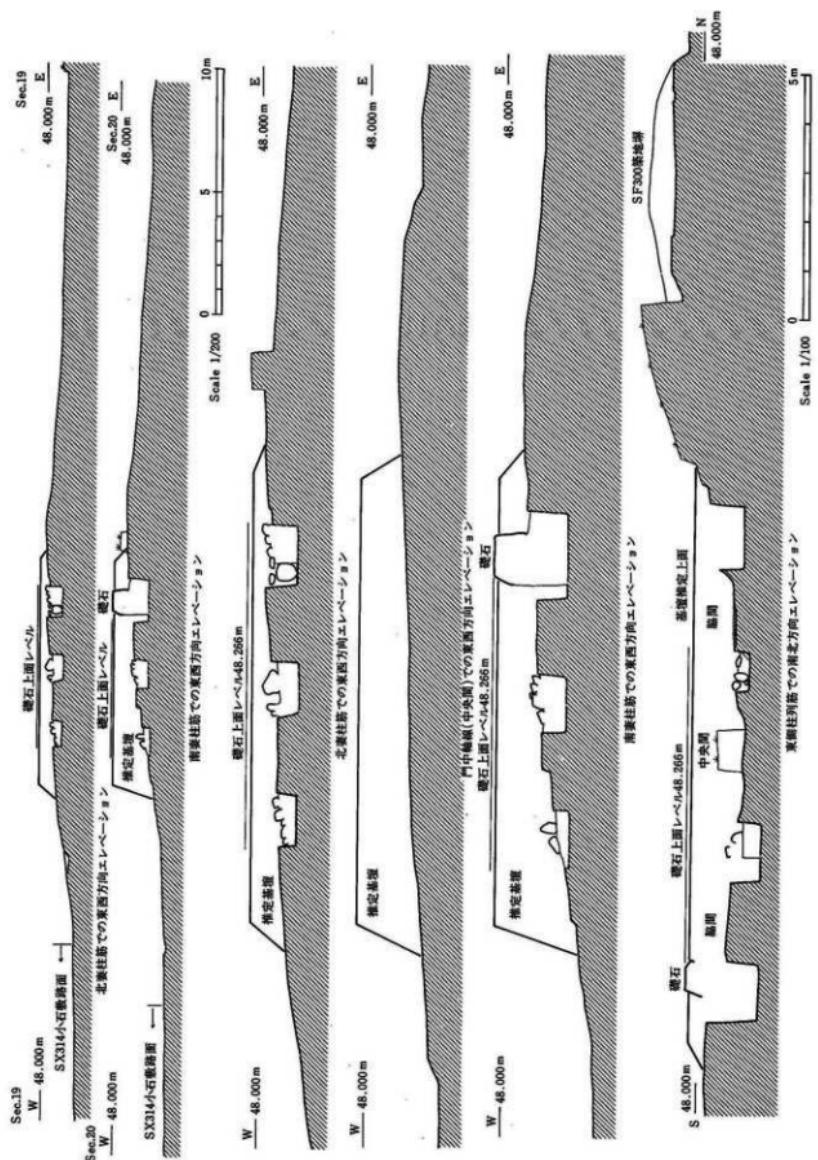
第32図 SB307 外部東門跡平面図



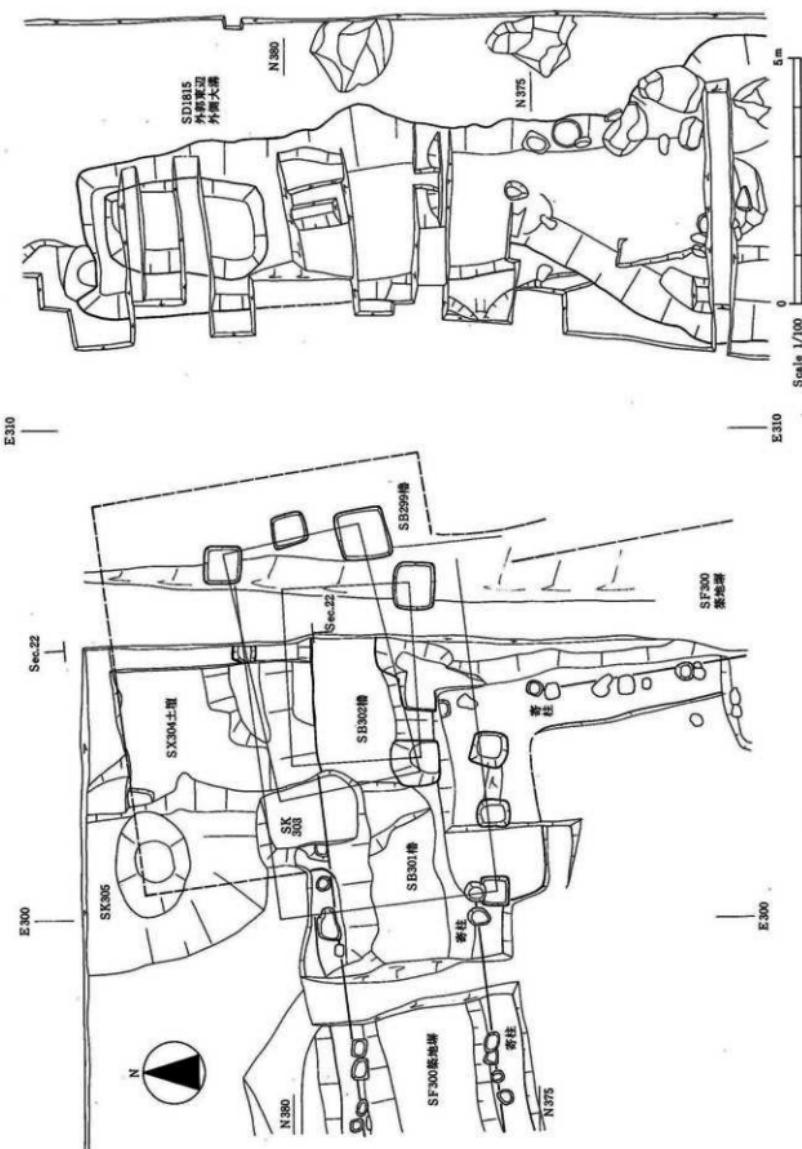
第33図 SB307A外郭東門の柱穴、SB307B外郭東門の据方の断面



第34図 SB307B外郭東門の推定造営尺と基壇の推定規模



第35図 SB307外郭東門のエレベーション



第36図 SB300外郭東辺塀地盤の南東屈曲部周辺の主要遺構

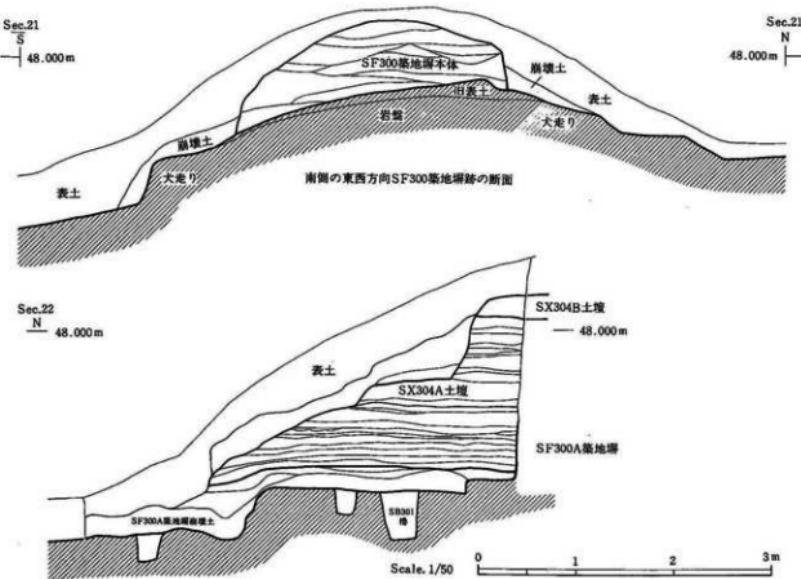
【S F 300 外郭東辺築地壠の南東屈曲部の櫓跡・土壙跡】

S F 300 外郭東辺築地壠の北東屈曲部と同様に、南東屈曲部にも櫓が取り付くと推定される。第13次調査で S A 299・301・302 柱列としたものをそれぞれ S B 299・301・302 櫓跡と改名する。また S X 304 土壙跡についても新旧2時期あり、古い土壙を S X 304A 土壙跡、新しい土壙を S X 304B 土壙跡と呼ぶことにする（第36・37図、付図）。

S B 299 櫓跡は東西2間、南北2間の東西棟で、規模は桁行総長約5.1m（17尺）、梁行総長約2.7m（9尺）と推定される。東妻、南側柱列の5個の柱穴のみを検出した。S F 300 外郭東辺築地壠、S X 304 土壙との位置関係、北東屈曲部の S B 311A 櫓跡との類似性から、S X 304A 土壙の上に建てられ、S F 300B 外郭東辺築地壠に伴い、S B 311A 櫓跡と同時期の櫓と推定される。

S B 301 櫓跡は東西が南側柱列3間、南北が西妻1間、東妻2間と推定される東西棟である。南側柱列で3個、北側柱列で1個の柱穴のみを検出した。北側柱列の柱穴は S X 304A 土壙跡の下で検出したので（第37図下）、S F 300A 外郭東辺築地壠に伴うもので、S F 300A 外郭東辺築地壠の北東屈曲部の S B 310 櫓に対応する。規模・構造は不明確であるが、S B 310 櫓との類似性から、S F 300A 外郭東辺築地壠をまたぐ構造と推定される。

S B 302 櫓跡は側柱列の3個の柱穴を検出したのだが、東西2間、南北1間で、桁行総長約3.6m（12尺）の小規模な東西棟と推定される。規模・構造は不明確だが、S F 300 外郭東辺築地壠、S X



第37図 SB300 外郭東辺築地壠の断面

304 土壇との位置関係、北東屈曲部の S B311 B 檐跡との類似性から、S X304 B 土壇の上に建てられ、S F300 C 外郭東辺築地壇に伴い、S B311 B 檐跡と同時期の檐と推定される。

S X304 A 土壇跡は2層に重成された土壇で、S F300 B 外郭東辺築地壇・S B299 檐に伴うと推定される。S F300 A 外郭東辺築地壇の崩壊土の上に作られ、S F300 A 築地壇に寄せて積土を積み上げている。平面形は方形で、南北・東西とも約 8.1m (19 尺) である。上段の高さは築成基部より約 1.6 m、下段の高さは約 0.9m である。下段は上段よりも約 0.7m 低く、上段より北側へ約 2.5m 張り出している (第 36・37 図下)。

S X304 B 土壇跡は2層に重成された土壇で、S F300 C 外郭東辺築地壇・S B302 檐に伴うと推定される。S X304 A 土壇の上段を約 25cm 嵩上げしている (第 37 図下)。平面規模は S X304 A 土壇と同様と推定される。

5. 考察

遺構期の設定

前述の事実記載に基づき、今回の調査で発掘した S F300 外郭東辺築地壇の北側、および第 13 次調査で発掘した S B307 外郭東門、南東屈曲部の南側の主要遺構について、遺構期を以下のように設定する。

	a 期	b 期	c 期
外郭東門	: S B307 A 挖立式八脚門 → S B307 B 碓石式八脚門		
外郭東辺築地壇	: S F300 A 外郭築地壇 → S F300 B 外郭築地壇	→ S F300 C 外郭築地壇	
北東屈曲部	: S B310 檐	→ S B311 A 檐	→ S B311 B 檐
		S X2255 A 土壇	→ S X2255 B 土壇
南東屈曲部	: S B301 檐	→ S B299 檐	→ S B302 檐
		S X304 A 土壇	→ S X304 B 土壇
暗渠	:		S D2256 暗渠
外郭外側大溝	: S D2257		
外郭内側大溝	: S D2258		

a 期の S B310 檐は SF300 A 外郭東辺築地壇の北東屈曲部、S B301 檐は SF300 A 外郭東辺築地壇の南東屈曲部に取り付き、SF300 A 外郭東辺築地壇をまたぐ構造の檐である。

b 期の SF300 B 外郭東辺築地壇は、SF300 A 外郭東辺築地壇と基底幅を同じで、ほぼ同位置で作り替えられている。しかし、寄柱穴の桁行柱間寸法は SF300 A 外郭東辺築地壇が約 3.0m であるのに対し、SF300 B 外郭東辺築地壇は約 2.7m のものが多いこと、SF300 A 外郭東辺築地壇本体の上部と両側を取り去った箇所が認められるなど、SF300 B 外郭東辺築地壇は SF300 A 外郭東辺築地壇をほぼ全面的に大改築したことが窺える。また、同時期に作り替えられた檐も a 期のものとは異なり、外に張り出す重成の土壇の上に建てられ、北東・南東屈曲部は大幅に作り替えられている。また、SF307 外郭東門が掘立式から礎石式に建て替えられたのも SF300 A 築地壇の大改築時期と推定される。

このように外郭東門地区では、a期の外郭東門・外郭東辺築地塀・櫓という主要遺構をb期に全面的に大改築している。

c期のSF300C築地塀については、北東屈曲部のSB311A櫓・SX2255A土壇→SB311B櫓・SX2255B土壇への櫓の建て替えと土壇の改修、南東屈曲部のSB299櫓・SX304A土壇→SB302櫓・SX304B土壇への櫓の建て替えと土壇の改修、北側の東西方向のSF300築地塀を南北に横断するSD2256暗渠の設置から想定されたものであり、改修が全面的に行なわれたものか、あるいは屈曲部と暗渠の周囲など部分的に行なわれたものかは不明である。

各遺構期の年代

a期については、出土遺物が少なく、SF300A築地塀の基礎整地から出土した政庁第III期の平瓦II B類aタイプ（第9図8～11）が最も新しい遺物である。政庁第III期は、宝亀十一（780）年の伊治公皆麻呂の乱以降、貞觀十一（869）年の陸奥国大地震までの期間である（『多賀城跡 政庁跡本文編』）。したがって、a期の造営年代については、遺物からは政庁第III期の間〔宝亀十一（780）年～貞觀十一（869）年〕としかわからない。

また、第53・54次調査の結果、奈良時代のSB1762外郭東門・SF380C外郭東辺築地塀は、宝亀十一（780）年の伊治公皆麻呂の乱で焼失したが、その後の同位置での暫定的な復興を経て、SF380D外郭東辺築地塀をほぼ位置で本格的に作り直すとともに、同じ築地塀の延長線上で外郭東門の位置を変更し、本格的な整備を行なっていることが判明した（『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1988）。

また、奈良時代のSB1762外郭東門から西に延びるSX1772城内道路のSD1773北側溝をSF300A築地塀基礎整地・SB310櫓柱穴の下から検出したことにより、SB307A外郭東門・SF300A外郭東辺築地塀がSB1762外郭東門・SF380C外郭東辺築地塀よりも新しいことを今回の調査で実証できた。

SF380D外郭東辺築地塀については、宝亀十一（780）年の伊治公皆麻呂の乱で焼失したSF380C外郭東辺築地塀を同位置で全面的に復興したものであることから、a期の直前に位置付けられる。

したがって、宝亀十一（780）年の伊治公皆麻呂の乱以降、a期のSB307外郭東門・SF300A外郭東辺築地塀が造営されるまでの間に、暫定的な整備の時期と本格的な整備の時期、併せて2時期の間隙があることになる。

b期については、a期の外郭東門・外郭東辺築地塀・櫓という主要遺構を全面的に大改築したものであることがb期の造営年代を考える上で重要である。

『日本三代実録』の貞觀十一（869）年五月廿六日条には、「陸奥國地大震動。流光如星隠映。頃之。人民叫呼。伏不能起。或屋仆壓死。或地裂埋瘞。馬牛駭奔。或相昇踏。城郭倉庫。門櫓墙壁。頽落顛覆。不知其數。海口哮吼。聲似雷霆。驚濤涌潮。沂洞漲長。忽至城下。去海數十百里。浩々不弁其涯涘。原野道路。慄爲滄溟。乘船不遑。登山難及。溺死者千許。資產苗稼。殆無子遺焉。」と記され、貞觀十一（869）年の陸奥国大地震の際には城郭、倉庫、門と櫓、築地塀の多数が崩れて倒れたことが知られる。この記事は貞觀十一（869）年の陸奥国大地震の際の多賀城に関する被害報告と考えられている（『多賀城跡 政庁跡本文編』）。

また、『日本三代実録』の貞觀十二（870）年九月十五日条には、「遣新羅人廿人。配置諸國。（中略）潤清。果才。甘參。長焉。才長。眞平。長清。大存。倍陳。連衰十人於陸奥國。（中略）潤清。長焉。眞平等。才長於造瓦。預陸奧國修理府・造瓦事。令長其道者相從伝習。」と記され、陸奥國修理府が置かれて日々的に復興されたことが知られる。

したがって、外郭東門地区におけるb期の大改築・改修は、貞觀十一（869）年の陸奥國大地震の復興期になされたと推定される。

b期のSF300B築地壝の本体からは底部が回転糸切り無調整の須恵器坏（第10図2）が出土している。同様の坏は9世紀第2四半期頃に位置付けられるSE2101B井戸跡第III層出土土器群（『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1991・1993）やこれ以降の土器群に認められる。また、SF300B築地壝の本体からは政府第IV期の瓦が出土しないのに対し、c期のSX2255B土壇、SD2256暗渠、SD2258B外郭内側大溝には政府第IV期の瓦が含まれている（表3・4）。出土遺物からみてもb期の造営を9世紀後半、c期の造営を政府第IV期とすることとも矛盾がない。

また、9世紀初頭頃の多賀城にも関連する大きな政治的動向には、延暦二十一（802）年の鎮守府胆沢城の造営、延暦二十四（805）年十二月の徳政争論、弘仁二（811）年閏十二月の三十八年戦争の終結がある。

延暦二十一（802）年に胆沢城が造営されると、大同三（808）年にそれまで陸奥国司の兼任であった按察使・鎮官（鎮守府官人）が国司とは各々別個に任命されるようになる（鈴木、1994）。多賀城に併置されていた鎮守府は、胆沢城が造営された延暦二十一（802）年以後、遅くともこの官制改革が行なわれた大同三（808）年までには胆沢城に移されたと考えられている（今泉、1992；鈴木、1994）。

また、延暦二十四（805）年十二月の徳政争論で三十八年戦争の終結を提唱した藤原緒繼は、大同三（808）年に陸奥出羽按察使となり、鎮守府をはじめとする多くの機構改革を行なっている（阿部、1985；鈴木、1994）

鎮守府の移転にあたって多くの機構改革がなされることと連動して、多賀城も大きく変容したことと考えられる。

a期の造営は記録には残されてはいないが、外郭東門・外郭東辺築地壝の位置を西側に大きく移して新たに造営していることから、その持つ意味合いは政府第II期の造営に次いで大きい。

したがって、前述したように、宝亀十一（780）年の伊治公咎麻呂の乱以降、a期の造営までの間に2時期あること、a期の造営が多賀城を巻き込んだ大きな政治状況と連動する可能性が高いこと、b期の造営が貞觀十一（869）年の陸奥國大地震の復興期であることなどを考え併せると、a期の造営は胆沢城への鎮守府移転に伴うものであり、延暦二十一（802）年～大同三（808）年までの間と考えるのが最も妥当と考えられる。

c期については、SX2255B土壇・SD2256暗渠・SD2258B外郭内側大溝に政府第IV期の瓦が含まれていること（表3・4）から、政府第IV期の期間中であることは確かである。SD2256暗渠の天井部整地には政府第IV期の宝相花文軒丸瓦420（第14図4）が含まれる。これは貞觀十二（870）年に陸奥國修理府に派遣された新羅人が伝習させた瓦である（工藤、1965；『多賀城跡 政府跡本文編』）。

また、SD2258B外郭内側大溝の上部に10世紀前葉に降灰した灰白色火山灰が含まれていることから、c期の造営は10世紀前葉よりも古いことも確かである。

したがって、b期の存続期間を考慮に入れると、c期の造営は10世紀初頭を前後する頃と考えられる。

大畠地区官衙の遺構期との対比

大畠地区官衙の奈良・平安時代の遺構期は、A～G期まで設定されている（『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1989～1992）。

このうち9世紀前半代の大畠地区D期官衙は、S F 300 外郭東辺築地塀を基準に計画的に造営され、北辺が塀で区画され、官衙の北辺には北門にあたる S B 707 捩立式八脚門を S B 307 外郭東門の西側柱列から西に約45m（150尺）離れた位置に東妻が、S F 300 A 外郭東辺築地塀の南側の東西方向築地塀の基底部南端から南に約15m（50尺）離れた位置に北側柱列が来るよう計画的に配置している。

S B 307 外郭東門と S B 707 大畠地区官衙北門との間隔は、「コ」字形に城内側に入り込んだ S F 300 外郭東辺築地塀の東西距離と同じである（『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1993、付図）。

また、S B 707 大畠地区官衙北門の南延長線上は、堅穴住居跡や10世紀ないしそれ以降と推定される小規模な建物跡が認められるものの、9世紀代には建物が認められず、大畠地区官衙に入る官衙内の道路の存在が想定される。

そして、大畠地区官衙北東部の建物群の集中する区域は、この S B 707 八脚門をかなり意識した配置を取っており、建物群の北限は S B 707 大畠地区官衙北門の南側柱列の延長線上から約7.5m（25尺）離れている。この間隔は前述の S B 707 大畠地区官衙北門と S F 300 外郭東辺築地塀基底部南端との間隔のほぼ半分に当たる。建物の方向もD期官衙では S B 307 外郭東門・S F 300 外郭東辺築地塀と一致している（『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1993、付図）。

以上のことから、a期は大畠地区D期官衙に対応すると見られる。

なお、第63次調査の結果、大畠地区D期官衙の存続期間中に S B 707 八脚門→S A 706 材木塀へと変遷し、当初の大畠地区官衙北辺区画施設は S A 706 材木塀に取って替わることが明かとなり、大畠地区D期官衙は新旧2時期に細部される可能性が高くなった（『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1993）。しかし、これに対応するような変遷は外郭東門地区では認められない。

大畠地区E期官衙は9世紀後半代で（『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1990・1991）、b期は大畠地区E期官衙に対応する。

c期は9世紀後半～10世紀前半代に位置付けた大畠地区F期官衙、および10世紀前半代に位置付けた大畠地区G期官衙に相当する。

外郭東門・大畠地区官衙の変遷

第53・54・65次調査の結果、外郭東門・大畠地区官衙については以下のような遺構の変遷を考えられる。

なお、遺構期については、D～G期は大畠地区官衙D～G期にそれぞれ対応し、A～C期と大畠地区官衙A～C期官衙との対比は現時点では行なわない。

―――奈良時代の外郭東門・築地塀の造営と修復――――――

A-1 期：S B 1761 挖立式棟門と S F 380 A 外郭東辺築地塀

(政庁第I期に相当する当初の簡易な門)

A-2 期：S F 380 B 外郭東辺築地塀（S F 380 A 外郭東辺築地塀の修復）

B-1 期：S B 1762 磐石式八脚門と S F 380 C 外郭東辺築地塀

(政庁第II期に相当する本格的な外郭東門の造営と S F 380 B 外郭東辺築地塀の修復)

B-2 期：S B 1762 磐石式八脚門に伴う雨落溝の改修

―――宝亀十一（780）年の伊治公咎麻呂の乱による外郭東門・築地塀の焼失と復興――

C-1 期：S B 1768 棟門・S A 1769 材木塀・S A 1770 柱列

(火災後の暫定的な復興；政庁第III-1期に相当)

C-2 期：外郭東門と S F 380 D 外郭東辺築地塀の再建（本格的な復興）

(本格的な復興、東門の位置は以前の南側と推定；政庁第III-2期に相当)

―――鎮守府の移転（延暦二十一（802）年～大同三（808）年までの間）――――

↓

この頃 外郭東門・外郭東辺築地塀を城内側に大きく移動

↓

外郭東門・外郭東辺築地塀の造営、大畠地区官衙の本格的整備

D 期：S B 307 A 挖立式八脚門と S F 300 A 外郭東辺築地塀、S B 310・301 檜、S B 707 大畠地区

(a期) 官衙北門、S B 706 材木塀跡（大畠地区官衙北辺区画施設）、大畠地区D期官衙

(9世紀初頭～中頃、政庁第III-2期に相当)

―――貞觀十一（869）年の陸奥国大地震による大被害とその後の復興――――

E 期：S B 307 B 磐石式八脚門と S F 300 B 外郭東辺築地塀、S B 311 A・299 檜、

(b期) S X 2255 A・304 A 土壇、大畠地区E期官衙

(9世紀後半、政庁第IV期に相当)

F・G期：S B 307 B 磐石式八脚門と S F 300 C 外郭東辺築地塀、S B 311 B・302 檜、

(c期) S X 2255 B・304 B 土壇・S D 2256 暗渠、大畠地区F・G期官衙

(10世紀初頭頃～中頃、政庁第IV期に相当)

ま と め

①東側に位置するS B 1762 外郭東門・S F 380 外郭東辺築地塀跡が奈良時代のもので、西側に位置するS B 307 外郭東門・S F 300 外郭東辺築地塀跡が平安時代のものである、とこれまで見てきた。奈良時代のS X 1772 城内道路のS D 1773 北側溝をS F 300 外郭東辺築地塀跡の下から検出し、このことを証明できた。

- ②S F 300 A 外郭東辺築地塀が S B 307 外郭東門と取り付く北西屈曲部から約 3 m (9 尺) を単位として東に向かって築かれ、北東屈曲部からは北に向かって同様に築かれていることが明らかとなつた。また、築地塀を築く際の寄柱穴・添柱穴・工事穴なども検出でき、築地塀の構築過程がある程度わかつた。そして、S F 300 外郭東辺築地塀に A・B・C の新旧 3 時期あり、2 番目の S F 300 B 築地塀は全面的な大改修だと判明した。
- ③S F 300 外郭東辺築地塀の北東・南東屈曲部に櫓が取り付くこと、これに 3 時期の変遷があり、それぞれ S F 300 A・B・C 外郭東辺築地塀に伴うこと、最初の櫓は築地塀をまたぐが、2・3 番目の時期の櫓は外側に張り出す 2 層に重成された土壇の上に建てられ、規模は順次縮小したことが判明した。
- ④S B 307 A 外郭東門、S F 300 A 外郭東辺築地塀、S B 310・301 樫の造営は、鎮守府の移転〔延暦二十一（802）年～大同三（808）年までの間〕と密接な関連を持って行なわれたと考えられる。
- ⑤S B 307 外郭東門の建て替え、S F 300 外郭東辺築地塀の大改修、北東・南東屈曲部における櫓の建て替えと土壇の設置がほぼ同時期になされたと考えられる。外郭東門地区におけるこうした大改築は、貞觀十一（869）年の大地震の復興期になされたと推定される。
- ⑥南に展開する大畠地区官衙が S B 307 外郭東門と S F 300 外郭東辺築地塀を基準に整備されたことが一層明らかとなつた。
- ⑦「コ」字形に曲がって S B 307 外郭東門に取り付く S F 300 外郭東辺築地塀跡の北側には建物群で構成される官衙がないことが明らかとなつた。

註

註 S B 310 樫跡の南側柱列の東より 1 間目柱穴は検出してないが、南東屈曲部の同時一期の S B 301 樫跡ではちょうどこの位置にあたる箇所で柱穴を検出している（第 36・37 図）。S B 310 樫跡の南側柱列の東より 1 間目柱穴は、S X 2255 A 土壇の積土 A・C に覆われ、S B 311 A 樫の東より 1 間目柱穴にも壊されていると見て、S B 310 樫跡の南側柱列を 4 間と推定した。

引 用 文 献

- 阿部義平, 1985, 「徳丹城とその施釉瓦について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 6 集, pp. 75～107
今泉隆雄, 1992, 「律令国家とエミシ」『新版 古代の日本 東北・北海道』, pp. 163～198
工藤雅樹, 1965, 「陸奥国分寺出土の宝相花文鏡瓦の製作年代について—東北地方における新羅系古瓦の出現—」『歴史考古』第 13 号, pp. 1～12
鈴木拓也, 1994, 「古代陸奥国の官制」『日本文化研究所研究報告別巻』第 31 集, pp. 43～78
奈良六大寺大観刊行会編, 1971, 『奈良六大寺大観 第一巻 法隆寺一』

III. 現状変更に伴う調査

【現状変更の概要】

多賀城跡における平成6年度の現状変更是表5に示したように合計20件である。その内容をみると、住宅の増改築・浄化槽の設置など個人住宅の老朽化に伴う生活改善に関わるもの、道路改良工事など公共事業に関わるもの、特別史跡多賀城跡を史跡公園(野外博物館)として整備・活用するための環境整備や、あやめまつりなどの開催に関わるものがある。当研究所では遺跡の景観や地下構造に悪い影

番号	申請	変更内容	対応	検出遺構
1	玉川寺 多賀城市市川字城前 27	焼却炉設置	設計変更指導 許可(5月23日)	遺構に支障なし。
2	多賀城市長 多賀城市中央2丁目1-1	手掘り設置工事	設計変更指導 立会(6月17日)	遺構に支障なし。
3	多賀城市長 多賀城市中央2丁目1-1	多賀城跡あやめまつり 仮設テントなど設置	立会(6月17日)	遺構に支障なし。
4	菊池信一 多賀城市市川字五万崎 36-2	住宅内装工事 合併処理浄化槽	発掘調査(6月21・22日) 発掘面積(3.6 m ²)	柱穴・溝。
5	佐藤ひさこ 多賀城市市川字五万崎 34-1	合併処理浄化槽	発掘調査(6月22・23日) 発掘面積(7.5 m ²)	溝・遺物包含層。
6	菊池一夫 多賀城市市川字金堀 1	擁護壁工事	発掘調査(6月27~29日) 発掘面積(24 m ²)	柱穴・遺物包含層。
7	菊池甚助 多賀城市市川字坂下 66	通路拡幅 合併処理浄化槽	発掘調査(6月29・30日) 発掘面積(29 m ²)	近世以降の溝。
8	菊池勇吉 多賀城市市川字五万崎 38-4・5	住宅増改築 合併処理浄化槽	発掘調査(7月6~15日) 発掘面積(80 m ²)	柱穴・井戸跡・土塼・溝、 遺物包含層。
9	菊池與市 多賀城市市川字丸山 5-1	住宅増改築 合併処理浄化槽	発掘調査(9月7日) 発掘面積(113 m ²)	削平のため残せず。
10	佐藤秋雄 多賀城市市川字金堀 16	住宅増改築	発掘調査(9月26日~10月4日) 発掘面積(77 m ²)	掘立式建物跡・溝。
11	多賀城市親光協会 多賀城市中央2丁目1-1	多賀城茶会 仮設テント設置	立会(10月1~3日)	遺構に支障なし。
12	多賀城能実行委員会 多賀城市中央2丁目1-1	多賀城薪能 仮設舞台設置等	立会(10月4~11日)	遺構に支障なし。
13	多賀城市長代理 多賀城市中央2丁目1-1	市道市川線改良工事 (市川字泰社地内)	立会(10月14日)	遺構に支障なし。
14	玉川寺 多賀城市市川字城前 27	浄化槽取り替え	立会(10月25日)	遺構に支障なし。
15	NTT仙台支店長 仙台市青葉区1番町2-8-1	電柱・支線撤去 (大久保・泰社地内)	立会(10~11月)	遺構に支障なし。
16	宮城県多賀城跡調査研究所 多賀城市浮島字宮前133	環境整備(トイレ) (市川字泰社地内)	発掘調査(11月10~16日) 発掘面積(186 m ²)	掘立式建物跡・柱列、 井戸跡。
17	鈴木清任 多賀城市市川字五万崎 40	合併処理浄化槽	発掘調査(1月23日) 発掘面積(8 m ²)	柱穴・ピット・溝。
18	多賀城市長 多賀城市中央2丁目1-1	山王遺跡の史跡設備	設計・施工指導 平成6年度事業	遺構に支障なし。
19	多賀城市長 多賀城市中央2丁目1-1	告知板の補修	立会(7年2月27日)	遺構に支障なし。
20	多賀城市長 多賀城市中央2丁目1-1	あやめ園の緑石及び植栽	設計変更指導 立会(7年3月)	遺構に支障なし。

* 順番は研究所の対応年月日順。なお、多賀城跡の計画調査は除く。

表5 特別史跡多賀城跡附寺跡の現状変更

響を与えないよう関係機関と協議し、特別史跡の保存と活用に努めてきた。

地下遺構に影響を与えるものについては、軽微なものは工事の際立会(調査)を行い、住宅の増改築・浄化槽の設置などの場合は発掘調査を実施した。前者は11件あり、遺構に対して支障がないことを確認した。後者は9件あり、発掘調査の結果、7件で古代の遺構や遺物包含層が検出された。発掘調査総面積は約520m²である。

【発掘調査の目的】

1. 現在、民家が建っている部分における遺構・遺物の残存状況を把握し、保存を講じるための資料を収集する。発掘調査の結果にしたがって、計画の変更をもとめる。
2. 地元住民に特別史跡の中に住んでいることを自覚してもらい、保存に対する協力をうながす。
3. 現在、計画調査に含めていない地域について、データを収集し、今後新たな計画を立てる場合の資料とする。

今回は、古代の遺構・遺物包含層が検出された7件について、調査の成果を地区ごと（五万崎・金堀・奏社地区）に報告する。なお、住宅を増改築する時は、遺構保存の盛土をした上で、景観を損なわないように実施することを指導した。浄化槽設置の場合は、深い掘削を伴う。調査の結果に応じて、位置を変更するように指導しているが、敷地が限られている場合、おのずと限界がある。



第38図 五万崎地区発掘調査区

五万崎地区

1. 菊池勇吉宅の調査

位置：多賀城市市川字五万崎字 38-4・5 調査期間：7月 6～15日

原因：住宅増改築と浄化槽の設置 発掘調査面積：80 m²

【調査対象地区】

発掘調査区は外郭西門跡の南約 60m に位置し、外郭西辺築地塀跡の東側に隣接している。標高は約 11m でほぼ平坦であるが、南側が緩やかに傾斜して低くなる(第 38 図)。

【基本層序】

第 1 層：表土。

第 2 層：灰白色火山灰層。第 3 層上面が窪地状になったところに、部分的に分布する。

第 3 層：暗黒褐色土で、木炭片を含む。調査区全体に分布し、南西部では次第に灰褐色になる。

第 4 層：暗褐色砂質土で、褐色・黄褐色砂質土のブロックを含む。

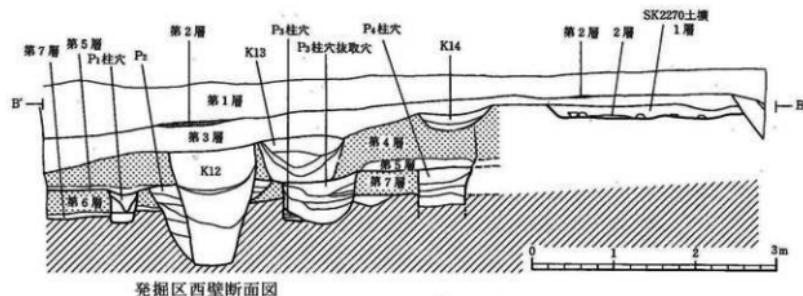
第 5 層：暗灰色粘質土。

第 6 層：暗褐色・褐色土と地山の黄褐色土ブロックの混じり合った層で、整地層とみられる。

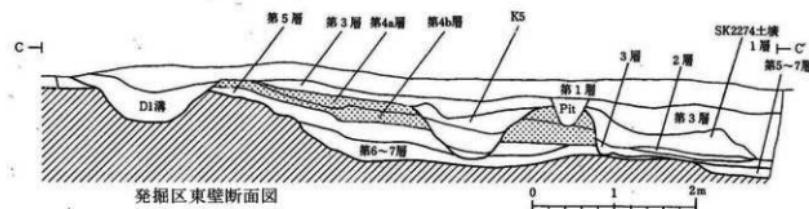
第 7 層：灰黒褐色土で、北側は地山の黄褐色砂質土小ブロックを少量含み、南側では泥土状になる。

第 8 層：地山の黄褐色砂質土。

第 1～3 層については調査区全体で層の分布をほぼ把握できたが、第 4 層以下については幅 1m の断割り調査で確認した(第 39 図)。これらの層の中で第 4 層は地山の黄褐色砂質土ブロックを含むことか



発掘区西壁断面図



第 39 図 菊池勇吉宅発掘調査区断面図

ら、整地層の可能性がある。第6層は西側の断面調査区の南側に分布し、暗褐色土と地山の黄褐色土が混じり合った層で整地層の可能性が高く、その上面から掘り込まれている柱穴を検出した。第7層の北側も整地層の可能性がある。第3・5層と第7層の南側は自然堆積した層とみられる。遺物は第3層が特に多かった。

【発見した遺構と遺物】

今回の調査で上層(第2~4層上面)から井戸跡1・土壌6・溝4を、下層(第6層・第7層上面)から柱穴3・土壌2・溝1を検出した(第40図)。以下、おもなものについて述べる。

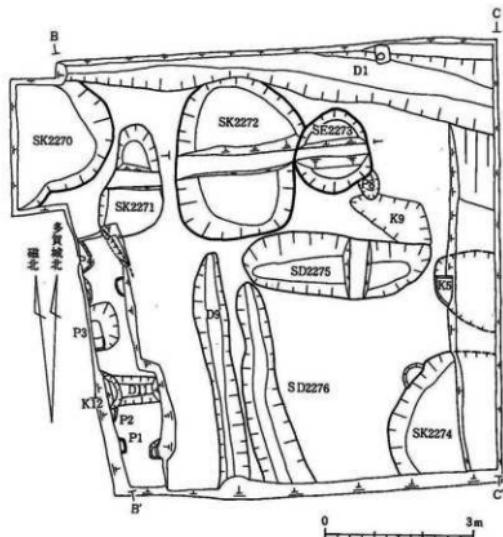
(1) 上層の遺構

SK2270 土壌

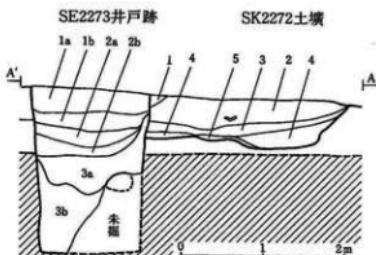
遺構と遺物の出土状況(第39図上段右・第40図)

調査区の北西隅に位置する土壌で、第4層上面で検出し、第3層に覆われている。平面形は不整円形とみられるが、北・西側は調査区外に延びている。規模は南北2.5m以上・東西1.9m以上で、深さは約15cmである。底面に僅かな凹凸はあるがほぼ平坦で、底面から壁面へは緩やかに立ち上がる。堆積層は灰色味をおびた暗褐色の砂質土で木炭片を含み(1層)、底面付近は木炭片の量が多い(2層)。

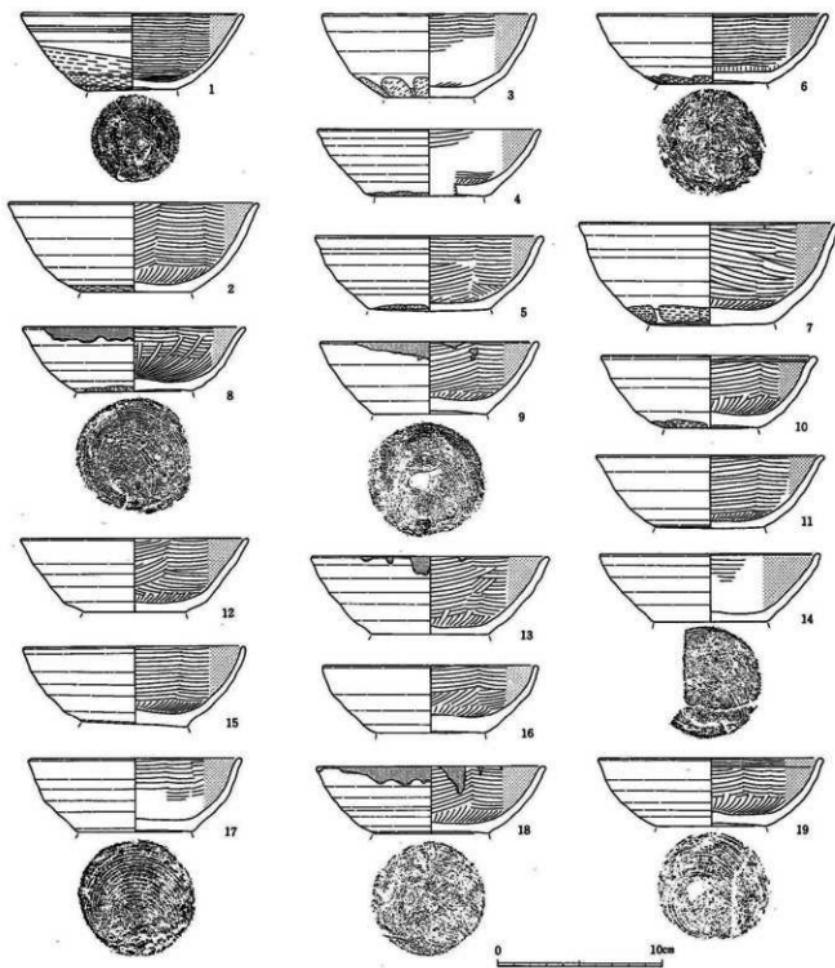
遺物は土師器壺が主体で、完形に近いものが多数を占める。上を向いているものが多いが、斜めのもの、伏せたものなどがある。中には、数個体が重なっていたものもあった。発掘調査時には、1層・2層・3層(底面直上)・底面として取り上げたが、土壌自体が浅い窪み状をしているため、底面から上部まで重なった出土状態であった。これらは、まとめて廃棄されたものとみられる(図版20)。



土師器壺とともに少量の高台壺・甕・須恵系土器高台鉢・須恵器蓋・壺・甕・施釉陶器壺・III・弥生土器などが出土した。土器以外には瓦があり、比較的量も多い。その他、壁材・鉄製品・石製品なども出土した。

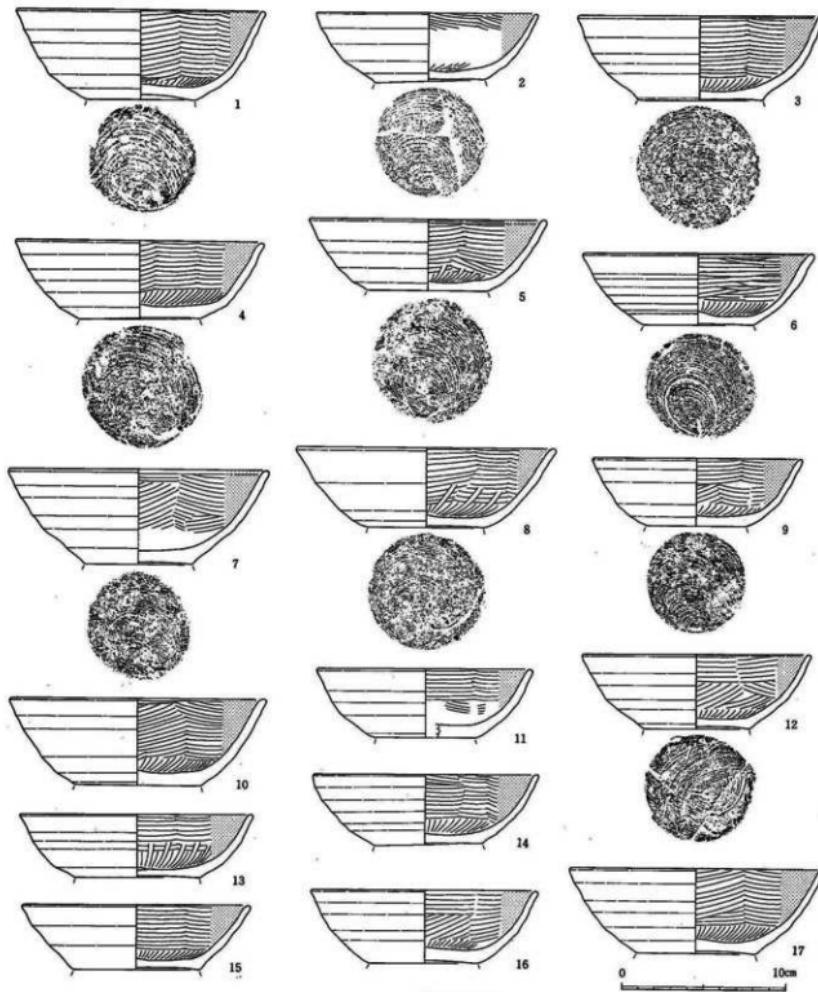


第40図 菊池勇吉宅の検出遺構平面図とSK2272 土壌・SE2273 井戸跡断面図



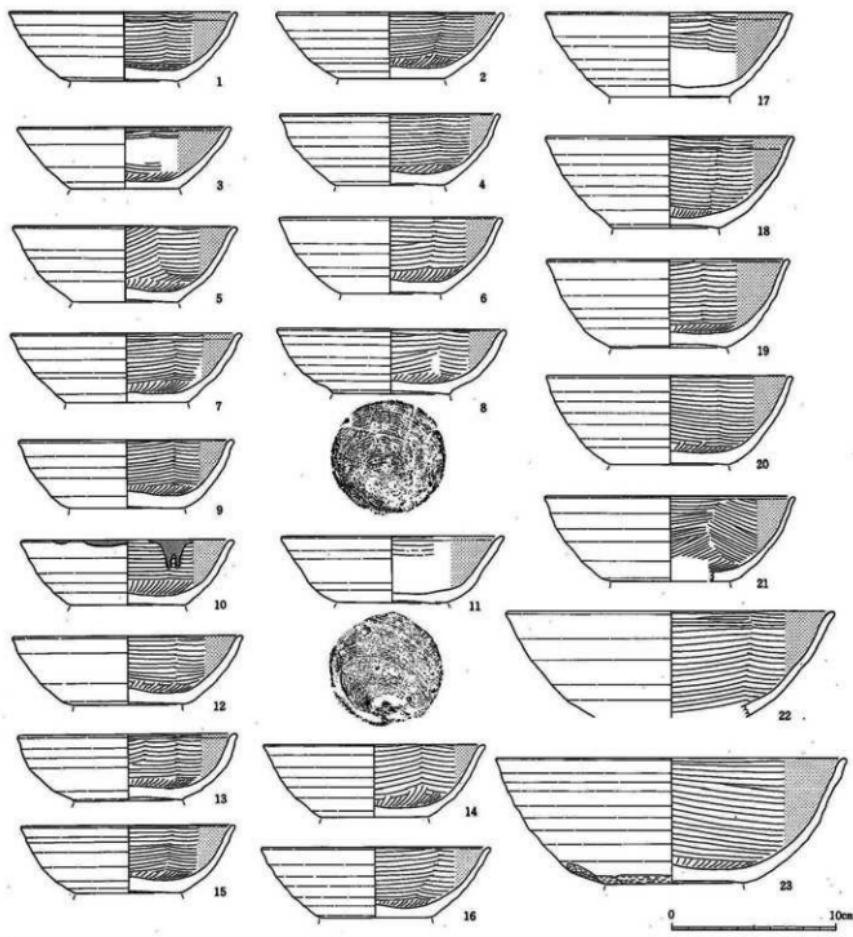
番号	器種	特 徴				口径	底径	高さ	整脚	底番 号	10	环	体下～底盤平持ケズリ。放射状ミガキ。	13.1	5.7	4.4	R15	12561
1	坪	静止系切り一回転ケズリ。放射状ミガキ。				13.4	5.4	4.7	862	12564	11	坪	底盤全面平持ケズリ。放射状ミガキ。	13.8	6.6	4.5	R33	12562
2	坪	体下部～底盤同軸ケズリ。放射状ミガキ。				15.2	6.7	5.5	814	12561	12	坪	底盤全面平持ケズリ。放射状ミガキ。	13.8	6.2	4.5	R24	12562
3	坪	回転系切り一手持ケズリ。放射状ミガキ。				13.0	5.4	5.1	841	12563	13	坪	底盤平持ケズリ。放射状ミガキ。油摩。	14.5	7.0	4.7	R13	12561
4	坪	回転系切り一手持ケズリ。放射状ミガキ。				13.6	6.6	4.1	867	12564	14	坪	回転系切り。(ガキ(底盤内面摩滅))。放射状ミガキ。	13.4	6.8	4.1	R44	12563
5	坪	体下～底盤手持ケズリ。放射状ミガキ。				13.9	7.4	4.6	857	12564	15	坪	回転系切り(アタリあり)。放射状ミガキ。	13.5	6.4	4.9	R7	12561
6	坪	回転系切り一手持ケズリ。油摩。				14.0	7.5	4.3	830	12562	16	坪	回転系切り。放射状ミガキ。	13.2	6.6	4.1	R74	12565
7	坪	回転系切り一手持ケズリ。放射状ミガキ。				15.8	7.5	6.3	812	12561	17	坪	回転系切り。(ガキ(底盤内面摩滅))。	13.0	6.8	4.5	R39	12563
8	坪	回転系切り一手持ケズリ。放射状ミガキ。油摩。				13.6	7.0	4.0	85	12561	18	坪	回転系切り。放射状ミガキ。油摩。	14.0	7.0	4.1	R10	12561
9	坪	回転系切り一手持ケズリ。放射状ミガキ。油摩。				13.4	6.9	4.4	832	12562	19	坪	回転系切り(二重切り)。放射状ミガキ。	13.7	6.6	4.2	R20	12562

第 41 図 SK2270 土壤出土遺物 I (土器器坏)



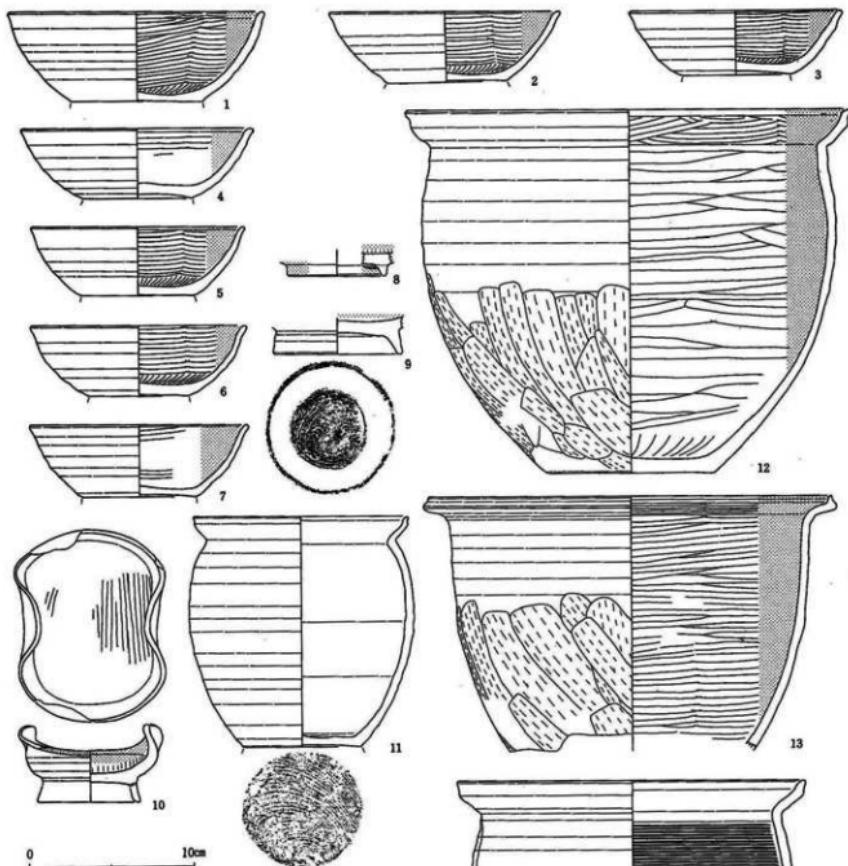
番号	器種	特徴	口径	底径	高さ	壁厚	品番	9	10	11	12	13	14	15	16	17
1	坪	同軸面切り。放射状ミガキ(磨滅有り)。	15.1	6.5	5.5	0.77	12565	坪	同軸面切り。放射状ミガキ。	12.9	6.1	4.1	0.75	12567		
2	坪	同軸面切り。放射状ミガキ。	13.5	6.6	4.2	0.81	12561	坪	同軸面切り(一度切り)。放射状ミガキ。	15.6	7.6	5.3	0.81	12561		
3	坪	同軸面切り(アタリあり)。放射状ミガキ。	15.0	7.6	5.1	0.89	12562	坪	同軸面切り(一度切り)。放射状ミガキ。	13.2	6.0	4.3	0.80	12563		
4	坪	同軸面切り(一度切り)。放射状ミガキ。	13.1	7.2	3.8	0.86	12561	坪	同軸面切り(アタリあり)。放射状ミガキ。	14.9	6.4	4.6	0.85	12564		
5	坪	同軸面切り。放射状ミガキ。	14.3	7.3	4.3	0.82	12562	坪	同軸面切り(アタリあり)。放射状ミガキ。	13.8	6.0	4.3	0.86	12561		
6	坪	同軸面切り。放射状ミガキ(磨滅有り)。	14.2	6.6	4.3	0.84	12564	坪	同軸面切り。放射状ミガキ。	14.0	7.6	4.0	0.85	12563		
7	坪	同軸面切り。ミガキ(磨滅有り)。	15.8	6.5	5.8	0.89	12561	坪	同軸面切り。放射状ミガキ。	13.8	6.6	4.4	0.81	12562		
8	坪	同軸面切り。放射状ミガキ。	15.8	7.0	4.9	0.88	12561	坪	同軸面切り。放射状ミガキ。	15.6	7.2	5.2	0.88	12561		

第42図 SK2270 土壤出土遺物II (土器師器)



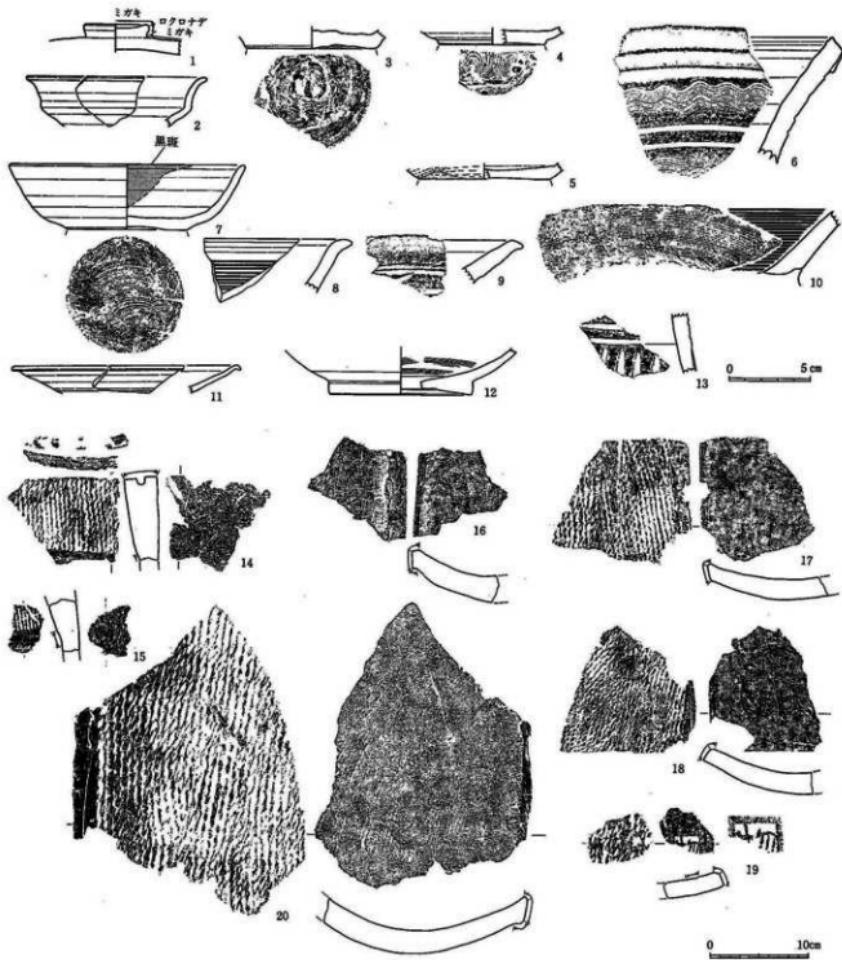
番号	器種	特徴	D(径)	底径	高さ	基盤	縁番号	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
1	环	回転条切り。放射状ミガキ。	13.8	6.4	4.2	R40	12563	13	环	回転条切り。放射状ミガキ(磨滅)。	14.0	6.5	4.2	R26	12562				
2	环	回転条切り。放射状ミガキ。	13.8	6.4	4.0	R59	12564	14	环	回転条切り。放射状ミガキ。	13.4	6.6	4.0	R26	12562				
3	环	回転条切り。放射状ミガキ。	13.0	6.6	3.7	R2	12561	15	环	回転条切り(二度切り)。放射状ミガキ。	13.5	6.4	4.4	R55	12564				
4	环	回転条切り。放射状ミガキ。	13.3	6.5	4.2	R61	12564	16	环	回転条切り。放射状ミガキ(磨滅)。	14.0	6.8	4.3	R71	12564				
5	环	回転条切り。放射状ミガキ。	13.6	6.4	4.6	R29	12562	17	环	回転条切り。ミガキ(摩滅)。	15.0	7.2	5.2	R70	12564				
6	环	回転条切り。放射状ミガキ。	13.6	6.0	4.6	R64	12564	18	环	回転条切り。放射状ミガキ。	15.1	6.4	5.6	R63	12564				
7	环	回転条切り。放射状ミガキ。	14.0	7.4	4.2	R34	12562	19	环	回転条切り。放射状ミガキ。	14.8	7.0	5.4	R3	12561				
8	环	回転条切り(アリ)。放射状ミガキ。	14.0	7.0	4.0	R28	12562	20	环	回転条切り。放射状ミガキ。	15.0	7.2	5.4	R17	12561				
9	环	回転条切り。放射状ミガキ。	13.1	7.0	4.1	R35	12562	21	环	回転条切り(二度切り)。放射状ミガキ。	15.3	7.2	5.2	R75	12565				
10	环	回転条切り。放射状ミガキ。崩壊。	13.0	6.9	4.9	R4	12561	22	大形环	ロクロナギ。ミガキ(底部破損)。	20.0	—	—	R73	12563				
11	环	回転条切り(二度切り)。ミガキ(摩滅)。	13.6	6.6	4.1	R27	12562	23	大形环	回転条切り一半切ケズリ。放射状ミガキ。	21.3	8.3	7.6	R72	12565				

第43図 SK2270 土壤出土遺物III (土器師器)



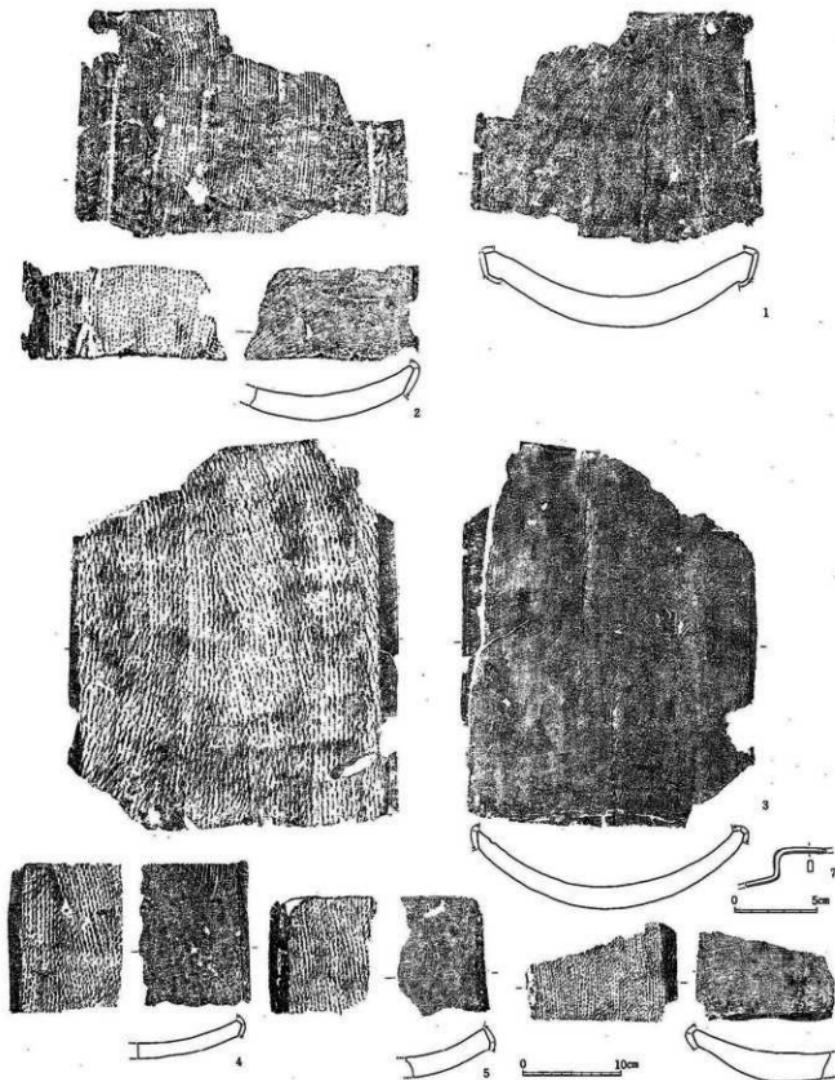
器種	特徴	直徑	底径	深高	登録番号
1 环	回転糸切り。放射状ミガキ。	15.5	7.9	5.4	R69 12564
2 环	回転糸切り(7度切り)。放射状ミガキ。	14.0	7.2	4.3	R23 12562
3 环	回転糸切り。放射状ミガキ。	12.9	6.5	3.9	R66 12564
4 环	回転糸切り。ミガキ(摩滅)。	14.0	6.5	4.3	R58 12564
5 环	回転糸切り。放射状ミガキ。	13.0	6.8	4.2	R31 12562
6 环	回転糸切り。放射状ミガキ。	13.1	6.9	4.2	R56 12564
7 环	回転糸切り。ミガキ(摩滅)。	13.2	6.9	4.3	R68 12564
8 高台环	高台部クロナデ。画面横ミガキ・墨。	高台径 6.0		R49 12563	
9 高台环	外縁長脚高台。回転糸切り。横ミガキ。	高台径 7.8		R48 12563	
10 耳皿	ロクロナデ。横ミガキ。高台破損。	長径 11.6		R43 12563	
11 壶	口縁部外反・受口状。回転糸切り。	13.0	7.2	14.0	R52 12566
12 壶	口縁部受口状。ロクロナデ。ミガキ・墨。	27.0	10.0	22.0	R51 12566
13 壶	口縁部受口状。ロクロナデ。ミガキ・墨。	25.0	-	-	R47 12563
14 壺	口縁部受口状。ロクロナデ。回転糸切り。	21.2	-	-	R46 12563

第 44 図 SK2270 土壤出土遺物IV (土師器環・高台環・耳皿・壺)



番号	器種	特徴	口径	底径	高さ	盤縁	施番号	番号	器種	特徴	高さ	施番号
1	蓋	低いいまみ。両面ミガキ。前土均質。	つまみ径4.0	-	R80	12565	11	蓋	浅鉢陶器。体ノ直輪船ケズリ。前土均質。外面薄輪。	R81	12565	
2	環焼	口縁部へ体部。口縁部強く外反。	-	-	R82	12565	12	環	浅鉢陶器軽目高台。両面ミガキ。淡緑色。高台径8.6。	R53	12563	
3	坪	底盤。ヘラ切り。	-	8.0	-	R85	12565	13	円面破	質地均質。横位2条・縱位4条の縫隙。	R79	12565
4	坪	底盤。刮削系切り(アタリあり)。	-	6.4	-	R80	12565	14	軒平瓦	草筋文(640cr641)。横大綻引き。錐形目→ナダ。	R97	12572
5	坪	体下部へ底盤手持ケズリ。	-	8.0	-	R84	12565	15	軒平瓦	草筋文or無文(640cr641)。中綻引き。ナダ。	R96	12572
6	甕	口縁部高凸部斜面付。底盤沈縮・波状文。	-	-	R83	12565	16	平瓦	TA類。側縫隙压板。ナダ。椎骨痕→ナダ。	R95	12572	
7	坪	同軸系切り→手持ケズリ。内面に黒斑。	14.4	7.2	4.0	R42	12563	17	平瓦	BB類。大綻引き→つぶれ。錐形目→群いナダ。	R98	12572
8	蓋台輪	口縁部。回転網毛目。ロクロナナ。	-	-	R50	12563	18	平瓦	BB類。中綻引き→つぶれ。中筋目→群いナダ。	R90	12572	
9	蓋台輪	口縁部。両面ロクロナナ。	-	-	R78	12565	19	平瓦	BB類。大綻引き→つぶれ。中筋目→ナダ→攝剝「物」A。	R101	12572	
10	蓋台輪	体部(底部接合部)。両面回転網毛目。	-	-	R76	12565	20	平瓦	BB類。側縫隙压板。太綻引き→つぶれ。中筋目→ナダ。	R89	12572	

第45図 SK2270 土壌出土遺物V (須恵器: 1~6
須恵器?: 7
須恵系土器: 8~10
施釉陶器: 11~12
円面鏡: 13
瓦: 14~20)



番号	種類	特 徴	登録	箱番号	4	5	6	7	8
1	平瓦 ⅡB類。	側面露圧痕。中継叩き一つぶれ。中布目→ナデ。	R99	12572	平瓦 ⅢC類。細継叩き。糸切り痕→中布目。	R91	12572		
2	平瓦 ⅢC類。	中継叩き。糸切り痕→中布目。	R92	12572	平瓦 ⅢC類。細継叩き。中布目。	R100	12572		
3	平瓦 ⅢB類。	太継叩き一つぶれ。糸切り痕→細布目→ナデ。	R93	12573	平瓦 ⅢC類。細継叩き。糸切り痕→細布目。	R93	12572	鉄製品 幅7mm・厚さ2.5mmの板状で、屈曲あり両端を欠く。	R88 12615

第46図 SK2270 土壌出土遺物VI(瓦・鉄製品)

遺物の特徴

土師器壺(第41~43図・第44図1~7)

完形のものや一部破損しているものが39点、2/3~1/2前後のものが12点ある。この他1/4以上で代表的なものの14点、底部を破損しているが大形のもの1点を実測図(合計66点)で、それ以外のものについては表6に示した。これらの資料の特徴について、法量・器形・製作技法・使用痕跡(油煙の付着など)の順に述べることにする。

種類	器種	部位	特徴	底面	3層	2層	1層	土壤内	合計
土師器	壺	口縁~底部	回転糸切り-ミガキ・黒	2			1	1	4
		口縁部	ロクロ-ミガキ・黒	69			76	61	206
		体部	ロクロ-ミガキ・黒	76			67	106	249
		体部	摩滅	5				5	10
		底部	回転削り-ミガキ・黒	2			5	2	9
		底部	手持削り-ミガキ・黒	4			3	1	8
		底部	不明削り-ミガキ・黒				12		12
		底部	回転糸切り-ミガキ・黒	14			26	13	53
		底部	摩滅	8			6		14
	鉢	体部	ロクロ-ミガキ・黒	1					1
	高台壺	高台部		1					1
		底部	高台部破損				1	1	2
	甕?	天井部?	両面ミガキ・黒				1		1
		口縁部	ロクロ-ミガキ・黒				2		2
		口縁部	ロクロ-ロクロ	1			2	3	6
		頸部	ロクロ-ロクロ					6	6
		体部	ロクロ-ロクロ	5			13		18
		体部	刷毛目	1	1	1		1	4
		体部	ナデ				4		4
		体部	手持削り				10	7	17
		体部	摩滅	10		2	13	21	44
		底部	衛状圧痕				1		1
		底部	不明痕跡				2		2
合計				199	1	3	245	228	676

種類	器種	部位	特徴	底面	3層	2層	1層	土壤内	合計
須恵器	壺	口縁部	ロクロ-ロクロ	4				11	15
		体部	ロクロ-ロクロ	4				5	9
		底部	手持削り-ロクロ	2		1		1	4
		底部	ヘラ切り-ロクロ	4					4
	總壠	口縁~体部	ロクロ-ロクロ					1	1
		口縁部	外傾・ロクロ-ロクロ	1				2	3
	蓋	口縁部	内傾・ロクロ-ロクロ					1	1
		口縁部	ロクロ-ロクロ					2	2
	瓶?	体部	ロクロ-ロクロ					2	2
		体部	平行叩き	5			1	2	8
	甕	体部	ロクロ-ロクロ	1				2	3
		体部	斜行繩文						
合計				21	0	1	1	29	50

種類	器種	部位	特徴	底面	3層	2層	1層	土壤内	合計
その他	壺	口縁部	ロクロ-ロクロ				3		3
		体部	ロクロ-ロクロ				2	2	4
弥生土器	鉢	体部	ロクロ-ロクロ					1	1
		体部	斜行繩文				1		1
合計				0	0	0	6	3	9

表6 SK2270 土壤出土土器破片資料

法量の特徴(第 47 図) : 法量をみると、口径 12.8~15.8 cm の中形のものと、口径 20.0~21.3 cm の大形のものがある。それらの特徴は次のようになる。

1. 口径は中形の杯が 12.8~15.8 cm で、13.0~14.0 cm のものが多い。大形の杯は 20.0~21.3 cm である。量的には中形の杯が 64 点で 9.7 割を占め、大形の杯は 2 点(0.3 割)のみである。
2. 底径は中形の杯が 5.3~7.9 cm で、6.0~7.2 cm のものが多い。大形の杯は 8.3 cm でやや大きい。
3. 器高は中形の杯が 3.7~6.3 cm で、4.0~5.5 cm のものが多く、特に 4.0~4.3 cm に集中度が高い。大形の杯は 7.6 cm である。
4. 口径に対する底径の比は中形の杯が 0.40~0.54 で、0.44~0.53 のものが主体を占め、0.46~0.49 に集中度が高い。大形の杯は 0.39 で、中形の杯の最も小さい値のものに近い。
5. 口径に対する器高の比は 0.27~0.40 で、0.29~0.37 のものが主体を占め、0.30~0.31 に集中度が高い。大形の杯は 0.36 で、中形の杯の中でやや高い範囲におさまる。

以上のように、中形の杯が大部分を占めると同時に、大形の杯の底径/口径比・器高/口径比も、中形の杯と大きく変わらない。底径/口径比は 0.46~0.49 に、器高/口径比が 0.30~0.31 に集中度が高いといふことが指摘できる。

器形の特徴：器形はいずれも平底で、体部が内湾するという点で共通するが、口縁部の特徴をみると次のような違いがみられる。

1. 体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部がそのままおさまるもの(第 41 図 1・3・6・9・14・15 など)。
2. 体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部が軽く外反するもの(第 41 図 2・4・5・7・8・10・第 43 図 23 など)。

これらは中形の杯と大形の杯の両者にみられる。量的には 1 の口縁部がそのままおさまるものが 28 点、2 の口縁部が軽く外反するものが 38 点で、その構成比は 4.2 : 5.8 で、やや 2 が多いが、大きな差はない。

製作技法の特徴：製作にロクロを使用しているという点(ロクロ調整)で共通する。ただし、外面の再調整(ヘラケズリ)・底部切離し技法・内面の再調整(ヘラミガキ)に次のような種類がある。

1. 外面の再調整と底部切離し技法(第 47 図)

I. 再調整のため底部切離し技法が判明しないもの。

a: 回転ヘラケズリ(第 41 図 2)。

b: 手持ヘラケズリ(第 41 図 5・10~13)。

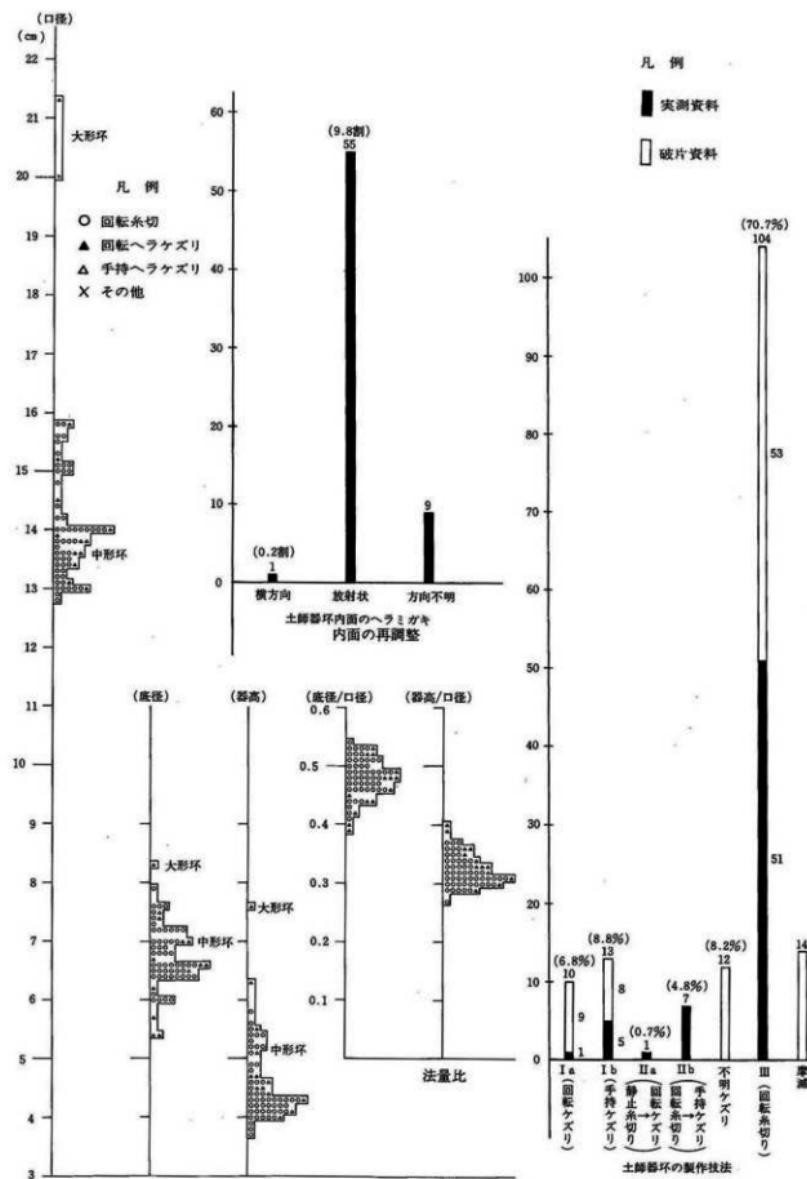
II. 再調整は部分的で、底部切離し技法が判明するもの。

a: 静止糸切り技法で切り離し、回転ヘラケズリを加えているもの(第 41 図 1)。

b: 回転糸切り技法で切り離し、手持ヘラケズリを加えているもの(第 41 図 3・4・6~9 第 43 図 23)。

III. 回転糸切り技法で底部を切離し、再調整を加えないもの(第 41 図 14~19 第 42 図 1~17 第 43 図 1~21 第 44 図 1~7)。

Ia の第 41 図 2 は体部下端~底部に回転ヘラケズリを加えている。Ib の第 41 図 5・10 は体部下端~



第 47 図 SK2270 土壤出土土師器環の法量・製作技法

外面の再調整と切離し技法

底部に手持ヘラケズリを加えている。第 41 図 11~13 の手持ヘラケズリは底部のみである。IIa の第 41 図 1 は体下半部～底部に回転ヘラケズリを加えているが、底部中央に静止糸切り痕が残っている。IIb の第 41 図 3・6 は体部下端～底部を、第 41 図 4・第 43 図 23 は体部下端を、第 41 図 7・8 は体部下端を部分的に、第 41 図 9 は底部周縁を手持ヘラケズリしている。いずれも底部切離しは回転糸切りである。なお、第 43 図 23 は大形の壺である。III の底部切離しは回転糸切りであるが、これらの中には一度では巧くゆかず、二度目で切離しているものもある(第 41 図 19、第 42 図 4・10・12、第 43 図 11・15・21、第 44 図 2)。

量的には、Ia が実測資料 1 点・破片資料 9 点で、合計 10 点である。Ib は実測資料 5 点・破片資料 8 点で、合計 13 点である。IIa は実測資料 1 点のみである。IIb は実測資料 7 点である。破片資料にヘラケズリの種類を限定できないものが 12 点ある。III は実測資料 51 点・破片資料 53 点、合計 104 点である。その他、摩滅のため切離し・再調整技法が不明なものが破片資料で 14 点ある。以上の合計は 161 点であるが、摩滅のため技法不明なものを除き、147 点の資料を対象にその構成比をみると、Ia:6.8%・Ib:8.8%・IIa:0.7%・IIb:4.8%・不明ケズリ:8.2%・III:70.7%となる。

全体として、底部を回転糸切り技法で切離したままのものが約 71%と多数を占め、再調整としてヘラケズリを行っているものは約 29%である。また、切離し技法が判明するものは 112 点あるが、回転糸切りが 111 点(99・1%)で圧倒的多数を占め、その他は静止糸切りが 1 点(0.9%)で極めて少ない。

2. 内面の再調整

内面はヘラミガキ・黒色処理が行われている。口縁部～体部のヘラミガキはいずれも口縁に沿っている。底部でヘラミガキの方向が判明するものは 56 点あり、そのうち放射状が 55 点(9.8 割)で圧倒的多数を占め、その他は横が 1 点(0.2 割)で極めて少ない。

以上のように土師器壺は器形・製作技法の点で非常にまとまりをもっていると言うことができる。

使用痕跡の特徴：使用痕跡には底部内面が磨り減ったものと油煙がある。

前者は底部内面の内黒が磨り減り、器面の胎土が透けて見えるものである(第 42 図 1・6・7 第 43 図 13・16)。これらは劣化して摩滅(保存状態)したものとは異なる。この他にもあるかもしれないが、劣化による摩滅と識別しがたいため触れないことにする。

油煙の付着したものは実測資料に 5 点ある(第 41 図 8・9・13・18 第 43 図 10)。いずれも口縁部にみられ、第 41 図 8・9・18、第 43 図 10 は外側に 1 cm 前後の高さで波帯状に垂れ下がっている。内側では帯状にはならず、1~3 条の波状に垂れ下がっている。内側のものが芯の形状をある程度反映しているとみられるが、即断は避けたい。なお、油煙の付着した部分は厚さが一定せず凸凹しており、表面は油脂のためか光沢を帶びている。

土師器高台壺(第 44 図 8・9)

高台壺は実測資料 2 点・破片資料 3 点がある。8 は高台にロクロナデの部分を残すが、両面ヘラミガキ・黒色処理されたものである。ヘラミガキの方向は横である。9 は底部に回転糸切り痕を残すもので、外面はロクロ調整・内面はヘラミガキ・黒色処理されている。ヘラミガキの方向は不整横である。破片資料は高台部 1 点と高台を破損した底部が 2 点である。

土師器蓋?

蓋の天井部かとみられる破片が 1 点ある。両面ヘラミガキで、黒色処理されている。

土師器耳皿(第 44 図 10)

この耳皿は高台皿(口径 11.6 cm)上半部を内側に折り曲げたものである。高台部分を破損しているが、外側はロクロナデ、内側は横方向のヘラミガキをして黒色処理している。

土師器甕(第 44 図 11~14)

甕は実測資料が 4 点、破片資料が口頸部 14 点・底部 3 点である。11 は小形の甕で、両面ともロクロナデで、底部は回転糸切りによって切離されている。12・13 は鉢状の甕で、外側はロクロナデの後、体下部を手持ヘラケズリ、内側はヘラミガキの後、黒色処理している。12 の底部は摩滅している。14 は長胴の甕で、外側はロクロナデの後、体下部を手持ヘラケズリ、内側は口縁・頸部にロクロナデ、体部に回転刷毛目を施している。破片資料の口頸部は 2 点が外側ロクロナデ・内側ヘラミガキと黒色処理、その他の 12 点が内外面ロクロナデである。底部は 1 点が壺状圧痕、2 点が不明圧痕である。

須恵器(第 45 図 1~6)

須恵器はいずれも破片であるが、その一部を図示した。

蓋：1 は低いつまみをもつもので、内外面の大部分がヘラミガキされ、胎土が均質である。この他、ロクロナデ仕上げの蓋口縁部が 4 点ある。

坏：3 がヘラ切り、4 が回転糸切り、5 が手持ヘラケズリのものである。底径は 3 が 8.0 cm、4 が 6.4 cm、5 が 8.0 cm と推定される。この他の坏には底部ヘラ切りが 4 点、手持ヘラケズリが 4 点ある。

稜塊：2 は口縁部が強く外反する。この他に稜塊の口縁～体部が 1 点ある。

その他：6 は甕の口縁～頸部で、頸部に横位沈線と波状文を描いたものである。この他に壺体部が 1 点、瓶か甕とみられる体部が 13 点ある。

須恵器?(第 45 図 7)

7 は口径 14.4 cm・底径 7.2 cm・器高 4.0 cm の坏である。底部を回転糸切りで切離した後、底部周縁を手持ヘラケズリしている。器面のロクロ目は滑らかで、凹凸は顕著でない。胎土に砂粒を含み、焼成はやや軟質で褐色をしている。口縁部～底部の内面に炭素が吸着(黒斑)している。

須恵系土器(第 45 図 8~10)

3 点あるが、いずれも高台鉢で、8・9 は口縁部、10 は体下部の破片である。口縁部は外反し、8 は外面回転刷毛目・内面ロクロナデ、9 は外面が回転刷毛目後ロクロナデ・内面ロクロナデ、10 は両面とも回転刷毛目で、底部との接合痕がある。

その他の土器

いずれも破片である。ロクロを使用しているが、種類不明の坏口縁部が 3 点ある。この他、弥生土器の体部(斜行縄文)破片が 1 点ある。

施釉陶器(第 45 図 11・12)

11 は灰釉陶器皿の口縁部～体部破片である。体部は外傾し、口縁部が強く外反する。体下部を回転ヘラケズリしている。胎土は均質で、明灰色をしている。焼成も良好で、外面には黄白色の透明な灰

軸が認められる。

12は縁釉陶器塊の体下～高台部である。蛇の目高台で、高台は径8.6cm・幅2.1cm・高さ8mmである。底部と高台の底面は回転ヘラケズリされ、その境は幅3mmの凹線状になっている。また、高台底面には幅2mmの凹線が巡っている。高台側面はロクロナデのままであるが、坯部は軽いヘラミガキがなされている。なお、底部～体部下端の内面にはカキ目状の筋がある。焼成は良好で、硬質で明るい灰褐色をしており、胎土も均質である。器面全体に淡緑色の釉がかかっている。

円面鏡(第45図13)

13は円面鏡の脚部破片である。上部に2条(横位)、その下に4条(縦位)の線刻がある。

瓦(第45図14～20、第46図1～6)

瓦の出土総数は300点で、その内訳は軒平瓦4点・平瓦164点・丸瓦132点である。それらの中で、おもなものについて述べる。

軒瓦：第45図14は単弧文軒平瓦(640)である。同15は瓦当面が破損しているため、単弧文か無文の軒平瓦か区別がつかない。いずれも政庁第Ⅱ期のものである。

平瓦：第45図16は政庁第Ⅰ期の平瓦IA類である。両面にナデ調整があるが、凹面に模骨痕を残す。側面には凹型台の側端部圧痕がある。

第45図17～19は政庁第Ⅱ期の平瓦II B類aタイプである。17は硬質、18はやや軟質、19は軟質のものである。19の凹面には陽刻文字「物」Aがある。

第45図20は平瓦II B類bタイプで、側面には凹型台の側端部圧痕がある。凸面の縄叩き原体が太いため、政庁第Ⅱ期かⅢ期のものか区別が困難である。

第46図1は政庁第Ⅲ期の平瓦II B類bタイプで、側面には凹型台の側端部圧痕がある。硬質で赤みがかかった灰色をしており、凸面には自然軸がかかっている。

第46図3は平瓦II B類aタイプで、凹面に布の端部圧痕がある。硬質で凸面には自然軸がかかっている。形状が長方形に近く、広端部と狭端部の識別が明確でない。政庁第Ⅱ期かⅣ期のものとみられる。

第46図2・4～6は政庁第Ⅳ期の平瓦II C類である。2・4・5は凹面の布目がやや細かいもの(中布目)、6は粗いものである。

その他の出土遺物(第46図7)

壁材：焼壁の破片が1点出土している。スサ入りで、壁下地の痕跡が半円状に残っている。

鉄製品：第46図7は細い板状(幅7mm・厚さ2.5mm)の鉄製品である。曲折部があり、両端が破損している。

鉄滓：1点出土している。

石製品：剥片が2点出土しており、そのうちの1点には部分的に調整が加えられている。

SK2271 土壙(第40・48図)

遺構：調査区の北西部に位置する土壙で、第4層上面で検出し、第3層に覆われている。平面形は不整長円形で、規模は南北2.3m・東西1.2m・深さ20cmである。堆積層は2層に分かれ、1層は灰褐色砂質土で炭化物を含む。2層はにぶい黄褐色砂質土で地山粒を含む。

遺物：いずれも破片であるが、土師器・須恵器・弥生土器・瓦が出土している(第48図)。

土師器は壺口縁部8点・底部9点、蓋口縁部1点、甕口縁部3点・底部3点である。壺口縁部はロクロ調整で、底部には手持ちヘラケズリ2点・ヘラ切り1点・回転糸切り2点がある。蓋は口縁部が外傾するもので、両面ともヘラミガキ・黒色処理されている。甕口縁部はロクロ調整で、底部には回転糸切りが2点ある。

須恵器は壺口縁～底部2点・口縁部13点・底部9点、蓋口縁部4点、高台壺4点、甕口縁部1点である。この他、ヘラミガキされた蓋天井部が1点ある。壺底部にはヘラ切りが6点ある。高台壺には回転ヘラケズリが2点ある。

弥生土器口縁部(第48図1)は横位沈線を2条引いて無文帶とし、その上下に地文(植物茎の回転)を施文したものである。植物茎回転文は口縁部上面にもみられる。内面には沈線が1条ある。

瓦は軒平瓦1点、平瓦15点、丸瓦が18点出土している。第48図2は單弧文軒平瓦(640)、3は平瓦II B類aタイプで凹面に陰刻文字「矢」Aがある。これらは政庁第II期のものである。4は平瓦II B類aタイプで、暗赤褐色をした硬質のものである。政庁第II期か第III期のものとみられる。



第48図 SK2271 土壌出土遺物

SK2272 土壌

遺構と遺物の出土状況(第40図)

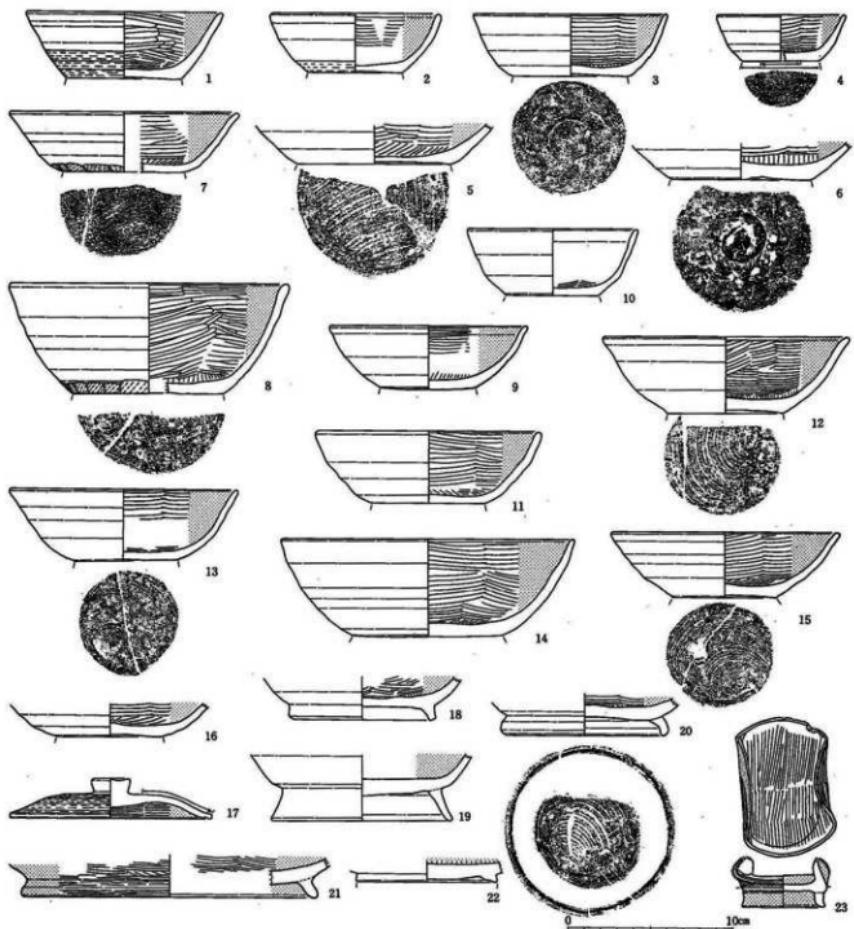
調査区の北部中央に位置する土壌で、第4層上面で検出し、第3層に覆われている。SE2273 井戸跡と重複しそれより古い。平面形は不整長円形で、規模は南北3.3m・東西2.5m・深さ60cmである。堆積層は5層に分かれるが、いずれも灰褐色もしくは灰暗褐色の砂質土である。遺物は土壌内としてまとめてとりあげた。出土遺物の大部分は土師器・須恵器・瓦で、その他に少量の弥生土器・土製品・鉄製品などがある。

遺物の特徴

1/4以上残存し器形が判明するもの、特徴的なものについては実測図で、その他の資料については表7・8に示した。

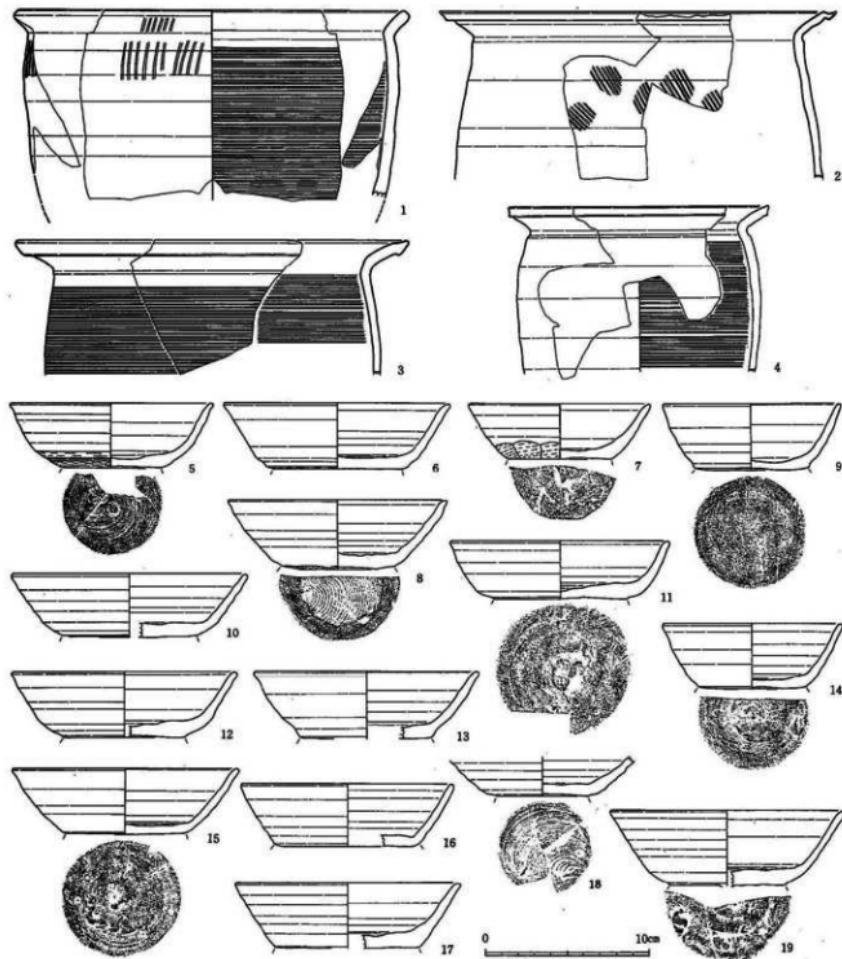
土師器壺(第49図1～16)

実測資料には、器形が判明するもの13点、体～底部が3点、合計16点がある。これらの資料の特



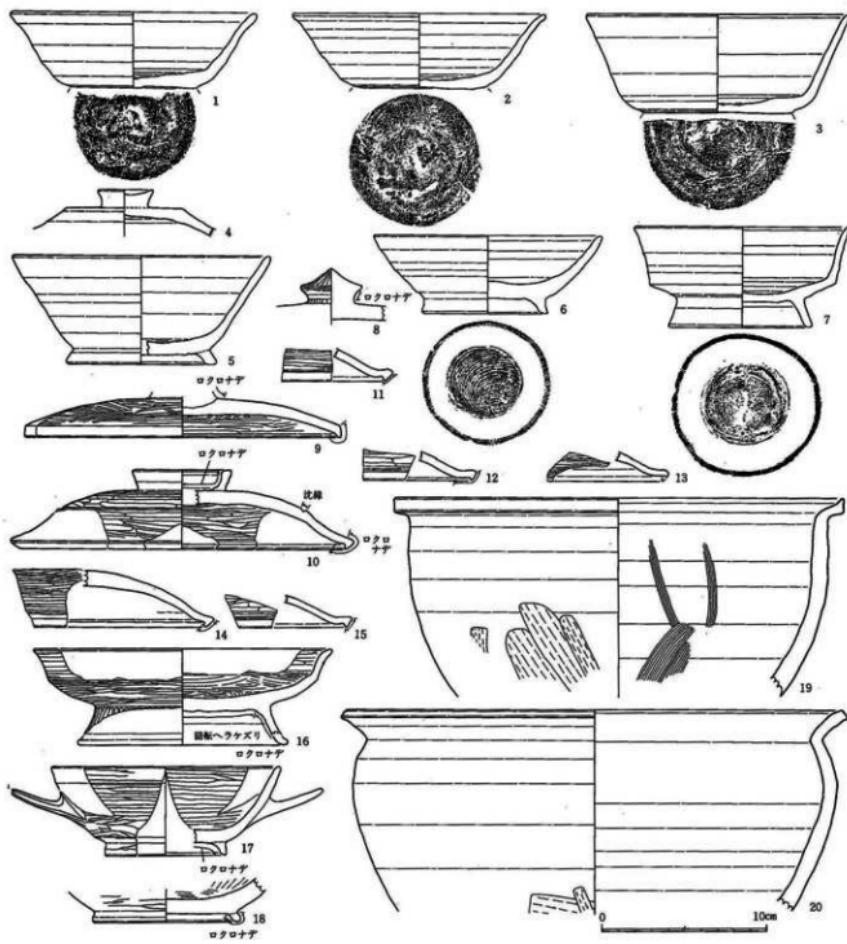
番号	器種	形	口径	底径	高さ	寛径	底面	底面番号	寸	所	説明	寸	所	説明	
1	碗	体盤丁半底張四輪ケズリ、縁々ガラ。	12.0	7.0	4.0	0.8	12568	12	所	四輪赤切り、四輪子丁ガラ。	15.0	7.0	4.7	R56	12568
2	碗	体丁加へ底張半四輪ケズリ、《サヨ》(摩羅)。	10.3	5.9	3.6	0.8	12568	14	所	四輪赤切り、不整體子ガラ。	12.9	6.1	4.4	R51	12565
3	碗	底張四輪ケズリ、縁・内舟形々ガラ。	11.8	7.0	3.7	0.8	12568	15	所	四輪赤切り、放射状子ガラ。	17.8	9.0	6.0	R61	12568
4	碗	四輪赤切り一圓錐半持ケズリ、縁々ガラ。	7.8	4.6	2.6	0.8	12568	16	所	四輪赤切り、放射状子ガラ。	-	6.3	4.0	R62	12568
5	碗	静止本持リ一圓錐四輪ケズリ、縁々ガラ。	-	9.2	-	0.8	12568	17	所	「ミル」(摩耶室跡)、多井頭四輪ケズリ。	12.5	-	2.3	R60	12568
6	碗	ヘア切引、縁々ガラ。	-	8.3	-	0.8	12568	18	所	四輪赤切り、各種直行、多井頭形、多井頭形等ガラ、西石径 8.9。	-	-	-	R54	12568
7	碗	体丁加へ底張手持ケズリ、放射状子ガラ。	14.0	7.4	3.8	0.8	12568	19	所	四輪ケズリ等、各種直行、《サヨ》(摩羅)、高台径 11.0。	-	-	-	R53	12568
8	碗	体丁加へ底張手持ケズリ、縁々ガラ。	17.0	9.1	6.6	0.8	12568	20	所	四輪赤切り、二日向西台、縁々ガラ、高台径 10.2。	-	-	-	R56	12568
9	碗	体丁加へ底張手持ケズリ、縁々ガラ。	12.0	7.0	3.9	0.8	12568	21	所	外縁赤台、圓錐擴て子ガラ、黒、高台径 8.8。	-	-	-	R57	12568
10	碗	ヘア切引(摩羅)、《カヨ》(摩羅)。	10.8	5.6	4.1	0.8	12568	22	所	外縁赤台、摩羅、縁々ガラ、高台径 8.5。	-	-	-	R55	12568
11	碗	四輪赤切り、不整體子ガラ。	13.8	8.9	4.1	0.8	12568	23	所	四輪赤切り、反瓦直行、圓錐擴てガラ、黒。	8.4	3.0	13.0	R58	12568

第 49 図 SK2272 土壤出土遺物 I (土師器坏・高台坏・耳皿)



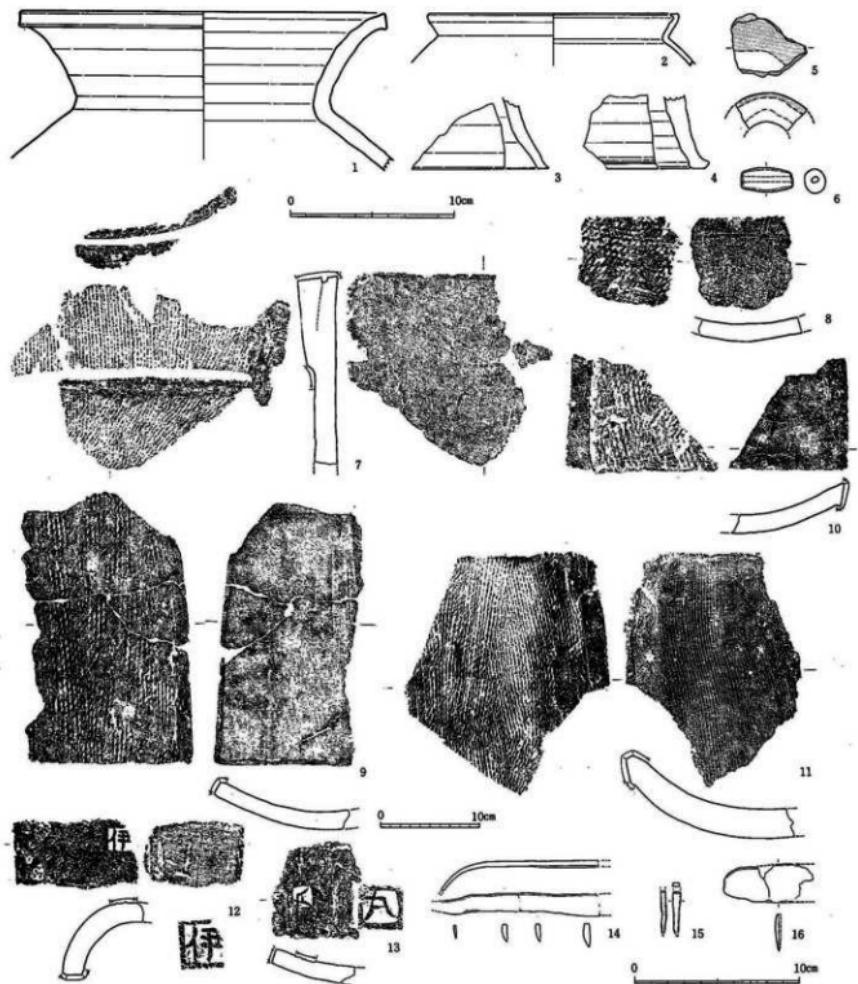
番号	記種	特徴	口径	底径	沿高	壁厚	器番号	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
1	便	口縁部外傾。平行叩き・クロクロ。回転刷毛目。口径(24.0)。	866	12568				坪	へラ切り。口縁部に重ね焼き痕。			14.4	8.2	3.9	R17	12567	
2	便	口縁部受口式。平行叩き・クロクロ。口径(24.2)。	865	12568				坪	へラ切り(アタリあり)。			13.4	8.2	3.6	R20	12567	
3	便	口縁部受口。回転刷毛目。口径(24.0)。	864	12568				坪	へラ切り(アタリあり)。重ね焼き痕。			13.8	8.0	4.1	R16	12567	
4	便	口縁部輕い受口状。クロクロ。回転刷毛目。口径(15.8)。	863	12568				坪	へラ切り(アタリあり)。			11.0	6.6	4.1	R23	12567	
5	坪	回転系切り。底下へ底部周縁回転ケズリ。	12.4	6.0	3.9	89	12567	坪	へラ切り。			13.8	7.2	4.0	R12	12567	
6	坪	へラ切り。体下端へ底部周縁手平ケズリ。	14.9	7.8	4.0	811	12567	坪	へラ切り。			13.0	8.8	3.8	R21	12567	
7	坪	へラ切り。体下部手平ケズリ。	11.1	6.4	3.4	810	12567	坪	へラ切り。重ね焼き痕。尻かぶり。			13.8	8.8	4.0	R15	12567	
8	坪	回転系切りへ底部周縁手平ケズリ。	13.4	6.8	4.3	825	12567	坪	回転系切り。口縁部へ体上部破損。			-	5.6	-	R39	12568	
9	坪	へラ切り(アタリあり)。	10.9	6.9	4.1	813	12567	坪	へラ切り(アタリあり)。			14.4	7.2	4.7	R24	12567	

第50図 SK2272 土壌出土遺物II（土師器壺：1～4　須恵器壺：5～19）



番号	器種	特徴	口径	底径	高さ	壁厚	器番号	番号	器種	特徴	口径	底径	高さ	壁厚	器番号
1	环	へつ切り(アタリあり)。	15.0	7.6	4.6	R19	12567	11	蓋	口縁部内側。画面くぎ孔。胎土均質。	-	-	-	R31	12567
2	环	へつ切り(アタリあり)。	15.4	8.1	4.6	R18	12567	12	蓋	口縁部内側。画面くぎ孔。胎土均質。	-	-	-	R30	12567
3	环	へつ切り(アタリあり)。	16.0	9.0	6.0	R14	12567	13	蓋	口縁部内側。画面くぎ孔。胎土均質。	-	-	-	R32	12567
4	高台环	回転ヘラカズリ。外縁削り。つまみ：低い宝珠状。径3.5、高さ1.0。	8.6	4.6	1.0	R26	12567	14	蓋	口縁部内側。画面くぎ孔。胎土均質。	-	-	-	R28	12567
5	高台环	回転ヘラカズリ。外縁削り。高台径9.2。	15.7	-	6.7	R26	12567	15	蓋	口縁部内側。画面くぎ孔。胎土均質。	-	-	-	R29	12567
6	高台环	回転ヘラカズリ。外反高台。高台径7.7。	14.0	-	4.8	R8	12567	16	後塊	口縁部背外方。体部膨らむ。外反高台高台(壺源欠く)。	R3	12567			
7	梗塊	回転ヘラカズリ。外縁削り。高台径8.7。	13.3	-	6.1	R7	12567	17	側耳堵	へつ切り一同転ヘラカズリ。画面くぎ孔。胎土均質。高台径8.1。	R3	12567			
8	蓋	つまみ：宝珠状。画面くぎ孔。径3.7、高さ(2.0)。	-	-	-	R27	12567	18	高台环	高台底足気泡。画面くぎ孔。胎土均質。高台径9.0。	R4	12567			
9	蓋	口縁部直立。画面くぎ孔。胎土均質。口径19.2。	19.2	-	12567	18		19	輪	口縁部受口状。ロクロ・体下部手持ケズリ。口径27.4。	R35	12568			
10	蓋	口縁部内側。天井部に旋削。画面くぎ孔。胎土均質。尻かぶり。	6.0	4.8	1.3	R1	12567	20	輪	口縁部外反。ロクロ・体下部手持ケズリ。口径30.8。	R34	12568			

第51図 SK2272 土壤出土遺物III (須恵器: 1~7・19・20 ミガキの須恵器 8~18)



番号	種類	特徴	口径	底径	器高	登録番号	番号	種類	特徴	登録番号
1	罐	口縁～肩部外反。ロクロナヂ。灰かぶり。	22.3	-	-	R33 12568	9	平瓦	B8 瓦。左下隅、太綱縫目き→つぶれ。中布目→ナヂ。	R80 12571
2	甕?	口縁内部・平底。ロクロナヂ。灰かぶり。	15.4	-	-	R38 12568	10	平瓦	B8 瓦。右下隅、側端部压板。溝印X→つぶれ。布目→ナヂ。	R81 12571
3	円面鏡	脚部、直点器質。ロクロナヂ。灰かぶり。	-	-	-	R37 12568	11	平瓦	B8 瓦。左上隅溝、中綱縫目き→つぶれ。縫目→ナヂ。	R82 12571
4	円面鏡	脚部、直点器質。ロクロナヂ。	-	-	-	R36 12568	12	丸瓦	B8 瓦。凸面に墨削「伊」。	R84 12571
5	羽口	透風口付近が灰褐色一帯色に焼けた。その他兩色。	-	-	-	R71 12568	13	平瓦	B8 瓦。左下隅、太綱縫目き。ナヂ。凹面に墨削「丸」R.	R86 12571
6	土鏡	オサエ仕上げ。長さ3.2、大きさ1.5。質感孔徑0.3~0.4。	R79 12568	14	-	-	-	铁製品	刀子。平鍔、手造り。片刃。身幅1.4、厚さ0.4。切先破損。	R74 12615
7	解平瓦	單弧文(6筋)。縫・斜め中綱縫目。(布目)→全面ナヂ。	R79 12571	15	-	-	-	铁製品	角針端部付近、断面長方形。幅0.4、厚さ0.2。	R75 12615
8	平瓦	IA類。小口付近、太綱縫目→ナヂ。中布目→ナヂ。	R78 12571	16	-	-	-	铁製品	鋸先端溝、幅2.3、厚さ0.6以上。	R76 12615

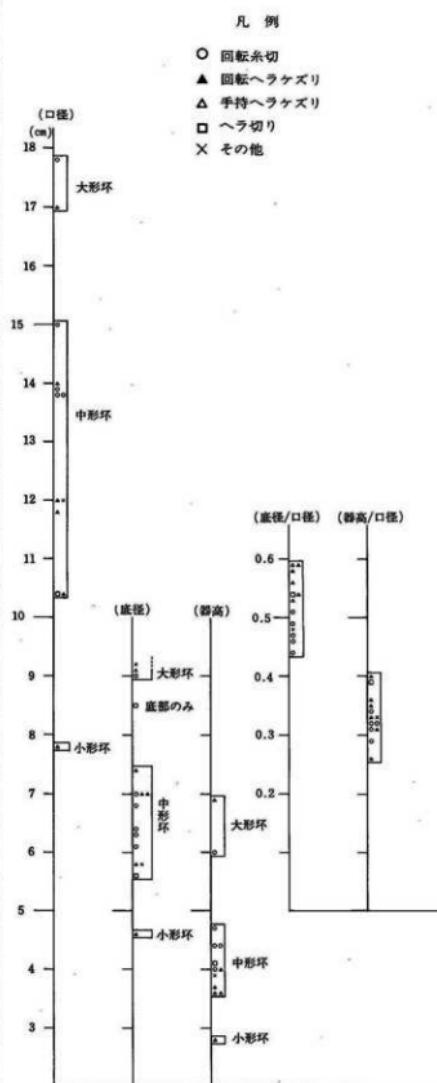
第52図 SK2272 土壤出土遺物IV（須恵器：1・2 円面鏡：3・4 土製品：5・6 瓦：7~13 鉄製品：14~16）

種類	器種	特徴	底面	土壤内	合計
土師器	环	口縁部 内湾・ロクロ-ミガキ・黒	65	65	
		口縁部 外縁・ロクロ-ミガキ・黒	84	84	
		口縁部 外反・ロクロ-ミガキ・黒	70	70	
		体下～底部 回転ケズリ-ミガキ・黒	17	17	
		体下～底部 手持ちケズリ-ミガキ・黒	36	36	
		体下～底部 摩滅	1	1	
		底部 回転ケズリ-ミガキ・黒	4	4	
		底部 静止系切り・回転ケズリ-ミガキ・黒	2	2	
		底部 回転系切り・回転ケズリ-ミガキ・黒	3	3	
		底部 手持ちケズリ-ミガキ・黒	12	12	
		底部 回転系切り-ミガキ・黒	58	58	
		底部 摩滅	47	47	
		体部 回転ケズリ-ミガキ・黒	9	9	
		体部 手持ケズリ-ミガキ・黒	8	8	
		体部 ロクロ-ミガキ・黒	93	93	
		体部 摩滅	170	170	
	高台环	口縁部 ロクロ-ロクロ・黒	1	1	
		底部 ロクロ-ロクロ・黒	4	4	
		高台部 高脚・ロクロ-ロクロ・黒	5	5	
		高台部 ロクロ-ロクロ	5	5	
	両耳壺	両耳部 ケズリ-ケズリ	1	1	
		高台皿 接合部	1	1	
	蓋	口縁部 口縁内傾・回転ケズリ-ミガキ・黒	1	1	
		口縁部 口縁直立・ロクロ-ミガキ・黒	3	3	
		天井部	1	1	
甕	環	口縁～体部 ロクロ・叩き目-ロクロ	1	1	
		口縁～体部 ロクロ-ロクロ	14	14	
		口縁～体部 ロクロ-ミガキ・黒	1	1	
		口縁～体部 ロクロ-摩滅	1	1	
		口縁部 ロクロ-ロクロ	4	4	
		口縁部 刷毛目-ナデ	1	1	
		頸部 ロクロ-ロクロ	2	6	8
		頸～体部 刷毛目-ナデ	1	1	
		頸～体部 有段・ケズリ	1	1	
		体部 ロクロ・平行叩き目-ロクロ	1	1	
		体部 ロクロ・平行叩き目-不明	1	1	
		体部 ロクロ-回転刷毛目	7	7	
		体部 ロクロ-ロクロ	56	56	
		体部 ロクロ-摩滅	5	5	
		体部 刷毛目-摩滅	1	1	
		体部 ケズリ-ナデ	1	1	
		体部 ケズリ-ロクロ	1	1	
		体部 ケズリ-回転刷毛目	6	6	
		体部 ケズリ-黒	2	2	
		体部 ロクロ-黒	3	3	
		体部 ナデ-ナデ	34	34	
		体部 ケズリ-ナデ	33	33	
		体部 刷毛目-刷毛目	2	2	
		体部 刷毛目-ナデ	10	10	
		体部 摩滅	8	135	143
		底部 回転系切り-ロクロ	1	1	
		底部 手持ちケズリ-摩滅	1	1	
		底部 手持ちケズリ-ロクロ	5	5	
		底部 手持ちケズリ-ナデ	6	6	
		底部 木葉痕-ナデ	1	1	
		底部 不明調整-ロクロ	1	1	
		底部 不明調整-ナデ	7	7	
合計			14	1,047	1,061

表7 SK2272 土壤出土土師器破片資料

種類	器種	特徴	数量
坏	口縁～底部	ヘラ切り	5
	口縁部	ロクロナデ	111
	体部	ロクロナデ	53
	体下～底部	手持ちケズリ	1
	底部	回転糸切り～手持ちケズリ	1
	底部	回転糸切り	7
	底部	ヘラ切り～回転ケズリ	6
	底部	回転ケズリ	6
	底部	手持ちケズリ	1
	底部	ヘラ切り～怪いケズリ	2
底	底部	ヘラ切り	49
	底部	小片	3
		小計	245
	口縁部	直立	5
蓋	口縁部	外傾	8
	口縁部	内傾	5
	天井部	外面に沈線 2条	1
	天井部	回転ケズリ	1
	天井部	小片	6
須恵器	つまみ		1
		小計	27
	口縁～体部	ロクロ	2
	体部	ロクロ	3
	高台部	回転ケズリ	4
埴	高台部	ヘラ切り～ロクロナデ	2
	高台部	ロクロナデ	2
	高台部	小片 ロクロナデ	3
		小計	16
高盤	脚部	破片 ロクロナデ	4
	脚部	壁との接合部	1
長頸瓶		小計	5
	口縁部	ロクロナデ	2
	体部	ロクロナデ	5
	体下～高台部	ロクロナデ	5
		小計	12
大形鉢	口縁部		5
		小計	5
甕	口縁～頸部	縁帯・ロクロナデ	1
	口縁～頸部	縁帯・波状文	2
	頸部	波状文・沈線	3
	頸部	隆線	1
	頸部	ロクロナデ	2
	頸～肩部	平行叩き	3
	頸～肩部	ナデ	1
	体部	格子叩き	1
	体部	平行叩き	82
	体部	ロクロナデ	33
	体部	カキ目	3
	体部	灰かぶり	18
	体下～底部	ケズリ	5
		小計	160
		合計	465
弥生土器	体部	平行状沈線・斜溝文(樹形團式)	2
	体部	斜溝文	11
	底部	木葉痕	1
		計	24

表 8 SK2272 土壤出土須恵器破片資料



第 53 図 SK2272 土壤出土土器坏の法量・法量比

徴について、法量・器形・製作技法の順に述べる。

法量の特徴(第53図)：法量は口径7.8~17.8cm、底径4.6~9.2cm、器高2.8~6.8cmのものがある。

口径の大きさをみると、7.8cmの小形のもの(第49図4)、10.4~15.0cmの中形のもの(第49図1~3・7・9~13・15)、17.0~17.8cmの大形のもの(第49図8・14)がある。それらの特徴は次のようにになる。

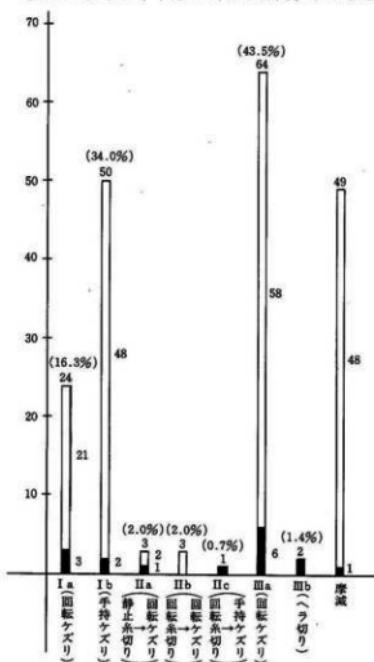
1. 最も多いのは中形の杯で10点あり、7.7割を占める。大形の杯は2点で1.5割、小形の杯は1点のみで0.8割である。
2. 底径は小形の杯が4.6cm、中形の杯が5.6~7.4cm、大形の杯が9.0~9.1cmである。この他、体～底部のものに8.5・9.2cmが各1点ある。
3. 器高は小形の杯が2.8cm、中形の杯が3.6~4.7cm、大形の杯が6.0~6.8cmである。
4. 口径に対する底径の比は小形の杯が0.59、中形の杯が0.44~0.59、大形の杯が0.51~0.54である。底径/口径比に関しては、大・中・小形の杯で差異は明確に認められない。
5. 口径に対する器高の比は小形の杯が0.36、中形の杯が0.26~0.39で差異はみられないが、大形の杯は0.34~0.40でやや大きい値を示す。

以上のように、中形の杯が大部分であると同時に、大形や小形の杯も底径/口径比・器高/口径比は、

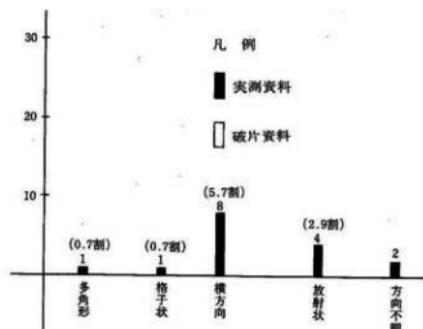
中形の杯と大きく変わらない。底径/口径比は0.44~0.59に、器高/口径比は0.26~0.40におさまる。

器形の特徴：器形はいずれも平底であるが、体部は内湾・外傾、口縁部は内湾・外傾・外反するなどの違いがみられる。

1. 体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部がそのままおさまるもの(第49図2~4・10・11・14・15)。
2. 体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部が軽く外反するもの(第49図7~9・12・13)。



外面の再調整・切離し技法



内面の再調整

第54図 SK2272 土壌出土土器杯の製作技法

3. 体部が外傾し、口縁部がそのままおさまるもの(第49図1)。

これらは中形の坏にすべて認められ、小形の坏は内湾するもの、大形の坏は内湾するものと口縁部が軽く外反するものがある。量的には1が7点、2が5点、3が1点で、その構成比は7:5:1である。

製作技法の特徴：製作にロクロを使用しているという点(ロクロ調整)で共通する。ただし、外面の再調整(ヘラケズリ)・底部切離し技法、内面の再調整(ヘラミガキ)に次のような種類がある。

1. 外面の再調整と底部切離し技法(第54図左)

I. 再調整のため底部切離し技法が判明しないもの。

a: 回転ヘラケズリ(第49図1~3)。

b: 手持ヘラケズリ(第49図7・8)。

II. 再調整は部分的で、底部切離し技法が判明するもの。

a: 静止糸切り技法で切り離し、回転ヘラケズリを加えているもの(第49図5)。

b: 回転糸切り技法で切り離し、回転ヘラケズリを加えているもの(破片資料のみ)。

c: 回転糸切り技法で切り離し、手持ヘラケズリを加えているもの(第49図4)。

その他：体下部に手持ヘラケズリを加えているが、底部が摩滅しているもの(第49図9)。

III. 底部切離し後再調整を加えないもの。

a: 回転糸切り技法で切離したままのもの(第49図11~16)。

b: ヘラ切り技法で切離したままのもの(第49図6・10)。

Ia の第49図1は体部下半～底部、2は体下部～底部、3は底部に回転ヘラケズリを加えている。Ib の第49図7・8は体下部～底部に手持ヘラケズリを加えている。IIa の第49図5は、静止糸切りで底部周縁に回転ヘラケズリを加えている。IIc の第49図4は回転糸切りで底部周縁に手持ちヘラケズリを加えている。

量的にはIaが実測資料3点・破片資料21点で、合計24点である。Ibは実測資料2点・破片資料48点で、合計50点である。IIaは実測資料1点・破片資料2点で、合計3点である。IIbは破片資料3点である。IIcは実測資料1点である。IIIaは実測資料6点・破片資料58点、合計64点である。IIIbは実測資料2点である。その他、底部が摩滅しているものが実測資料1点・破片資料48点で、合計49点である。以上の合計は196点であるが、摩滅のため切離し・再調整技法が不明なものを除き、147点の資料を対象にその構成比をみると、Ia:16.3%・Ib:34.0%・IIa:2.0%・IIb:2.0%・IIc:0.7%、IIIa:43.5%・IIIb:1.4%となる。これらの中で、底部を回転糸切り技法で切り離したままのIIIaが約44%ともっと多いが、次に再調整として手持ヘラケズリを行っているものが約35%・回転ヘラケズリが約20%、その他はヘラ切り技法で切離したまゝのものが約1%である。ただし、底部を切離したままのIIIは約45%であるのに対し、切離し後ヘラケズリを加えているI・IIは約55%と半数以上になる。なお、切離し技法が判明するものは73点あるが、回転糸切り68点(93%)・静止糸切り3点(4%)・ヘラ切りが2点(3%)で、大部分を回転糸切りが占めている。

2. 内面の再調整(第54図右)

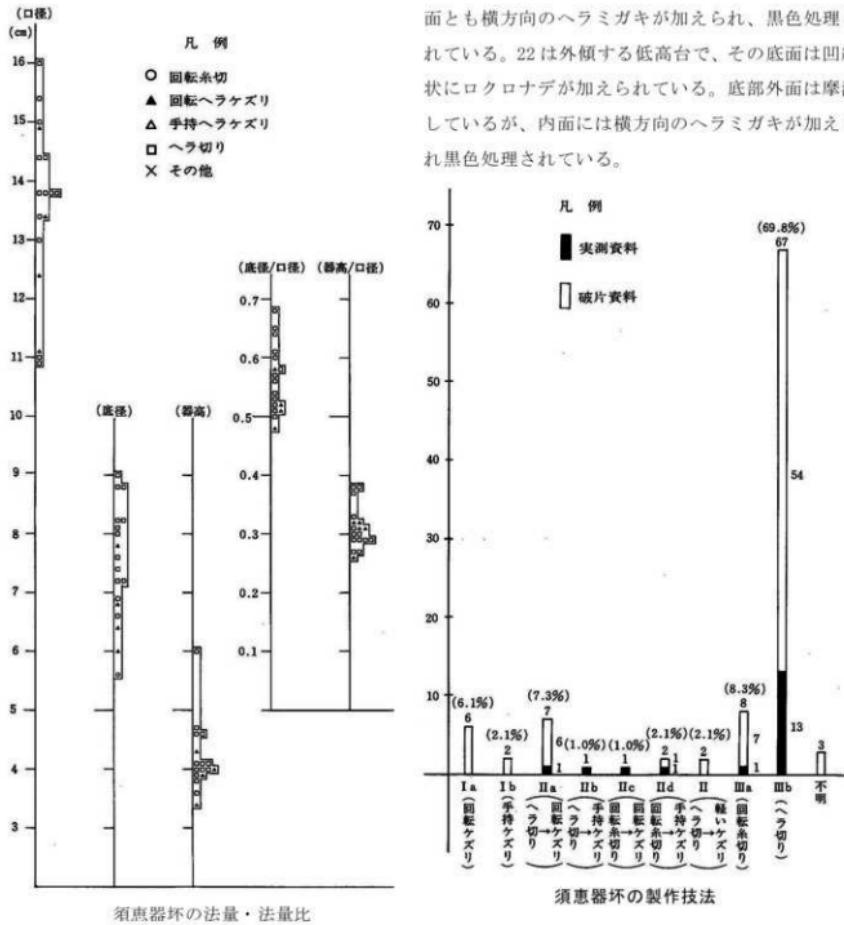
内面はヘラミガキ・黒色処理が行われている。口縁部～体部のヘラミガキはいずれも口縁に沿って

いる。底部でヘラミガキの方向が判明するものは14点あり、そのうち横方向が8点(5.7割)、放射状が4点(2.9割)、多角形と格子状が各々1点(1.4割)で、横方向が半数以上を占める。

土師器高台坏 (第49図 18~22)

高台坏は実測資料5点・破片資料16点がある。第49図18は外傾する角高台で、底部は回転糸切り、内面のヘラミガキは多角形である。19は外反気味に外傾する高台で、底部は回転ヘラケズリかとみられる。内面はヘラミガキされているが、摩滅している。20は三日月高台で、底部は回転糸切り、内面のヘラミガキは横である。21は高台が短く外傾する。高台径が18cmと大きく盤の可能性がある。両

面とも横方向のヘラミガキが加えられ、黒色処理されている。22は外傾する低高台で、その底面は回線状にロクロナデが加えられている。底部外面は摩滅しているが、内面には横方向のヘラミガキが加えられ黒色処理されている。



第55図 SK2272 土壤出土須恵器坏の法量・法量比・製作技法

破片資料は口縁部 1 点・底部 4 点・高台部 10 点・底部と高台の接合部 1 点である。

土師器両耳壺

手持ヘラケズリされた耳部の破片資料が 1 点ある。

土師器耳皿（第 49 図 23）

耳皿は高台皿（口径 8.4 cm）上半部を内側に折り曲げたものである。両面とも横方向のヘラミガキが加えられ、黒色処理されている。高台は直立し、端部が外反している。底部の切離しは回転糸切りである。

土師器甕（第 50 図 1～4）

甕は実測資料が 4 点、破片資料が口縁・頸部 32 点・底部 22 点である。第 50 図 1 は口縁部が外傾する甕で、胎土が均質である。外面は平行叩きの後ロクロナデ、内面は回転刷毛目・ロクロナデが加えられている。2～4 は口縁部が受口状の甕で、胎土に砂粒を含む。2 の外面は平行叩きの後ロクロナデ、内面はロクロナデである。3 は両面とも回転刷毛目、4 は外面がロクロナデ、内面が回転刷毛目である。

破片資料の口縁・頸部は両面ロクロナデが 27 点、外面ロクロナデ・内面ヘラミガキと黒色処理が 1 点、外面ロクロナデ・内面摩滅が 1 点、外面刷毛目・内面ナデが 2 点、外面有段・ヘラケズリが 1 点である。底部は回転糸切りが 1 点・手持ヘラケズリが 12 点、木葉痕が 1 点、不明压痕が 8 点である。

須恵器壺（第 50 図 5～19、第 51 図 1～3）

実測資料には、器形が判明するもの 17 点、底部が 1 点、合計 18 点がある。これらの資料の特徴について、法量・器形・製作技法の順に述べる。

法量の特徴（第 55 図左）

1. 口径は 10.9～16.0 cm で、13.8 cm 前後がやや多い。
2. 底径は 5.6～9.0 cm である。
3. 器高は 3.4～6.0 cm で、4.0 cm 前後に集中する。器高 6.0 cm の壺は他のものとかけはなれている。口径 16.0 cm・底径 9.0 cm とも最大値を示し、大形のものといえる。
4. 口径に対する底径の比は 0.48～0.68 で 0.55 前後がやや多い。
5. 口径に対する器高の比は 0.26～0.38 で、0.29 前後にやや集中する。

器形の特徴：器形はいずれも平底であるが、体部は内湾・外傾、口縁部は内湾・外傾・外反するなどの違いがみられる。

1. 体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部がそのままおさまるもの（第 50 図 7・9）。
2. 体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部が軽く外反するもの（第 50 図 5・6・11、第 51 図 1・2）。
3. 体部が外傾し、口縁部がそのままおさまるもの（第 50 図 8・10・12～17・19、第 51 図 3）。

量的には 1 が 2 点、2 が 5 点、3 が 10 点で、その構成比は 2 : 5 : 10 で、3 の外傾するものが 6 割を占める。

製作技法の特徴（第 55 図右）：製作にロクロを使用しているという点（ロクロ調整）で共通する。ただし、外面の再調整（ヘラケズリ）・底部切離し技法に次のような種類がある。

1. 再調整のため底部切離し技法が判明しないもの。

a : 回転ヘラケズリ(破片資料)。

b : 手持ヘラケズリ(破片資料)。

II. 再調整は部分的で、底部切離し技法が判明するもの。

a : ヘラ切り技法で切離し、回転ヘラケズリを加えているもの(第50図6)。

b : ヘラ切り技法で切り離し、手持ヘラケズリを加えているもの(第50図7)。

c : 回転糸切り技法で切り離し、回転ヘラケズリを加えているもの(第50図5)。

d : 回転糸切り技法で切り離し、手持ヘラケズリを加えているもの(第50図8)。

III. 底部切離し後再調整を加えないもの。

a : 回転糸切り技法で切離したままのもの(第50図18)。

b : ヘラ切り技法で切離したままのもの(第50図9~17・19、第51図1~3)。

I はいずれも破片資料であるが、IIa の第50図6は体部下端に回転ヘラケズリ・IIb の第50図7は体下部に手持ヘラケズリ、IIc の第50図5は底部中央と周縁に回転ヘラケズリ・IId の第50図8は底部周縁に手持ヘラケズリを加えている。

量的には Ia は破片資料 6 点、 Ib は破片資料 2 点である。 IIa は実測資料 1 点、破片資料 6 点で、合計 7 点である。 IIb・c は実測資料各々 1 点である。 IId は実測資料・破片資料各々 1 点で、合計 2 点である。

IIIa は実測資料 1 点・破片資料 7 点で、合計 8 点である。 IIIb は実測資料 13 点・破片資料 54 点で、合計 67 点である。その他、 IIa or b の破片資料が 2 点、技法不明の小破片が 3 点ある。以上の合計は 99 点であるが、技法が不明なものを除き、96 点の資料を対象にその構成比をみると、 Ia : 6.1%・ Ib : 2.1%・ IIa : 7.3%・ IIb : 1.0%・ IIa or b : 2.1%・ IIc : 1.0%・ II d : 2.1%・ IIIa : 8.3%・ IIIb : 69.8%となる。これらの中で、ロクロからヘラ切り技法で切り離したままの IIIb が約 70%ともっと多く、次に再調整としてヘラケズリを行っている I・II が約 22%、回転糸切りのままの IIIa が約 8%である。また、切離し技法が判明するものは 88 点あるが、回転糸切り 11 点 (12.5%)・ヘラ切り 77 点 (87.5%) で、大部分をヘラ切りが占めている。

須恵器蓋・高台坏・稜塊・高盤(第51図4~7)

蓋：第51図4は低いつまみをもつもので、天井部はヘラ切りである。この他・破片資料として口縁部が18点、天井部が8点ある。

高台坏：第51図5は口縁～体部が外傾し、高台は外傾する角高台である。底部は回転ヘラケズリされている。6は口縁～体部が内湾し、高台は外反する角高台である。底部は回転糸切りである。

この他、高台坏の破片資料には底～高台部が6点、高台部が1点ある。底～高台部の4点が回転ヘラケズリ、2点がヘラ切り・ロクロナデ、高台部はロクロナデである。

稜塊：第51図7は口縁部が外反し、体部が外傾する。高台は外傾し端部が丸くおさまる。この他に稜塊の口縁～体部が2点、体部が3点ある。

高 盤：破片資料が5点あり、いずれも脚部である。

須恵器長颈瓶・鉢・壺(第51図19・20、第52図1・2)

長頸瓶：破片資料が12点あり、口縁部が2点、体部が5点、体下～高台部が5点である。

鉢：第51図19は口縁部が受口状、20は外反する。口径は19が27.4cm、20が30.8cmである。

甕：第52図1は甕の口縁～肩部で、口縁部が外反し、両面ともロクロナデである。2は口縁～肩部であるが、一般的の甕とは異なり、口縁端部が内折する。上面は平坦である。甕の破片資料は155点あり、口縁～頸部が13点ある。口縁部は縁帯状をしている。体部は137点、底部は5点ある。底部は手持ヘラケズリである。

ミガキの須恵器（第51図8～18）

器面がヘラミガキされた一群の須恵器がある。これらは胎土が均質で、精製された粘土で作られており、焼成も良好である。器種には蓋・稜塊・両耳塊などがある。

蓋：第51図8はつまみの部分で、宝珠状をしている。器面の大部分がヘラミガキされているが、つまみの接合部付近はロクロナデのままである。色は暗褐色（小豆色）をしている。

9は口縁～天井部であるが、つまみの部分を破損している。口縁部は直立ぎみに外傾し、天井部はなだらかである。口径は19.2cmである。口縁部とつまみの付け根の部分はロクロナデのままであるが、その他はヘラミガキされている。色は赤みを帯びた暗褐色（小豆色）であるが、内面に重ね焼き痕があり、その部分はにぶい黄褐色をしている。

10はリング状のつまみをもつものである。天井部は高く、下半部が内反している。外面には沈線が一条巡っている。折り曲げられた口縁部は、内傾している。口径は20.8cmである。つまみの内面と口縁部はロクロナデのままであるが、その他はヘラミガキされている。色は明るい灰色であるが、口縁部が灰かぶりのため灰黒褐色をしている。

11～15は口縁部から天井部にかけての破片である。器形・ヘラミガキ・色は10と同じである。

棱塊・両耳塊など：16の稜塊は口縁部が強く外反し、体部に膨らみを持つ。高台は高く、端部に向かって外反ぎみに外傾する。口径は18.1cmである。底部はヘラ切りの後、周縁を回転ヘラケズリしている。高台内面はロクロナデのままであるが、その他はヘラミガキしている。色は水色がかった灰色であるが、塊底面に重ね焼き痕があり、その部分と高台内面は暗褐色（小豆色）をしている。

17は両耳塊で、口縁～体部は内湾している。高台は内湾ぎみに直立している。口径は14cmである。底部～高台内面はロクロナデのままであるが、その他はヘラミガキされている。色は灰白色である。

18は短い高台を持つが、口縁～体部を破損している。残存する体下部～底部は、9～10mmと厚手である。高台はロクロナデであるが、その他はヘラミガキされている。色は灰白色である。高台坏の可能性もあるが、他の器種かもしれない。

その他の土器

弥生土器はいずれも破片資料であるが、体部が13点、底部が1点ある。体部には平行状沈線の間に斜縄文を充填施文したものが2点、斜縄文を施文したものが11点ある。底部には木葉痕がある。

円面鏡（第52図3・4）

脚部破片で、第52図3は外傾しそのままおさまり、4は端部が外反気味になる。

瓦(第 52 図 7~13)

瓦の出土総数は 175 点で、その内訳は軒平瓦 2 点・平瓦 81 点・丸瓦 92 点である。それらの中で、おもなものについて述べる。

軒 瓦：第 52 図 7 は単弧文軒平瓦(640)で、政庁第 II 期のものである。硬質で自然釉がある。

平 瓦：第 52 図 8 は小口の部分で、政庁第 I 期の平瓦 IA 類である。両面ともナデ調整されているが、凸面に縄叩き痕、凹面に布目痕を残す。硬質で灰かぶりである。

第 52 図 9・13 は政庁第 II 期の平瓦 II B 類 a タイプで、左下隅の部分である。褐色をしており、9 はやや軟質、13 は軟質である。13 の凹面には陽刻文字「丸」 B がある。

第 52 図 10・11 は政庁第 III 期の平瓦 II B 類 b タイプで、側面には凹型台の側端部圧痕がある。10 は右下隅、11 は狭端部小口の部分である。両者とも硬質で、10 は灰黒色、11 は赤かかった褐色をしている。11 は凹面の布目がほつれている。

丸 瓦：第 52 図 12 は政庁第 II 期の丸瓦 II B 類である。有段付近で、やや軟質で褐色をしている。凸面に陽刻文字「伊」がある。

その他の出土遺物

土製品：第 52 図 5 は轆の羽口である。砂粒を多く含む粗土を使用している。褐色をしているが、送風口付近は灰黒色に変色して硬くなっている。

第 52 図 6 は長さ 3.2 cm の紡錘形をした小型の土錐である。オサエ仕上げで、貫通孔は長円形である。

鉄製品：第 52 図 14 は刀子の身の部分で、切っ先を欠いている。平棟・平造り・片刃で、幅 1.4 cm・厚さ 4 mm である。15 は角釘の先端部付近で、先端を欠いている。断面長方形で幅 4 mm・厚さ 2 mm である。16 は鎌の先端部で幅 2.3 cm・厚さ 2 mm 以上(錯のため剥落)である。

SE2273 井戸跡

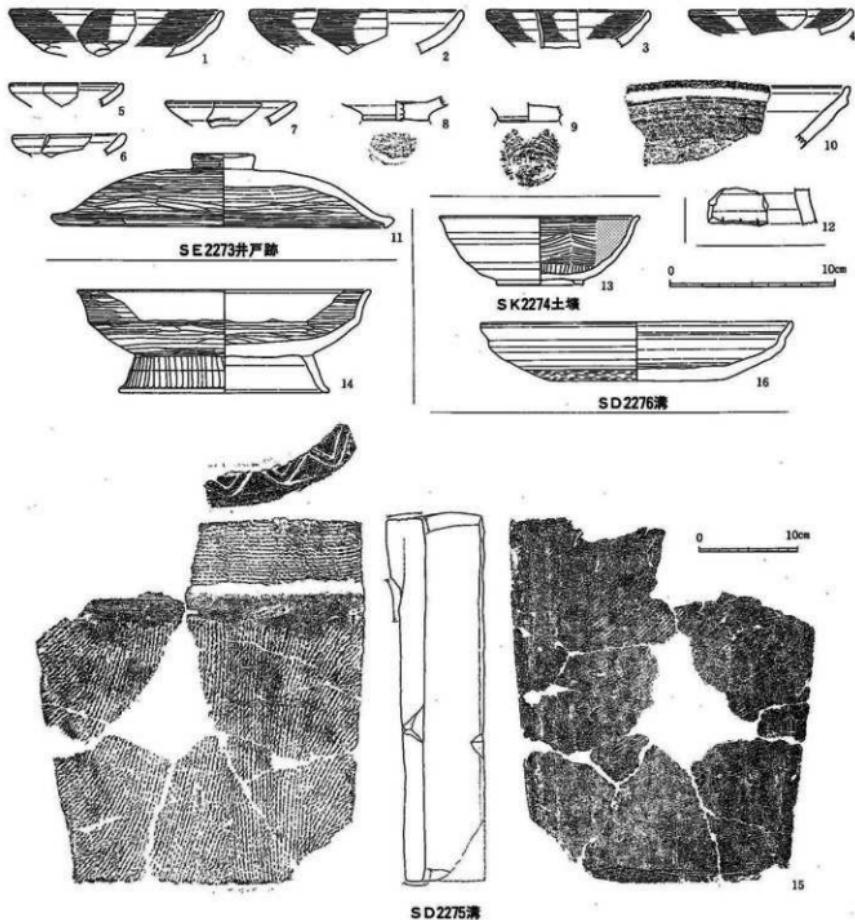
遺構(第 40 図)

調査区の北部中央東に位置する井戸跡で、第 3 層上面で検出し、SK2272 土壌・K8・9 土壌より新しい。円筒形で、直径 1.5m・深さ 2.0m である。堆積土は 3 層に大別される。1・2 層は井戸跡上半部に堆積し、1 層は褐色砂質シルト、2 層は暗褐色枯土質シルトである。3 層は下半部に堆積する黒褐色もしくは灰黒褐色の枯土質シルトで、植物遺体を含む。なお、3b 層は泥土状をしている。

遺物(第 56 図 1~12)

かわらけ・須恵系土器・土師器・須恵器、円面鏡・瓦が出土している。ミガキの須恵器を除きすべて破片である。

かわらけ：手づくりとロクロ調整のかわらけがあり、器種として壺と小皿がある。前者は胎土が均質で白褐色をしているのに対し、後者は砂粒を含みにぶい橙褐色をしている。第 56 図 1~3 は手づくりの壺で、口縁部~体部が内湾気味に外傾する。口縁部~体部は内外面とも横ナデ調整であるが、体下部~底部外面は製作時のオサエ痕がそのまま残っている。横ナデによって、口縁部外面に軽い稜、体部外面に膨らみを一段生じさせている。内面にはそれらに対応する軽い屈曲がある。4 は小皿で、壺に較べると浅く、口径も小さいが、製作技法(調整)は共通している。なお、2 には僅かであるが



SD 2275 溝

番号	種類	器種	特徴	直径	通番号	番号	種類	器種	特徴	直径	通番号
1	かわらけ	坪	手づくね。白褐色。胎土均質。ナデ。オチエ。	R10	12569	9	かわらけ	小盤	回転赤切り。にぶい褐褐色。胎土砂粒含む。	R19	12569
2	かわらけ	坪	手づくね。白褐色。胎土均質。ナデ。オチエ。	R8	12569	10	重蒸系土器	鉢	ロクロ調整。灰褐色。胎土砂粒含む。	R23	12569
3	かわらけ	坪	手づくね。白褐色。胎土均質。ナデ。	R3	12569	11	重蒸器	皿	低いつまみ。両面くがき。乳白色。胎土均質。	R2	12569
4	かわらけ	小盤	手づくね。白褐色。胎土均質。ナデ。	R6	12569	12	内面観	脚部。ロクロ調整。継位線見二条。硬質。灰被り。	R1	12569	
5	かわらけ	小盤	ロクロ調整。にぶい褐褐色。胎土砂粒含む。	R18	12569	13	土器器	高台坪	丁寧なロクロナデ。底深くガキ不定方向。	R1	12569
6	かわらけ	小盤	ロクロ調整。にぶい褐褐色。胎土砂粒含む。	R21	12569	14	重蒸器	横縫	底面回転ケズリ。大部分ミガキ。胎土均質。	R1	12569
7	かわらけ	小盤	ロクロ調整。にぶい褐褐色。胎土砂粒含む。	R17	12569	15	軽平皿	二重霞文(650)・中継切口。中有目。黒褐色自然釉。	R3	12574	
8	かわらけ	小盤	回転赤切り。にぶい褐褐色。胎土砂粒含む。	R20	12569	16	重蒸器	盤	体下部～底部：(へラ切り) → 回転ケズリ。	R1	12569

第 56 図 SE2273 井戸跡・SK2274 土壌・SD2275～2276 溝出土遺物

金色の雲母が含まれている。この他、てづくねの口縁部が4点、体部が6点ある。

第56図5~9はロクロ調整の小皿で口縁部~体部が外傾する。口縁部外面には丸みをもった軽い稜があり、6ではその部分が肥厚している。底部は厚手で、回転糸切りの離し切りである。底径は8が4.0cm・9が3.8cmで、切離しの際のアタリが明瞭である。この他、口縁部と底部が5点ずつある。

その他の遺物：10は須恵系土器の高台鉢とみられるものである。坏もしくは小皿の底部が2点あるが、かわらけとの識別は難しい。土師器は坏口縁部が4点・底部が6点ある。いずれもロクロ調整で、底部はヘラケズリ2点・回転糸切り4点である。甕は口縁部2点がロクロ調整、底部1点が回転糸切りである。11はほぼ完形の須恵器蓋で、ヘラミガキされている。胎土が均質で、焼成も良く乳白色をしている。内面に径12cmの重ね焼き痕がある。つまみは低く、天井部はなだらかで、口縁部に向かつて外反気味になる。口縁部は内側に折り返している。この他、須恵器には坏口縁部5点・底部2点があり、底部はヘラ切りである。

円面硯は脚部の破片である(第56図12)。縦位の線刻が3条確認できる。

瓦は平瓦II B類が33点、II C類が9点、丸瓦II B類が13点ある。

SK2274 土壙

遺構(第40図)

調査区南東部に位置する土壙で、第4層上面で検出し、第3層に覆われている。平面形は不整円形と推定され、南北2.4m以上・東西2.2m以上・深さ50cmで、調査区外に延びている。堆積土は3層に分かれる。1層は黄褐色砂質シルト、2層は灰褐色砂質シルト、3層は黄褐色砂質シルトで、1層に炭化物、3層に地山土ブロックを含む。

遺物(第56図13)

土師器・須恵器・瓦が出土している。

第56図13は土師器高台坏で、一部破損しているが、2/3以上残っている。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。高台は凸帯状で、径5.4cm・幅6mm・高さ4mmである。高台の底面は幅3mmの凹線状になっている。外面のロクロ調整は丁寧で、滑らかである。内面のヘラミガキは口縁に沿っており、底部でやや不規則になる。この他、坏口縁部4点・底部9点がある。ロクロ調整で、底部は回転ヘラケズリ5点、手持ちヘラケズリ2点である。甕口縁部1点は摩滅している。

須恵器は坏口縁部2点・底部5点で、すべてヘラ切りである。高台坏は高台部が2点あり、いずれも底部外面は回転ヘラケズリである。蓋口縁部は2点ある。

瓦は平瓦IA類1点・II B類4点、丸瓦II B類5点である。

SD2275 溝

遺構(第40図)

調査区中央東に位置する東西溝で、第4層上面で検出され、K9土壙より新しい。幅1.2m・長さ3.8m・深さ36cmで、断面「U」字状をしている。堆積土は明黄褐色砂質シルトで、下部に灰黄褐色砂質シルトを含む。

遺物(第 56 図 14・15)

土師器・須恵器・弥生土器・瓦が出土している。

土師器は非クロ調整の有段壺口縁部 1 点、クロ調整の壺口縁部～底部 1 点があり、後者の底部はヘラケズリされている。第 56 図 14 は須恵器の稜塊で、ヘラミガキされている。口縁部が強く外反し、体部に膨らみを持ち、高い高台は端部か外反する。器形・法量とも SK2272 土壙出土の稜塊とほぼ同じである。胎土も均質で、焼成も共通する。この他、須恵器には壺口縁部 1 点・底部 1 点、蓋口縁部 1 点、甕口縁部 1 点がある。弥生土器は甕肩部 1 点である。

瓦には第 56 図 15 の二重波文軒平瓦(650)がある。波文は鋸歯状をしており、瓦当面は半分ほど失われているが、波文の数は 6 個とみられる。この他、平瓦 II B 類もしくは II C 類が 1 点ある。

SD2276 溝

遺構(第 40 図)

調査区の南部西側に位置する溝で、第 4 層上面で検出し、第 3 層に覆われている。幅 95 cm・長さ 4.2m 以上・深さ 15 cm で、断面「U」字状をしている。堆積層は灰褐色砂質土で炭化物を含む。

遺物(第 56 図 16)

土師器・須恵器・弥生土器が出土している。土師器はクロ調整の壺口縁部・底部各 1 点、蓋口縁部 1 点、甕口縁部 1 点・底部 2 点である。須恵器は第 56 図 16 が皿である。体部は内湾気味に外傾するが、屈曲した後口縁部が外傾する。体下部から底部は回転ヘラケズリが加えられている。この他、須恵器壺口縁部・底部各 1 点、短頸壺口縁部 1 点がある。壺底部はヘラ切りである。

弥生土器は体部 2 点である。

その他の遺構(第 40 図)

土壙・ピット・溝がある。K5・9 は第 4 层上面で検出され、第 3 层に覆われている。K9 は SD2275 より古い。K12 は第 4 层上面で検出され、第 3 层に覆われる。P.8 は K9 より新しく、SE2273 より古い。D1 は第 3 层より新しい。D9 は第 4 层上面で検出され、第 3 层に覆われる。

(2) 下層の遺構

柱穴群(第 39・40 図)

調査区西側断割り部で、第 4～5 层の下から 3 個の柱穴(P.1・3・4)を検出した。いずれも、第 6・7 层上面で検出された。大きさは P.1 が一辺 30 cm、P.3 が 60 cm、P.4 が 60 cm で、P.1・3 に柱抜取り(切り取り)穴が伴う。上層遺構の保存のため、建物跡の存在を確認するに留めた。

その他の遺構

ピット・溝などがある。P.2 は第 6 层上面で検出され、第 5 层に覆われている。D11 は P.2 より古い。

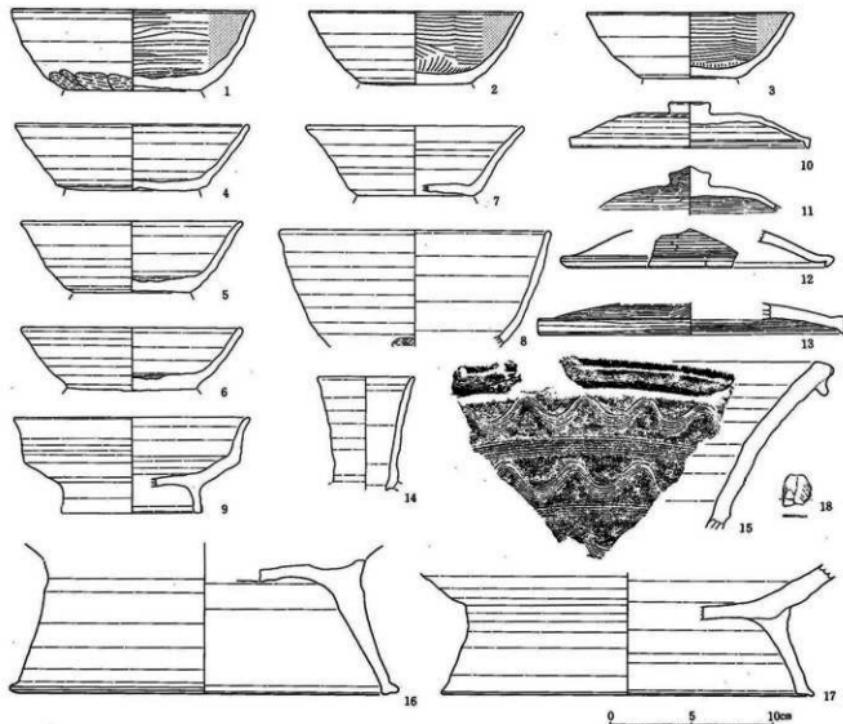
(3) 堆積層の出土遺物

堆積層出土遺物についてはおもなものを図示した。なお、第 1 层出土遺物には層・遺構が不明なものも含めた。

第 3 層出土遺物(第 57・58 図)

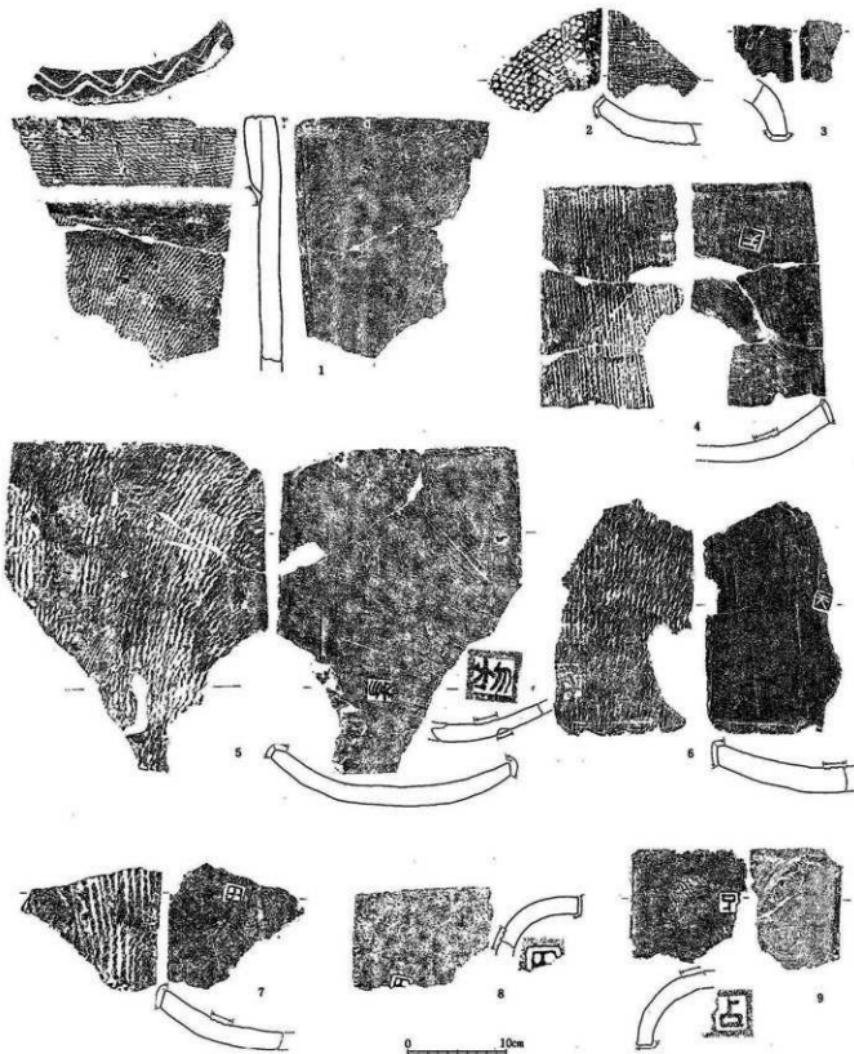
土師器（第 57 図）：1～3 は口縁部～体部が内湾する。1 は底部をヘラ切りで切離し、体部下端～底部周縁を手持ちヘラケズリしている。底部内面のヘラミガキは横方向である。2・3 は底部を回転糸切りで切離したままのもので、内面のヘラミガキは 2 が放射状・3 が不定方向である。

須恵器（第 57 図）：坏の 4・6・8 は口縁部～体部が内湾気味に外傾する。坏の 5 は口縁部が外反し、7 は外傾する体部が口縁部で外反気味になる。8 は大形で深い。底部は 4～6 がヘラ切り、7 が回転糸切りのままである。8 は体部下端に手持ちヘラケズリがあるが、底部を破損している。9 の稜塊は角高台で、底部外面は回転ヘラケズリされている。10 は低いつまみをもつ蓋である。天井部は回転ヘラ



番号	器種	特徴	概	口径	底径	厚さ	登録	通番号	番号	器種	特徴	概	口径	底径	厚さ	登録	通番号
1	坏	ヘラ切り半持ちケズリ。横方向ミガキ。	14.6	8.4	5.0	R27	12570	10	盖	低いつまみ。天井部回転ケズリ。	14.8	-	2.8	R7	12570		
2	坏	回転糸切り。放射状ヘラミガキ。	13.2	6.8	4.5	R2	12565	11	盖	宝珠状つまみ。表面ヘラミガキ。小豆色。	-	-	-	R13	12570		
3	坏	回転糸切り。横方向ヘラミガキ。	12.8	5.8	4.0	R1	12565	12	盖	ヘラミガキ。一部クロナザ。緑青灰色。	-	-	-	R6	12565		
4	坏	ヘラ切り。	14.4	8.1	4.1	R24	12569	13	盖	天井部回転ケズリ。両面ヘラミガキ。	18.8	-	-	R11	12569		
5	坏	ヘラ切り。	13.8	7.2	4.4	R2	12569	14	粗	口縁部僅かに外反。胎土中に砂粒含む。	6.0	-	-	R17	12570		
6	坏	ヘラ切り。ゆがみ有り。	13.8	6.0	3.9	R1	12569	15	便	口縫部縦帯状。通路波状文。楕円沈線。	-	-	-	R26	12570		
7	坏	回転糸切り。	13.2	7.2	4.3	R1	12569	16	昌古跡	底部へら切り压痕。オサエ。ロクロ調整。	24.0	-	-	R3	12562		
8	坏	体部下端半持ちケズリ。	16.6	-	-	R6	12569	17	昌古跡	ロクロ調整。無い作り。	-	23.6	-	R4	12565		
9	稜塊	高台や外縁。高台径 8.6。高さ 1.8.	14.4	-	5.9	R8	12569	18	貴白	半透明の薄片。幅 2.0。横 1.7。厚さ 0.5～1.0。	-	-	-	-	-		

第 57 図 第 3 層出土遺物 I (土師器：1～3 須恵器：4～15 須恵系土器：16～17)



番号	種類	特徴	裏面	型式	商番号	5	平瓦	BB類aタイプ。裏面に陽刻文字「物」A。	844	12577
1	輕平瓦	二重波文(650)。強横縫切き。凸面斜縫切き。輪廓褐色。	B49	12576	6	平瓦	BB類aタイプ。裏面に陽刻文字「矢」B。	B49	12577	
2	平瓦	IC類。斜格子切き。布目重複。海綿骨針含む。	B53	12576	7	平瓦	BB類aタイプ。裏面に陽刻文字「田」A。	B36	12577	
3	丸瓦	I類。平行叩き+ナギ。布目。海綿骨針含む。	B43	12577	8	丸瓦	BB類aタイプ。裏面に陽刻文字「田」A。	B4	12574	
4	平瓦	BB類aタイプ。裏面に陽刻文字「矢」A。	B41	12577	9	丸瓦	BB類aタイプ。凸面に陽刻文字「古」。	B35	12577	

第58図 第3層出土遺物II

ケズリが加えられている。口縁部は直立気味に折り曲げられている。11～13はヘラミガキの加えられた蓋である。胎土が均質で、焼成も良い。11は小豆色、12・13は灰白色をしている。14は瓶、15は甕の口縁部～頸部である。

須恵系土器(第57図):16・17は高台鉢の底部～高台部である。両者とも胎土に砂粒を含み、粗い作りである。16の底部剥がれ目には、回転糸切りの圧痕が残っている。

瓦(第58図)

軒平瓦:1は二重波文の軒平瓦(650)で、政府第III期のものである。硬質で、暗赤褐色をしている。

平瓦・丸瓦:2は平瓦I C類aタイプ、3は丸瓦I類で、政府第I期のものである。胎土に海綿骨針を含み淡灰色をしている。製作技法と胎土の特徴から下伊場野窯跡産とみられる。

4～7は平瓦II B類aタイプで政府第II期のものである。

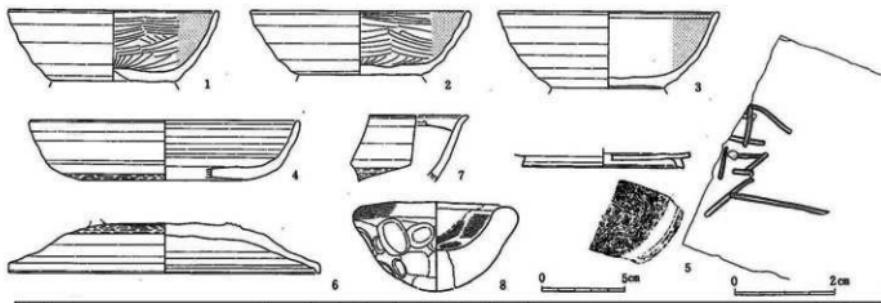
第1層出土遺物(第59図)

土師器:1～3は口縁部～体部が内湾する壺で、底部は回転糸切りのままである。

須恵器:4は口縁部～体部が内湾する皿状の壺で、体部下端～底部が回転ヘラケズリされている。5は高台皿で、底部外面に焼成以前に「舍人」とヘラ書している(図版27-8)。胎土は砂粒を含むが比較的均質で、焼成も良い。底部外面を回転ヘラケズリし、外傾する角高台を付け、周囲にロクロナデを加えている。「舍人」の文字は、幅約1mmの先端が平坦な工具で書いている。ヘラの入りは浅いが、数条の筋状痕跡が観察されることから、竹先のようなものを使用したと推定される。なお、図版27-11・12に参考資料として矢本町赤井遺跡出土の「舍人」ヘラ書き須恵器を掲載した。筆致はやや似ているが「舍」の書き方が相違する。6は蓋もしくは高台皿とみられるもので、回転ヘラケズリが加えられている。

灰釉陶器:7は壺の口縁部～体部で、体下部が回転ヘラケズリされている。器面全体に半透明の薄い灰釉がかかっている。なお、内面の口縁下部に重ね焼きによる線状の剥がれ目がある。

埴堀:8は口縁部と内面にナデ調整が加えられているが、体～底部外面は指頭によるオサエのままである。内面には熔融を示す灰褐色のてりがある。



番号	記録	形	口径	底径	高さ	登録	番号	番号	器種	形	口径	底径	高さ
1	回転糸切り。放射状ヘラミガキ。	12.6	7.4	4.2	R10	12569	5		高台皿	底部回転ヘラケズリ。外縁高台。底部外面ヘラ書き「舍人」。	R2	12570	
2	回転糸切り。放射状ヘラミガキ。	13.2	7.4	3.9	R7	12579	6		蓋	高盤の可能性あり。粗い回転ヘラケズリ。	R1	12569	
3	回転糸切り。厚壁。	13.2	6.8	4.7	R9	12579	7		甕	底下部回転ヘラケズリ。重ね剥がれ目。表面薄い灰釉。	R3	12569	
4	甕。体下部～底部回転ヘラケズリ。	16.4	10.0	2.6	R1	12570	8		壺	外面おさこ。内面～口縁ナデ。内面に擦傷のてり。	R5	12569	

第59図 第1層出土遺物(土師器: 1～3 須恵器: 4～6 灰釉陶器: 7 土製品: 8)

【遺構と遺物の年代】

遺構の重複関係

発見された遺構・堆積層の重複関係を整理すると次のようになる。



遺物の年代

今回の調査で、遺物がまとめて出土した遺構はSK2270 土壙とSK2272 土壙で、土師器と須恵器が多い。この他、SE2273 井戸跡から少量ではあるがわらけが出土し、それよりも時期的に新しい。そこでSK2272・2270 土壙出土土器をそれぞれ第1・2群土器、SE2273 井戸跡出土土器を第3群土器とする。ここでは、良く年代的特徴を示すものとして、第1・2群土器については土師器と須恵器の坏、第3群土器についてはわらけを取り上げ、それらの特徴を整理し、共伴する遺物・層序・類例を検討することによって、その年代を明らかにしたい。

1. 第1・2群土器の年代

(1) 土師器坏の特徴

第1・2群土器ともロクロ調整の平底坏という点で共通している。しかし、器形細部・法量・法量比・外面の再調整と切り離し技法・内面の再調整をみると、次のような共通点と相違点が認められる。

器形細部：口縁部はそのままおさまるものと、軽く外反するものがある。その比率は第1群土器が5.8:4.2、第2群土器が4.2:5.8で、第2群土器に外反するものがやや多い傾向にある。

法量：それぞれに大形と中形のものがあり、中形のものが主体を占める。大形のものはそれぞれ2点ずつである。この他、第1群土器に小形のものが1点含まれている。

大形坏の口径は第1群土器17.0～17.8cm、第2群土器20.0～21.3cm、中形坏が第1群土器10.4～15.0cm、第2群土器12.8～15.8cmで、第2群土器がやや大きい傾向にある。底径を中形坏でみると、1群土器5.6～7.4cm、第2群土器5.3～7.9cmではほぼ変わりはない。器高を中形坏でみると、第1群土器3.6～4.7cm、第2群土器3.7～6.3cmで、第2群土器に高いものがみられるが、集中するのは4.0cmで共通性がある。

このように、法量でみると口径に若干の相違がみられるが、底径・器高はほぼ共通している。

法量比：口径に対する底径・器高の比は第1・2群土器とも大・中・小形坏で違いは認められず、相似形をなすとみられる。径/口径の比は第1群土器が0.44～0.59に平均的にみられ、その平均値は

0.52である。第2群土器は0.39～0.54で、0.48前後に集中度が高い。器高/口径の比は第1・2群土器とも0.26～0.40で、0.31前後に集中度が高い。

このように、口径に対する底径の比は第1群土器が若干大きいが、器高の比には相違が認められない。

外面の再調整と切り離し技法:再調整および底部切離し技法の関係には、I:再調整のため切離し技法が判明しないもの、II:再調整は部分的に切離し技法が判明するもの、III:底部切離し後再調整を加えないものがある。外面の再調整技法にはA:回転ヘラケズリ、B:手持ヘラケズリ、底部切離し技法には1:ヘラ切り、2:静止糸切り、3:回転糸切りがある。これらの技法は、後述する須恵器坏においても同様で、その組み合わせと第1・2群土器における比率は次のようになる。

技法の組み合せ		再調整の有無	再調整の種類	底部切離し技法	土師器第1群土器	土師器第2群土器	須恵器第1群土器
I	A	有り	回転ヘラケズリ	ケズリのため不明	16.3%	6.8%	6.1%
	B	なし	手持ヘラケズリ	*	34.0%	8.8%	2.1%
II	A 1	有り(部分)	回転ヘラケズリ	ヘラ切り	—	—	7.3%
	A 2	なし(〃)	なし	静止糸切り	2.0%	○.7%	—
	A 3	なし(〃)	なし	回転糸切り	2.0%	—	1.0%
III	B 1	なし(〃)	手持ヘラケズリ	ヘラ切り	—	—	1.0%
	B 2	なし(〃)	なし	静止糸切り	—	—	—
	B 3	なし(〃)	なし	回転糸切り	○.7%	4.8%	2.1%
Ⅳ	— 1	無し	無し	ヘラ切り	1.4%	—	69.8%
	2	なし	なし	静止糸切り	—	—	—
	3	なし	なし	回転糸切り	43.5%	70.7%	8.3%

※ A or B 8.2% ※ A or B 2.1%

これらを、底部を切離したままのもの、その後の再調整技法という点から整理すると、第1群土器はヘラ切りのまま1.4%、回転糸切りのまま43.5%、回転ヘラケズリを加えているもの20.3%、手持ヘラケズリを加えているもの34.7%となり、ヘラケズリを加えているものが55.0%と半数を越える。これに対し第2群土器では回転糸切りのまま70.7%、回転ヘラケズリを加えているもの7.5%、手持ヘラケズリを加えているもの13.6%、不明ケズリ8.2%となり、ヘラケズリを加えているものが29.3%で1/3以下である。両者は技法のありかたに相違がみられる。

内面の再調整技法:内面の再調整技法にはヘラミガキと黒色処理がある。ヘラミガキは口縁～体上半部が口縁部に沿っているが、体下～底部では多角形・格子状・横方向・放射状のものがみられる。多角形～横方向のものでは、底部内面がほぼ平坦であるのに対し、放射状のものでは中央がへそ状に幾分高くなっている傾向がある。

第1群土器では多角形:0.7割・格子状:0.7割・横方向:5.7割・放射状:2.9割で、多角形～横方向をまとめると7.1割を占める。第2群土器では横方向0.2割・放射状が9.8割で、大部分を放射状が占めている。

第1・2群土器の土師器坏の相違:以上、第1・2群土器の土師器坏を比較・検討したが、それらをまとめると次のようになる。

1. 器形はいずれも平底の坏で似ているが、第1群土器と較べると第2群土器に口縁部が軽く外反するものがやや多い傾向がある。底部内面は第1群土器がほぼ平坦なものが多いのに対し、第2群土器では中央がへそ状に高くなっているものが多い傾向がある。

- 口径は第2群土器がやや大きいが、底径・器高はほぼ共通している。
- 底径/口径比は第1群土器が若干大きいが、器高/口径比はほぼ共通している。
- 底部切離しは回転糸切り技法が多い。その後の再調整は、第1群土器ではヘラケズリを加えているものが1/2以上であるのに対し、第2群土器では1/3以下という相違がある。
- 内面のヘラミガキは第1群土器が多角形～横方向が約7割であるのに対し、第2群土器では放射状が9.8割を占め、横方向は極めて少ない。これは大きな相違である。
- 器形・法量・法量比・技法を総合的にみると、器形～法量比には僅かな違いしか認められなかったが、外面・内面の再調整技法のありかたに明瞭な相違点を指摘することができる。

(2) 須恵器杯の特徴

須恵器は第1群土器では比較的多かったが、第2群土器では僅少であった。したがって、両者の比較はできないが、第1群土器についてその特徴を整理しておきたい。

- 器形は平底の壺で、体～口縁部が外傾するものが比較的多い。
- 法量は、口径10.9～16.8cm・底径5.6～9.0cm・器高3.4～6.0cmの範囲におさまる。
- 底径/口径比は0.48～0.68、器高/口径比は0.26～0.38である。
- 底部切離しはヘラ切りのまま69.8%、回転糸切りのまま8.3%である。再調整は回転ヘラケズリ14.4%・手持ちヘラケズリ5.2%・不明ヘラケズリ2.1%で、これらの合計は21.7%である。

(3) 共伴する遺物

上述した須恵器壺の他に、第1群土器に土師器蓋・高台壺・耳皿・甕・須恵器蓋・高台壺・稜塊・鉢・甕、第2群土器に土師器高台杯・耳皿・甕・須恵器壺・蓋・稜塊・甕・須恵系土器高台鉢・灰釉陶器皿・綠釉陶器塊などが伴っている。第1群土器に伴う土師器高台壺には灰釉陶器の模倣（第49図20など）とみられるものもある。土師器甕には平行叩き目や回転刷毛目が特徴的にみられる。また、須恵器にはヘラミガキが加えられたものがまとまってみられる。第2群土器の土師器甕はクロナデが主体で回転刷毛目が少ない。須恵器は少ない。この他第1群土器にみられないものとして、須恵系土器高台鉢がある。

土器群の年代を考える上で、重要な遺物は瓦である。第1群土器には政府第I～III期、第2群土器には政府第I期～第IV期の瓦が伴っている。政府第I期のものは少ないが、第II期以降のものは量的にまとまっている。

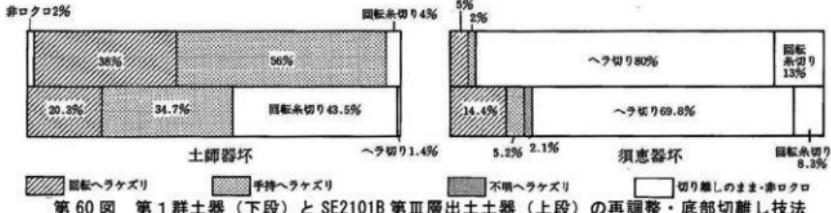
(4) 第1・2群土器の年代

基本層序・瓦との関係：第1・2群土器は第2層（灰白色火山灰）の下層であることから、承平4（934）年以前¹⁰のものである。さらに、灰白色火山灰との間に第3層が堆積している。瓦との共伴関係から第1群土器は政府第III期以降、第2群土器は政府第IV期以降となる。政府第III期は宝亀11（780）年の伊治公昔麻呂の乱後の造営、政府第IV期は貞觀11（869）年の大地震直後の復興である¹¹。基本層序と瓦から第1群土器は780年～934年、第2群土器は869年～934年のものであることが明らかである。さらに、土器群の特徴に相違が認められることから、政府第IV期の瓦の有無・第3層の存在を考慮すると、第1群土器は第2群土器より古く、その廃棄年代は869年以降をさほど下らないこと、それより

新しい第2群土器は934年よりある程度遡る可能性が生じる。次にその点を検討してみたい。

第1群土器とSE2101B井戸跡出土土器との関係：第1群土器に類似する資料としては、第60次調査のSE2101B井戸跡第III層出土遺物がある⁽³⁾(第60図)。土師器坏の器形・法量比(底径/口径)はほぼ共通しており、識別は困難である。底部の切離し・再調整技法をみると、第1群土器は回転ヘラケズリ20.3%・手持ヘラケズリ34.7%・回転糸切り43.5%であるのに、井戸跡は回転ヘラケズリ38%・手持ヘラケズリ56%・回転糸切り4%である。再調整の加えられたものが1/2以上という点では共通しているが、第1群土器が55%であるのに対し、井戸跡では94%に達している。回転糸切りのままが第1群土器で43.5%・井戸跡で4%というのも対照的である。このように土師器坏に関しては、第1群土器と井戸跡では器形・法量比という点で共通しているものの、技法的には第1群土器が新しい要素をもつている。

須恵器坏は器形・法量比の点で共通性がみられる。技法的には第1群土器が回転ヘラケズリ14.4%・手持ヘラケズリ5.2%・種類不明ケズリ2.1%・ヘラ切り69.8%・回転糸切り8.3%で、井戸跡が回転ヘラ



第60図 第1群土器（下段）とSE2101B第III層出土土器（上段）の再調整・底部切離し技法

ケズリ5%・手持ヘラケズリ2%・ヘラ切り80%・回転糸切り13%で、ヘラ切りが主体を占める(3/4前後)という点で共通している。ヘラケズリを加えたものが第1群土器21.7%・井戸跡7%・回転糸切りのままのものが第1群土器8.3%・井戸跡13%で、一見すると第1群土器のほうが古い要素をもつかにみえるが、いずれも10%前後の違いで集計誤差の範囲に収まると考えられる。

以上によって、第1群土器とSE2101B井戸跡第III層出土土器は共通性をもちながら、第1群土器が新しい要素をもつことが、特に土師器坏の技法を検討することによって明らかになった。

井戸跡出土文字資料との関係：SE2101B井戸跡第III層からは漆紙文書が出土している。この文書は記載内容から書状と考えられ、天長9(832)年以降に作成されたことが知られるもので、漆容器の蓋紙として用いられた後井戸に廃棄されたとみられる。

また、この井戸跡からは「石口」と底部外面に墨書きされたヘラ切りの須恵器坏が出土している(図版27-13)⁽⁴⁾。「石口」の2字目は「團」の可能性が高く、「磐城團」を省略したものとみられる⁽⁵⁾。陸奥国の軍團については弘仁6(815)年8月太政官符により兵士六千人、六團(名取・玉造・白河・安積・行方・小田)六番となり、承和15(848)年5月に「磐城團」の名が初見し、『延喜式』にみる七団制まで継続したとみる点では見解が一致している。ただし、「磐城團」の成立年代については『統日本後紀』承和10(843)年4月19日条の「更加一千人。与本井八千人。」の理解をめぐって、板橋源氏は「一千人」は「二千人」の誤写誤伝とし「承和十年(843)頃まで六団であったらしい。⁽⁶⁾」としている。それ

に対し高橋崇氏は「815年以降843年の間に7,000人に増員されたことになる。^⑩」とし七団制成立（磐城団新設）の可能性を述べ、さらに鈴木拓也氏は高橋氏の考えを支持し「磐城団の新設は」「『続後紀』承和十年(843)四月丁丑条以前とみた方がよいであろう。^⑪」としている。磐城団の新設が承和10~15年なのか、弘仁6年~承和10年なのか必ずしも明らかではないが、弘仁6年~承和15年の間であることに異論はない。磐城団の成立年代からすれば、SE2101B 井戸跡第III層出土の「石團」墨書須恵器は弘仁6~承和10年以降、もしくは承和10~15年以降ということになる。

これらの漆紙文書・墨書須恵器が井戸に廃棄されるまでに、漆紙文書は作成・使用（書状）→反故→漆容器の蓋紙→廃棄、墨書須恵器は生産→供給→「石團」墨書→使用→廃棄、という経過をたどったものと考えられる。井戸が短期間で埋まっていることから、両者の廃棄年代はほぼ同じとみられる。文書が作成された後漆容器の蓋紙として使用された期間と、須恵器に「石團」と墨書きされた使用された期間については厳密にはわからない。しかし、漆紙文書が書状であること、須恵器壺が日常雑器であることからそれほど掛け離れていたとも考えがたい。これらは天長9(832)年以降のそれほど隔たらぬい頃に廃棄されたと考えられる。このことは磐城団成立年代と矛盾せず、さらに限定できる可能性がある。

以上の検討によって、まず第1群土器が第2群土器より古いこと、SE2101B 井戸跡第III層出土土器と共に通性とともに新しい要素を併せもつことを指摘した。次に、SE2101B 井戸跡第III層出土土器は共伴する文字資料(漆紙文書・墨書須恵器)によって天長9(832)年頃以降に使用・廃棄されたことを述べた。したがって、第1群土器の年代は、天長9(832)年頃以降に使用・廃棄された SE2101B 井戸跡第III層出土土器とほぼ同じかそれより新しいと考えができる。

第2群土器と灰白色火山灰層堆積以前の土器：第2群土器は第1群土器より新しく、貞觀11(869)年～承平4(934)年の間に廃棄されたもので、その廃棄年代は第3層の存在によって承平4年よりある程度遡るとした。この点を次に検討してみる。

灰白色火山灰層の下層からまとまった遺物が出土しているのは多賀城跡の南西1.2kmに位置する山王遺跡SE504 井戸跡^⑫・多賀城廐寺跡の南西0.5kmに位置する高崎遺跡SX1080 土器捨て場跡^⑬である。山王遺跡SE504 井戸跡はIV層上面で検出された。掘り方は隅丸方形で、くりぬきの「井戸側」をもつ。井戸側の上部は腐朽し、灰白色火山灰層が堆積している。その下では井戸側か残っており、井戸側内から土師器・須恵器・木製品などが出土している。土師器壺10点が図示されており、いずれも回転糸切り技法によって切り離されたままのものとみられる。口径は13.4~16.0cm、底径は5.5~6.8cm、底径/口径比は0.38~0.47で0.4前後に比較的集中している。高崎遺跡SX1080 土器捨て場跡は浅い谷に3回にわたって土器を一括廃棄したもので、灰白色火山灰層堆積以前に2回一括廃棄が行われている。これらの土器のほとんどは壺で、土師器・須恵器・赤焼き土器(須恵系土器に同じ)からなり、多くのものに油煙が付着している。須恵器は僅かとみられる。これらの壺は回転糸切りのままのものが大部分で、底径/口径比は0.4のものが圧倒的に多いという。

第2群土器と山王遺跡SE504 井戸跡・高崎遺跡SX1080 土器捨て場跡の灰白色火山灰層下出土の土器はいずれも承平4(934)年以前のものである。しかし、これらには土器組成・法量比などに相違がみら

れる。すなわち、第2群土器では須恵系土器は高台鉢に限られ、明瞭な坏がみられない。山王遺跡の場合は不明確であるが、井戸が掘り込まれている第IV層(整地層)から赤焼き土器(須恵系土器と同じ)坏が出土している。高崎遺跡では多量の須恵系土器坏が存在する。底径/口径比では、第2群土器が0.48前後に集中度が高いのに対し、山王遺跡・高崎遺跡では0.4前後である。土器組成・法量比の違いは須恵系土器の坏が器種として確立し大量に生産されるようになったこと、回転糸切り技法が進歩し底径の小形化をもたらしたこと示している。第2群土器と高崎遺跡出土土器との間に両者の過渡的段階の土器群が存在しても不思議ではない。このようにみてくると、第2群土器は承平4(934)年以前でもかなり遅く、9世紀代に収まる可能性がある。ここでは幅をとって下限年代を9世紀末10世紀初頭としておきたい。

第1・2群土器の年代：以上の検討結果を整理すると、次のようなになる。

1. 第1群土器は天長9(832)年頃以降に使用・廃棄された第60次調査のSE2101B井戸跡第III層出土土器群とほぼ同じか、それよりも新しい。
2. 第2群土器は貞観11(869)年以降で、承平4(934)年より一定期間遅る頃に廃棄された。その下限年代は9世紀末～10世紀初頭頃とみられる。
3. 第1・2群土器の年代観相互の関係から、第1群土器は9世紀第3四半期、第2群土器は9世紀第4四半期頃を中心とした時期のものと思われる。

2. 第3群土器の年代

(1) かわらけの特徴

第3群土器のかわらけには手づくりのもの(A類)とロクロ調整のもの(B類)がある。A類には坏と小皿、B類には小皿がある。製作技法とともに胎土に明瞭な違いがある。すなわち、A類は胎土が均質で白褐色をしており、なかには僅かながら金色の雲母を含むものもある。B類は胎土に砂粒を含み、にぶい橙褐色をしているものが多いが、一部に白っぽいものもある。これらは次のような特徴をもっている。(第61図)

A類の杯：

1. 器形は口縁部～体部が内湾気味に外傾する。
2. 口縁～体部は横ナデが加えられており、体下部～底部外面には製作時のオサエ痕がそのまま残っている。
3. 横ナデによって口縁部外面に軽い稜、体部に膨らみを一段生じさせている。内面にはそれらに対応する屈曲がある。

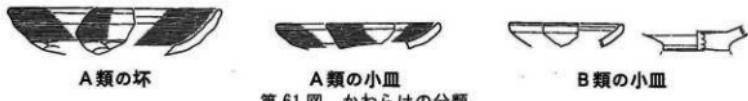
A類の小皿

1. 器形的特徴・製作技法は坏と共に通するが、坏に較べると浅く、口径も小さい。

B類の小皿

1. ロクロ調整の加えられた平底の小皿である。
2. 器形は口縁部～体部が外傾する。
3. 口縁部外面に丸みをもった稜がある。なかには、口縁部外面が肥厚するものもある。

4. 底部は厚手で、回転糸切りのアタリが明瞭である。底部の回転糸切りは離し切りである。



(2)かわらけの年代

第3群土器のかわらけと類似する資料としては、外郭南門一政府間の道路を壊して作られた第50次調査のSX1629平場跡・SK1641回み出土資料がある（註11）。両者は近似しているが、第1群土器のかわらけA類の胎土のほうが白く、夾雜物も少ない。器形細部もていねいな仕上げである。第50次調査のかわらけについては平安京・平泉のかわらけとの比較から12世紀のものとしている。第1群土器のかわらけもこの頃のものと考えられる。胎土、仕上げの違いは、その場の性格によるものか、細かな年代差によるものかは今後の課題したい。

遺構の年代

上層の遺構で、まとまった遺物が出土しているのはSK2270・2272土壤とSE2273井戸跡である。SK2272土壤からは第1群土器、SK2270土壤からは第2群土器が出土していることから、それぞれ9世紀第3四半期・第4四半期頃のものとみられる。SE2273井戸跡はかわらけの特徴から12世紀のものと考えられる。なお、この井戸跡からは、ほぼ完形のヘラミガキされた須恵器蓋が出土している。井戸跡がSK2272土壤と重複して、それよりも新しいことから、井戸の壁が崩落した際に落ち込んだものと考えられる。

この他の遺構は出土遺物が少ないが、灰白色火山層・第3層に覆われることから、承平4(934)年以前であることがわかる。SK2271土壤からは政府第II期もしくは第III期の瓦と回転糸切りと手持ちヘラケズリされた土師器坏の底部が2点ずつ出土していることから、9世紀後半頃のものと考えられる。SK2274土壤からは土師器高台坏とともにロクロ土師器坏の底部が7点出土している。高台坏（第56図13）は緑釉陶器塊の模倣（註12）とみられるもので、底部内面のヘラミガキは不規則ながら横方向に近いものである。坏の底部はいずれもヘラケズリされている。須恵器坏底部5点もすべてヘラ切りである。破片資料が多いため確実性に欠けるが、第1群土器に先行するもので、9世紀第2四半期に遡る可能性がある。SD2277溝からはヘラミガキされた須恵器の稜塊（第56図14）、ヘラケズリされたロクロ土師器坏底部、政府III期の軒平瓦（650）が出土している。量的に少ないが第1群土器と様相が似ていることから、9世紀第3四半期頃のものみられる。SD2276溝からは体下部～底部がヘラケズリされた須恵器皿（第56図16）が出土している。この須恵器は8世紀に遡る可能性があるが、ロクロ土師器坏の口縁部・底部が出土していることから9世紀代に廃棄されたと考えられる。

以上、上層の遺構についてその年代を検討したが、大部分のものは9世紀代とみられる。その中でSE2273井戸跡だけが12世紀で、その間の遺構・遺物は明らかでない。また、下層の柱穴群・溝についてでは、遺物が出土していないので明確にしえないが、第4・5層に覆われることから、9世紀前半もしくは8世紀に遡る可能性もある。

2. 鈴木清任宅の調査

位置：多賀城市市川字五万崎 40 調査期間：1月 23 日

原因：合併処理浄化槽の設置 発掘調査面積：8 m²

【調査対象地区】発掘調査区は外郭西門跡の南東約 40m に位置し、外郭西辺築地跡の東側に隣接している。標高約 13m で、ほぼ平坦である(第 38 図)。

【遺構と遺物】層序は第 1 層が表土、第 2 層が地山である。検出した遺構は柱穴 1・ピット 5・溝 2 である。P.3 柱穴は一辺 40cm・深さ 40cm の方形とみられ、抜取り穴が伴う。P.2 は平面形が隅丸三角形で、南北 65cm・東西 60cm・深さ 13cm である。暗褐色砂質シルトが堆積していた。P.4 は隅丸長方形、P.5 は円形、P.6・7 は不整長方形で、いずれも浅い。D8 溝は幅 20cm・深さ 7cm である。D1 溝は P2・3 より新しく、ガラス片を含む(第 62 図)。

遺物はいずれも破片であるが、P.2 から須恵器蓋天井部、D1 溝から須恵系土器口縁部、平瓦 II C 類が各々 1 点ずつ出土している。出土遺物が少ないため遺構の年代は不明確であるが、調査区内の遺物の有り方から D1 溝を除き古代のものと思われる。

3. 菊池信一宅の調査

位置：多賀城市市川字五万崎 36-2

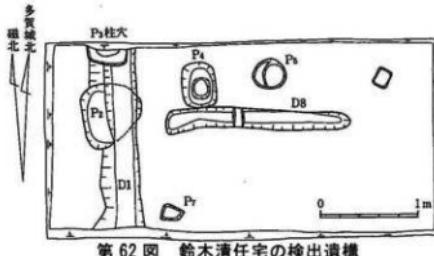
調査期間：6月 21・22 日

原因：合併処理浄化槽の設置

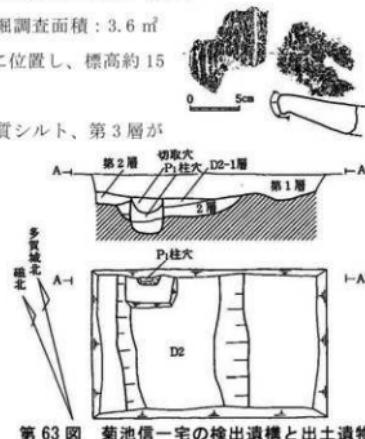
発掘調査面積：3.6 m²

【調査対象地区】発掘調査区は外郭西門跡の東約 110m に位置し、標高約 15m の南緩斜面で、ほぼ平坦である(第 38 図)。

【遺構と遺物】層序は第 1 層が表土、第 2 層が黒褐色砂質シルト、第 3 層が地山である。検出した遺構は柱穴 1・溝 1 である。P.1



第 62 図 鈴木清任宅の検出遺構



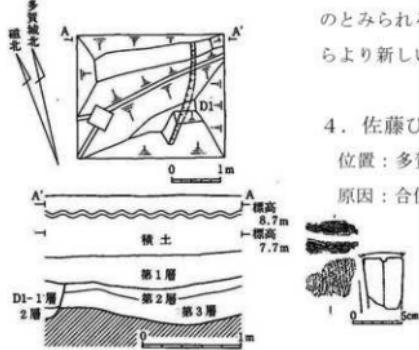
第 63 図 菊池信一宅の検出遺構と出土遺物

柱穴は第 2 層・D2 より新しい。平面形は一辺約 30cm の方形とみられ、切取り穴がある。柱穴埋土は地山ブロックを含む黒褐色砂質シルトである。D2 溝は南北方向の溝で、柱穴より古く、第 2 層に覆われる。幅約 1.3m で、深さは 20cm である。堆積土は 2 層に分かれ、1 層が暗褐色砂質シルト、2 層が地山ブロックを含む灰褐色砂質シルトである(第 63 図)。

遺物は D2 溝から、ロクロ土師器壺口縁部 2 点・回転糸切りの底部 3 点、須恵器瓶高台部 1 点、須恵系土器壺口縁部 2 点・底部 1 点・平瓦 IA 類 1 点・II B 類 1 点・II B 類 b タイプ(第 63 図上)1 点が出土

している。第2層からは、須恵器壺口縁部1点・瓶口縁部1点、須恵系土器壺口縁部1点・底部1点、平瓦II B類2点が出土している。

【遺構の年代】D2溝は政府第III期の平瓦・須恵系土器壺が出土していることから、10世紀前半のもとのみられる。第2層からも須恵系土器壺が出土しており、それより新しいP.1柱穴は10世紀前半以降のものと考えられる。



第64図 佐藤ひさ子宅の検出遺構と出土遺物
盛土で約1.6mの厚さがある。第2層は黒褐色砂質シルト、第3層が暗褐色砂質シルト、第4層が褐色および黄褐色粗砂質シルトの地山である。第2層上面で南西に湾曲する南北方向のD1溝を検出した。今回検出したのはその西端部分で、東側は調査区外に延びている。検出幅・深さとも約40cmである。堆積土は2層に分かれ、1層は黒褐色粘土質シルトで炭化物を含む。2層は灰褐色砂質シルトである(第64図)。

遺物は、D1溝から回転糸切りの土師器壺底部2点、平瓦II C類1点が出土している。D1溝は政府第IV期(貞觀11年)以降に埋まつたとみられる。この他、第1層から須恵系土器壺口縁部2点、単弧文軒平瓦(640)が1点出土している(第64図)。

金堀地区

1. 菊池一夫宅の調査

位置：多賀城市市川字金堀1 調査期間：6月27～29日

原因：擁護壁設置工事 発掘調柾面積：24m²

【調査対象地区】発掘調柾区は政府跡の西約150mで、金堀地区と五万崎丘陵に西から東へ谷が入った谷頭にあたる南斜面に位置し、標高は18～21mである(第65図)。発掘区は南側に向かって凹状に設置した(第66図)。

【層序と遺構】宅地盛土下の第1層が表土で、両者を合わせると約2mの厚さがある。第2層は褐色～黒褐色土の自然堆積層で、a～f層に細分される。a層は暗褐色シルト、b層は黒褐色シルトで木炭片を多量に含んでいる。c層は褐色シルト、d層は褐色砂質シルト、e層は暗褐色シルト、f層は褐色シルトである。第3層は灰褐色シルトで地山土のブロックを含み固い。第4層は黄褐色土の地山である。

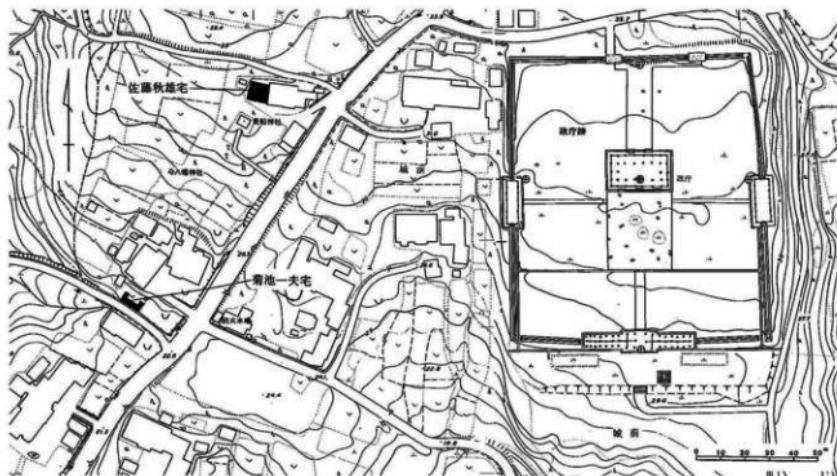
る。第2a層は調査区の東・西に分布するが、第2b~f層は東側にだけみられる。また、第3層は調査区西側にだけ分布する。南側は現状の土留壁設置に伴って、第2・3層が失われ、表土下が直接地山となっている。第2層およびそれに覆われた地山をみると、古代の地形は南側に緩やかに傾斜していることが判明した。

遺構としては調査区西側の第3層(整地層)上面で柱穴を1個、東側では第2c層上面でピットを2個検出した。柱穴は一辺約50cmで、調査区外に延びている。深さは25cm以上で、切取り穴が伴う。柱穴埋土は暗褐色土と地山ブロックを含む暗褐色土との互層である。切取り穴には地山土小ブロックを小斑状に含む軟らかい暗褐色土が堆積していた(第66図)。

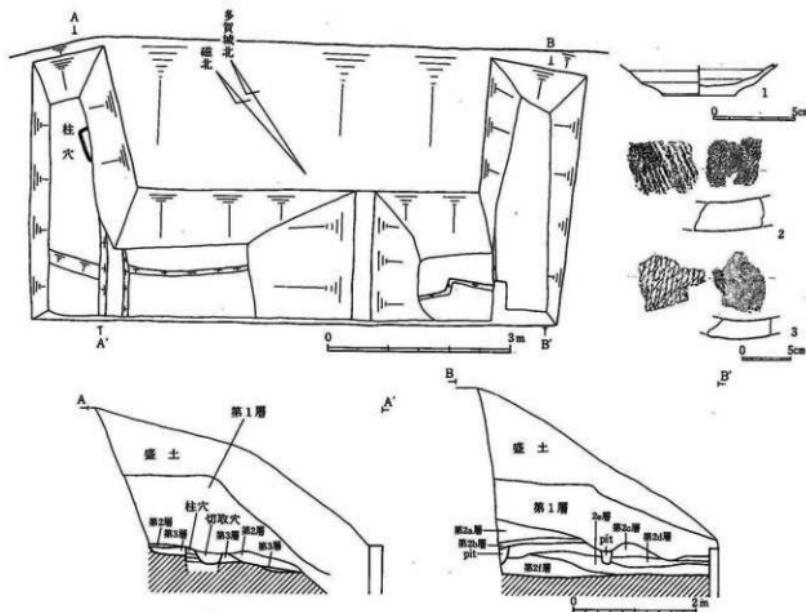
【遺物】 第2層からは土師器壺口縁部(両面ヘラミガキ・黒)・底部(摩滅)、甕底部(摩滅)、須恵器壺底部(回転糸切り)が各々1点ずつ出土している。瓦には平瓦IA類2点、IIA類2点、IIB or IIC類1点がある。第66図2は政府第III期の平瓦IIB類で、暗赤褐色をしたやや硬質のものである。3は平瓦IIB or C類で、橙褐色をした硬質のもので、政府第III期もしくは第IV期とみられる。

第1層からは土師器・須恵器とともに、須恵系土器壺が出土している(第66図1)。このほかに須恵系土器の壺底部3点、高台壺2点がある。瓦には平瓦IIB類2点・IIC類1点、丸瓦IIB類2点がある。

【堆積層・遺構の年代】 第2層は回転糸切りの須恵器壺、政府第III期もしくは第IV期の瓦が出土していることから9世紀頃に堆積したとみられる。第1層に須恵系土器壺が含まれていることから、付近に10世紀の堆積層・遺構が存在したものと考えられる。柱穴は第2層との関係が不明なため、年代の確定はできないが、その形状と周囲の遺物の出土状況から9~10世紀頃のものと思われる。



第65図 金堀地区発掘調査区



第 66 図 菊池一夫宅の調査区と出土遺物

2. 佐藤秋雄宅の調査

位置：多賀城市市川字金堀 16

調査期間：9月 26 日～10月 4 日

原因：住宅増改築

発掘調査面積：77 m²

【調査対象地区】

発掘調査区は政庁跡の西約 100m に位置し、南側へ緩やかに傾斜する平坦面で、標高は約 33m である(第 65 図)。この地区は政庁跡北半部から西に延びる平坦面となっている。

【層序と遺構】

層序は第 1 層が表土および盛土、第 2 層が地山である。第 1 層の盛土は北側が約 1m と厚いが、南側は 20 cm 程度である。

遺構には掘立式建物跡 4・柱穴 1・小柱穴 2・溝 1 があり、いずれも地表面で検出した(第 67 図)。

SB2280 建物跡

東西 4 間以上、南北 2 間の東西棟建物跡で、東側は調査区外に延びる。検出した柱穴は 9 個で、そのうち 2 個で柱痕跡と切取り穴、1 個で柱痕跡を確認した。SB2281 建物跡・SD2284 溝と重複し、それより古い。柱間は桁行が 2.35m、梁行が 2.91m の等間とみられる。方向は南側柱列で、東西基準線に対して E6° 0' S である。柱穴は一辺約 1.1~1.4m の方形で、深さは 40 cm 以上である。掘方埋土は褐色土に黄褐色地山土ブロックを含み、多量と少量含む層の互層になっている。柱痕跡は直径 27 cm で、

焼土・木炭を僅かに含む暗褐色土が埋まっていた。

遺物としては柱穴掘方埋土からロクロ土師器坏口縁部2点、平瓦IA類1点・平瓦IB類3点が出土した。第67図9は政府第III期の平瓦IB類で、暗赤褐色をした硬質のものである。

SB2281 建物跡

東西3間以上、南北2間の東西棟建物跡で、東側は調査区外に延びる。検出した柱穴は7個で、そのうち6個で柱痕跡と切取り穴、1個で柱痕跡を確認した。SB2280建物跡より新しく、SB2282・2283建物跡より古い。柱間は桁行が北側柱列で西から2.88m・2.64m、梁行が西妻で北から3.23m・2.71mである。方向は北側柱列で、東西基準線に対してE5° 30' Sである。柱穴は一辺約1.0~1.5mの方形で、深さは40cm以上である。掘方埋土は褐色土と黄褐色の地山ブロックを多く含む土で、地山ブロックはSB2280建物跡より小さい。柱痕跡は直径30cmで、焼土・木炭を含む暗褐色土が埋まっていた。

遺物は柱穴掘方埋土からロクロ土師器坏口縁部4点、平瓦IB類10点(第67図8:陽刻文字「物」A)、丸瓦IB類1点が出土している。切取穴・柱痕跡からロクロ土師器坏1点(第67図1:回転糸切り)・口縁部2点・底部(回転ヘラケズリ1点・回転糸切り2点)3点、須恵系土器坏口縁部1点・底部1点、平瓦IB類8点が出土している。この他、柱穴内から丸瓦IB類の凸面に陽刻文字「田」Aが刻印されたものが1点ある(第67図11)。

SB2282 建物跡

調査区北東部で柱穴2個を検出し、1個で柱痕跡と切取り穴、もう1個で柱痕跡を確認した。調査区の北と東に延びる建物跡の南側柱列とみられ、SB2281建物跡より新しい。柱間は2.63mで、方向は東西基準線に対してE5° 30' Sである。柱穴は南北約90cm・東西50~80cmの長方形で、深さ40cm以上である。掘方埋土は褐色土と黄褐色地山の小ブロックを含む土の互層である。柱痕跡は直径24cmで、木炭を少量含む灰褐色土が埋まっていた。

遺物は掘方埋土からロクロ土師器坏口縁部3点・底部(回転ヘラケズリ1点・手持ヘラケズリ1点・回転糸切り3点)5点、須恵器坏底部(ヘラ切り1点)、須恵系土器坏口縁部1点、平瓦IB類3点が出土している。柱痕跡からは土師器坏口縁部2点・底部(回転糸切り2点)、須恵器坏口縁部1点が出土している。

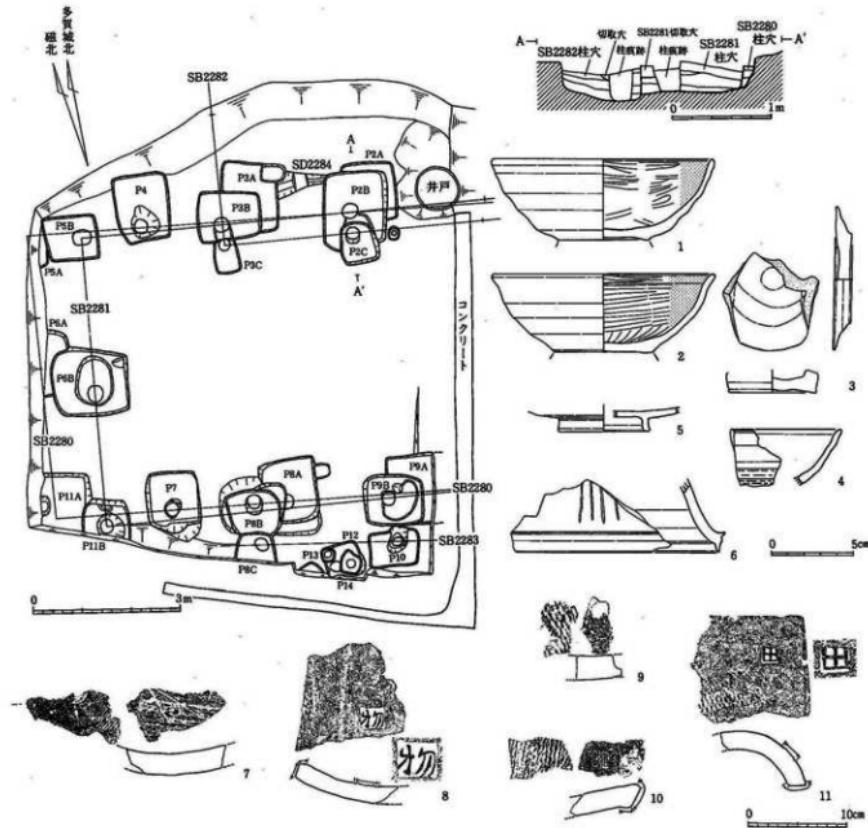
SB2283 建物跡

調査区南東部で柱穴2個を検出し、1個で柱痕跡と切取り穴、もう1個で柱痕跡を確認した。調査区の南と東に延びる建物跡の北側柱列とみられ、SB2281建物跡より新しい。柱間は2.79mで、方向は東西基準線に対してE9° 0' Sである。柱穴は一辺80~90cmの方形で、深さ40cm以上である。掘方埋土は黄褐色の地山ブロックを主体とした土で褐色土がまじる。柱痕跡は直径約20cmで、木炭を含む灰褐色土が埋まっていた。

遺物は掘方埋土から須恵器坏口縁部1点、平瓦IB類1点・IB類bタイプ1点(第67図10)、切取穴・柱痕跡から土師器坏底部(回転糸切り)1点、平瓦IA類1点・IB類6点が出土している。

その他の柱穴

P.12は調査区南東部で検出した一辺約80cmの方形の柱穴で、深さは20cm以上である。直径約20cmの柱痕跡を確認した。掘方埋土は黄褐色の地山ブロックが主体で、柱痕跡には炭化物を含む。遺



番号	種類	特徴	遺構・層序	登録番号	6 円面 硯	7 縦部密状。透かし有り。縦脚刻3条。	第1層	R5	12570
1	环	回転式切り。内面ミガキ不整構方向。	SB2281切取穴	R1	12570	7 平瓦	II類。平行叩き。ナデ。陶器骨針含む。	R13	12575
2	环	回転式切り。内面ミガキ放射状。	第1層	R3	12570	8 平瓦	II類。やや硬質。表面に陽刻文字「物」A。	R10	12575
3	耳皿	回転式切り。ロクロ調整。一部陥き出。	第1層	R4	12570	9 平瓦	II類。硬質。太継叩き。ナデ。淡赤褐色。	R8	12575
4	塊	体下部回転タグリ。両面ミガキ。淡緑色釉。	第1層	R7	12570	10 平瓦	II類タグリ。中継叩き。ナデ。	R9	12575
5	塊	体端ミガキ。高台路ロクロ調整。濃緑色釉。	第1層	R6	12570	11 瓦瓦	II類。調叩き。陽刻文字「田」A。	R12	12575

第67図 佐藤秋雄宅の検出遺構と出土遺物（土師器：1・2 須恵系土器：3 緑釉陶器：4・5）

円面硯：6 瓦：7~11)

物は掘方から須恵器壺口縁部 1 点、須恵系土器壺口縁部 1 点が出土している。

この他、大きさ 30 cm 前後の中柱穴が 3 個あり、そのうち 2 個は P.12 柱穴より新しい。柱痕跡は直径 10~15 cm である。

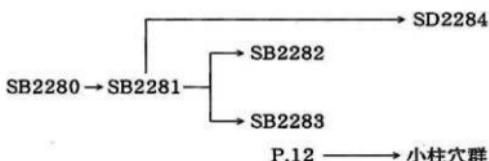
SD2284 溝

幅 15~50 cm・深さ 5 cm の東西溝で、SB2280・2281 建物跡より新しい。黒褐色土が堆積し、須恵系土器壺口縁部 7 点・底部 1 点・高台杯 1 点(三角高台)が出土している。

堆積層出土遺物：第 1 層から出土した遺物については、おもなものを図示した。第 67 図 2 はロクロ調整の土師器壺で、底部が回転糸切り、内面のヘラミガキが放射状である。3 は須恵系土器の耳皿で、底部が厚く、全体が偏平である。外面はくすんだ黒褐色をしている。4・5 は縁釉陶器塊で、硬質のものである。4 は淡緑色、5 は濃緑色の縁釉がかかっている。6 は円面研の脚部で、方形とみられる透かしと、継位の線刻が 3 条ある。7 は平瓦 IA 類で、胎土に海綿骨針を含んでいる。製作技法と胎土の特徴から下伊場野窯跡産とみられる。

【遺構の年代と変遷】

遺構の重複関係：佐藤秋雄宅で発見された遺構の重複関係を整理すると次のようになる。



遺構の年代：重複している遺構の中で、最も古い SB2280 建物跡の柱穴掘方埋土から、政府第 III 期の平瓦・ロクロ調整の土師器壺が出土していることから、これらは 9 世紀以降のものである。次に古い SB2281 建物跡の柱切取穴・柱痕跡からは須恵系土器の壺が出土している。したがって、この建物は 10 世紀前葉に解体されたとみられる。また、SB2281 建物跡より新しい SB2282 建物跡の柱穴掘方埋土からは須恵系土器の壺が出土していることから、10 世紀前葉以降に建てられたことがわかる。

ところで、SB2280・SB2281 建物跡は柱穴の位置がほぼ同じであることから、建て替えとみられ、連續性が高いと考えられる。これに対し、SB2282 建物跡は前段階の建物の北側柱列と重複して、その北側に位置しており、柱穴も小さくなっている。この関係は SB2283 建物跡も同じで、前段階の建物南側柱列と重複して、その南側に位置している。この 2 棟の建物跡は部分的検出ではあるが、柱穴の位置から、西側柱列を揃えて南北に配置された可能性がある。P.12 柱穴はその位置から、これらの建物とは併存せず、柱穴掘方埋土から須恵系土器の壺が出土していることを考慮すると、一段階新しいとみられる。さらに、小柱穴群はそれよりも新しいものである。

遺構の変遷：以上を整理すると、SB2280・SB2281 建物跡は 9 世紀～10 世紀前葉のもので、それに後続するのが SB2282・SB2283 建物跡となる。この段階で建物配置が変化したことになる。P.12 柱穴の建物がどのような有り方を示すか明らかでないが、その次の小柱穴群の段階で再び大きな変化があったとみられる。

奏社地区

環境整備に伴う調査

位置：多賀城市市川字奏社

調査期間：11月 10～16日

原因：便所の設置

発掘調査面積：186 m²

【調査対象地区】

奏社地区は外郭東門から東に延びる丘陵で、発掘調査区は奈良時代の外郭東門跡の北東約50m、外郭東辺築地跡の東約40mに位置している。この場所は現奏社宮の南西60mで、市川配水池の東に隣接しており、丘陵尾根から北側緩斜面にいたる部分である(第68図)。

【基本層序】

第1層：表土。

第4層：暗褐色土。

第2層：黄褐色土で、地山ブロックを多量に含む整地層。

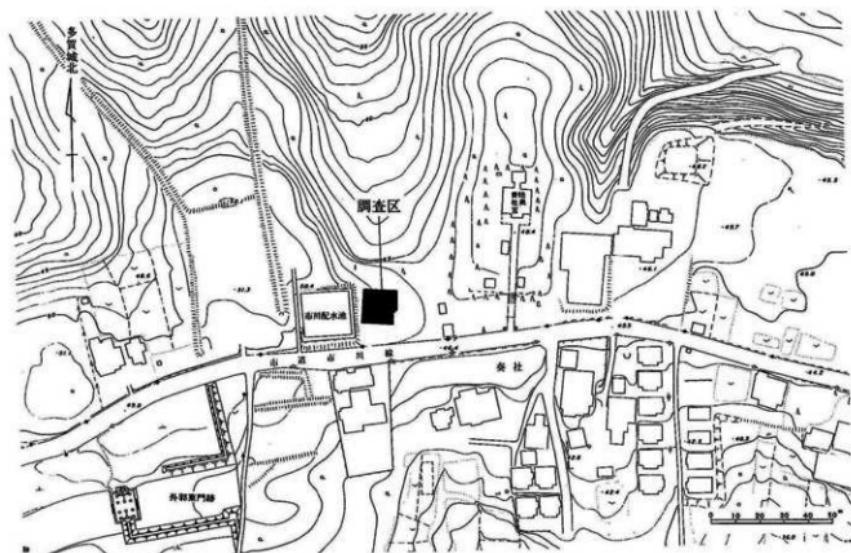
第5層：地山。

第3層：褐色土。

第2～4層は調査区の北東緩斜面に分布し、その他は第1層(表土)の下が直接第5層(地山)になっている。また第2層(黄褐色土)はSE2287井戸跡検出部分の北側にのみ認められ、調査区外に延びることから、井戸に伴う整地層と見られる。

【発見した遺構と遺物】

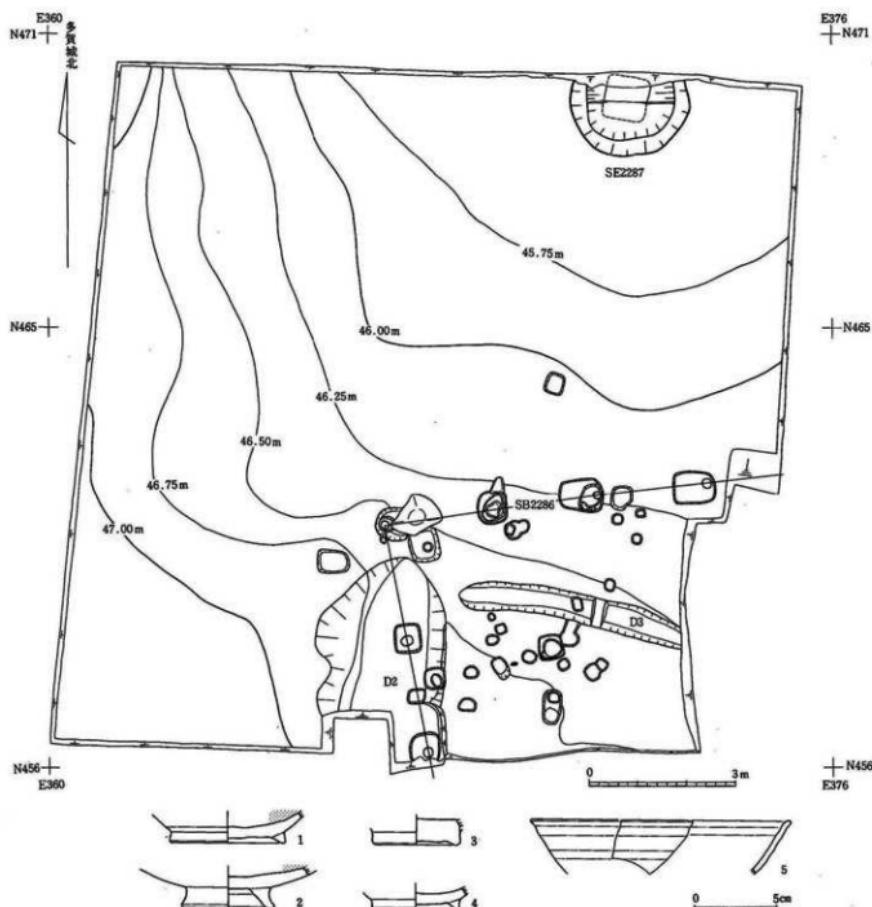
今回の調査で、丘陵尾根平坦面から建物跡1・溝2・北東緩斜面から井戸跡1を検出した(第69図)。



第68図 奏社地区発掘調査区

SB2286 建物跡

東西3間以上・南北2間以上の掘立式建物跡で、東・南側が調査区外に延びる。検出した柱穴は6個で、そのうち2個で柱痕跡と柱切り取り穴、3個で柱痕跡、1個で柱抜取穴を検出した。D2溝と重複し、それより古い。柱間は北側柱列が西から(2.25m)・(2.14m)・2.25m、西側柱列が北から2.38



番号	種類	特	測	登録番号	3	備考	R9	R12579
1	土器器高台坪	内外面塗灰。高台径6.8cm。三角高台高さ0.7cm。	E2	12570	4	須恵系土器高台基 円転素切り。高台径5.0cm。胎土均質。	R8	12579
2	土器器高台坪	内外面塗灰。高台径5.4cm。高台外R。高さ1.5cm。	E3	12570	5	灰釉陶器坪 内外面に乳白色の灰釉。胎土均質。	R10	12579

第69図 奏社地区の検出遺構とD2溝出土遺物

m・2.31mである。方向は、北側柱列が東西基準線に対して E7° 2' N である。

柱穴は一辺 60~90 cm の方形で、掘方埋土は地山ブロックを含む褐色土である。柱痕跡は直径約 20 cm で、柔らかい暗褐色土で埋まっていた。また、西側柱列の北から 1 間目の柱痕跡には灰白色火山灰が堆積していた。

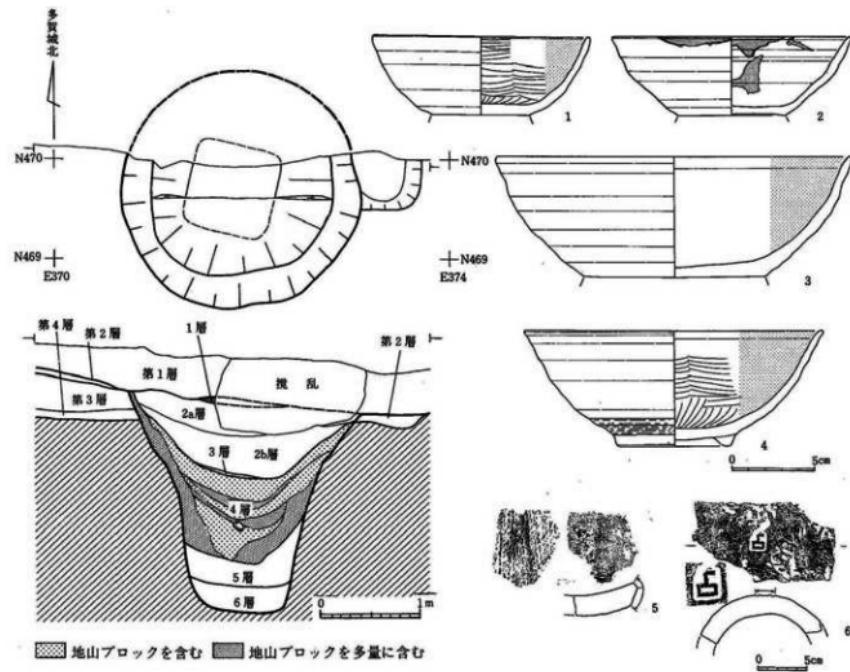
遺物は柱穴から、ロクロ土師器坏口縁部 2 点、須恵器坏底部 1 点・壺または甕の頸部 1 点・甕体部 1 点、丸瓦破片が出土している。

D2 溝

第 1 層下の地山上面で検出した幅 2.6 m・深さ 30 cm の南北方向の溝で、SB2286 建物跡より新しい。木炭・焼土を含む暗褐色土が堆積していた。

遺物はロクロ土師器坏・高台坏・甕、須恵器坏・瓶、須恵系土器坏・高台坏・高台皿・灰釉陶器塊、瓦、鐵滓が出土している(第 69 図)。

土師器坏は口縁部に油煙のついたものが 2 点、底部内面に漆または油煙の付着したものが 1 点ある。



番号	種類	層位	特徴	登録番号	番号	種類	層位	特徴	登録番号	
1	土師器坏	2b層	円転底切り。内面のヘラミガキ放射状。	R1	12570	4	土師器高台坏	2a層 体下部～底部回転ケズ。高台壠脈。	R4	12570
2	須恵系土器坏	2b層	円転底切り。油煙付着。灰褐色。胎土均質。	R3	12570	5	平瓦 II 型	2b層 内面縦縫切き。内面輕いナダ。硬質。	R7	12575
3	土師器大型坏	2b層	底部周縁手持ちケズ。摩滅。	R2	12570	6	丸瓦有段部	2a層 内面ナダ。機けハゼ有り。陽刻文字「古」。	R8	12575

第 70 図 SE2287 井戸跡と出土遺物

第 69 図 1 の高台坏は三角高台が体部下端(底部の脇)に、2 は外反する高台が底部周縁についている。須恵系土器の坏もしくは高台坏の口縁部にも油煙の付着したものが 1 点ある。第 69 図 3・4 は高台皿もしくは坏とみられる高台部で、体部下端に小さな三角高台がついている。3 の底部は特に分厚く、1 cmほどある。5 は灰釉陶器塊で、乳白色の灰釉が全面にかかっている。瓦は、平瓦 II B 類・II C 類と、丸瓦の破片が出土している。

D3 溝

第 1 層下の地山上面で検出した幅 60 cm・深さ 10 cm の東西方向の溝で、SB2286 建物跡と重複関係にあるが、新旧は不明である。暗褐色土が堆積していた。遺物は須恵器甕体部破片と平瓦 II C 類の破片が、1 点ずつ出土している。

SE2287 井戸跡

第 1 層下の第 2 層(整地層)上面で検出された井戸跡で、北側が調査区外に延びている。井戸の掘方は断面が漏斗状をしており、上部が直径 2.4m の円形で、中・下部が一辺 1.8m・0・9m の方形と推定され、深さは 2.2m である。井戸跡の周囲には第 2 層(整地層)が認められるが、その分布は北側の低い部分に偏っている。このことは井戸を掘る際に低い部分を整地し、一定の平坦面を確保しようとしたものとみられる(第 69・70 図)。

井戸跡の堆積土は、6 層に大別される。1 層は灰白色火山灰層、2a・b 層は褐色土層・3 層は炭化物層、4 層は地山ブロックを含む層、5 層は褐色土層、6 層は灰褐色泥土層である。これらの層の堆積状況をみると、5・6 層は井戸下部にみられ、底面に近い程泥土化が顕著であることから、井戸の使用時かその直後に自然堆積したものとみられる。4 層は地山ブロックを多量に含む層と少量含む層が井戸中央部に向かってずり落ちた堆積状況をしていることから、井戸枠の裏込土が崩落したものとみられる。3 層は炭化物の薄い層(厚さ 2 cm)で、この層は井戸の埋まりかたが一時おさまった時に形成されたとみられる。2a・b 層はその後自然堆積した層で、井戸はほぼ埋まったものとみられる。1 層はさらにその後僅かな窪地状部分に灰白色火山灰層が堆積したものとみられる(第 70 図)。

遺物は 2a・b 層から土師器・須恵器・須恵系土器・瓦が出土している。2a 層からはロクロ土師器坏・高台坏(第 70 図 4)・甕・須恵器坏・甕・須恵系土器坏・高台坏・高台鉢・平瓦 II B 類・丸瓦(第 70 図 6)などが出土している。4 の土師器高台坏は底部周縁に丸みをもった三角高台のつくもので、体下部から底部は回転ヘラケズリが加えられている。内面の再調整は放射状のヘラミガキである。6 の丸瓦には陽刻文字「占」がある。

2b 層からはロクロ土師器坏(第 70 図 1)・大型坏(同図 3)の他に、平瓦 I A 類・II B 類・II C 類と丸瓦破片が出土している。

堆積層の遺物

第 1 層から出土した遺物はすべて破片であるが、土師器坏 9 点・甕 6 点・須恵器坏 3 点・甕 1 点、須恵系土器坏 7 点・丸瓦片などがある。

【遺構の年代】

遺構の重複関係：新旧関係が判明するのは、調査区南東部の SB2286 建物跡と D2 溝で、SB2286 建物

跡のほうが古い。また、SB2286 建物跡と D3 溝は位置的に重複しているが、新旧関係は不明である。調査区北東部の SE2287 井戸跡は整地層上にあるが、他の遺構との重複関係はない。

遺構の年代：SB2286 建物跡は柱穴からロクロ土器器坏が出土し、柱痕跡から灰白色火山灰が検出されていることから、9世紀以降のもので承平4(934)年以前には廃絶していたことがわかる。SE2287 井戸跡は 2b 層から政府第IV期の平瓦 II C 類が出土しており、貞觀 11(869)年以降には半分以上埋まっていたことがわかる。さらに、井戸跡の最上部(1 層)に灰白色火山灰層が堆積していることから、承平4(934)年以前にはほぼ埋まりきったこともわかる。このように建物跡と井戸跡は承平4(934)年以前のもので、同じ時期に存在した可能性がある。

また、D2 溝は建物跡より新しいことが判明しており、須恵系土器の坏・高台皿などが出土している。須恵系土器の特徴をみると、高台皿は第 61 次調査(鴻の池地区)第 7 層以降のものと類似し、特に底部の分厚さは第 4 層のものと似ている。第 7 層の土器群は 10 世紀中頃以降と考えられており(註 13) D2 溝の須恵系土器は鴻の池地区第 4 層出土土器と同様に、さらに新しいものである。したがって、D2 溝は 10 世紀代でも新しく、11 世紀代の可能性もある。

- 註 1 白鳥良一(1980.3)：「多賀城跡出土土器の変遷」宮城県多賀城跡調査研究所『研究紀要』VII pp. 1~38
- 註 2 宮城県多賀城跡調査研究所(1982.3)：『多賀城跡 政府跡本文編』pp. 1~499
- 註 3 宮城県多賀城跡調査研究所(1992.3)：『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1991
土器については真山悟 pp. 28~34、pp. 87~90、漆紙文書は鈴木拓也 pp. 九~三四、井戸の埋没過程は丹羽茂 pp. 36~46
- 註 4 実測図は宮城県多賀城跡調査研究所(1992.3)『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1991
p. 32
- 写真・解説は佐藤和彦(1994.3)：「第 58・60 次調査資料の追加報告」『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1993 pp. 50~53 図版 14~21
- 註 5 註 4 の佐藤和彦(1994.3)に同じ。なお、「石團」と読むことは、実測図を作成した鈴木拓也も年報 1991 作成時に同意見であった。
- 註 6 板橋 源(1996.5)：「古代陸奥軍団考」『軍事史学』第 5 号 pp. 2~20
- 註 7 高橋 崇(1978.1)：「平安初期の奥羽 九世紀の奥羽」『古代の地方史』6 pp. 193~208
- 註 8 鈴木拓也(1991.9)：「古代陸奥国軍制」『歴史』第七七輯 pp. 19~36
- 註 9 木簡の内容から国守の館と推定される建物群に配置された井戸跡。
多賀城市埋蔵文化財センター(1992.3)：『山王遺跡第 9 次発掘調査報告書』pp. 1~64 『多賀城市文化財調査報告書』第 26 集 平川南「多賀城市山王遺跡の木簡について」pp. 50~52 同書所収
- 註 10 多賀城市埋蔵文化財センターによる 1994 年度の発掘調査資料。発掘調査の現場で、出土状況・遺物の概要は実見した。その後のデータは同センター千葉孝弥氏の教示による。

- 註 11 宮城県多賀城跡調査研究所(1988. 3)：『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1987 pp. 1～47
- 註 12 平安京右京三条三坊五町 SD19 の綠釉陶器塊に器形・高台の作りが似ている。古代の土器研究会(1992. 9)：「都城の土器集成」『古代の土器』1 p. 64
- 註 13 宮城県多賀城跡調査研究所(1992. 3)：『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1991 pp. 95～140

参考文献

- 仙台市教育委員会(1987. 3)：「五本松窯跡」『仙台市文化財調査報告書』第 99 集
- 宮城県教育委員会(1961. 3)：『陸奥国分寺跡発掘調査報告書』
- 宮城県教育委員会(1987. 3)：「硯沢・大沢窯跡ほか」『宮城県文化財調査報告書』第 116 集
- 愛知県教育委員会(1980. 3)：『猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告』(I)
- 愛知県教育委員会(1981. 3)：『猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告』(II)
- 愛知県教育委員会(1983. 3)：『愛知県古窯跡群分布調査報告』(III)
- 宮城県多賀城跡調査研究所(1977. 3)：『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1976
- 宮城県多賀城跡調査研究所(1980. 3)：『多賀城跡 政庁跡 図録編』
- 宮城県多賀城跡調査研究所(1982. 3)：『多賀城跡 政庁跡 本文編』
- 宮城県多賀城跡調査研究所(1994. 3)：「下伊場野窯跡群」『多賀城関連遺跡発掘調査報告書』第 19 冊

IV. 環境整備

1. 多賀城跡環境整備事業の概要(第71図)

多賀城跡の環境整備事業は、昭和45(1970)年度より当研究所で5ヵ年計画に基づき実施してきており、すでに第1次～第5次5ヵ年計画が終了している。このうち第1次～第3次5ヵ年計画の整備対象地区及び実施状況は次の通りである。第1次～第3次5ヵ年計画の実施内容は『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1978、1979、1984で既に報告している。

また、第4次5ヵ年計画は平成元(1989)年度で、第5次5ヵ年計画については平成6(1994)年度で終了したので以下まとめて報告しておきたい。

第1次5ヵ年計画の実績

年 度	対 象 地 区	主 な 整 備 内 容	面積(m ²)	事業費(千円)
昭和45(1970)	政府地区(第1期工事)	南門翼廊・東脇殿復元表示	3,519	10,000
昭和46(1971)	政府地区(第2期工事)	正殿・築地御復元表示	7,256	20,000
昭和47(1972)	政府地区(第3期工事)	西脇殿・築地御復元表示	14,669	25,000
昭和48(1973)	政府地区(第4期工事)	北西門・築地御復元表示	9,415	20,000
	外郭東門地区	東門・堅穴住居復元表示		
昭和49(1974)	六月坂地区	掘立式建物・倉庫・道路復元表示	8,326	20,000
合計			43,185	95,000

第2次5ヵ年計画の実績

年 度	対 象 地 区	主 な 整 備 内 容	面積(m ²)	事業費(千円)
昭和50(1975)	外郭東南隅地区(第1期工事)	木質造構保存施設設置	3,600	20,000
昭和51(1976)	外郭東南隅地区(第2期工事)	濠地修景・園路設置	6,400	10,000
昭和52(1977)	鴻の池地区(第1期工事)	南堀地御復元表示	2,000	16,000
昭和53(1978)	鴻の池地区(第2期工事)	多賀城碑周辺修景	2,500	16,000
	外郭南門地区(第1期工事)	南門・築地御跡保護		
昭和54(1979)	外郭南門地区(第2期工事)	南門周辺丘陵の地形修復および修景	5,200	20,000
合計			19,700	82,000

第3次5ヵ年計画の実績

年 度	対 象 地 区	主 な 整 備 内 容	面積(m ²)	事業費(千円)
昭和55(1980)	外郭南門地区(第3期工事)	盛土・園路・便益施設設置・緑化修景	7,030	30,000
昭和56(1981)	外郭南築地御跡東半部	園路・便益施設設置・緑化修景	2,149	30,000
	園路(資料館-外郭南門)			
昭和57(1982)	外郭南門東斜面	園路	91,891	29,000
	作賀地区(第1期工事)	盛土・造構保護		
昭和58(1983)	作賀地区(第2期工事)	盛土・園路・造構復元表示 ・便益施設設置・緑化修景	54,400	30,000
昭和59(1984)	作賀地区(第3期工事)	園路・造構復元表示・便益施設設置	6,750	27,000
合計			102,160	145,000



第71図 多賀城跡環境整備全体図 (1/6,000)

2. 第4次5カ年計画

(1) 概要

多賀城跡環境整備の第3次、第4次5カ年計画は『多賀城跡歴史公園基本計画(仮)概要』(昭和53年6月、第14回多賀城跡調査研究指導委員会承認)において、中期10カ年計画として位置づけたもので、多賀城跡の東南地域4分の1、および外郭築地堀沿いに園路を設け、遺跡の立地、規模など基本的構造に関する理解を容易にすることを計画主旨とするものである。しかし、第3次5カ年計画において全体的な事業費の削減、および対象地の公有化の遅れなどの理由により実施できなかった部分を一部第4次5カ年計画に組み入れる必要性が生じてきた。したがって、外郭築地堀沿いに一周できるようにするという第4次5カ年計画の目標を縮小せざるを得なかつたが、中期10カ年計画の計画主旨を最低限達成すべく多賀城跡の東半部については外郭築地堀沿いの園路および周辺地域の修景を実施していくことを主な目的として計画した。

(2) 計画(第72図)

各年度の対象地区や整備内容などの計画は次の通りであった。

第4次5カ年計画 (第21回多賀城跡調査研究指導委員会承認 昭和60.4.25)

年度	対象地区	主な計画内容	面積(m ²)	事業費(千円)
昭和60	作貫地区(第4期工事)	空堀露出展示・〈作貫-雀山〉間連絡園路	4,630	35,000
昭和61	〈政庁-外郭南門〉間	〈政庁-外郭南門〉間大路復元・緑化修景	25,670	35,000
昭和62	〈作貫-外郭東門〉間	〈作貫-外郭東門〉間連絡園路・既存緑地修景 ・便益施設設置	23,530	35,000
昭和63	外郭北東隅地区	連絡園路・既存緑地修景・便益施設設置	68,330	35,000
昭和64	外郭北門推定地区	北門復元表示・連絡園路・既存緑地修景 ・便益施設設置	43,000	35,000

第4次5カ年計画 (第24回多賀城跡調査研究指導委員会承認 昭和63.6.22)

年度	対象地区	主な計画内容	面積(m ²)	事業費(千円)
昭和63	〈作貫-外郭東門〉間北半部	遺構保護基礎整備	6,800	27,000
	作貫地区丘陵南西裾部	〈作貫-外郭東南隅〉間連絡園路	3,000	
昭和64	〈作貫-外郭東門〉間北半部	連絡園路(兼管理用)・便益施設設置	17,000	35,000

(3) 実施概要(第73図)

各年度の対象地区や面積、事業費などの実施状況は次の通りであった。

第4次5カ年計画の実績

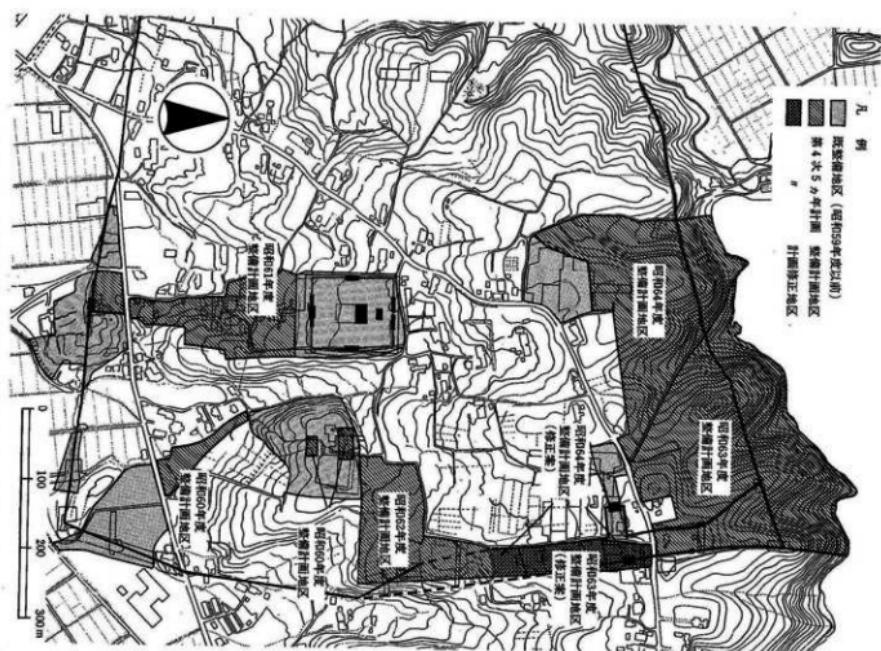
年度	対象地区	面積(m ²)	事業費(千円)
昭和60 (1985)	作貫地区(第4期工事)	6,400	27,000
昭和61 (1986)	政庁南地区、作貫地区、雀山地区	7,470	27,000
昭和62 (1987)	作貫地区北部、政庁地区、雀山地区	6,130	27,000
昭和63 (1988)	作貫地区北部及び南西部、政庁地区、外郭南門地区	8,260	27,000
平成元 (1989)	北邊地区	6,700	27,112
合計		34,960	135,112

各年度の計画実施内容は以下の通りである。

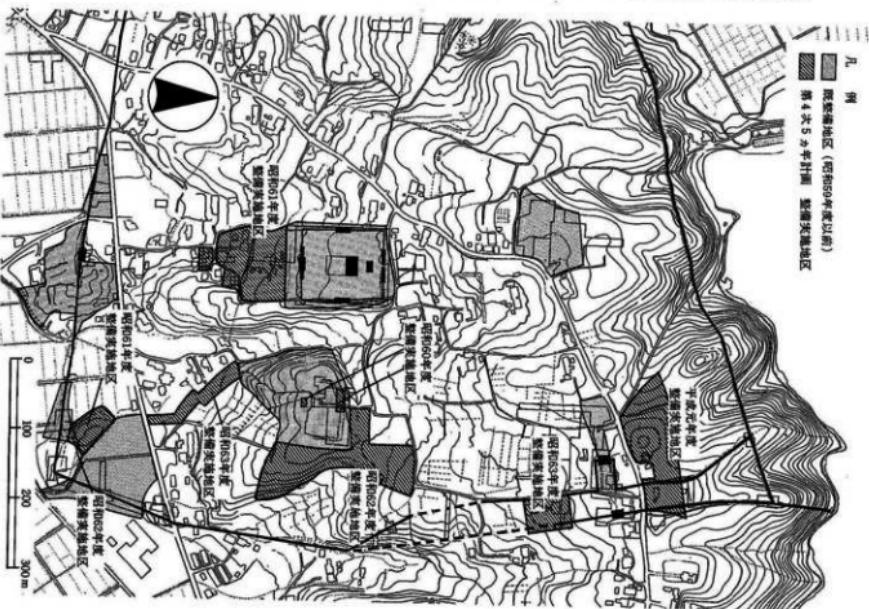
<昭和60(1985)年度>

対象地区:作貫地区

昭和59(1984)年度に引き続き、作貫地区の第4期工事として実施した。当地区では、中・近世の



第72図 第4次5ヵ年計画 計画平面図 (1/7,000)



第73図 第4次5ヵ年計画 実施平面図 (1/7,000)

土壁と空堀の一部露出展示とその保護覆屋、あずまや、政庁を臨む西側山林での遊歩園路の設置を行った。また、委託事業として多賀城跡全体の地形図(S=1:1,000)を作成した。なお、当初予定していた雀山地区については予算の都合上実施できなかった。工事の概要は次の通りである。

昭和 60 年度実施状況

整備名	種類	数量	工費(千円)	備考
遺構表示	空堀跡表示	1式	1,471	露出展示保護処置、覆屋建築面積 121.74 m ²
学習施設設置	遺構説明板	1基	2,124	クロマリンディスプレイ、木製額縁
	縁台	2ヶ所	959	2基×2ヶ所、コンクリート土台、木製、稲井石敷
便益施設設置	あずまや	1棟	1,351	木造、銅板葺、建築面積 7.45 m ²
	誘導標識	7基	470	稲井石製
	広場	186 m ²	104	碎石敷
園路	園路①	58 m ²	311	幅 2m×延長 29m、カラーアスファルト舗装
	園路②	102 m ²	227	幅 90cm×延長 113m、シエタイン舗装
	園路③	18 m ²	520	幅 90cm×延長 20m、稲井石飛石
	段階	2ヶ所	1,303	稲井石製、13段×2ヶ所
	車止め	1基	90	稲井石製
緑化修景	張芝	1,082 m ²	894	野芝
	種子吹き付け	3,000 m ²	498	ペントグラスハイランド
その他	資料館アルフォト	1基	500	説明板取り替え

＜昭和 61 (1986) 年度＞

本年度は①政庁南地区、②作貫地区の露出展示覆屋内および③雀山地区の整備を行った。

対象地区①：政庁南地区

本地区では約 6,700 m²を対象に、後世の削平箇所の地形復元の後、政庁地区で表示した遺構期に対応する道路遺構の復元を実施した。その他に既存緑地の修景および盛土部分の張芝などを行った。工事の概要は次の通りである。

昭和 61 年度実施状況 ①政庁南地区

整備名	種類	数量	工費(千円)	備考
遺構表示	道路跡表示	1式	4,630	段階玉石置、道路シエタイン舗装
	伐開	1,507 m ²	312	
緑化修景	移植	40本	42	
	張芝	3,518 m ²	3,279	野芝
地形復元	盛土整地	4,436 m ²	5,301	
排水施設設置	園路排水	139m	312	BF-250
	段階部排水	92m	844	グレーチング側溝
	暗渠	238m	400	塩ビ管
集水樹	5基	146	コンクリート製	

対象地区②：作貫地区

昭和 60 (1985) 年度に設置した空堀露出展示覆屋内に遺構表示の補助施設、便益施設などを設置した。工事の概要は次の通りである。

昭和 61 年度実施状況 ②作貫地区(覆屋内)

整備名	種類	数量	工費(千円)	備考
遺構表示	横脚跡表示	1基	38	アクリル透明円柱
学習施設設置	遺構標識	9基	140	アルフォトプラカード
	遺構説明板	1基	57	木製額縁、アルフォト板
便益施設設置	誘導標識	1基	15	稲井石製

対象地区③：雀山地区(第1期工事)

本地区の丘陵東斜面の既存緑地の修景を実施した。工事の概要は次の通りである。

昭和 61 年度実施状況 ③雀山地区

整備名	種類	数量	工費(千円)	備考
緑化修景	間伐、除草	773 m ²	161	
昭和 61 年度直接工事費計			15,677	

<昭和 62 (1987) 年度>

本年度は、①作貫地区、②政庁地区および③雀山地区を対象に整備を行った。

対象地区①：作貫地区北部

本地区では外郭東門・大畠地区へ向かう連絡園路の設置、便益施設の設置および既存緑地の修景を行った。工事の概要は次の通りである。

昭和 62 年度実施状況 ①作貫地区

整備名	種類	数量	工費(千円)	備考
学習施設設置	総合説明板	1 基	429	
便益施設設置	構造説明板	1 基	389	アルミ板写真焼付、1.2×1.6m
	誘導標識	5 基	509	稲井石製、Aタイプ 2 基、Bタイプ 2 基、Cタイプ 1 基
園路	盛土	632 m ³	786	
	舗装道路	318 m ³	2,486	幅 1.5m×延長 212m、カラー舗装
	車止め	1 式	91	稲井石製、3 基
緑化修景	木橋	1 式	517	木造、杉
	張芝	2,976 m ²	3,172	野芝・平面 2,430 m ² ・法面 546 m ²
	植栽	10 本	103	ツバキ
	下草刈	6,030 m ²	151	
	伐木	6,030 m ³	205	径 12cm 以下
	伐木	1 式	183	径 12~36cm、杉、383 本
	集積焼却	6,030 m ³	398	
	盛土	577 m ³	1,110	山砂

対象地区②：政庁地区

本地区では、昭和 61 (1986) 年度に実施した復元道路の説明板、政庁地区の総合説明板および各表示構造の説明板を政庁理解の便を考慮して設置した。また、これらの他に連絡園路沿いの必要箇所に誘導標識を設置した。工事の概要は次の通りである。

昭和 62 年度実施状況 ②政庁地区

整備名	種類	数量	工費(千円)	備考
学習施設設置	総合説明板	1 基	859	コンクリート土台、アルフォト板
便益施設設置	構造説明板	3 基	660	アルミ板写真焼付、1.2×0.8m
	ベンチ	3 基	158	木製、檜、コンクリート土台
園路	広場	33 m ²	704	稲井石敷乱張
	階段	1 式	456	稲井石製
緑化修景	植栽	20 株	14	カンツバキ移植
	張芝	28 m ²	26	野芝

対象地区③：雀山地区(第2期工事)

本地区では昭和 61 (1986) 年度に引き続き、この地区的修景、便益施設の設置などを行い、東北歴史資料館から外郭南門地区への動線の機能の充実を図った。工事の概要は次の通りである。

昭和 62 年度実施状況 ③雀山地区

整備名	種類	数量	工費(千円)	備考
便益施設設置	あずまや	1棟	1,953	木製、銅板葺、建築面積 7.45 m ²
園路	階段	1式	147	稲井石製
緑化修景	芝張	104 m ²	98	野芝
地形造成	盛土整地	67 m ³	129	
昭和 62 年度直接工事費計			15,733	

<昭和 63 (1988) 年度>

本年度は①作貫地区、②政庁地区および③外郭南門地区を対象に整備を行った。

対象地区：①作貫地区

本地区では、〈作貫－外郭東門〉間の連絡園路の設置に先立って、既存緑地の修景など基礎的整備を実施した。また作貫地区の丘陵南西部については、第3次5ヵ年計画の積み残し分が公有化の進展により実施可能となったので、優先的に行なったもので、主に東南隅地区への連絡園路およびその周辺部の修景を実施した。工事の概要は次の通りである。

昭和 63 年度実施状況 ①作貫地区

整備名	種類	数量	工費(千円)	備考
便益施設設置	休息展望所	1棟	5,836	木造、銅板葺、建築面積 30 m ² 、床稲井石乱張
園路	盛土	641 m ³	801	
	切土	38 m ³	140	
	路床改良	54 m ³	65	
	道路舗装	224 m ²	2,101	幅 1.5m × 延長 150m、樹脂舗装、一部稲井石乱張
	階段	2ヶ所	636	稲井石製
車止め	1式	183	稲井石製	
排水施設	1式	2,102	U-150 型側溝、ヒューム管、集水樹、暗渠排水管	
緑化修景	刈払	7,880 m ²	205	下草刈
	間伐	7,880 m ²	323	径 18cm 未満伐木 133 本
	集積焼却	7,880 m ²	559	
	芝張	2,068 m ²	2,288	野芝
排水施設設置	排水溝	13m	8	覆屋排水、排水管径 100mm

対象地区②：政庁地区

本地区では、昭和 61(1986) 年度に工事した政庁南面大路の南側に位置する広場の導入口にあたる道路の舗装を行った。工事の概要は次の通りである。

昭和 63 年度実施状況 ②政庁地区

整備名	種類	数量	工費(千円)	備考
園路	舗装道路	55 m ²	175	幅 3.5m × 延長 16m、アスファルト舗装
排水施設設置	排水溝	19m	404	U-300 型側溝、グレーチング蓋付

対象地区③：外郭南門地区

昭和 55(1980) 年度に設置した外郭南門地区の公衆便所の配管が損傷したために急遽補修を行ったものである。工事の概要は次の通りである。

昭和 63 年度実施状況 ③外郭南門地区

整備名	種類	数量	工費(千円)	備考
公衆便所補修	浄化装置	1式	100	配管の補修
昭和 63 年度直接工事費			15,926	

<平成元（1989）年度>

対象地区：北辺地区

北辺地区東部の第1期工事として当該地区南側を、外郭東門・大畠地区からさらに北へ展開する北辺地区の導入部として、連絡園路、広場および便益施設の設置を行った。工事の概要は次の通りである。

平成元年度実施状況

整備名	種類	数量	工費(千円)	備考
便益施設設置	緑	台	1基	135 木製、檜、オイルステイン塗、コンクリート土台
	休憩展望所	1棟	3,314 木造、銅板葺、建築面積 14.4 m ² 、床稲井石乱張	
	広場	519 m ²	1,175 砕石敷、境界ブロック、緑石	
園路	園路兼管理用道路	164 m ²	1,454 幅 2.5m × 延長 65.5m、樹脂舗装	
	園路	160 m ²	1,418 幅 1.5m × 延長 107m、樹脂舗装	
	階段	1式	659	
	石敷園路	131 m ²	2,827 幅 1.5m × 延長 65m、幅 1m × 延長 31m、稲井石敷	
	オーバーデッキ	1式	879 木製、杉	
	車止め	1式	210 稲井石製	
	排水溝	126m	272 U-150型側溝	
	ヒューム管	4m	42 径 300mm	
	集水樹	1基	42	
	間伐	30 本	25 伐木径 24cm	
緑化修景	芝張	2,223 m ²	2,103 野芝	
地形復元	盛土整地	293 m ²	563	
排水施設設置	排水溝	79m	170 U-150型側溝	
	集水樹	3基	127 コンクリート製	
平成元年度直接工事費計			15,415	

(4) 成果と課題

第4次5ヵ年計画の主な成果としては以下の事が挙げられよう。

①第3次5ヵ年計画の一部積み残しであった作貫地区的便益施設の設置、緑化修景などを行い、この地区の整備を一応完了した。

②<政府-外郭南門>間、<作貫-外郭東門>間、<作貫-東北歴史資料館>間にそれぞれ連絡園路およびそれに付帯する便益施設を設置することによって、東北歴史資料館を拠点として多賀城跡の東南地域4分の1を、理解を深めながら見学する事ができるようになった。

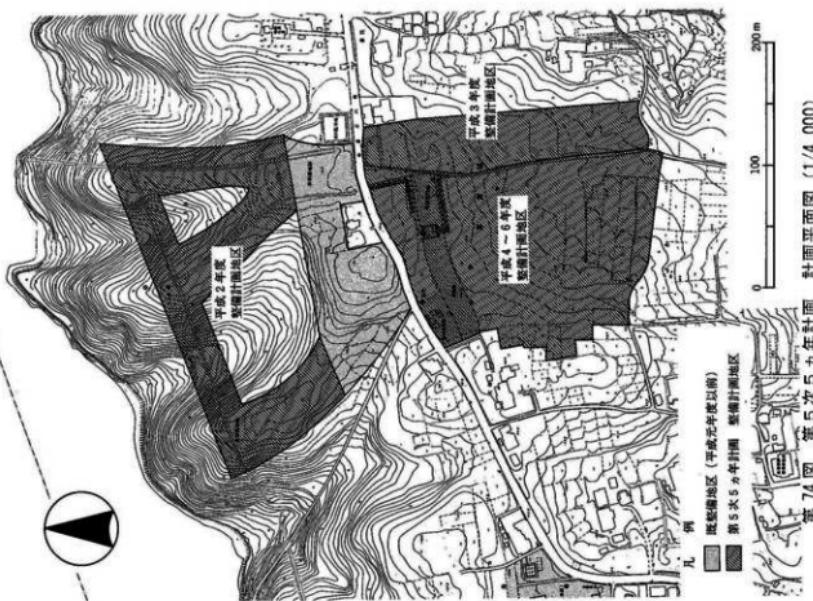
また、北辺地区の整備に先行して、当該地区の南側に便益施設や園路および広場などを設置し、第5次5ヵ年計画の足掛かりとなる整備を行った。

なお、政府南地区的政府南面大路跡の表示は、土地の公有化の状況から政府の南約80mまでの部分にとどめ、それ以南については実施を見送った。

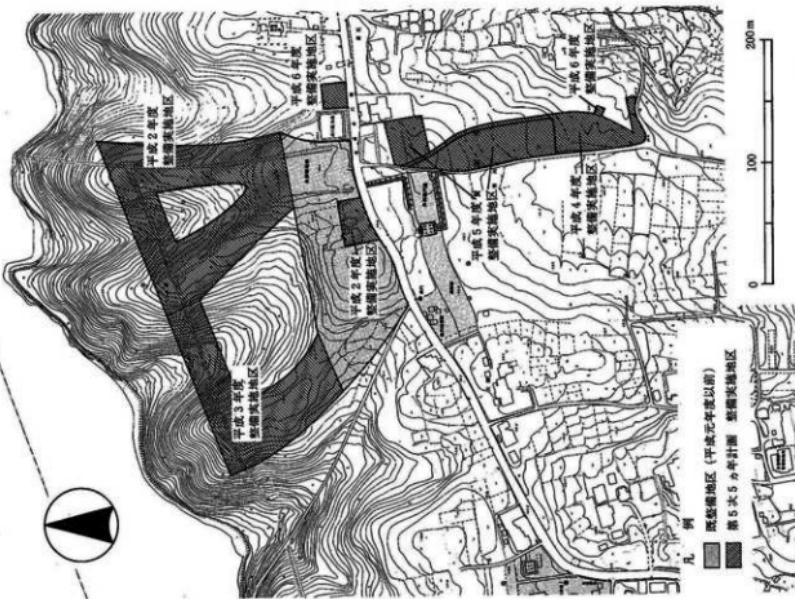
3. 第5次5ヵ年計画

(1) 概要

多賀城跡環境整備の第4次5ヵ年計画までに、東北歴史資料館を拠点として外郭南東隅地区・外郭南門地区、政府地区、作貫地区を主要地区とする多賀城跡の約4分の1にあたる東南地域を対象として、各地区を相互に関連付けることにより見学者が遺跡の立地、規模および基本的構造などを容易に理解できる事を目的として計画、実施してきた。第5次5ヵ年計画ではさらに外郭東門・大畠地区、



第74図 第5次5カ年計画 計画平面図 (1/4,000)



第74図 第5次5ヵ年計画実施平面図(1/4,000)

外郭北東隅地区および北辺地区を含めて多賀城跡の東半部を有機的に整備活用する事を目的として計画した。

(2) 計画(第74回)

各年度の対象地区や整備内容などの計画は次の通りであった。

第5次5ヵ年計画(第26回多賀城跡調査研究指導委員会承認 平成2.6.11)

年 度	対象地区	主な整備内容	面積(m ²)	事業費(千円)
平成2	北辺地区	遺構保護修景・連絡園路・休息展望施設 ・説明板など	11,500	35,000
平成3	外郭東門・大烟地区 東側部	連絡園路・管理用道路・休息施設・説明板 ・周辺部の緑化修景	14,600	35,000
平成4	外郭東門・大烟地区 西側北半部(第1期工事)	発掘調査成果に基づき実施計画を立案する		35,000
平成5	外郭東門・大烟地区 西側北半部(第2期工事)	建物表示・連絡園路・休息施設・説明板	25,700	35,000
平成6	外郭東門・大烟地区 西側北半部(第3期工事)	・緑化修景など		35,000

(3) 実施概要(第75回)

各年度の対象地区や面積、事業費などの実施状況は次の通りであった。

第5次5ヵ年計画の実施

年 度	対象地区	面 積 (m ²)	事業費(千円)
平成2(1990)	北辺地区(第2期工事)	11,500	30,000
平成3(1991)	北辺地区(第3期工事)	19,000	30,000
平成4(1992)	北辺地区(第4期工事)、外郭東門・大烟地区東側部	2,900	30,000
平成5(1993)	外郭東門・大烟地区東側部(第2期工事)	2,500	35,000
平成6(1994)	外郭東門・大烟地区東側部(第3期工事)	550	35,000
合計		36,450	160,000

各年度の計画実施内容は以下の通りである。

<平成2(1990)年度>

対象地区：北辺地区的うち、奈良時代の外郭北東隅周辺の地域

平成元(1989)年度に引き続き、北辺地区東部の第2期工事として実施した。当地区は遺跡の中でも築地跡の遺存状態が良好な部分であり、原則として現況のまま保存する事とし、遺構の保護処置と共にこれに沿って巡る園路を設置した。工事の概要は次の通りである。

平成2年度実施状況

整備名	種類	数量	工費(千円)	備考
学習施設設置	遺構説明板	2基	477	アルフォト板、0.8×1.2m、1.6×1.2m
	縄舞台	2基	212	木製、15×15m
便益施設設置	誘導標識	9基	1,007	稲井石製
	広場①	58m ²	43	碎石敷
	広場②	97m ²	2,115	稲井石乱張
	張り出しデッキ	30m ²	1,419	木製、3×10m
園路	園路兼管理用道路	217m	1,948	幅2.5m×延長86.8m、樹脂舗装
	園路	210m	1,885	幅1.5m×延長140m、樹脂舗装
	木道	122m ²	824	幅1.5m×延長81m、木製
	オーバーデッキ①	13m ²	1,004	幅1.5m×延長8.7m、木製
	オーバーデッキ②	16m ²	114	幅1.5m×延長10.9m、木製
緑化修景	既存緑地修景	6,000m ²	180	下草刈
	平成2年度直接工事費計		17,280	

<平成3(1991)年度>

対象地区：北辺地区のうち、平安時代の外郭北東隅周辺の地域

北辺地区東部の第3期工事として、前年度に引き続き築地塀跡の保護処置と共にこれに沿って巡る園路を設置した。工事の概要は次の通りである。

平成3年度実施状況

整備名	種類	数量	工費(千円)	備考
便益施設設置	広場	81 m ²	151	碎石敷、地先境界ブロック設置
	園路	273 m ²	2,337	幅 2.5m×延長 109.2m、樹脂舗装
	木道	121 m ²	11,104	幅 3m×延長 109.8m、木製
	排水溝	24m	123	U-150型側溝
緑化修景	張芝	647 m ²	801	野芝
平成3年度直接工事費計			14,516	

<平成4(1992)年度>

本年度は①北辺地区の第3期工事および②外郭東門・大畠地区東側部を対象とした。

対象地区①：北辺地区

これまで積み残しとなっていた総合説明板、誘導標識、休息施設など便益施設の設置を行いこの地区の一応の完了をみた。工事の概要は次の通りである。

平成4年度実施状況 ①外郭北辺地区

整備名	種類	数量	工費(千円)	備考
学習施設設置	総合説明板	1基	1,098	稲井石土台、アルフォト板、1.8×0.8m
	遺構説明板	1基	524	アルフォト板、0.8×1.2m
便益施設設置	ベンチ	2基	183	木製
	誘導標識	6基	736	稲井石製

対象地区②：外郭東門・大畠地区東側部

外郭東門・大畠地区東側部の第1期工事として、遺構の保存と表示の前提となる盛土整地、園路兼管理用道路の設置および緑化修景を実施した。工事の概要は次の通りである。

平成4年度実施状況 ②外郭東門・大畠地区東側部

設備名	種類	数量	工費(千円)	備考
園路兼管理用道路	630 m ²	4,126	幅 3m×延長 210m、カラーアスファルト舗装	
	車止め	2基	28	稲井石製
	排水溝	200m	753	U-150型側溝
地形復元	張芝	500 m ²	2,870	野芝
	盛土整地	3,190 m ²	6,297	
平成4年度直接工事費計			16,615	

<平成5(1993)年度>

対象地区：外郭東門・大畠地区のうち東側北半部

外郭東門・大畠地区東側部の第2期工事として、奈良時代の東門、平安時代の道路および奈良時代の掘立式建物の遺構表示を行った。またこの遺構表示の補助施設としての説明板、巡回園路沿いに誘導標識など便益施設の設置を実施した。工事の概要は次の通りである。

平成5年度実施状況

整備名	種類	数量	工費(千円)	備考
遺構表示	奈良時代外郭東門	1式	4,032	半立体復元表示
	“ 道路	1式	1,131	シュタイン舗装、素掘り溝、瓦敷石組溝復元
	“ 堀立式建物	1式	9,179	柱位置木柱表示
	平安時代道路	1式	562	碎石敷、U-150型側溝付設
学習施設設置	遺構説明板	3基	1,822	アルフォト板、 $0.6 \times 0.8m$ 、 $1.2 \times 0.8m$ 、 $2.4 \times 0.8m$
便益施設設置	誘導標識	4基	733	福井石製
緑化修景	芝張	2,319 m ²	3,372	野芝
地形復元	盛土整地	348 m ³	89	
平成5年度直接工事費計			20,920	

<平成6(1994)年度>

対象地区：外郭東門・大畠地区のうち東側北半部

外郭東門・大畠地区東側部の第3期工事として、遺構標識、公衆便所・あずまや・誘導標識などの便益施設の設置を実施し、この地区の整備を一応完了した。工事の概要は次の通りである。

平成6年度実施状況

整備名	種類	数量	工費(千円)	備考
学習施設設置	遺構標識	1基	128	福井石製、平安時代の道路跡に付設
	公衆便所	1棟	19,370	木造瓦葺、建築面積 39.28 m ² 、ベンチ・案内板付設
便益施設設置	あずまや	1棟	3,368	木造、銅板葺、建築面積 12.96 m ² 、床福井石乱張
	誘導標識	1基	331	福井石製
平成6年度直接工事費計			23,197	

(4) 成果と課題

第5次5ヵ年計画の主な成果としては以下の事が挙げられよう。

- ①多賀城跡の北辺地区の東半部の築地跡の保護を施し、これに沿って巡回できるような園路を設置した。適所に広場や遺構説明板を配置し、来訪者が散策しながら遺跡を理解できるように配慮した。
- ②外郭東門・大畠地区の東側部では遺構保護処置の後、奈良時代の遺構を中心として表示し、関連施設の設置、周辺緑地の修景などを実施し、広大な外郭東門・大畠地区のうち東側の部分の使われ方の理解を図った。

なお、外郭東門・大畠地区の東側部の東端を南北に走る奈良時代の築地跡の表示、外郭東門・大畠地区東側部南部の植栽、外郭東門・大畠地区の西側部については、予算の不足・土地の公有化の遅れなどにより先送りせざるをえなくなった。

4. 地区別の整備計画・実施状況

各年度の実施状況の概要是前述の通りであるが、第4次5ヵ年計画の対象地区は、大きく作貢地区、政庁・政庁南地区、雀山地区、北辺地区東半部の4地区に分かれる。また、第5次5ヵ年計画の対象地区は、大きく北辺地区東半部、外郭東門・大畠地区東側部の2地区に分かれる。したがって以下では理解の便を考慮してこれらの地区ごとに、概要、整備前の状況・発掘調査・計画の基本方針・整備工事の概要について報告する事としたい。

(1) 作貫地区の環境整備(第76図)

① 地区の概要

当地区は、第3次5ヵ年計画において昭和57年度から継続して環境整備を行ってきた地区である。地区の概要や、整備前の状況、発掘調査および計画の基本方針については、『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1984に記載されている通りであり、そちらを参照されたい。以下では、第3次5ヵ年計画で諸般の理由により実施できず第4次5ヵ年計画に繰り越して実施した整備工事の概要を記すことにする。

② 整備工事の概要

<遺構表示工>

● 土壙・空堀跡(第77図、図版31)

この地区は、多賀城の中でも古代のみでなく中世以降も使われていたことが確認された数少ない場所である。そこで、この地区的特性を活かして古代の遺構表示と併せて、中・近世の土壙・空堀跡の表示を行った。その手法として、見学者が埋蔵文化財を視覚的に体感できる方法の一つである遺構の露出展示を採用した。

遺構の保存科学的処理については、遺構をそのまま露出展示すると東北地方の気候条件下では確実に凍結融解を起こすことが予想され、遺構の固化は必要不可欠であった。空調設備なしの前提条件で凍結融解を防ぐために遺構の表面約10cmの厚さを樹脂により固化することとし、現地の土による室内テストを繰り返し、樹脂の種類や施工法を検討した。その結果、次の樹脂及び施工法により実施した。

樹脂等の配分は約1m³当たり、

樹脂：メタクリル酸メチル 10リットル

アクリル酸 2リットル

触媒：亜硫酸水素ナトリウム 30グラム

乳化剤：ネオコール SW-C 0.1リットル

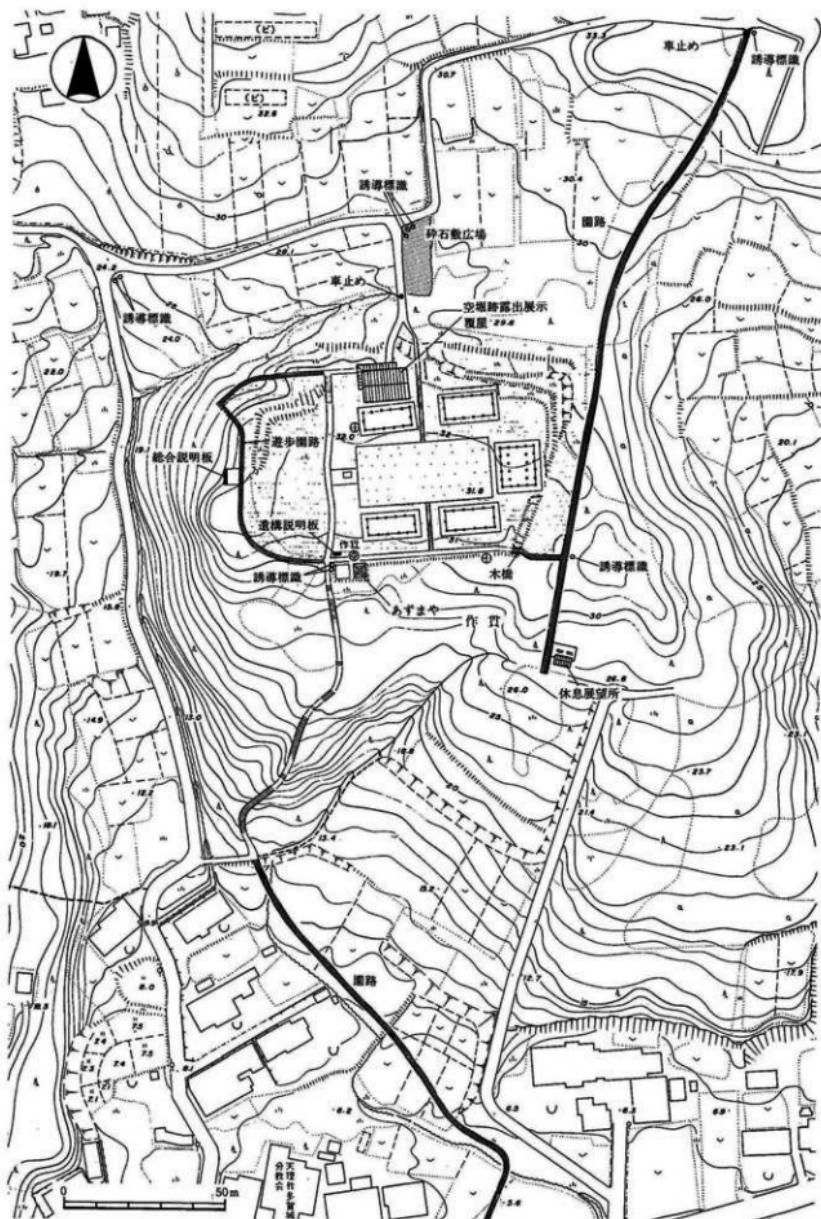
水：1リットル

である。

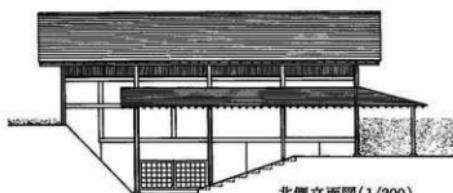
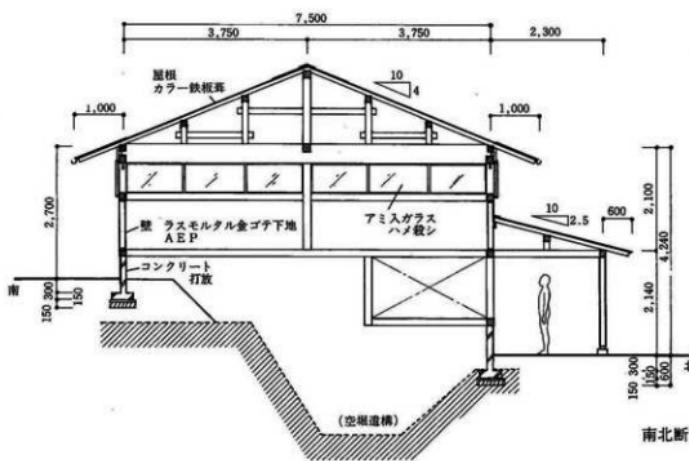
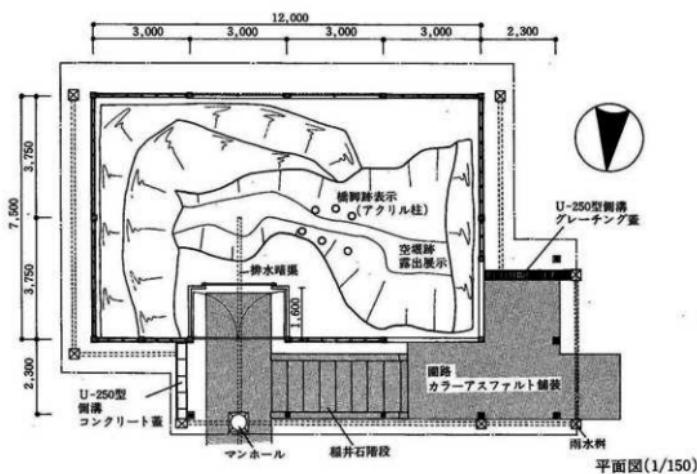
施工法は、使用樹脂が極めて浸透性に優れているので加圧する必要がないという実験結果があり、遺跡に足場を組み、ジョウロにて散布した。散布は3回に分けて行い、各回の間隔は約1週間である。1回散布ごとに薬品の揮発を防ぐため、シートで覆い養生をするなどを繰り返し、約1ヶ月で保存処理を終了した。

露出展示の覆屋は、景観的に突出しないように一般的な木造切妻の和風建築とした。空調および照明設備は、常時監視の目が届かない位置にあることや管理体制、経費の面から設置しないことを前提とした。

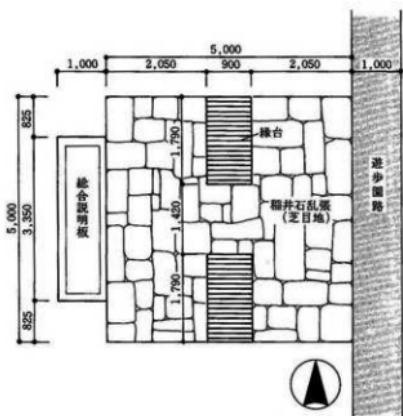
さらに、遺構のみの展示では部分的であり、見学者にはわかりにくい面があると考え、さまざまな補完施設を計画した。覆屋内にはカラー説明板を設置し、その内容は当地区的発掘状況の全景、整備後の案内平面図、木橋の類似例の絵図などをもりこんだ。他に展示遺構自体にもその状況が理解しや



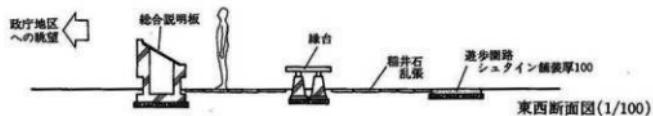
第76図 作貫地区平面図 (1/1,500)



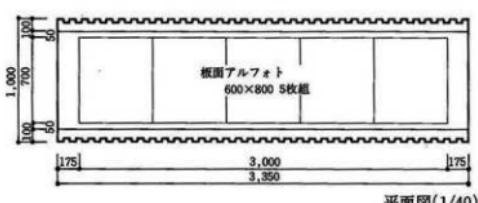
第77図 空堀露出展示覆屋詳細図



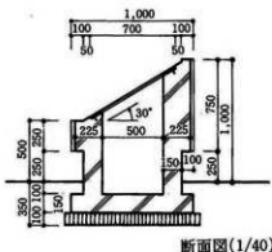
平面図(1/100)



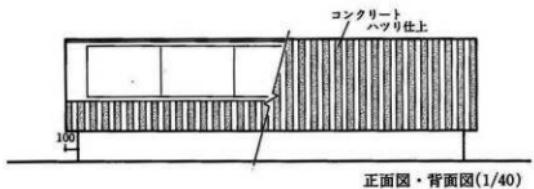
東西断面図(1/100)



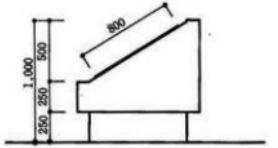
平面図(1/40)



断面図(1/40)



正面図・背面図(1/40)



側面図(1/40)

第 78 図 総合説明板詳細図

すいように橋脚の一部復元の表示、各土層の境界ラインの明示、遺構・土層などの名称プレート等の付設を行った。(註)

＜学習施設設置工＞

●総合説明版(第78図、図版32上)

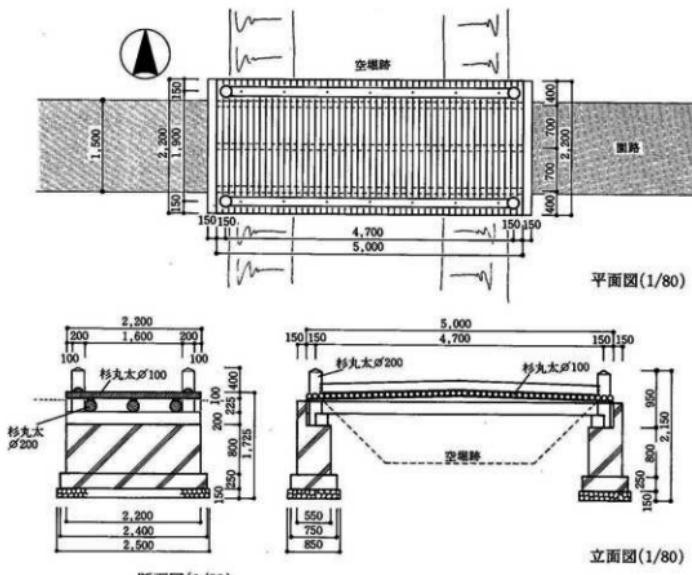
当地区西側山林の、政府を臨む位置に総合説明板を設置した。その内容は、第Ⅱ期の政府復元模型の写真、およびその解説をしたものである。縦80cm、横3mの写真焼付アルミ板の板面をコンクリートの上台に貼り付けた。説明板の高さや板面の傾斜を、政府への眺望を遮らずに政府と板面と見比べられるよう配慮した。

〈圖論II〉

●園路

これまで当地区で設置した園路に接続するような形で、西側の山林間に遊歩園路を設置した。遊歩園路として、一般道路や他の連絡園路と区別できるように、土壤硬化剤(シュタイン R)による舗装とし、柔らかい感じが出るようにした。

また、当地区と北側の外郭東門・大畠地区、当地区と南側の東北歴史資料館・雀山地区をつなぐ目的で、それぞれに連絡園路を設置した。路面は、多賀城跡の整備で連絡園路の統一的手法として行っているカラー樹脂舗装とした。さらに園路の入り口には、一般車両の乗り入れを制限するために、稲井石製の車止めを設置した。



第 70 回 太極詳細圖

●木橋(第79図、図版32中)

当地区を巡る空堀と連絡園路とが交差する部分に木製の橋をかけた。杉丸太を並べた形状で、路幅1.6m、長さ5mとした。

<便益施設設置工>

●休息展望所(第80図、図版32下)

当地区東側の丘陵平坦地南部に休息展望所を設置した。これは休息所としての機能とともに、南側に位置する雀山地区、南西に位置する外郭南門地区への眺望を考慮したものである。木造銅板葺で建築面積は30m²である。北半分は床を稲井石乱張りとし、ベンチを2基付設した。南半分には地上より75cmの高さで床板を張り、展望デッキとした。

●あずまや

建物の遺構表示を行った場所のすぐ南側に木造銅板葺のあずまやを設置した。これは、表示した建物遺構の配置が一望できるように配慮したものである。形態はこれまで多賀城跡の整備で設置してきたあずまやと同様のものである。またこれと併せて、縁台を2基設置した。

<緑化修景工>

緑化修景については、既存緑地は、間伐、下枝払いなどの修景処置を行うにとどめそのまま利用し、平坦部を含めて新たな植栽は行わない、という基本方針に従って、張芝を施す程度とした。

(2) 政府南地区の環境整備(第81図)

①地区的概要

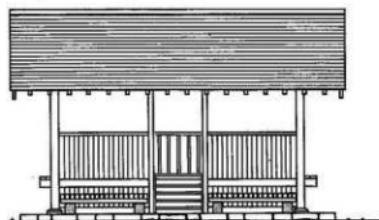
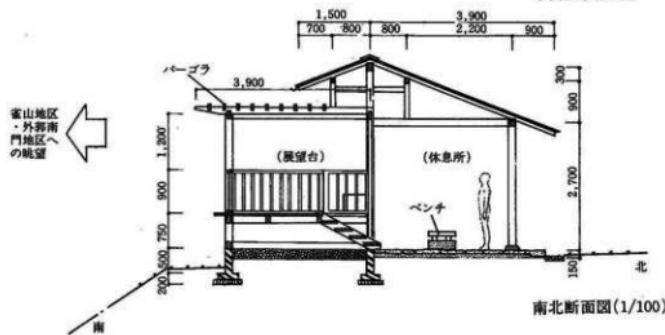
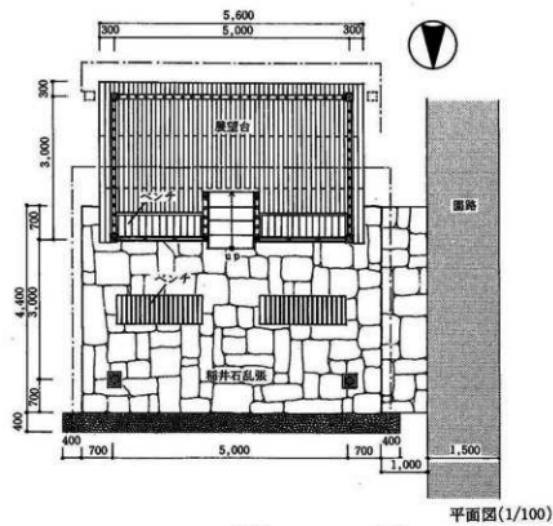
当地区は、多賀城跡のほぼ中央部で標高約30mの台地状の丘陵上に位置する政府地区のすぐ南側に位置し、政府地区の西側を刻む沢が東へ大きく広がる部分に当る。また東側には政府地区の南東部から南へ細長い尾根が延びている。この地区は、政府の南門と外郭の南門とを結ぶ道路遺構の存在する場所で、多賀城跡整備活用計画敷地利用基本図において遺構展示地区に位置付けられており、遺構の整備活用を考える上でも重要な地区の一つである。

②整備前の状況

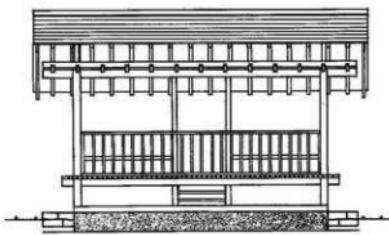
政府地区は昭和45年度から昭和48年度にかけて整備が行われている。政府南門から南に約70mの当地区北側は傾斜が急で、当時植栽した樹木および杉や雑木の林になっていた。そこから更に南へなだらかに傾斜しており、田畠となっていた。北側においては古代の遺構が良好に遺存していたが、南側は中世以降の削平を受けていると見られる。

③発掘調査

この地区的調査は、昭和58年度の第43・44次調査(『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1983)と昭和61年度の第50次調査(『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1987)に実施されている。これらの発掘調査で、外郭南門から政府南門へ続く道路跡が、8世紀から10世紀までの間一貫として政府の中軸線上を通っていたことが明らかとなった。そしてその道路跡は、政府第I・II期には路幅約12mであったものが、第III期からは路幅が約24mに拡幅されたことが解った。また、政府南門に近い位置の勾配

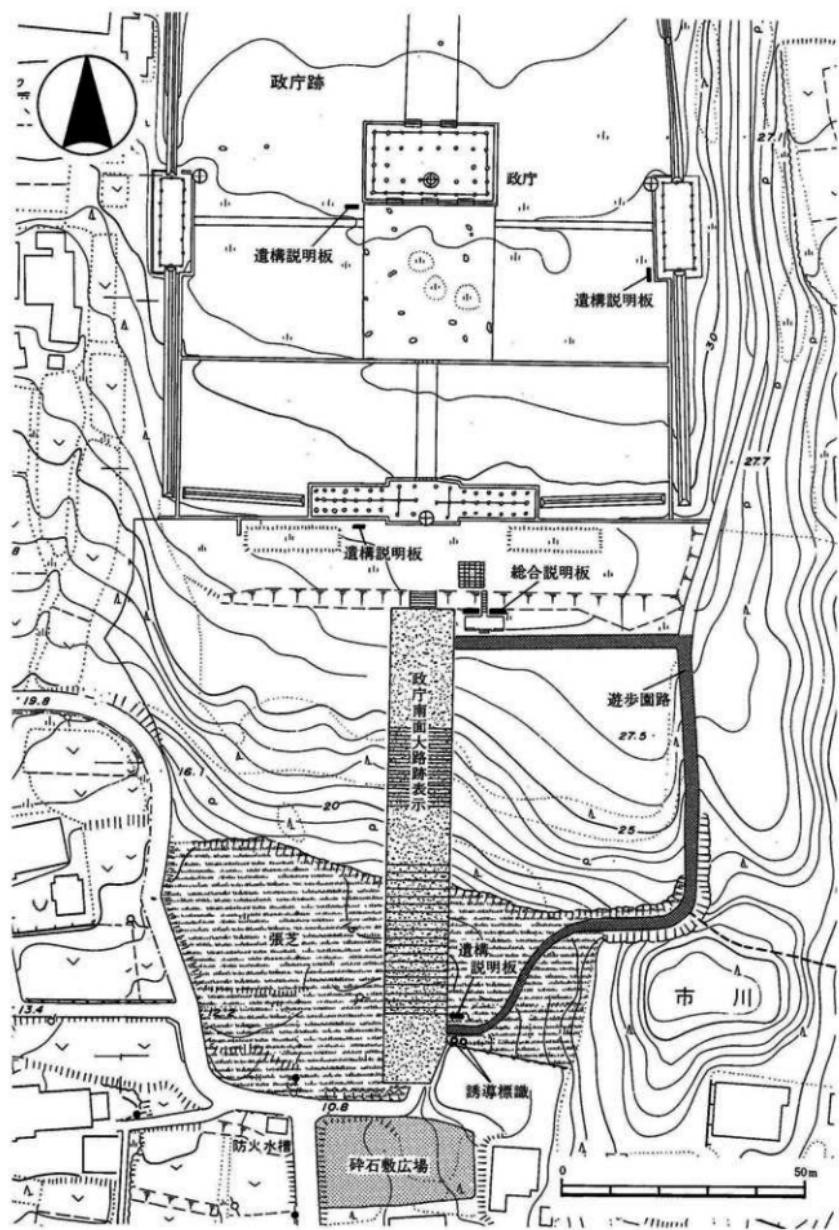


北側立面図(1/100)



南側立面図(1/100)

第 80 図 休息展望所詳細図



第 81 図 政府南地区全体平面図 (1/1,000)

が急な所では第III期の遺構として階段の痕跡を検出した。

④計画的基本方針

以上の状況を踏まえ、当地区の計画立案にあたっては、以下の基本方針によった。

(イ)後世に削平を受けた部分については地形の復元を行う。

(ロ)道路跡の遺構表示は、先に行われた政庁地区の整備(『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1978にて報告)の遺構表示時期に合わせて、政庁第II期のものを復元する。

(ハ)既存緑地の間伐および盛土部分の張芝など緑化修景を行う。

(二)政庁地区について、必要と思われる箇所に遺構表示に付随させて説明板等を充実させる。

⑤整備工事の概要

＜遺構表示工＞

●政庁南面大路跡(第82図、図版32上・中)

政庁第II期に対応する幅約12mの道路遺構について復元した。なお、今回は土地の公有化の状況から政庁の南門より南約80mにわたって復元するにとどまった。路面は土壌硬化剤(シュタインR)を用いて舗装した。発掘調査では第III期についてのみ階段の痕跡を検出したが、政庁の南側約30mまで他の場所よりも勾配がきつく、第II期に関しても第III期と同様に階段が設けられていたと考えられるので、傾斜の急な部分については玉石置きの階段を推定復元した。その階段の踏面・蹴上げ等は地形の勾配に合わせて調整した。また、この復元道路に沿って東側に、排水施設としてグレーティング蓋付のU-240型側溝を付設した。

＜学習施設設置工＞

●総合説明版(第83図、図版33下)

政庁南門の南東20mの所に総合説明板を設置した。これは多賀城の政庁の変遷、政庁の性格、平城宮や大宰府との比較などを発掘状況や出土品、模型や遺跡の全景などの写真とともに説明したものである。縦80cm、横3mの写真焼付アルミ板の板面を、コンクリートの土台に貼り付けたものを2基並べて設置した。

●遺構説明版

復元道路の脇に道路跡の説明板を設置した。発掘状況の写真とともに政庁南門の模型写真を整備した道路の写真と合成して見学者が当時の状況をイメージしやすいように配慮した。また、先に整備を行った政庁の南門、正殿、脇殿について、各建物の推定復元図と発掘状況の写真とともに説明したものを、各遺構表示のそばに設置した。これらの形状はこれまで多賀城跡の環境整備で設置してきた遺構説明版と同様のものとした。

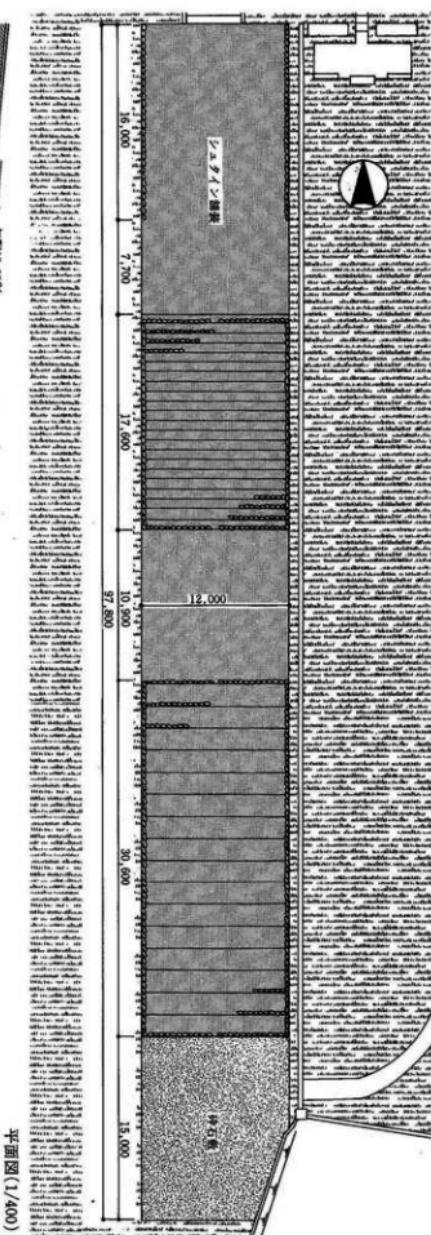
＜便益施設設置工＞

●ベンチ

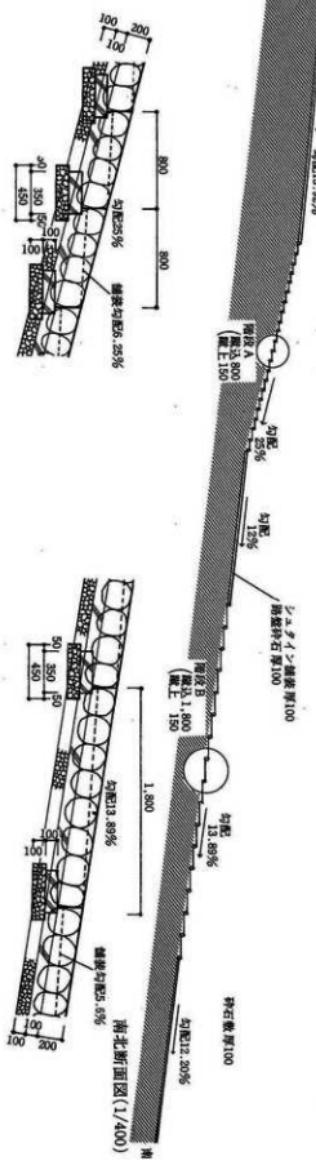
前述の総合説明板に付帯する施設として稲井石敷の広場にベンチを3基設置した。

●広場

当地区の導入部にあたる復元道路の南側に、多目的に利用できる碎石敷の広場を設けた。



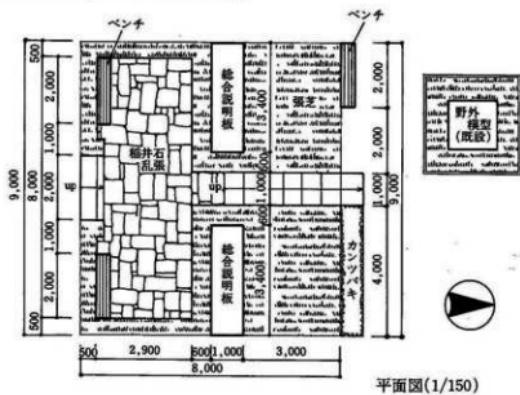
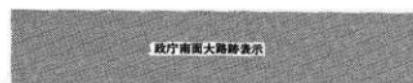
(1/400) 因里本



阶段A 详细图(1/40)

第82図 政庁南面大路跡表示詳細図

階段B 詳細図(1/40)



第 83 図 総合説明板詳細図

<排水施設設置工>

降水時の排水処理を考慮して必要な箇所には排水溝や集水樹などを適宜設置した。

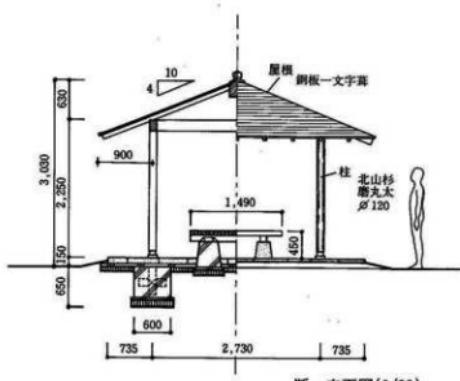
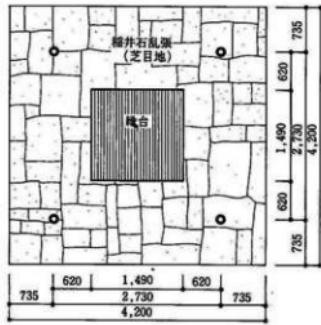
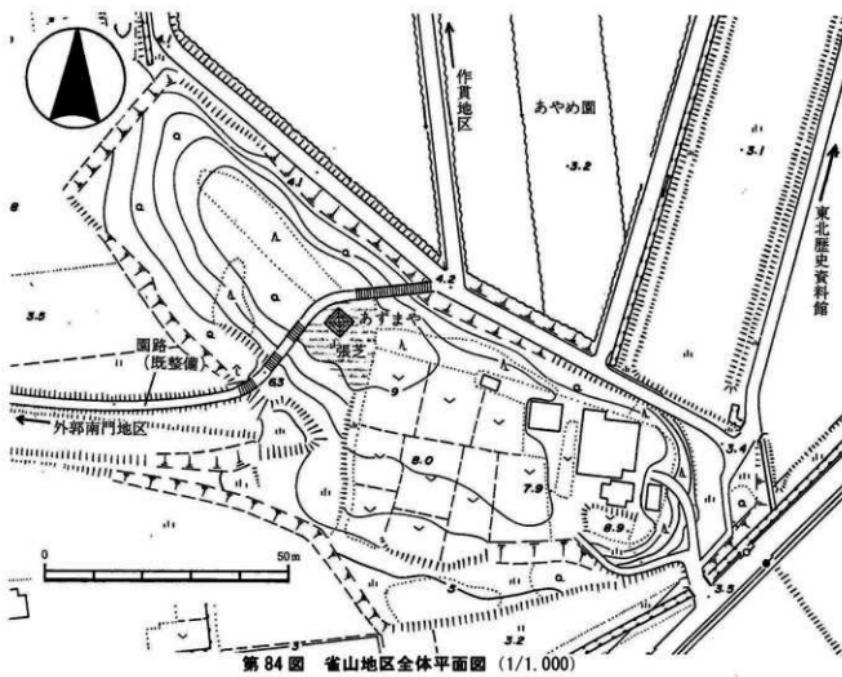
<緑化修景工>

地形復元の盛土整地をおこなった後、オープンスペースには張芝を行った。また、総合説明板の東側にはカンツバキを植栽した。

(3) 雀山地区の環境整備(第 84 図)

① 地区の概要

当地区は外郭南門地区と東北歴史資料館との間の地域の内通称雀山と呼ばれる標高 9m程度の丘陵地である。多賀城跡整備活用計画敷地利用基本図において、この地区は既存緑地修景地区に位置付けられており、昭和 56(1981)年度に園路および造構説明板の設置を行っている。整備前の状況、発掘



第85図 あづまや詳細図

調査、計画の基本方針ならびに当時の整備工事の概要については『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1984に報告しているのでそちらを参照されたい。

②整備工事の概要

＜便益施設設置工＞

●あずまや(第85図)

東北歴史資料館と外郭南門地区をつなぐ園路か当地区を通っているが、この園路沿いに木造銅板葺のあずまやを設置した。これは、当地区の東側に位置するアヤメ園、南側に位置する後山から館前地区への眺望を考慮したものである。形態はこれまで多賀城跡の環境整備において設置してきたあずまやと同様のものとした。

＜緑化修景工＞

あずまや設置に伴う間伐、除草を行い、張芝をする程度の緑化修景とした。

(4) 北辺地区東半部の環境整備(第86図)

①地区的概要

当地区は、外郭東門・大畠地区と市道市川線をはさんで北側の標高約30～40mの地域で、北側には加瀬沼が位置している。多賀城跡整備活用計画敷地利用基本図において、この地区は遺構保護園地地区及び既存緑地修景地区に位置付けられており、それをふまえて第5次5ヵ年計画ではこの地区的東半部を中心に、遺構の保護処置と周辺の緑地の修景を主に計画した。

②整備前の状況

北辺築地壠跡は、北側にある加瀬沼にいくつも張り出す尾根の先端をつなぐように土手状の高まりとして良好に残存している。また、東辺北部の築地壠跡も奈良時代のものと平安時代のもの、ともに良く遺存している。周辺は起伏に富み、杉や雑木の森林となっている。

③発掘調査

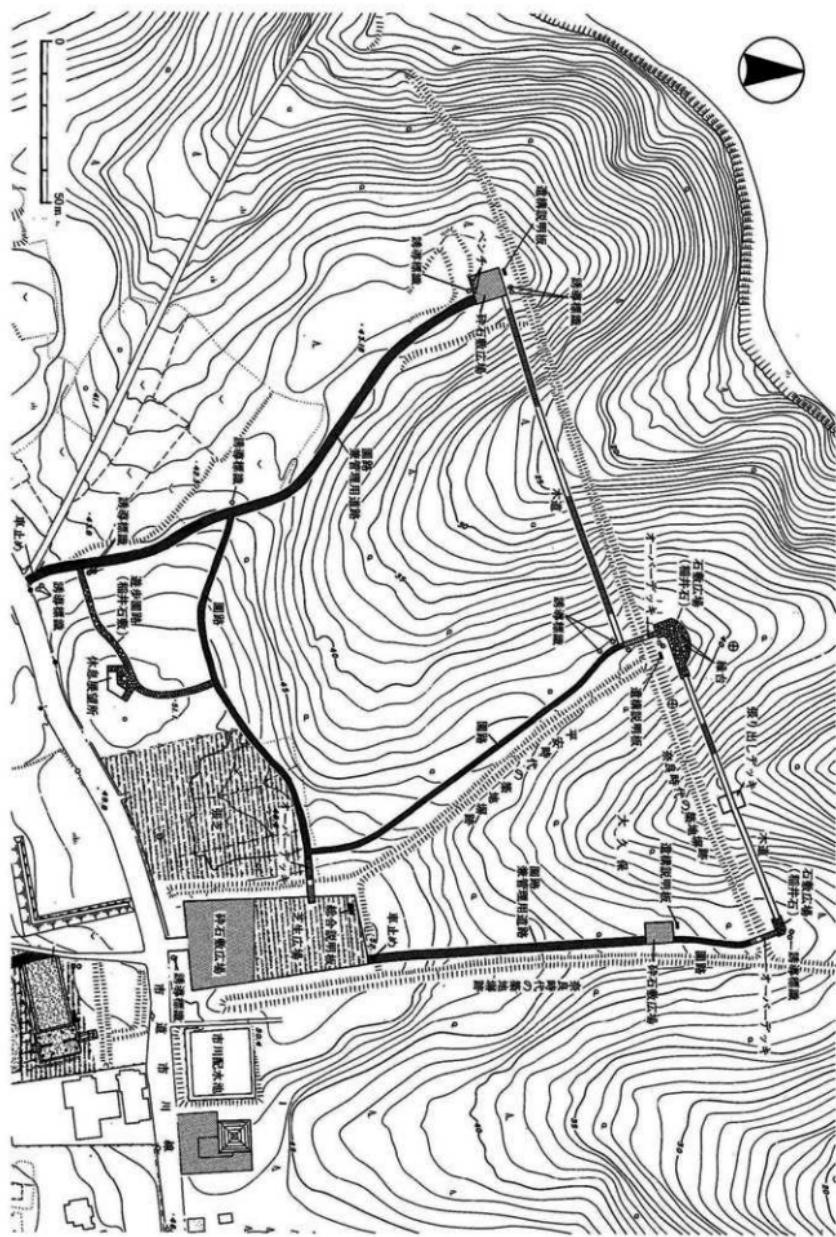
この地区的調査は、昭和47年度の第17次調査(『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1972)と、昭和61年度の第51次調査(『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1986)に実施されている。発掘調査の概略を記すと、土手状の高まりとして残っていた東外郭線北側の築地壠跡と北外郭線の東側の築地壠跡の位置とその構造、付随する遺構の時期と性格を解明した。SF380築地壠跡(東辺築地壠)はA,Bの2時期あり、崩壊土における瓦の出土状況から瓦葺きであったと推定できる。SF1681築地壠跡(北辺築地壠)は構築後の改修痕跡はみられず、崩壊土における瓦の量とその出土状況から瓦葺きではなかったと推定される。また、奈良時代と平安時代では外郭施設の位置を変えている事が解った。

④計画の基本方針

以上の状況を踏まえ、当地区的計画立案にあたっては、以下の基本方針によった。

(イ)北辺築地壠跡である土手状の高まりは、多賀城の中でも良好に残っている部分であり、あえて復元的表示を行わず、間伐・除草・除根の後、保護のための覆土を行う程度とする。

(ロ)園路は、築地壠跡に沿って設定し、地形の起伏が大きい事や景観的配慮より、工事の自由度の大



第86図 北辺地区全体平面図 (1/1,500)

きい木道を設置する。

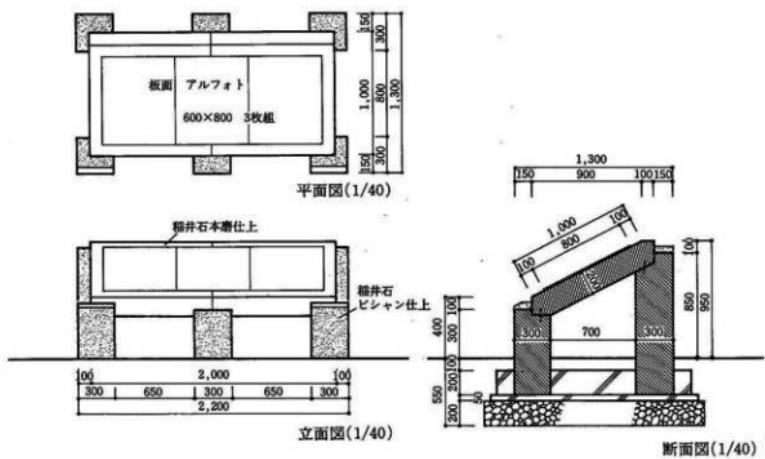
(ハ)園路の途中の適所に広場や休息展望所を設置し、それに遺構説明板などを併設して来訪者への便益を図る。

⑤整備工事の概要

<学習施設設置工>

●総合説明版 (第 87 図、図版 34 上)

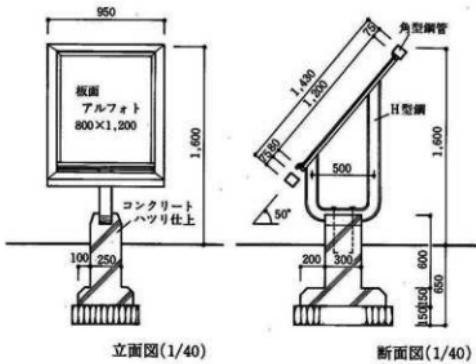
当地区的導入口にあたる芝生広場の一画に、北辺・大畠地区の地区説明を行った総合説明板を設置した。土台は稲井石製で板面はアルミ板写真焼付のものとした。



第 87 図 総合説明板詳細図

●遺構説明版 (第 88 図)

園路に付帯する施設として、北辺築地塀に関する遺構説明板を 3 基設置した。その内容は、①東辺築地塀について ②櫓について ③北辺築地塀についてそれぞれ発掘状況の写真や、築地塀・櫓に関する資料の写真や図およびその解説を中心としたものである。文字や文章は和文と英文を併記し、外国からの来訪者へも便宜を図った。形状はこれまで多賀城跡において設置して



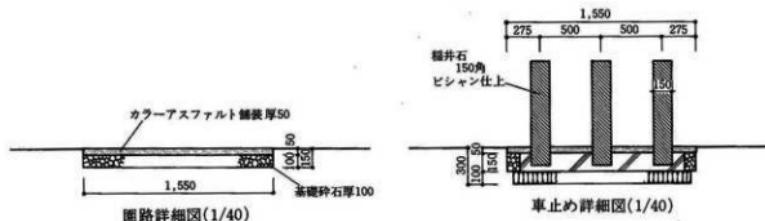
第 88 図 遺構説明板詳細図

きた遺構説明板のものを踏襲して、フレームはスチール製、板面はアルミ板写真焼付のものとした。

〈園路工〉

●園路(第89図)

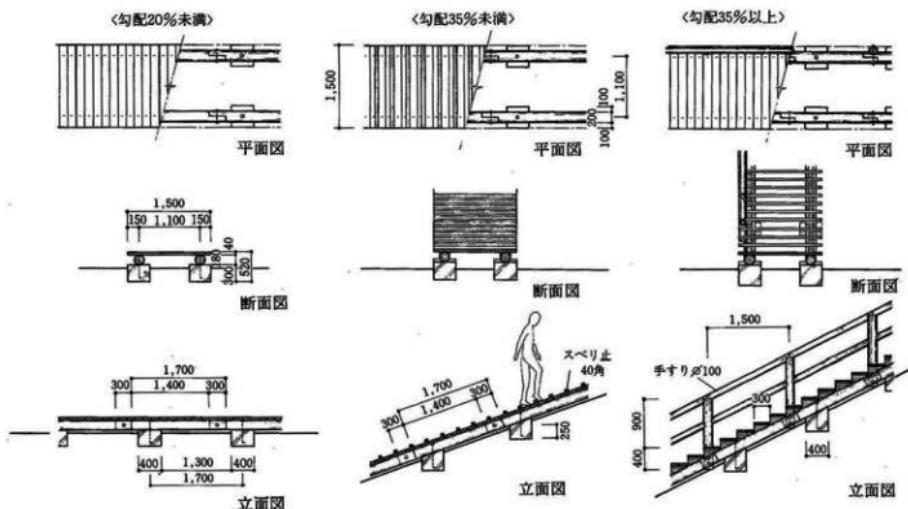
外郭東門・大畠地区と北辺地区東半部とを連絡し、さらに当地区を巡回するための園路で、平坦部は幅員2・5mの園路兼管理用道路と幅員1.5mの園路とともにカラー樹脂舗装とし、一般道路と識別できるようにした。併せて日常的な車の進入を制限するために稻井石製の車止めを設置した。



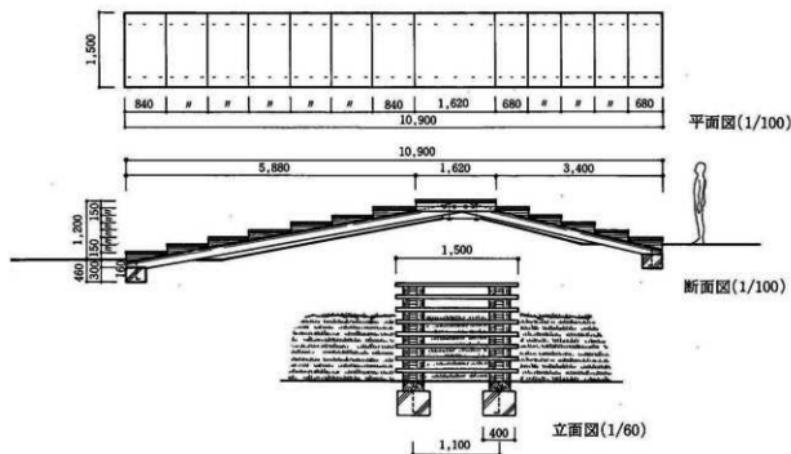
第89図 園路・車止め詳細図

●木道、オーバーデッキ(第90図、第91図、図版34中・下)

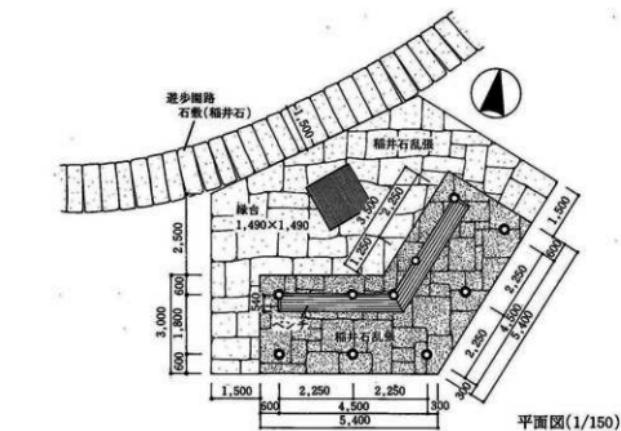
起伏の激しい北辺築地跡沿いの園路は、原則として地面を削平せずに、路面勾配を地形に合わせて設定し、地上に基礎を打設してその上に幅員1.5mの木道を設置した。一部築地跡と交差する部分はこれを跨ぐようにオーバーデッキを設置した。



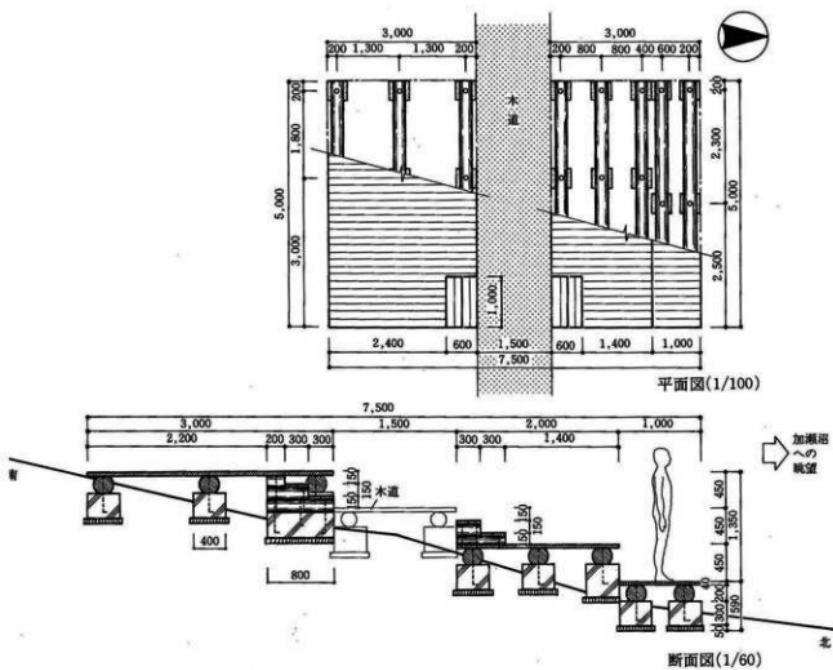
第90図 木道詳細図



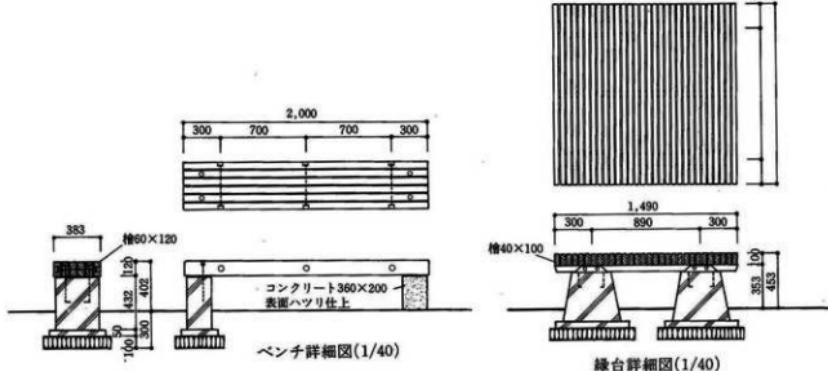
第91図 オーバーデッキ詳細図



第92図 休息展望所詳細図



第93図 張り出しデッキ詳細図



第94図 ベンチ・縁台詳細図

<便益施設設置工>

●広場

当地区的導入部に碎石広場1ヶ所、それに接続させて芝生広場1ヶ所、園路の途中に碎石敷広場2ヶ所と稲井石敷広場2ヶ所を設置した。これらには、造構説明板や後述の休息施設を併設し、利用者への便益を図った。また、碎石敷の広場は園路兼管理用道路に接続させて、管理用の車の転回などに配慮をした。

●休息展望所(第92図、図版35上)

市道市川線のすぐ北側の小高くなった場所に、将来まとまった整備を行う予定である大畠地区の眺望を考慮して休息展望所を設置した。木造鋼板葺きで、床面積は14.4m²、床は稲井石乱張りとし、南に面してベンチを併設した。また、その北側に稲井石敷広場を接続させ、そこにはコンクリート土台で木製座面の縁台を1基付設した。

●張り出しデッキ、ベンチ、縁台(第93図、第94図、図版35中・下)

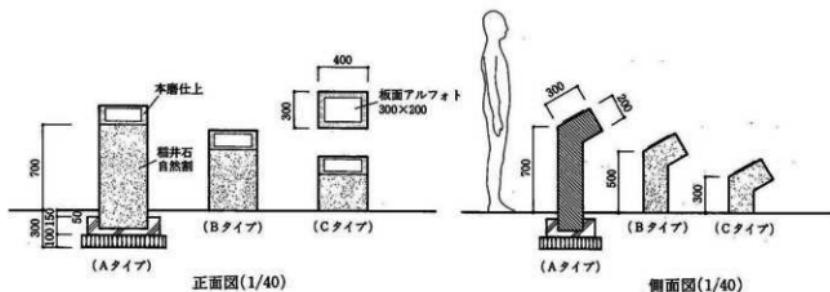
園路の途中に展望施設として、板張りの張り出しデッキを設置した。これは、北にある加瀬沼への眺望を考慮したものである。また前述の稲井石敷広場に、休息施設としてベンチ2基、縁台2基を設置した。ベンチ・縁台とともに土台はコンクリートで座面は木製とした。

●誘導標識(第95図)

園路の分岐点など適所に周辺地区や各施設への方向・距離を示した誘導標識を設置した。形状はこれまで多賀城跡において設置してきた誘導標識のものを踏襲し、標識の高さを3タイプ設定して設置する地面の高さに応じて適宜配置した。

<緑化修景工>

築地跡の土手状の高まりは現況を残す、という基本方針に従い、除草・除根の後、覆土をし、この高まりの周辺の樹木を間伐する程度にとどめた。さらに、当地区の南側を走る市道市川線の北側のオープンスペースに張芝を施した。



第95図 誘導標識詳細図

(5) 外郭東門・大畠地区東側部の環境整備(第96図)

①地区の概要

当地区は、多賀城跡の北東部で、塩竈市へ延びる平坦な丘陵尾根の南緩斜面に位置する。政庁地区の北東、作貫地区の北の地域で、城内最大の官衙域である。多賀城跡整備活用計画敷地利用基本図においてこの地区は遺構展示地区に位置付けられている。第5次5ヵ年計画において、古代多賀城の、さらには現在の多賀城跡の東の導入口として、主要な地区の一つとして位置付けている。

②整備前の状況

当地区は、北から南にかけて緩やかに傾斜しているが、ほぼ平坦地である。周辺は雑木林である。遺構は、当地区的北側では良好に遺存するが、南にいくにつれて残存状況が悪くなる。

③発掘調査

この地区的調査は、昭和62・63年度の第53・54次調査(『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1988)と平成2年度の第59次調査(『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1990)に実施されている。第53・54次調査では、奈良時代の外郭東門としてSB1761棟門、SB1762礎石式八脚門、SB1768棟門(SA1769材木塀がとりつく)を検出し、これらの門に取り付く築地塀としてSF380A、B、C、Dの4時期のものがあることが解明された。また、SB1762礎石式八脚門の西側にSD1773北側溝とその南に分布する整地層により、SX1722城内道路跡の存在が確認された。また第59次調査では、第56次調査(平成元年度)によって一部検出されていた南北棟掘立式建物跡SB1930が、南北15間以上、東西4間の東西廂付の南北棟掘立式建物跡であることが判明した。

④計画の基本方針

以上の状況を踏まえ、当地区的計画立案にあたっては、以下の基本方針によった。

(イ)奈良時代の外郭東門周辺では遺構の残存状況がすこぶる良好なため、これを保護する盛土を施した上に遺構表示を行う。また、南北15間掘立式建物跡の周辺では、南にいくにつれて後世の削平をうけているので、これを地形修復した上で遺構の表示を行う。

(ロ)現在生活道路として使用されている農道の西側を、奈良時代の遺構表示ゾーンとして、奈良時代の遺構を中心に遺構表示を行う。また、来訪者の理解に混乱を起こさないように考慮して、一部平安時代の遺構の表示も行う。

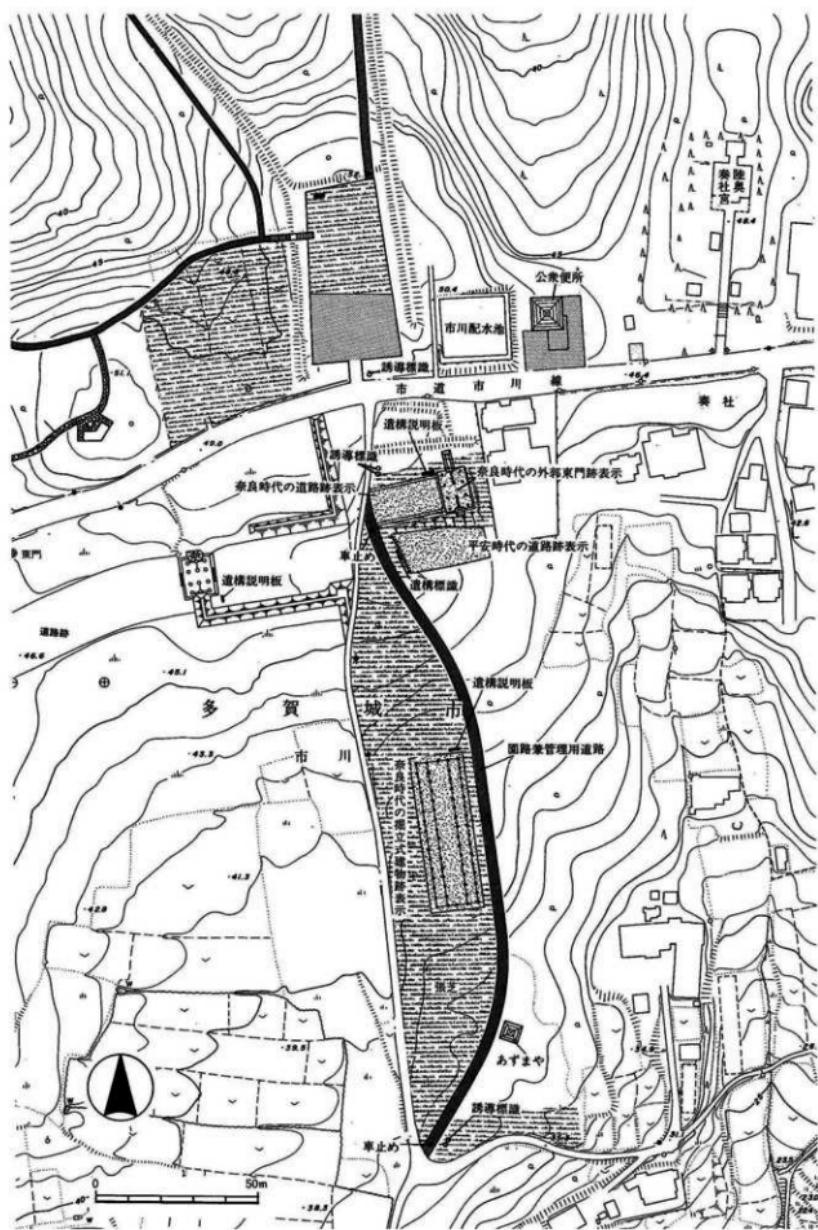
(ハ)遺構の表示は、奈良時代の外郭東門・道路・道路側溝、奈良時代の掘立式建物、平安時代の道路を対象に行う。

(二)当地区的地形は北から南へ緩やかに傾斜しており、これを勘案して排水施設を設置する。

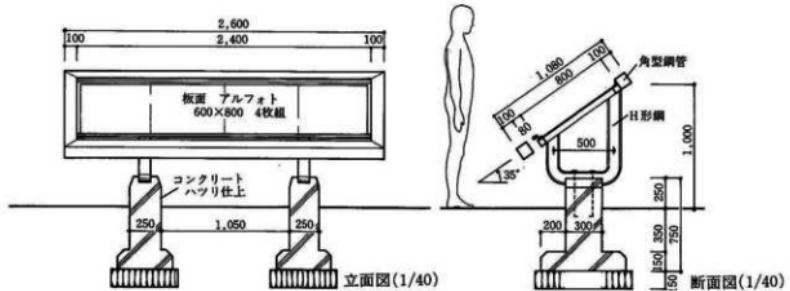
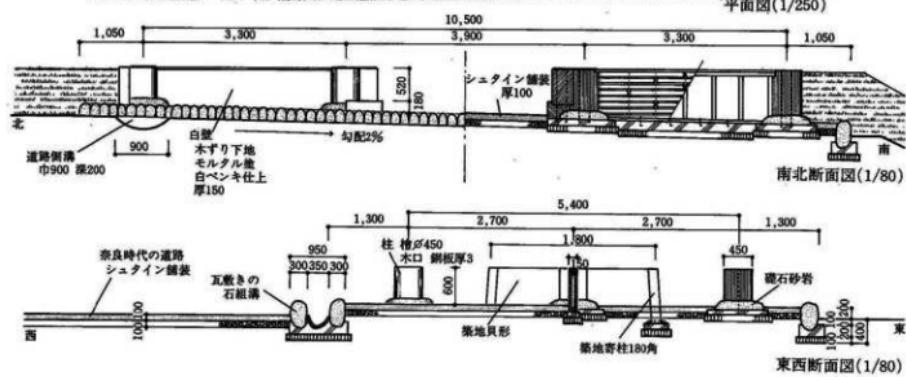
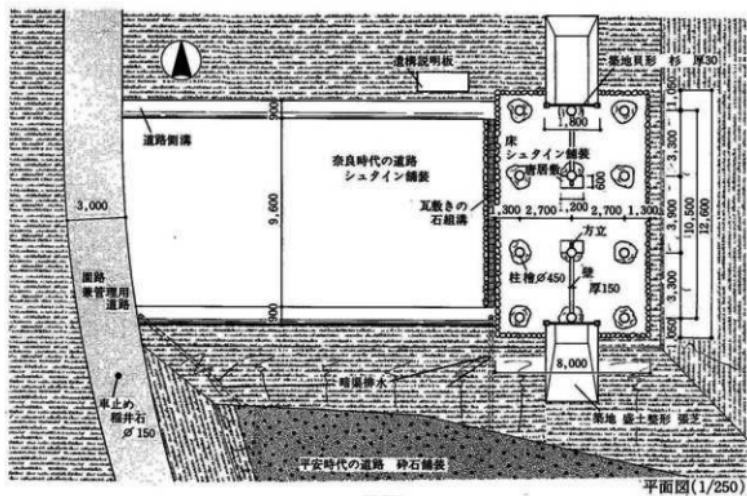
(ホ)奈良時代の築地塀跡と掘立式建物跡の遺構表示を配慮し、この築地塀跡と建物跡の間を巡回できるような園路兼管理用道路を設置する。

(ヘ)当地区的は将来計画の中で、多賀城跡の東からの重要な導入部として位置付けられている地区である。その整備の第1段階として、公衆便所やあづまやなど便益施設を設置する。

(ト)当地区的緩斜面には、張芝によって土の流れを抑制する。遺構が分布しないところには、既存緑地に若干植栽をして緑陰帯を設定する。



第96図 外郭東門・大畠地区全体平面図



第 98 図 遺構説明板詳細図

⑤整備工事の概要

＜地形造成工＞

●盛土整地

奈良時代の外郭東門跡部分は遺構の残存状況が良好であるが、そのすぐ南側の平安時代の道路跡部分は大きく削平されている。そこで奈良時代の外郭東門跡部分に平均厚約50cmで遺構保護盛土をして、そこから南に約50%の勾配で平安時代の道路跡部分にすりつけた。その法尻には50cm間隔に打った丸太杭に竹を編んだしがらみで土留めを施した。

奈良時代の掘立式建物跡周辺は、南へいくほど後世の削平を受けておりこの地形復元のため、30cm～1m程度の盛土整地を行った。

＜遺構表示工＞

●奈良時代の外郭東門跡(第97図、図版36)

発掘調査によって、奈良時代の外郭東門は大きく4時期の変遷があったことがわかっている。そのうちの政府第Ⅱ期に相当する時代のものは、その様相が最も良く解っており、さらに門に接続する道路跡も検出されている。そこでこの時期の門・道路・道路側溝を表示の対象とした。

門跡の表示は、その平面規模・位置・および基本的構造に加えて、実際の建物をイメージできるよう礎石の上に高さ60cmの柱を立て、壁もその高さまで表示した。また、門扉の取り付く柱に、唐居敷や方立などの部材を表現した。柱間や各部材の寸法は、発掘調査の成果に忠実に基づくようにし、調査結果からはデータが得られないものについては法隆寺西院東大門や東大寺軒轅門などの古代建築物を参考にして復元した。

礎石は発掘調査で検出されたものと同質の砂岩を使用し、大きさも同程度の直径約80cmのものを選んだ。この礎石を、厚さ約15cmになるように底面を平坦に切って、据付時の地下工事量を極力少なくした。

礎石の上に立ちあげた柱は、柱の下端をひかりつけし、柱の上端と礎石の下面をボルトにてつないだ。木部には、ベンガラ・鉛丹・赤色顔料を調合し、ニカワで溶いたもので着色し、その上から木質保護剤を塗布した。柱と方立の木口面は銅板(厚さ3mm、片面磨き)にて覆い、木口面からの腐朽防止処置を行った。壁は、モルタル塗りの上に白色ベンキで塗装して白壁を表現した。

門の基壇周りは発掘調査成果に基づいて、直径約20cmの川原石を並べて表現し、基壇面は土壤硬化剤(シュタインR)にて舗装し、その色調は薄茶色とした。また、基壇の西側で検出された瓦敷の石組溝を表示するために、古代の製作技法を用いて形態・法量・外観を当時のものに極力近づけた瓦を作成し、これを使ってこの溝を復元した。

門に取り付く築地塀については、高さ60cmで寄柱と貝形を表示し、築地塀本体は盛土して張芝を行い地形の高まりとして表示した。

●奈良時代の道路跡・道路側溝跡

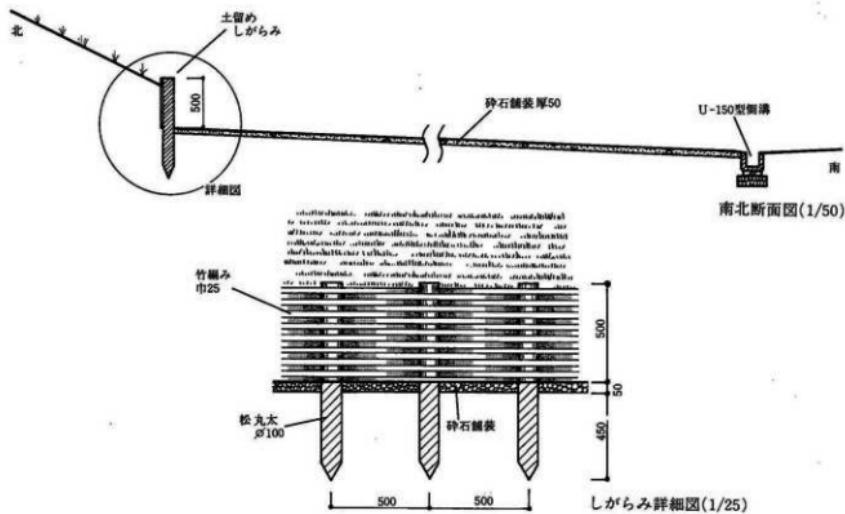
門に接続する道路跡については、路幅9.6m、長さは奈良時代の外郭東門跡の西を通る園路まで約18.5mにわたって、門の基壇面と同様に土壤硬化剤(シュタインR)にて薄茶色に舗装した。

道路側溝については、発掘調査で道路北側溝のみを検出し道路南側溝は検出されていないが、道路北側溝を門の中軸線で折り返した位置にこれを想定して復元した。その手法は、道路面と同じ土壌硬化剤による舗装をこの部分だけ厚く行い、それを幅 90 cm、最大深さ 20 cm で断面 U 字状に掘り込んで素掘りの溝を表示した。

●平安時代の道路跡(第 99 図、図版 37 上)

奈良時代の外郭東門のすぐ南側の大きく削平された部分は、位置的にみて平安時代の外郭東門に接続する道路跡の延長上にあり、ここには平安時代の道路跡が続いていたと考えられる。今回この地域は奈良時代の遺構の表示を中心しているが、すぐ北側の奈良時代の外郭東門跡の遺構表示とはレベル差か大きく視覚的に両者を識別する事ができるということから、この部分に平安時代の道路跡を表示した。

この道路跡は、バラス敷であった平安時代の道路跡を表示するために碎石敷舗装を用いて、路幅約 12m で表示した。また、この道路跡は西から東へ傾斜しているが、降雨の際の碎石の流出を軽減するために、道路跡に沿って東西に排水施設として U-150 型側溝を付設した。



第 99 図 平安時代の道路跡表示詳細図

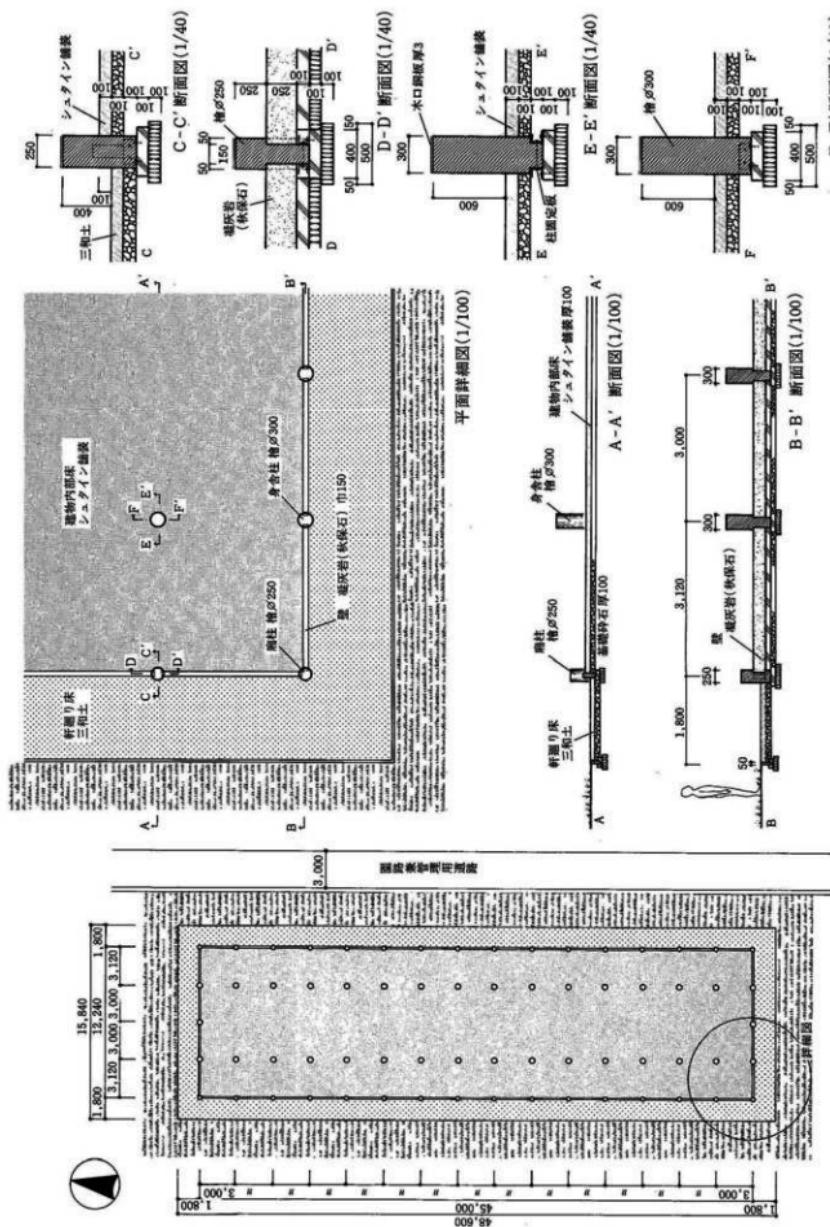
●奈良時代の掘立式建物跡(第 100 図、図版 37 中)

当地区の中央部にある奈良時代の掘立式建物跡については、発掘調査の成果に基づいて、身舎の柱を直径 30 cm、高さ 60 cm で、廂の柱を直径 25 cm、高さ 40 cm と身舎と廂の柱の太さと高さを変えて視覚的に身舎と廂の空間イメージを感じられるように考慮した。

柱は防腐処理を行い、木口面には銅板（厚さ 3 mm、片面磨き）で覆い、木口面からの腐朽防止処置

第100図 捶立式建物跡表示詳細図

平面図(1/400)



を行った。壁の表示は側柱をつなぐ部分に厚さ10cm、高さ15cmの秋保石凝灰岩製とし、柱へは大入れにて接続した。建物内は地表面より10cm上げ、土壌硬化剤(シュタインR)にて舗装し、その色調は薄茶色とした。また、建物部分のみの平面的表示だけでは、建物の上屋を含めた実際のボリューム感よりも小さく感じるため、加えて軒下部分を平面的に表現した。軒廻りは白色系の三和土舗装にして、建物床面と仕上げを違えた。軒下部分の表示と周辺部との見切り部分は幅5cmの秋保石を使用した。

＜学習施設設置工＞

●遺構説明版（第98図、図版37下）

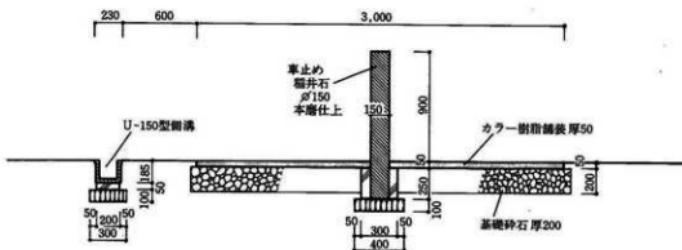
遺構表示の補助的施設として各遺構表示に関する遺構説明板を3基設置した。その内容は、①奈良時代の外郭東門について②平安時代の外郭東門について③奈良時代の掘立式建物跡及び掘立柱をたてる手順について、それぞれ発掘状況の写真、推定復元図やイラストを多用し視覚的にわかるように配慮した。形状はこれまで多賀城跡において設置してきた遺構説明板のものを踏襲して、フレームはスチール製・板面はアルミ板写真焼付のものとした。また、板面全面には紫外線による退色防止のため紫外線カット透明フィルムを貼り付けた。

●遺構標識

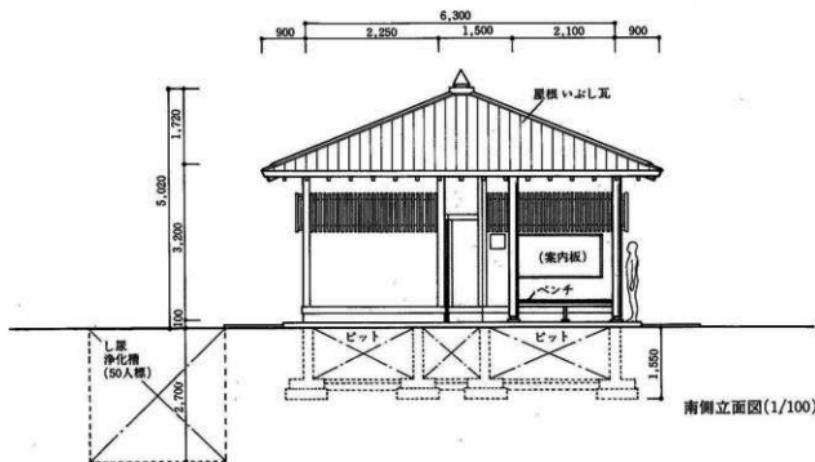
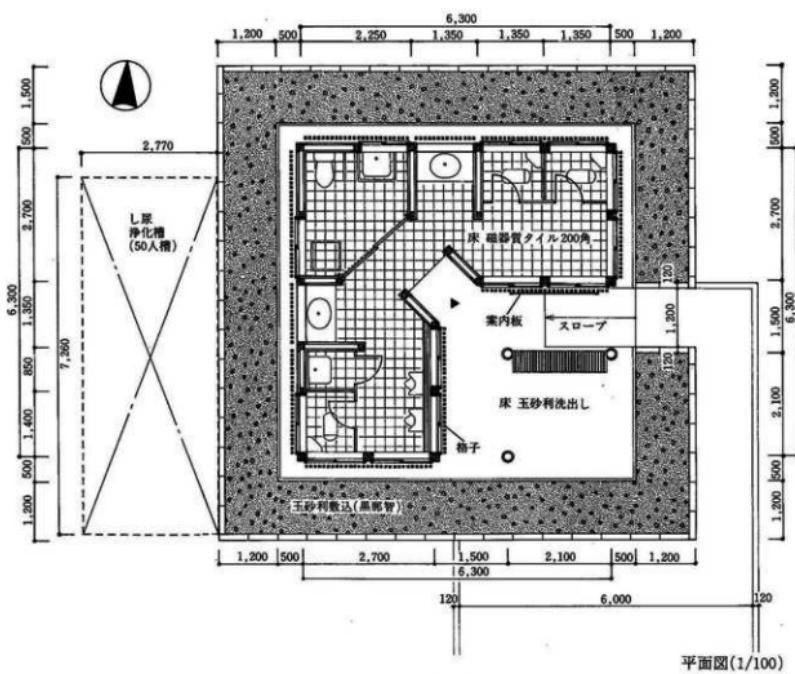
平安時代の道路跡の周辺に遺構標識を設置した。これは、幅57cm、厚さ15cm、高さ35cmの稻井石に遺構名を掘り込んだものである。

＜園路工＞（第101図）

現在使われている農道は、平安時代の築地塀跡の上を走るもので、将来的にはこれを調査し何らかの遺構表示を行いたいと考えている。そのために、遺構の存在しない部分に園路を通す必要があった。そこで、奈良時代の築地塀跡と掘立式建物跡の遺構表示を配慮し、この築地塀跡と建物跡の間を巡回できるように管理用道路を兼ねた園路を設置した。この園路は、幅員3mのカラーアスファルト舗装とし、一般道路と識別できるようにした。併せて日常的な車の進入を制限するために稻井石製の車止めを設置した。また、この園路に沿って排水施設としてU-150型側溝を併設した。



第101図 園路・車止め詳細図 (1/40)



第 102 図 公衆便所詳細図

<便益施設設置工>

●公衆便所（第102図、図版38上）

当地区東側の市道沿いにある陸奥奏社宮に隣接して公衆便所を設置した。この場所は多賀城跡への東の主要導入口である。木造瓦葺で、建築面積は39.28m²（便所スペース26.73m²・休息案内スペース12.55m²）である。車椅子での利用も考慮した多目的ブースをコアにおいて、L字型に男子用（小便器2、和式大便器1）と女子用（和式大便器2）を振り分けた。多目的ブースは手すりを設け、洗面台には自動水栓を取り付けた。当地区付近は当分の間下水道が引き込まれる予定がないため簡易水洗とし、単独処理50人槽の浄化槽を設置し、2次処理（30ppm）まで行い・市道の側溝へ排水することとした。

また便所の外側にはベンチ・案内板を併設した。奏社宮への参拝客がこの便所を利用した際に、案内板を見ることによって多賀城跡へ誘導できるように考慮した。

●あずまや（図版38中）

園路兼管理用道路の東脇にあずまやを設けた。これは前述の奈良時代の掘立式建物跡の表示や、将来その南側に計画している桜等の鑑賞樹木を一望できるような位置に設置した。その形態はこれまで多賀城跡の環境整備において設置してきたものを踏襲した。ただ、建築面積は12.96m²とこれまでのものよりやや大きく、付設する縁台についても今までのものとデザインを多少変更した。

●誘導標識（図版38下）

園路兼管理用道路の南北端にそれぞれ2基ずつ、周辺地区や各施設への方向・距離を示した誘導標識を設置した。形状はこれまで多賀城跡において設置してきた誘導標識のものを踏襲した。

<緑化修景工>

修景と兼ねて、地形復元のための盛土が降水などによって流出するのを防ぐためにオープンスペースには張芝を行った。

5.まとめ

今まで第4次、第5次5ヵ年計画で実施してきた環境整備について、各年度別に事業の概要を、また各地区別に計画の主旨と、その概要の内容について記述してきた。ここでは第4次、第5次5ヵ年計画のまとめとして今まで実施してきた遺跡整備の内容を整理し、若干の検討を加えてみたい。

（1）遺構保護

整備のすべてに優先して、遺構を保護する必要がある。その方法として地表面から遺構までの覆土が薄い場合は盛土を行うのであるが、上部に工作物を設置する時には、その基礎部分が遺構面に及ばないようにその厚さを決定しなければならない。一方で、盛土によって現地形を大きく改変することのないように、その量を必要最小限にとどめる必要がある。そのすり合わせが難しい。また、明らかに後世の削平を受けていると考えられる部分は、古代地形の復元を行うことが望ましいのだが、どこまでの厳密さで復元できるかについては限度があろう。

(2) 遺構表示

遺構の表示方法として採用した各手法について検討すると、次のとおりである。

① 露出展示

作貫地区の中世の空堀跡について用いた手法である。科学的処理を施すにあたって処理剤の実験を繰り返したことは前述の通りであるが、土の固化の厚さが十分でなく、かつ地下水が浸透してきて、凍結融解を繰り返し、現在かなり劣化が進行している状態である。遺構の露出展示は、それを行う対象の立地条件、遺構そのものの科学的分析、劣化した際の補修方法など様々な項目を徹底的に検討する必要があろう。

② 平面表示

外郭東門・大畠地区の掘立式建物について用いた手法である。これまでにも多賀城跡の掘立式建物跡の表示に用いてきているが、今回は身舎と廂の違いを視覚的にわかるように柱の高さを工夫したものである。しかしこの手法は、建物の柱の位置など平面規模を表示するにとどまり、実際の建物をイメージするのは容易ではないというのが現状のようである。

③ 半立体表示

外郭東門跡の表示に用いた手法である。平面表示と異なる点は、実物大復元をある程度の高さまで行ったものであるという点である。礎石の上に柱をたて、壁や方立・唐居敷などの部材も表現し、これまでの礎石式建物の遺構表示よりは建物のイメージをしやすいものとなった。しかし、実際の建物のイメージは、屋根まで含めた建物全体のボリューム感に左右されるものであり、平面表示と同様その効果については限界があると思われる。

また、各部材を丹塗りにすることで、より古代の建物の雰囲気を出そうと試みた。その塗料についても古代技法を使ってみたが、風雨にさらされることによって予想以上に早く劣化した。

ここに述べた手法以外にも遺構表示方法は幾つかあるが、これら各手法を一つの遺跡の中で各々どのくらいの割合で行つていけば良いのかを、遺跡全体の計画の中で十分検討する必要があろう。

(3) 学習施設

遺構表示の補助手段として各種学習施設を設置している。今回は遺構標識(遺構の名称を明示したもの)・遺構説明板(表示遺構の解説をしたもの)、総合説明板(各地区の解説をしたもの)を設置した。またこれら以外にも今までに野外模型を設置している。このようなハードウェアによる解説の一方で、東北歴史資料館の解説員が定期的に史跡めぐりという形で来訪者へ解説を行つており好評を得ている。これからはガイダンス棟の設置や、音声による解説機、FM電波による解説などハードとソフトを融合させたようなサービスも考えていきたい。

(4) 便益施設、園路

便益施設に関しては、基本的には通常の公園整備と考え方を一にしているが、ここでは遺跡としての特殊性を考慮しなければならない点をあげる。

まず、施設を設置する際には遺構の保護に関しては先に述べた通りであるが、それに加えて、遺跡としての景観との兼ね合いを十分に考慮しなければならない。その上で、遺跡の立地環境が感じ取れ

るよう配慮する必要がある。また、動線については、将来遺跡内全体を有機的につなぐ園路および広場等の計画、およびその巡回方法の検討が必要となってくる。

(5) 緑化修景

地表面は、遺構保護や修景の面から極力地被植物を植栽している。現在張芝を行っているが、広範囲に渡る場合は経費の点からも管理の点からも最適という訳ではなく、今後更に適した材料の検討が必要である。また、樹木に関しては極力既存緑地を計画に組み入れることとし、修景上必要な部分について緑陰を設定することにしている。

註 古川雅清 1990「整備計画と覆屋建設－多賀城跡作貫地区を中心として」『月刊文化財』318号 pp. 11~16

V. 付 章

1. 関連研究・普及活動

平成6年度は多賀城跡の発掘調査・環境整備の他に、以下の関連研究や普及活動を行った。

(1) 多賀城関連遺跡発掘調査事業

当研究所では多賀城に関連する古代遺跡について、計画的な調査・研究を実施している。本年度は第5次5ヵ年計画の1年目にあたり、桃生郡河北町飯野から桃生町太田に跨る桃生城跡の第3次発掘調査を7月27日～10月5日に実施した。発掘調査面積は2,300m²である。調査にあたっては桃生郡河北地区教育委員会・桃生町教育委員会の協力を得た。なお、桃生城跡周辺の地形図(1/1,000)も作成した。総事業費は22,000千円(50%国庫補助)である。

【調査の目的】

桃生城は陸奥守藤原朝彌(あさかり)が天平宝字4(760)年頃に牡鹿郡に完成させた城柵で、その後まもなく桃生郡が置かれた。当研究所では昭和49・50年に発掘調査を行い、政庁の区画施設が築地塀であること、正殿跡・後殿跡と推定される建物跡が火災にあっていることを明らかにした。また、外郭は複郭で西郭があり、それらの区画施設が土塁で櫓をもつことも確認した。

その後、大規模な圃場整備事業が計画され、桃生城跡が土取り用地にあてられる危険性が生じた。そこで、桃生城跡を保存するためには、その歴史的意義を明らかにし、範囲を確定することが緊急の課題となった。今年度は政庁跡と外郭北東隅地区を対象に発掘調査を実施した。

【調査の成果】

政庁跡

1. 今回の調査で、東西の脇殿跡と東辺の築地塀跡を検出した。政庁の規模は方約70mで、東側には別の区画が存在することが明らかになった。
2. 政府が立地する丘陵の最も高い場所に基壇をもつ正殿(桁行5間・梁行2間の東西棟)を置き、その北側に同規模の後殿・南側に東西脇殿(桁行5間・梁行2間の南北棟)を配置している。これらの建物は掘立式で瓦葺きである。このような建物配置は多賀城の政庁第II期と共通する。多賀城の政庁第II期は天平宝字6(762)年修造によるものであるが、桃生城ではその2年前に新たな城柵政府のパターンを完成させている。
3. 正殿と東西脇殿に囲まれた広場は、東西約43m・南北約35mで東西に長い。このことは、東西の脇殿を築地塀側に寄せ、広場をできるだけ広く確保しようとした意図がうかがえる。
4. 東西の脇殿の規模は桁行11.8m・梁行5.4mである。床束をもつことから床張りの建物で、広場に面した部分には縁が付くことも明らかになった。また、建物を建てる際に整地を行い、柱を立てた後さらに整地をしていることも判明した。
5. 第1・2次調査の成果を含めると、政庁の建物はいずれも火災にあっている。このことは、宝亀5(774)年海道の蝦夷が蜂起した事件にかかるものとみられる。その後、政庁は再建されていない。

外郭北東隅地区

土壘は緩やかに南側にカーブしながらのびていることも明らかになった。さらに、焼土もみられたことから、政庁と同様に火災にあったものと推定される。

(2) 遺構調査研究事業

本事業は多賀城跡で検出した建物跡などの諸遺構を保存・展示・活用することを目的として、他遺跡における類例と比較検討しながら基礎的研究を行うものである。本年度は遺構調査研究事業の第4次5ヵ年計画の1年目として、国府の中で調査が進んでいる伊賀国府跡(三重県)・大宰府跡(福岡県)の発掘調査・復元データを収集した。事業費は693千円である(県単独事業)。

(3) 発掘調査成果のデータベース化事業

多賀城跡等の発掘調査・環境整備事業でこれまで蓄積してきた遺構・遺物などの資料(実測図・写真・文献資料を含む)をパソコンで整理して、データベース化を図ることを目的にしている。これによって、今後の発掘調査・環境整備事業および一般への公開に役立てる。事業費は2,106千円である(県単独事業)。

(4) 現地説明会の開催

発掘調査の成果を一般に公開するために、下記の現地説明会を開催した。

「多賀城跡第65次調査」平成6年11月19日 丹羽茂・柳澤和明

「桃生城跡第3次調査」平成6年8月27日 阿部恵・佐藤和彦

(5) 他機関への発掘調査協力

東山遺跡第9次調査：宮崎町教育委員会主体

宮崎町の専門職員が退職したため、当研究所が文化財保護課と協力して調査を実施した。目的は昨年部分的に検出した外郭南門跡とそれに取り付く築地跡の調査である。

【調査の成果】

1. 外郭南門跡の柱穴12個をすべて検出し、掘立式八脚門であることを確定した。規模は桁行総長が8.4m(28尺)、柱間は中央間3.6m(12尺)、両脇間が2.4m(8尺)である。梁行の柱間は3.15m(10.5尺)の等間である。年代は9世紀中頃以前である。

2. この八脚門は基礎整地の上に柱を立て、その後さらに整地を行うという工程で建てられていることが判明した。柱穴は棟通り中央間が浅く、柱も抜き取られていたが、その他では柱穴が深く、柱材も残っていた。

3. 築地跡はコの字型に内側に入って八脚門跡に取り付いている。寄柱をもつもので、3時期の変遷がある。

(6) 研究発表・論文など

進藤秋輝「多賀城跡」考古学研究 第41巻3号 平成6年12月

阿部恵「桃生城跡第3次調査」

柳澤和明「多賀城跡第 65 次調査」

宮城県遺跡調査発表会平成 6 年 12 月 第 21 回古代城柵官衙遺跡検討会平成 7 年 2 月

柳澤和明「東北の施釉陶器—陸奥を中心にして—」古代の土器研究会 平成 6 年 9 月

「多賀城跡外郭東門・大畠地区の調査」東北史学会 平成 6 年 10 月

「多賀城における 10 世紀前後の土器群」古代末の土器群の勉強会 平成 7 年 1 月

(7) 講演会など

進藤秋輝「多賀城と東北の古代文化」東北六県住宅供給公社会議 平成 6 年 6 月 16 日

「瓦生産からみた多賀城」東北歴史資料館開放講座 平成 6 年 8 月 6 日

「最近の東北城柵の調査成果」古代吉備を語る会 平成 6 年 8 月 20 日

「多賀城跡の最新の調査成果」多賀城市教育委員会 平成 6 年 9 月 30 日

「多賀城と三十三間堂遺跡について」宮城いきいき財團 平成 6 年 10 月 14 日

「東北の古代官衙遺跡と整備」「城柵官衙遺跡研究の現状」奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター
平成 7 年 1 月 25 日・2 月 24 日

「多賀城と牡鹿柵・桃生城」宮城県文化財保護協会 平成 7 年 2 月 15 日

丹羽 茂「多賀城跡の発掘」東北歴史資料館開放講座 平成 6 年 7 月 23 日

佐藤和彦「多賀城の役人たち」東北歴史資料館開放講座 平成 6 年 7 月 30 日

柳澤和明「陸奥の城柵」東北歴史資料館開放講座 平成 6 年 8 月 6 日

「多賀城跡について」宮城県内市町村文化財担当者等研修会 多賀城跡 平成 7 年 8 月

「分層発掘について」(財)岩手県文化財振興事業団埋蔵文化財センター 平成 7 年 2 月
白崎恵介「多賀城南門の復元と遺跡の整備」東北歴史資料館開放講座 平成 6 年 8 月 20 日

(8) 委員会などへの協力

進藤秋輝 秋田城跡環境整備指導委員・払田柵跡環境整備審議委員・史跡志波城跡保存整備委員・名生館官衙遺跡発掘調査指導委員・名生館官衙遺跡環境整備指導委員・石巻市史執筆委員・多賀城市文化財保護委員・郡山遺跡発掘調査指導委員・根岸遺跡調査指導委員

丹羽 茂 名生館官衙遺跡発掘調査指導委員

白崎恵介 名生館官衙遺跡環境整備指導委員

2. 研究成果刊行物

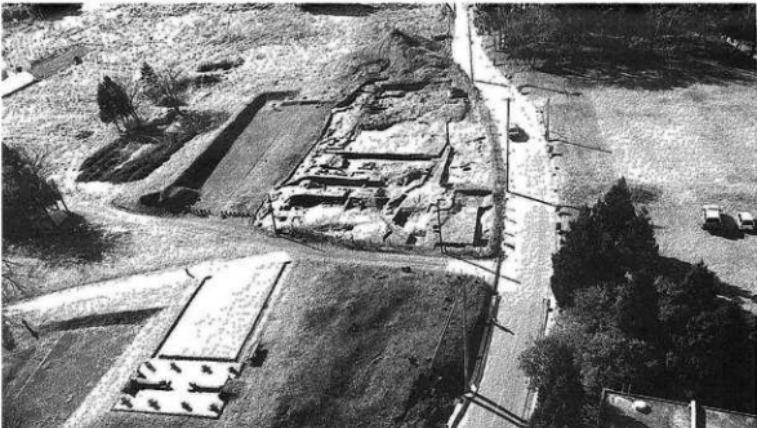
『多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所年報 1994 平成 7 年 3 月

『桃生城跡Ⅲ』多賀城関連遺跡発掘調査報告書 第 20 冊 平成 7 年 3 月

報告書抄録

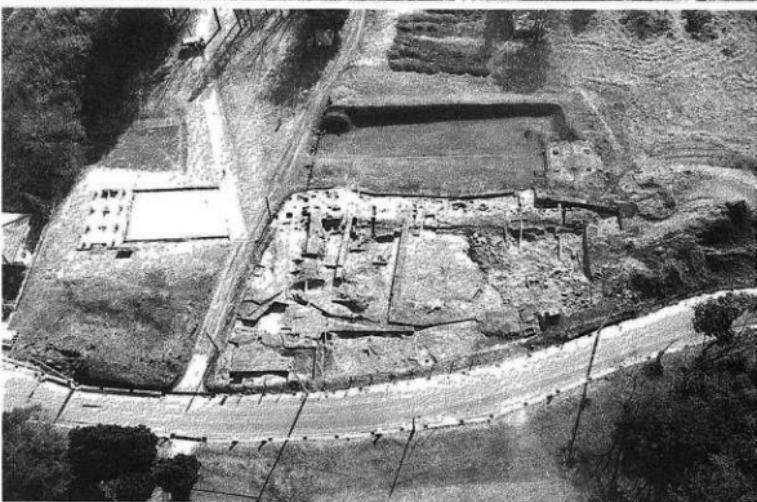
ふりがな	みやぎけんたがじょうあとちょうけんきゅうしょねんぽう							
書名	宮城県多賀城跡調査研究所年報 1994							
副書名	第65次調査・現状変更に伴う調査・環境整備第4・5次5ヵ年計画の実績							
巻次	年報 1994							
シリーズ名	年報							
シリーズ番号	1994							
編著者名	進藤秋輝・丹羽茂・柳澤和明・白崎恵介・三浦幸子							
編集機関	宮城県多賀城跡調査研究所							
所在地	〒985 宮城県多賀城市浮島字宮前 133 TEL022-368-0102							
発行年月日	西暦 1995年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	°'N	°'E			
特別史跡 たがじょうあと 多賀城跡 いわきしろ	みやぎけんたがじょうし 宮城県多賀城市 いわきしろ うわしま 市川・浮島	04209	006	38 度 18 分 14 秒	140 度 59 分 30 秒	1994.4.20 ～ 1994.11.30	1. 1,800 m ² 2. 520 m ²	1. 調査計画 に基づく 学術調査 2. 特別史跡 の現状変 更による 緊急調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
特別史跡 多賀城跡	国府・ 城柵遺跡	奈良・平安 時代	道路跡 築地塀跡 櫓跡 掘立式建物跡 井戸跡 土壤 溝など	1条 3条 3棟 5棟 2基 2基	土師器・須恵器・須恵 系土器・縁軸陶器・灰 軸陶器・円面鏡・瓦 (軒丸瓦・軒平瓦・丸 瓦・平瓦)・鉄製品(刀 子・釘)・漆紙文書	I. 平安時代の外郭東門に 接続する築地塀跡の下 層から奈良時代の道路 跡が検出された。 II. 平安時代の築地塀・櫓 跡に3時期の変遷があ ること、櫓が築地塀を跨 ぐものから土壤の上に 建てられるものへ変化し ていることがわかった。 III. 土器を一括廃棄してい る土壤が2基あり、それ ぞれ9世紀第3四半期・ 第4四半期のものであ ることが明らかになっ た。		

調査区遠景
(東上空から)



B8267

調査区全景
(北上空から)



B8262

調査区全景
(南上空から)



B8268



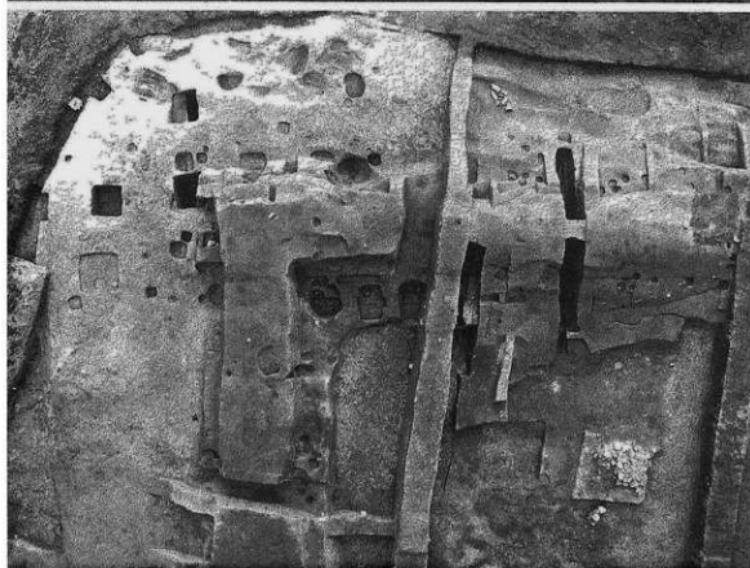
調査区全景
(東から)

B8199



調査区全景
(西から)

B8194



北東屈曲部全景
(上空から)

B8279

整備された奈良時代の
SB1762 外郭東門・SX
1772 城内道路(奥)と
SF300 外郭東辺築地塀
北東屈曲部(手前)
(西から)



B8196

SF300 外郭東辺築地塀
北東屈曲部の櫓・SX
2255 土壇、SX2256 暗渠
SD2258 大溝、積み手の違い
(西から)



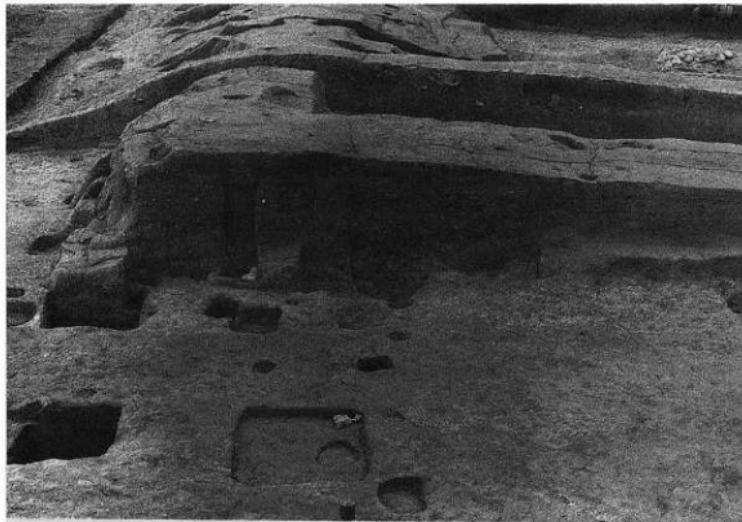
B8195

SF300 外郭東辺築地塀
北東屈曲部の櫓・SX
2255 土壇、積み手の違い
(西から)



B8198

図版4



SF300 外郭東辺築地堀
北東屈曲部の SB310・311
櫓、SX2255 土壇、積み手
の塗い、SX1773 北側構。
(東から)



SF300 外郭東辺築地堀
北東屈曲部の SB310・311
櫓、SX2255 土壇
(南から)



SF300 外郭東辺築地堀
北東屈曲部の SB310・311
櫓、SX2255 土壇(右手)
と SD2256 暗渠(左手)
(南東から)

図版 5

SF300 外郭東辺築地塀
北東屈曲部の SB310・311
櫓、SX2255 土壇、積み手
の違いと SD2258 大溝
(南から)

B8204



SF300 外郭東辺築地塀
北東屈曲部の SB310・311
櫓、SX2255 土壇、積み手
の違いと SD2258 大溝
(南から)

B8207



SF300 外郭東辺築地塀
北東屈曲部の SB310・311
櫓、SX2255 土壇、積み手
の違いと SD2258 大溝
(南西から)

B8203



整備された SB307 外郭東門(奥)とそれに取り付く SF300 外郭東辺築地塀
(北東から)

B8210

SF300 外郭東辺築地塀
北西屈曲部周辺の寄柱穴・
添柱穴・積み手の違いなど
(北東から)

B8213

SF300 外郭東辺築地塀
北西屈曲部の寄柱穴・
添柱穴、積み手の違い
と築地塀の両面

B8217

図版 7

SF300 外郭東辺築地解
北西屈曲部の南東における
寄柱穴・添柱穴・工事穴
(南西から)

B8230



左 : SB311A・B 構の北西
隅柱穴の検出状況
(北から)

B8227

右 : SX2255A 土壌上面
の炭化物薄層と SX
2255B 土壌嵩上げの
断面(北から)

B8221



左 : SX2255B 土壌・炭化
物薄層の下で検出した
SB311A 構の北側柱列
中央・柱穴の掘方・柱
痕跡・柱抜取穴
(北から) B8223

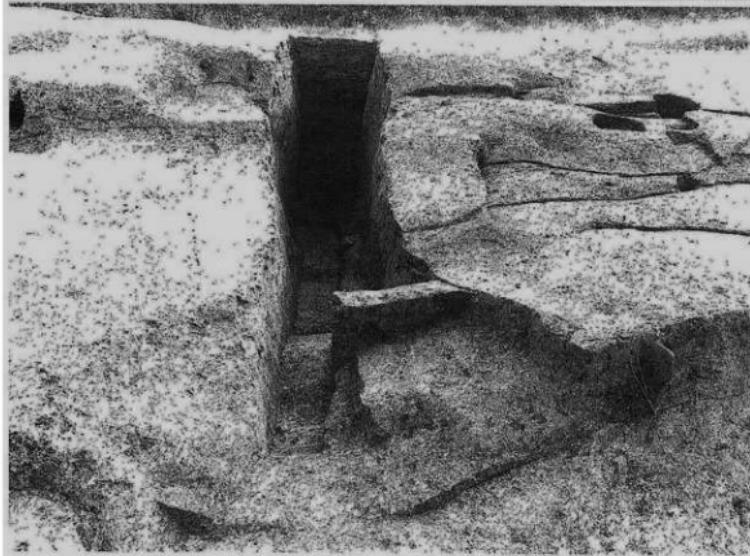
右 : SB311A 構の北側
柱列中央柱穴の断ち
割り状況(南東から)

B8225

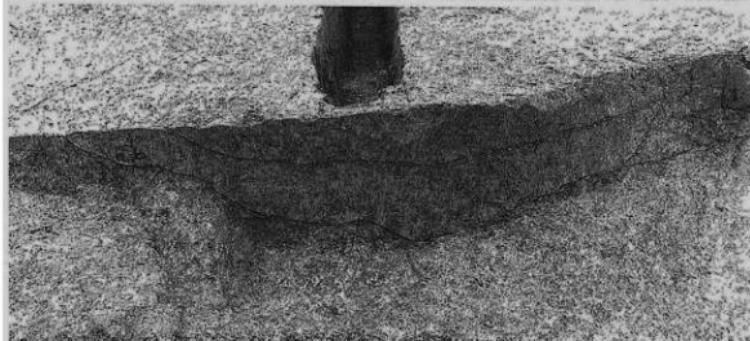




B8232



B8234



B8233

SD2256 暗渠全景と
SF300A 外郭東辺築地盤
寄柱穴・添柱穴・積み手
の違い(南から)

SD2256 暗渠の取水口
(北から)

SD2256 暗渠の取水口
断面(北から)

図版9

SD2256 暗渠北半部壁面
(Sec. 4)に見えるSF300A
築地盤本体・基礎、SF300B
築地盤崩壊土、SD1773 道路
北側敵北東から)

B8238



SD2256 暗渠南半部壁面
(Sec. 4)に見えるSF300A
築地盤本体・基礎、SF300B
築地盤本体・崩壊土
(南西から)

B8237



SD2256 暗渠横断面(Sec.14)
に見える裏込め・木樋内堆
積層・天井部整地
(南から)

左: B8235

右: B8236





B8243

奈良時代の SX1772 城内
道路の SD1773 北側溝と
その断面(Sec.1)
(西から)



B8242

奈良時代の SD1773 北側溝と SF300A 築地塀基礎
の重複状況 (Sec.5) と
SF300A 築地塀基底部に
敷かれた平瓦の検出状況
(西から)

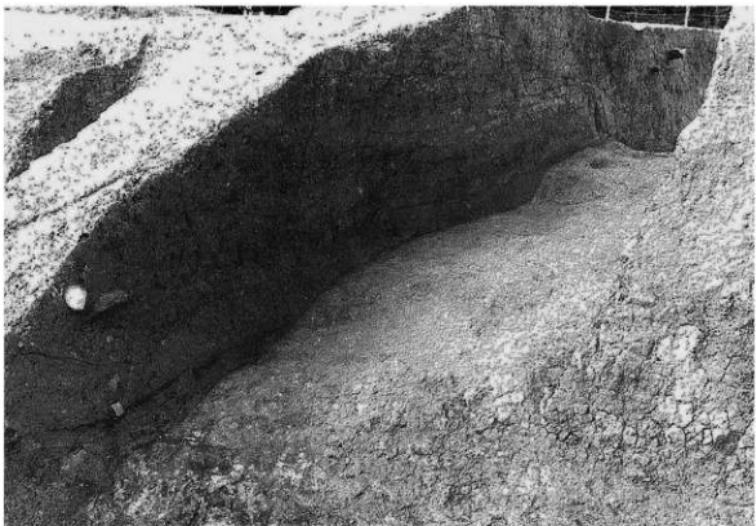


B8249

図版 11

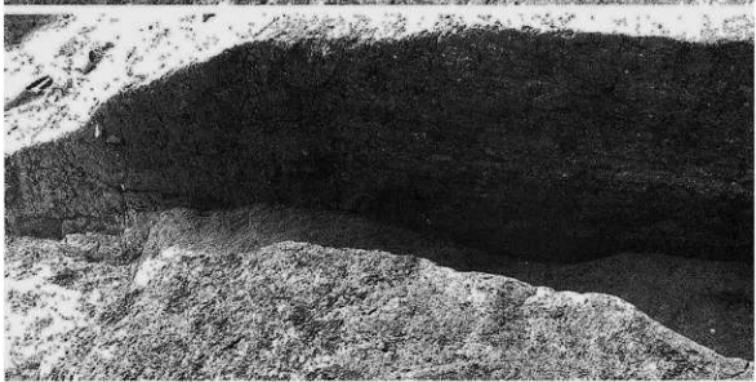
SF300 築地塀の断面(Sec.6)
SX1772 城内道路、SF300A
築地塀基礎・本体、SF300B
築地塀本体・崩壊土、SX
2263 烧成造構の重複状況
(南東から)

B8245



SF300 築地塀の断面(Sec.6)
SX1772 城内道路、SF300A
築地塀基礎・本体、SF300B
築土也塀本体・崩壊土、SX
2263 烧成造構の重複状況
(東から)

B8248



SF300 築地塀の断面(Sec.6)
SX1772 城内道路、SF300A
築地塀基礎・本体・崩壊土、
SF300B 築地塀本体・崩壊
土、SB310 檜北西隅柱穴の
重複状況(東から)

B8247



図版 12



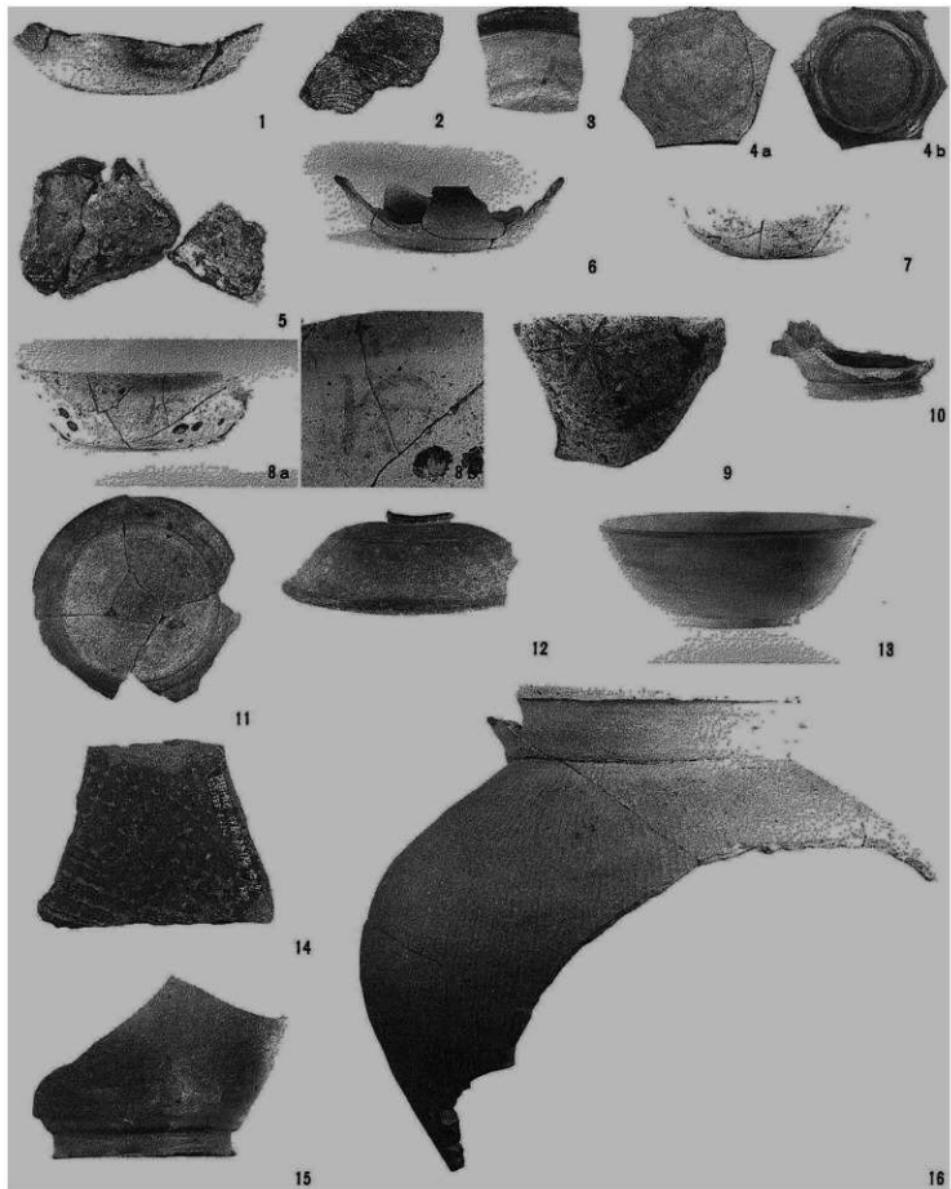
SF300 築地塙北西屈曲部における SD2258 大溝の断面(北西から)



SD2257 大溝(手前)と SX
2266 石敷道路跡(奥)
(南西から)

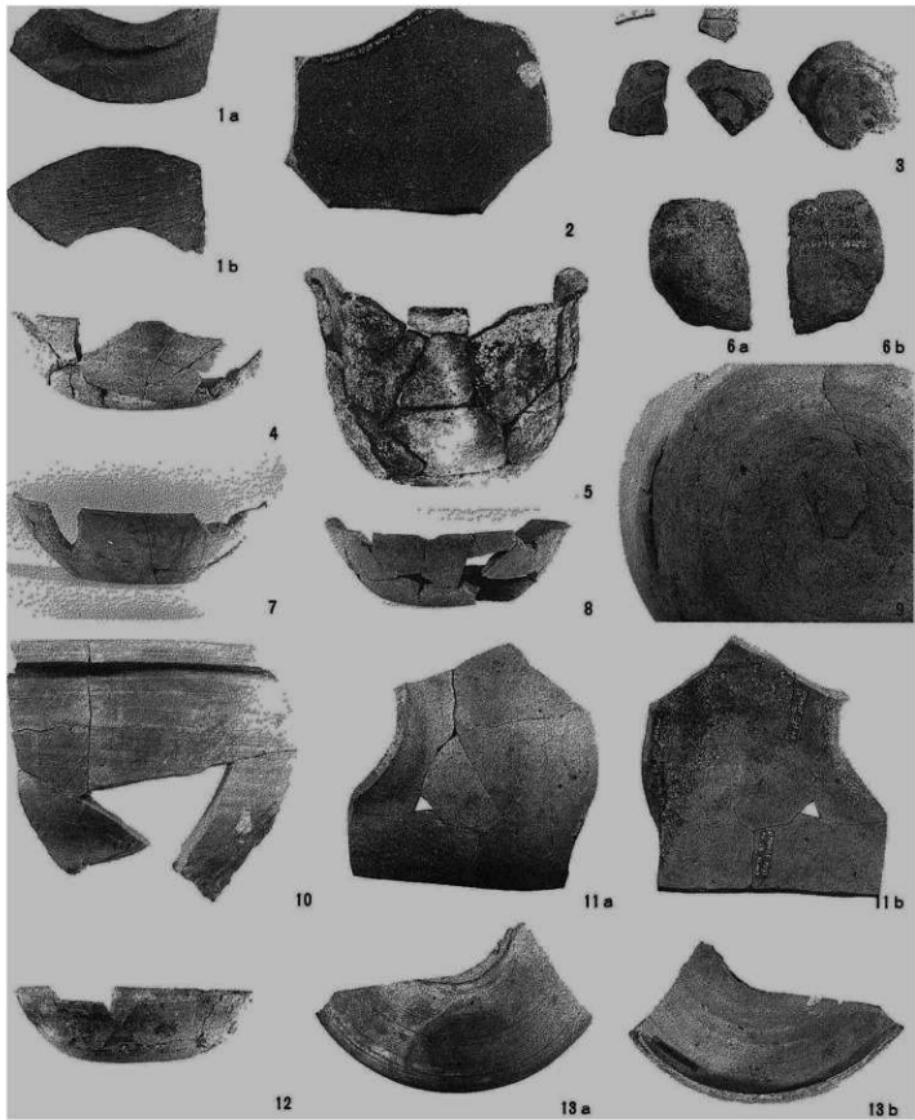


SE2265 井戸跡と遺物の
出土状況(北から)



図版13 第65次調査出土の土器(1)

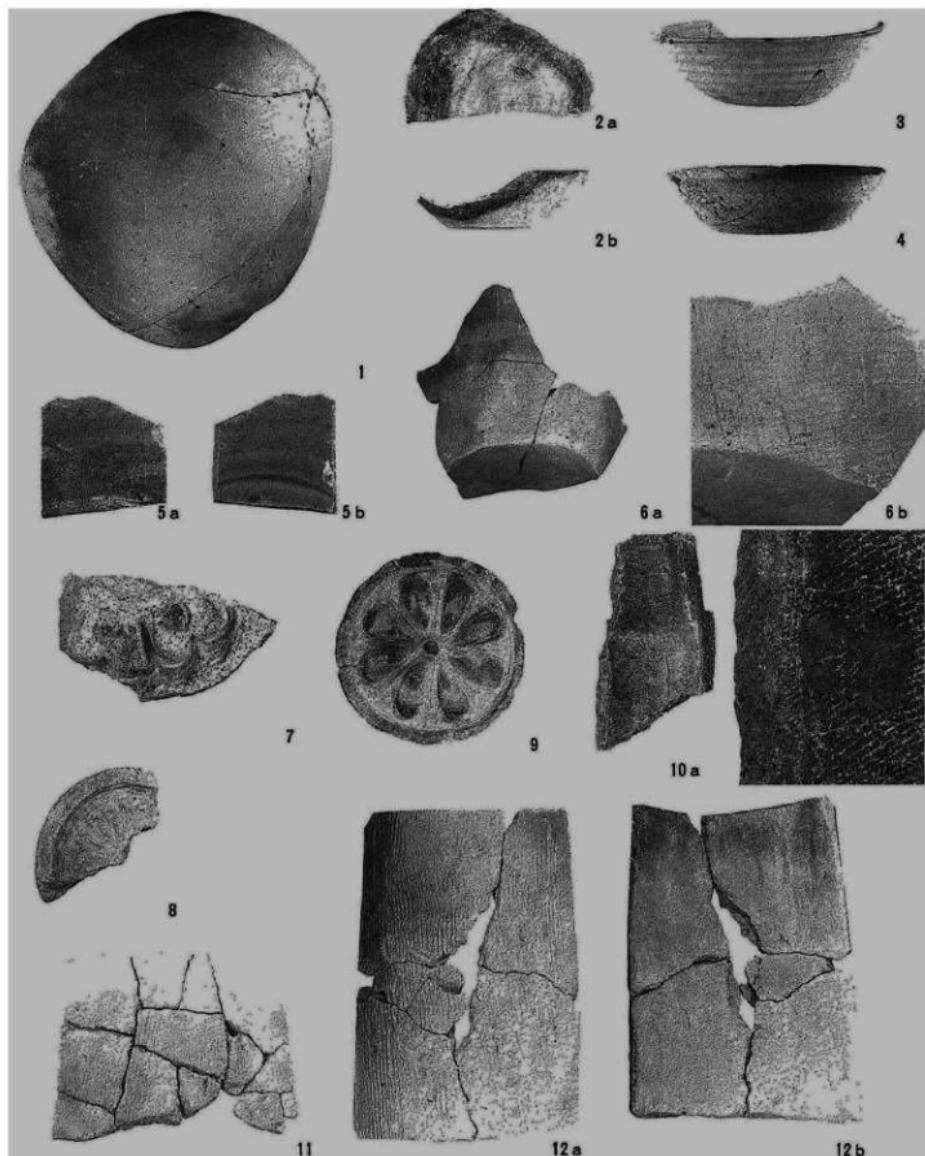
- 1 : SF300A 基地盤基礎
- 2 : SF300B 基地盤解本体
- 3・4 : SD2257
- 5～16 : SD2258
1. 素面器坏(第8図3、B8310)
2. 須恵器坏(第10図2、B8316)
3. 黒墨「人」須恵器坏(第16図、B8319)
4. 緑釉陶器坏
- 転用磯(第16図3、B8320・8321)
5. 漆パレット土器器坏(第17図5、B8326)
6. 須恵器坏(第17図12、B8330)
7. 須恵器坏(第17図9、B8327)
8. 墨書「白」須恵器坏(第17図11、B8328・8329)
9. ヘラ書き須恵器坏(第17図14、B8331)
10. 須恵器双耳坏(第17図16、B8333)
11. 狂毫器模様(第17図15、B8332)
12. 須恵器蓋(第17図19、B8334)
13. 緑釉陶器坏(第17図20、B8335)
14. 格子状當て具底ある須恵器裏(第17図22、B8336)
15. 布目压痕ある須恵器臺(第17図23、B8338)
16. 須恵器甕(第18図1、B8340)



図版14 第65次調査出土の土器(2)

1・2 : SD2258B 3~11 : SK2259 12・13 : SE2265

1. 須恵器瓶(第18図3、B8342・8343) . 須恵器蓋軸用硯(第18図2、B8341) 3. 須恵器土器环(第24図1~4、B8376)
4. 土師器环(第24図9、B8377) 5. 土師器甕(第24図15、B8378) 6. 土師器瓶(第24図16、B8379・8380)
7. 須恵器环(第24図22、B8388) 8. 須恵器环(第24図24、B8384) 9. 墓書「口山」須恵器环(第24図19、B8382)
10. 須恵器大型鉢(第25図6、B8385) 須恵器横瓶(第25図9、B8386・8387)
12. 須恵器环(第28図1、B8399) 13. 須恵器蓋軸用硯(第28図3、B8400・8401)



図版15 第65次調査出土の土器(3)・瓦(1)

1 : SE2265 2 : 09 3 : 6 : D30 4 : D8 5 : 表土 7 : SD2256 暗渠 8 ~ 10 • 12 : SD2258 11 : SF30A 築地脚基礎

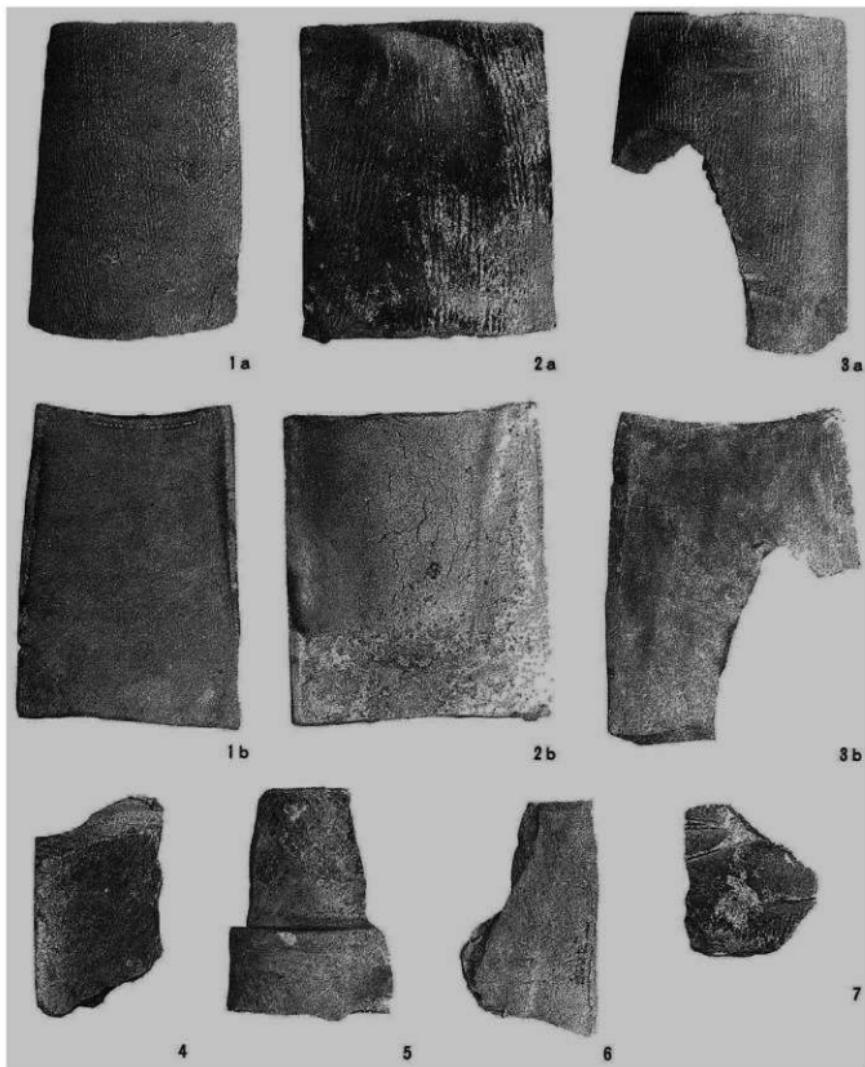
1. 須恵器壺(第28図4、B8402) 2. 油壺付須恵器壺(第29図9、B8404・8405) 3. 須恵器壺(第29図10、B8406)

4. 須恵器壺(第29図11、B8407) 5. 青磁皿?(第29図21、B8414・8415) 6. 須恵器壺(第29図14、B8409)

7. 宝相花文軒丸瓦420(第14図4、B8318) 8. 繩弁蓮花文軒丸瓦3108(第19図1、B8348)

9. 重弁蓮花文軒丸瓦320(第19図3、B8349) 10. 刻印丸瓦II B類aタイプ(第19図28、B8351・8352)

11. 平瓦II B類aタイプ(第9図5、B8312) 作り直された平瓦II C類(第20図1、B8353・8355)



図版 16 第65次調査出土の瓦(2)

1~4 : SD22588 5 : SK261 6・7 : 表土

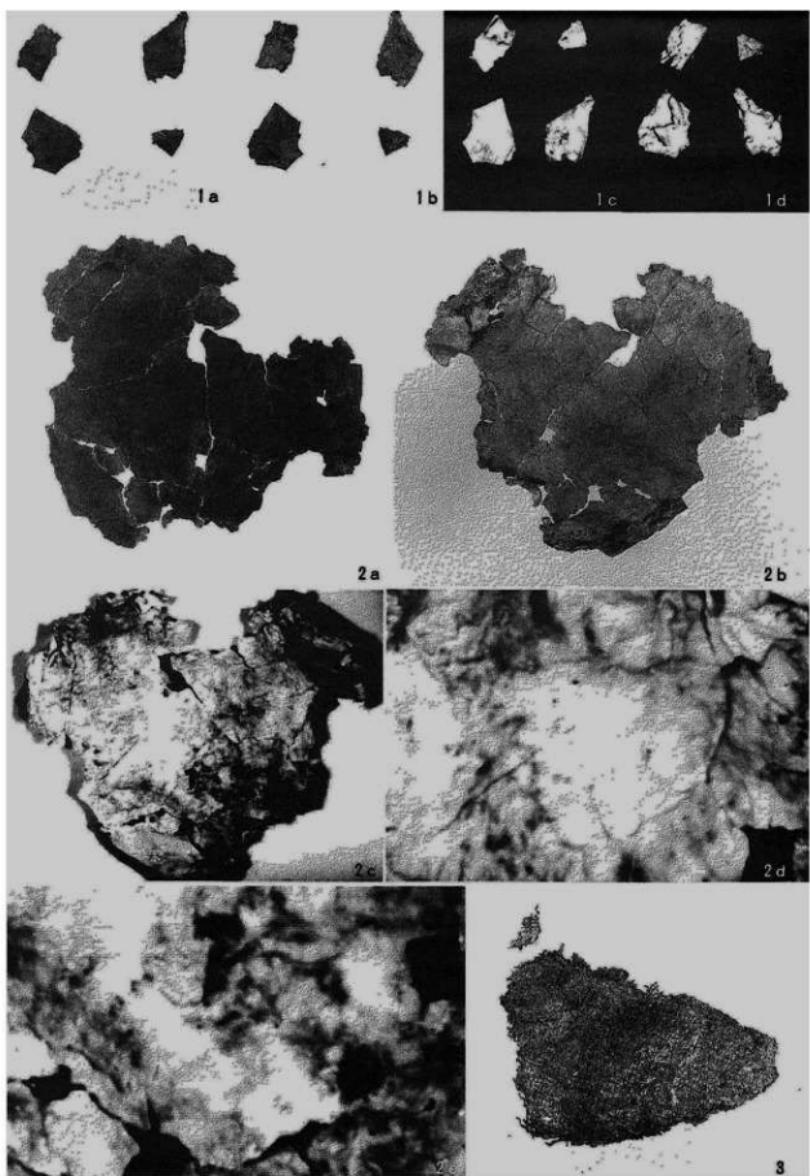
1. 平瓦II C類(第20図2、B8356・8357) 2. 寸詰りの平瓦II B類aタイプ(第20図3、BS358・8359)

3. 凸面中央上下2ヶ所をヨコナデした平瓦II B類aタイプ(第21図2、B8362・8364)

4. 煙斗瓦(第22図3、B8365) 5. 丸瓦II B類bタイプ(格子叩き目、政寧第1期、第26図8、B8397)

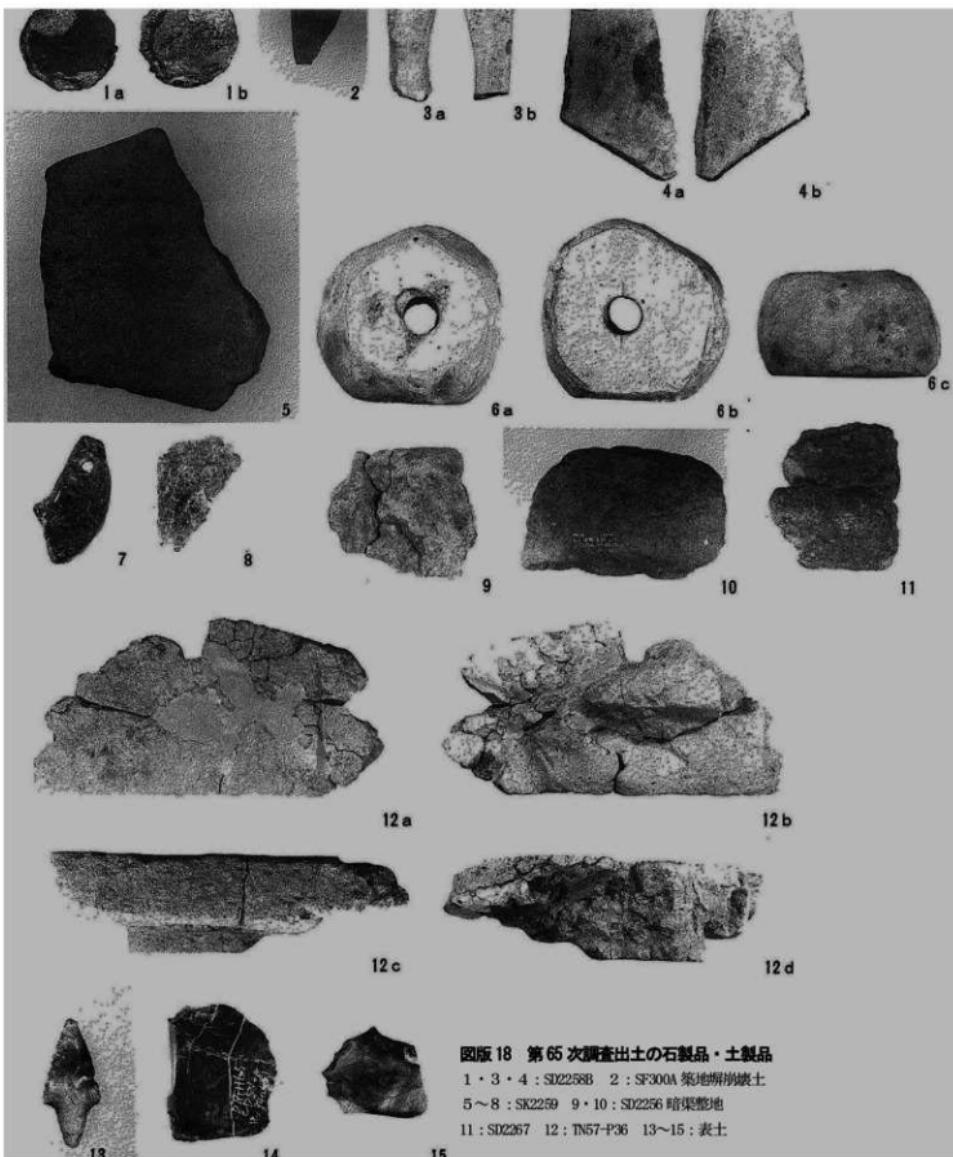
6. 凹面に無文叩き板瓦痕の残る平瓦II C類(第30図14、B8417)

7. 玉縁を木口でヨコナデした丸瓦II Baタイプ(第30図15、B8419)



図版 17 第 65 次調査出土の漆紙文書・漆紙・漆漉し布断片

1. 黒漆付着漆紙断片、SD2257, B8322~8325 1c·d: 赤外線写真
2. 漆紙文書、SD2258B、第23図、B8367~8370·8372 2c~e: 赤外線写真
3. 漆漉し布断片(実大)、SE2265 井戸跡、B8403



図版 18 第 65 次調査出土の石製品・土製品

1・3・4 : SD2258B 2 : SF300A 築地削削土

5～8 : SK2259 9・10 : SD2256 墓渠整地

11 : SD2267 12 : TN57-P36 13～15 : 表土

1. 須恵器甕体部破片転用の円板状土製品(第 18 図 4、B8344・8345) 2. 砥石(第 8 図 8、B8311)

3. 砥石(第 8 図 5、B8346・8347) 4. 砥石(B8374・8375) 5. 砥石(第 25 図 11、B8393)

6. 車輪車(第 25 図 12、B8389～B8391) 7. 勾玉(第 25 図 14、B8393) 8. 雲母片(第 25 図 13、B8392)

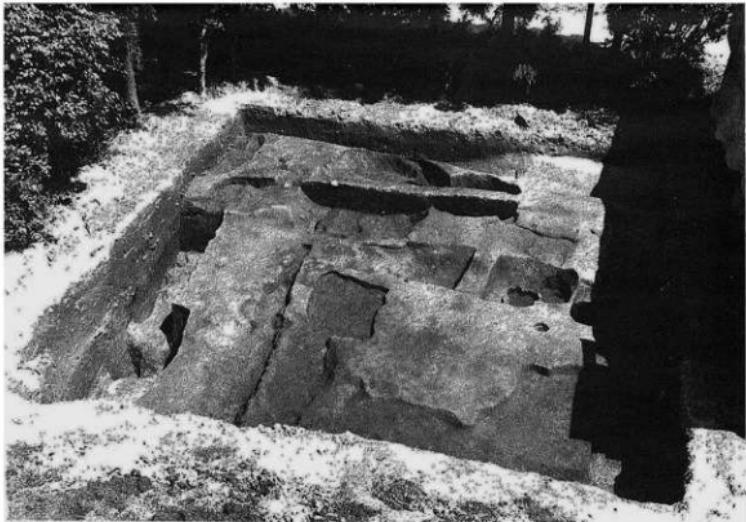
9. 霧灰岩切石(第 31 図 2、B8422) 10. 霧灰岩切石(第 31 図 1、B8421) 11. 霧灰岩切石(第 31 図 3、B8423)

12. 霧灰岩切石(基壇化粧?、第 31 図 4、B8424～8427) 13. 石鐵(玉鉄製、B8428)

14. ピエス・エス・キュー(珪質岩製、B8428) 15. 刃片(メノウ製、B8428)

図版 19 菊池勇吉宅の調査

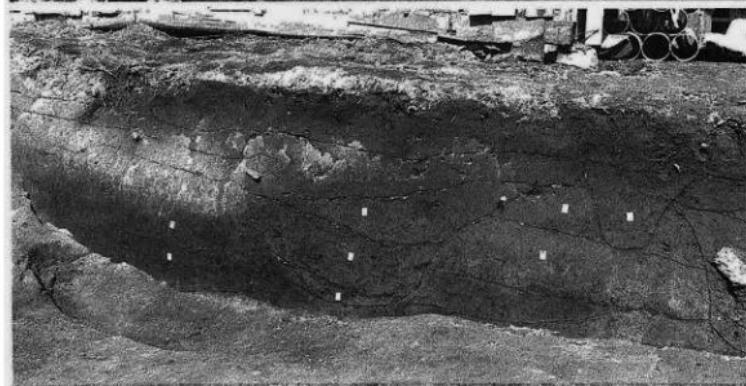
1. 発掘調査区全景
南から(ネ B8286)



2. 西壁断ち割り断面
南東から(ネ B8294)



3. 東壁断ち割り断面
南西から(ネ BS297)



図版20 菊池勇吉宅の調査



1. SK2270 土壌の検出状況
東から(ネ B8290)



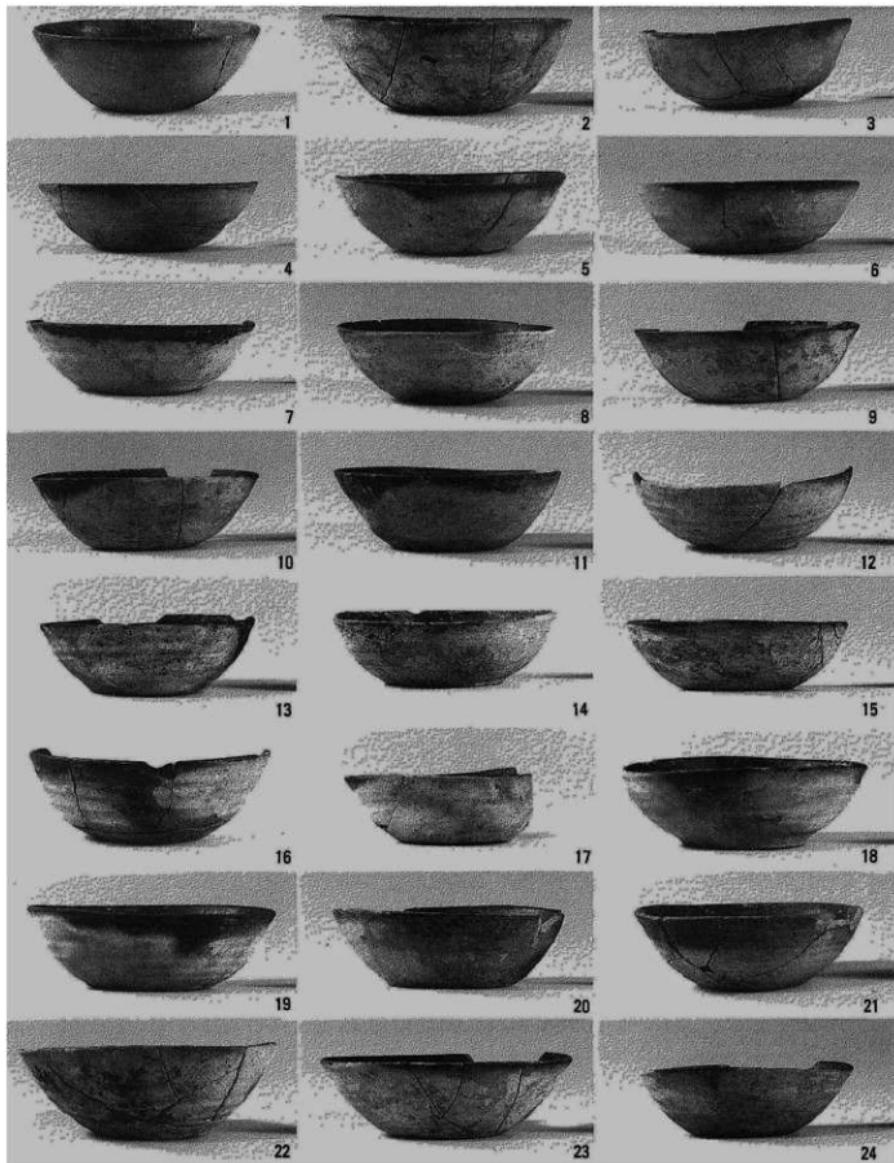
2. SK2270 土壌の遺物
出土状況
北東から(ネ B8291)



3. SK2270 土壌の遺物
出土状況細部
東から(ネ B8293)

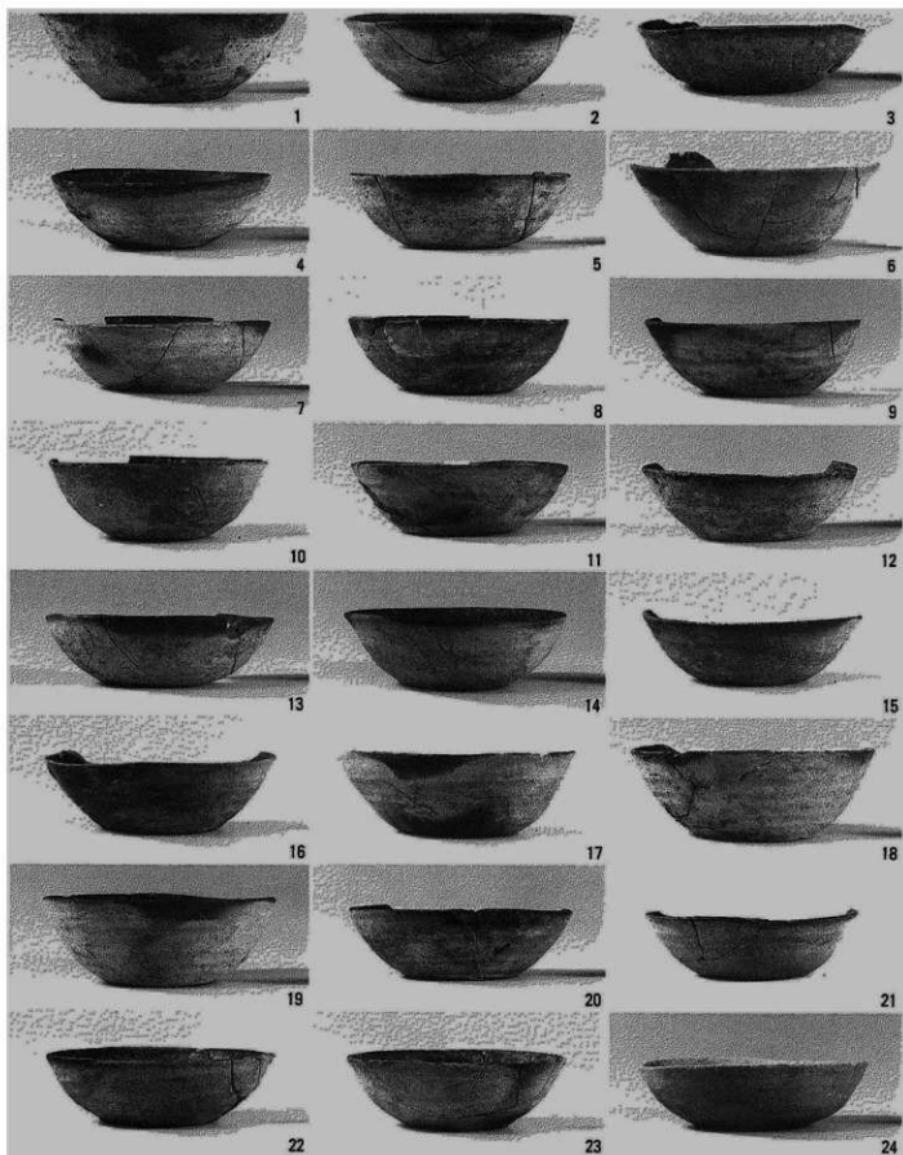


4. SK2272 土壌(手前)と
SE2273 井戸跡(左奥)
北西から(ネ B8288)



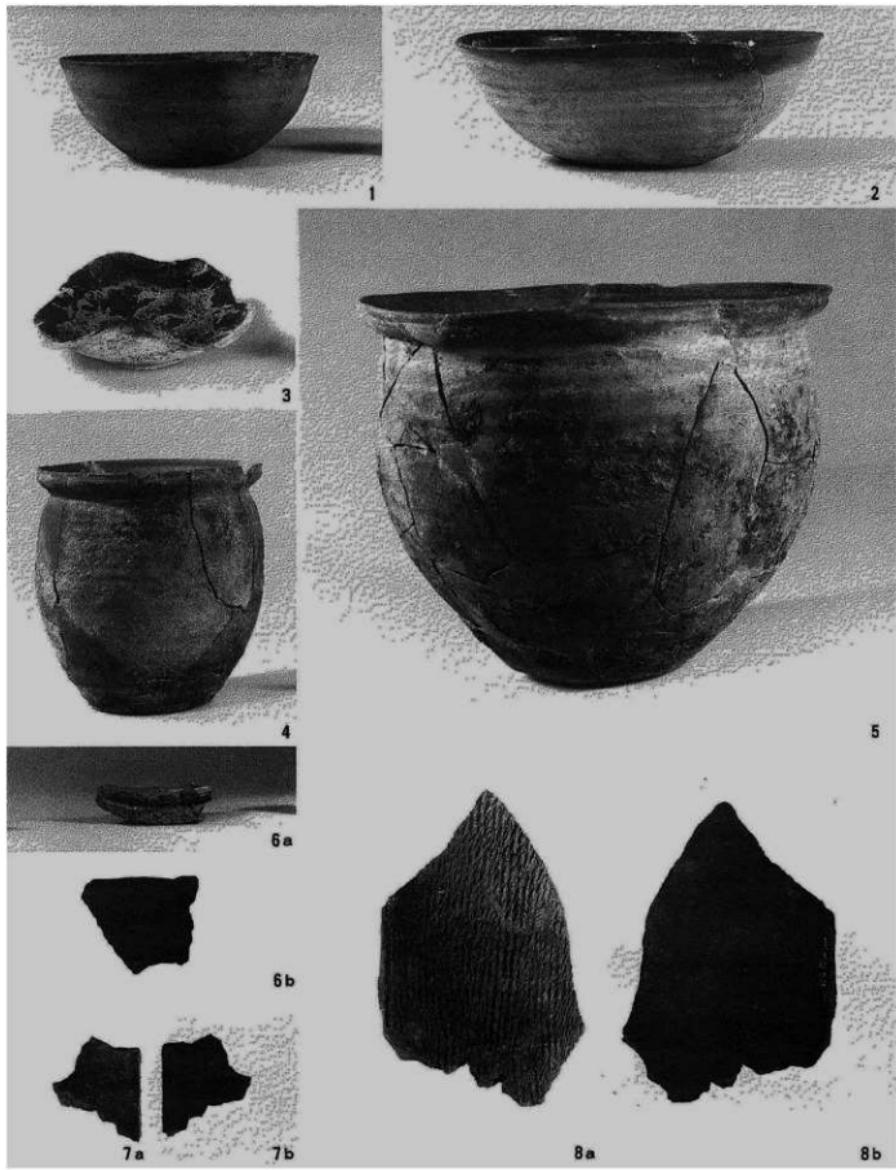
図版21 菊池勇吉宅の調査 SK2270 土壙の出土遺物 I(土師器)

1. 第41図1-R62(ネB851)
2. 第41図2-R14(ネB8479)
3. 第41図3-R41(ネB8499)
4. 第41図4-R67(ネB8515)
5. 第41図5-R57(ネB8507)
6. 第41図6-R30(ネB8493)
7. 第41図8-R5(ネB8470)
8. 第41図10-R5(ネB8480)
9. 第41図11-R33(ネB8494)
10. 第41図12-R1(ネB8489)
11. 第41図13-R13(ネB8478)
12. 第41図15-R7(ネB8472)
13. 第41図17-R39(ネB8497)
14. 第41図18-R10(ネB8475)
15. 第41図19-R20(ネB8485)
16. 第42図1-R77(ネB8519)
17. 第42図2-R1(ネB8467)
18. 第42図3-R19(ネB8484)
19. 第42図4-R16(ネB8481)
20. 第42図5-R22(ネB8487)
21. 第42図6-R51(ネB8502)
22. 第42図7-R9(ネB8474)
23. 第42図8-R18(ネB8483)
24. 第42図9-R25(ネB8490)



図版22 菊池勇吉宅の調査 SK2270 土壙の出土遺物II(土師器坏: 1~23・土器坏: 24)

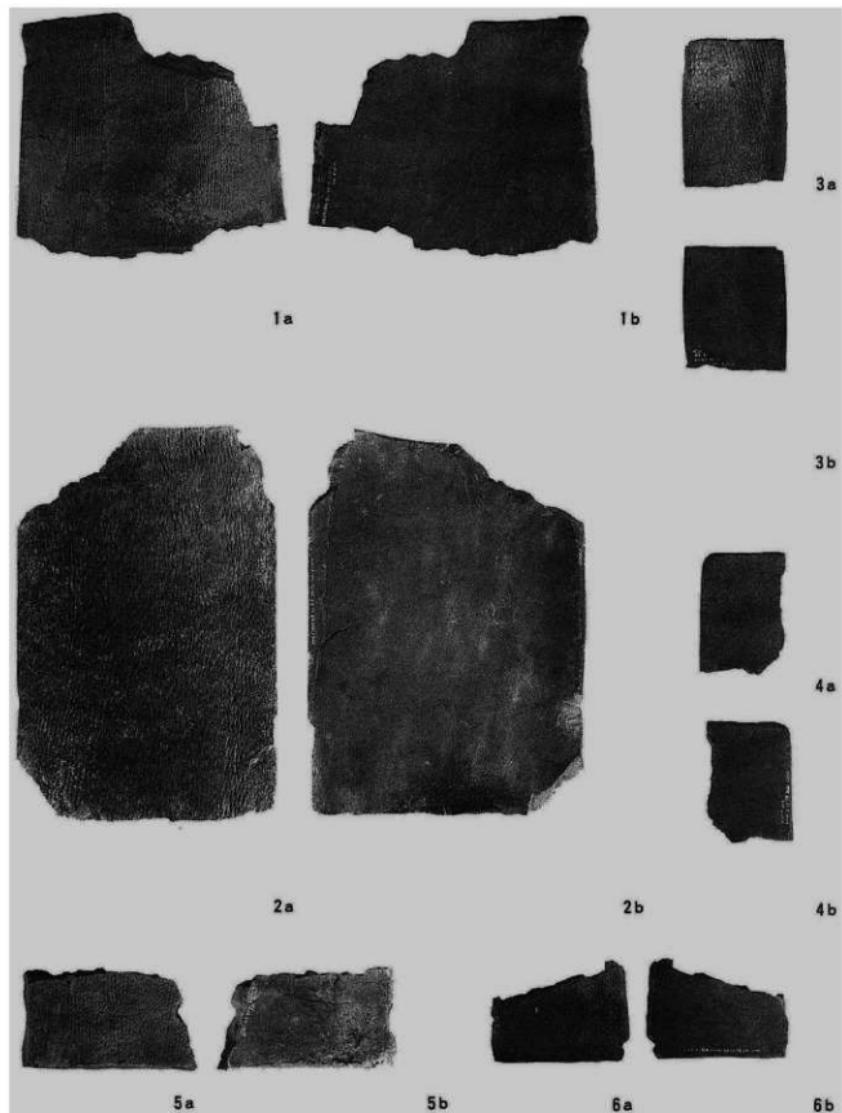
1. 第42図10-R11(ネB8476)
2. 第42図12-R65(ネB8513)
3. 第42図13-R37(ネB8496)
4. 第42図14-R65(ネB8471)
5. 第42図16-R21(ネB8486)
6. 第42図17-R8(ネB8473)
7. 第41図1-R40(ネB8498)
8. 第43図4-R61(ネB8510)
9. 第43図5-R29(ネB8492)
10. 第43図6-R64(ネB8512)
11. 第43図9-R35(ネB8495)
12. 第43図10-R4(ネB8469)
13. 第43図12-R26(ネB8491)
14. 第43図14-R55(ネB8503)
15. 第43図15-R60(ネB8509)
16. 第43図16-R71(ネB8517)
17. 第43図17-R70(ネB8516)
18. 第43図19-R3(ネB8468)
19. 第43図20-R17(ネB8482)
20. 第44図2-R23(ネB8488)
21. 第44図3-R66(ネB8514)
22. 第44図4-R58(ネB8508)
23. 第44図6-R56(ネB8506)
24. 第45図7-R42(ネB8500)



図版23 菊池勇吉宅の調査 SK2270 土壌の出土遺物Ⅲ

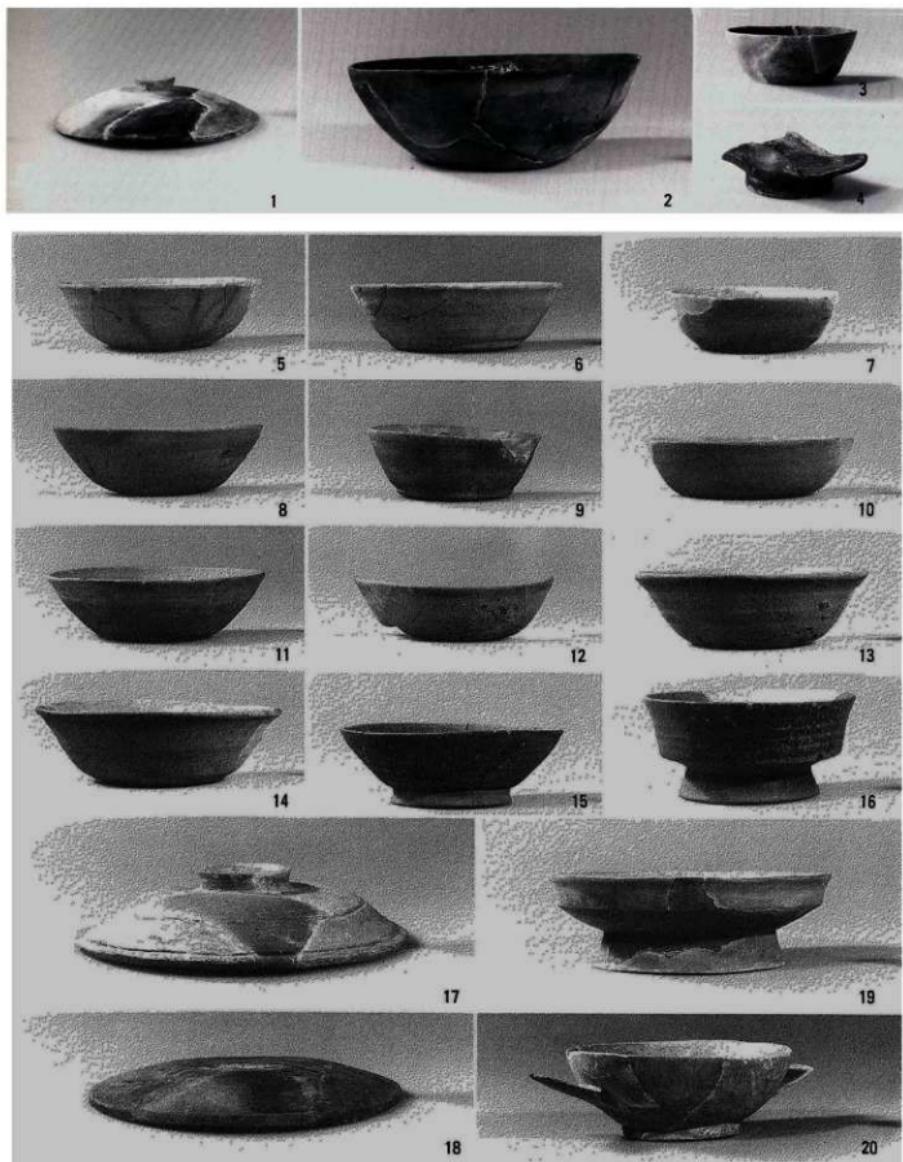
(土師器坏: 1・2、耳皿: 3、甕: 4・5、軒平瓦: 6、平瓦: 7・8)

- | | | |
|-----------------------------|-----------------------------|-----------------------------|
| 1. 第41図7-R12 (ネB8477) | 2. 第43図23-R72 (ネB8518) | 3. 第44図10-R43 (ネB8501) |
| 4. 第44図11-R52 (ネB8504) | 5. 第44図12-R51 (ネB8505) | 6. 第45図14-R97 (ネB8549-8557) |
| 7. 第45図16-R95 (ネB8574-8575) | 8. 第45図20-R89 (ネB8582-8583) | |



図版24 菊池勇吉宅の調査 SK2270 土壌出土遺物IV (平瓦IIIB類: 1・2、平瓦IIC類: 3~6)

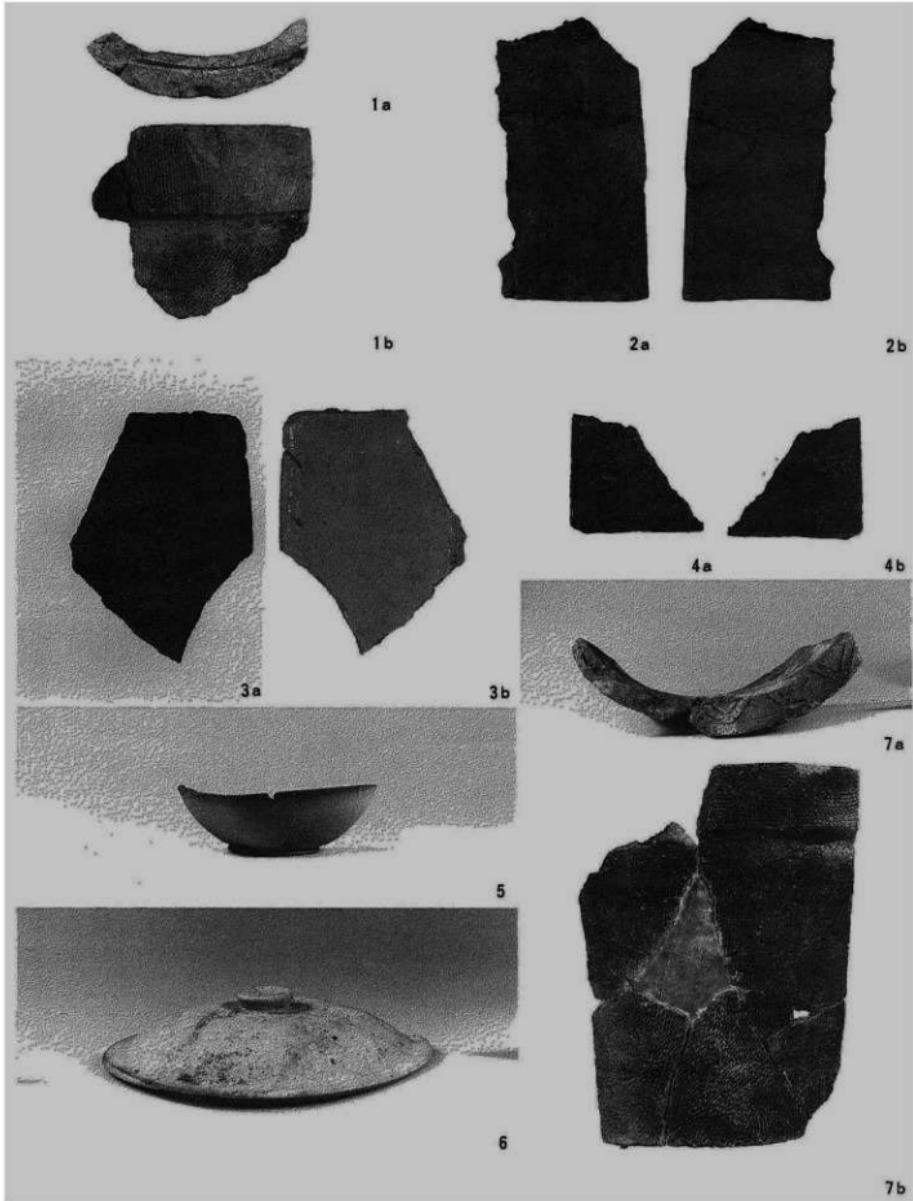
1. 第46図1-R99 (木B8584・8585) 2. 第46図3-R91 (木B8594・8595) 3. 第46図4-R94 (木B8588・8589)
4. 第46図5-R100 (木B8590・8591) 5. 第46図2-R92 (木B8586・8587) 6. 第46図6-R93 (木B8592・8593)



図版25 菊池勇吉宅の調査 SK2272 土壙の出土遺物 I (土師器蓋:1. 壺:2・3. 耳皿:4. 須恵器壺:5~14.

高台壺:15. 積塊:16. ミガキの須恵器蓋:17~18. 積塊19. 両耳壺:20)

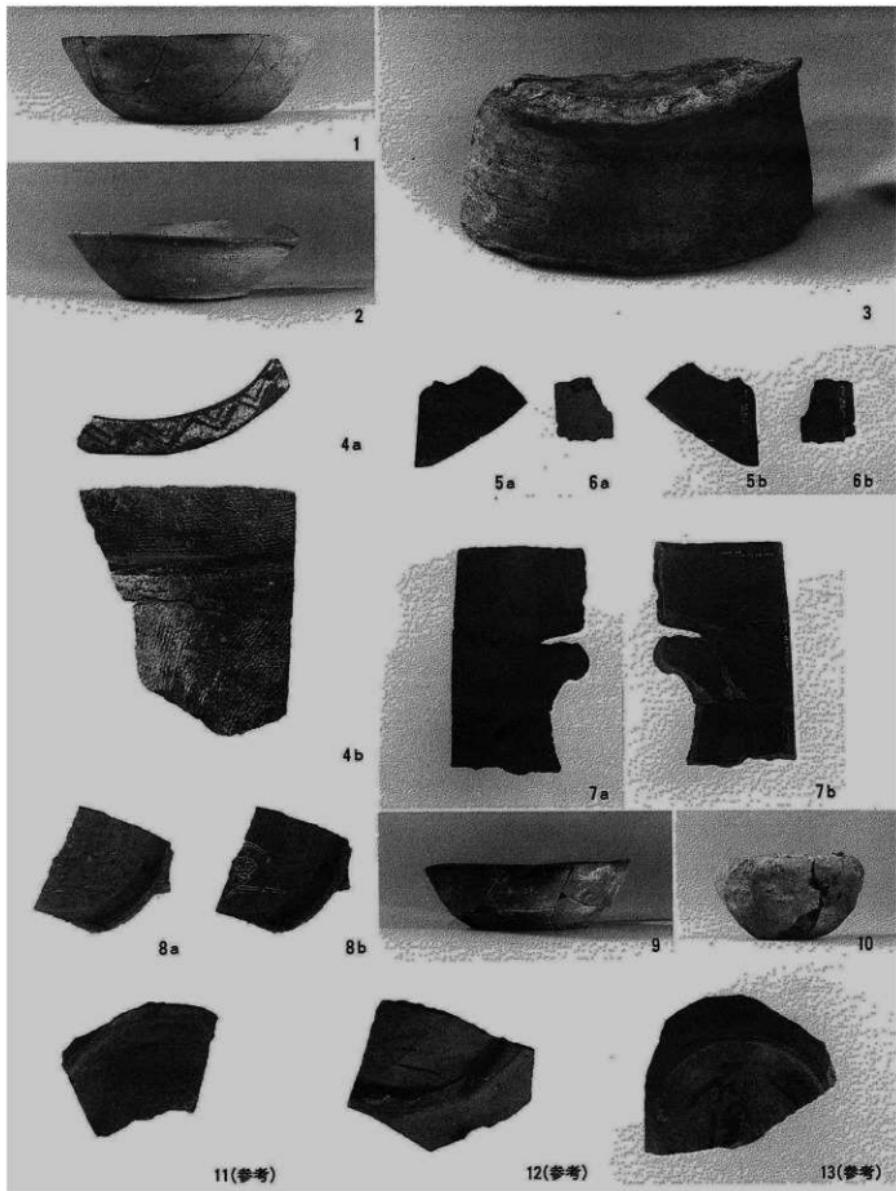
1. 第49図17-R60(ネB8539)
2. 第49図14-R61(ネB8540)
3. 第49図4-R69(ネB8538)
4. 第49図23-R58(ネB8537)
5. 第50図5-R9(ネB8527)
6. 第50図6-R11(ネB8529)
7. 第50図7-R10(ネB8528)
8. 第50図8-R25(ネB8536)
9. 第50図9-R13(ネB8531)
10. 第50図11-R20(ネB8534)
11. 第50図15-R12(ネB8530)
12. 第50図16-R21(ネB8535)
13. 第51図1-R19(ネB8533)
14. 第51図2-R18(ネB8532)
15. 第51図6-R8(ネB8526)
16. 第51図7-R7(ネB8525)
17. 第51図10-R1(ネB8521)
18. 第51図9-R2(ネB8522)
19. 第51図16-R3(ネB8523)
20. 第51図17-R5(ネB8524)



図版26 菊池勇吉宅の調査

SK2272 土壙(軒平瓦・平瓦: 1~4)、SE2273 井戸跡(ミガキの須恵器蓋: 6)、
SK2274 土壙(土師器高台坏: 5)、SD2275 溝(軒平瓦: 7)の出土遺物

1. 第52図7-R79(ネB8550・8559)
2. 第52図9-R80(ネB8803・8804)
3. 第52図11-R82(ネB8607・8608)
4. 第52図10-R81(ネB8605・8606)
5. 第56図13-R1(ネB8542)
6. 第56図11-R2(ネB8541)
7. 第56図15-R33(ネB8551・8561)



図版27 菊漣勇吉宅の調査 第3層(土師器壺:1、須恵器壺:2、須恵系土器高台鉢:3、軒平瓦:4、平瓦5~7)

第1層・遺構・層不明(ヘラ書き須恵器高台皿:8、土師器壺:9、埴塙:10)の遺物

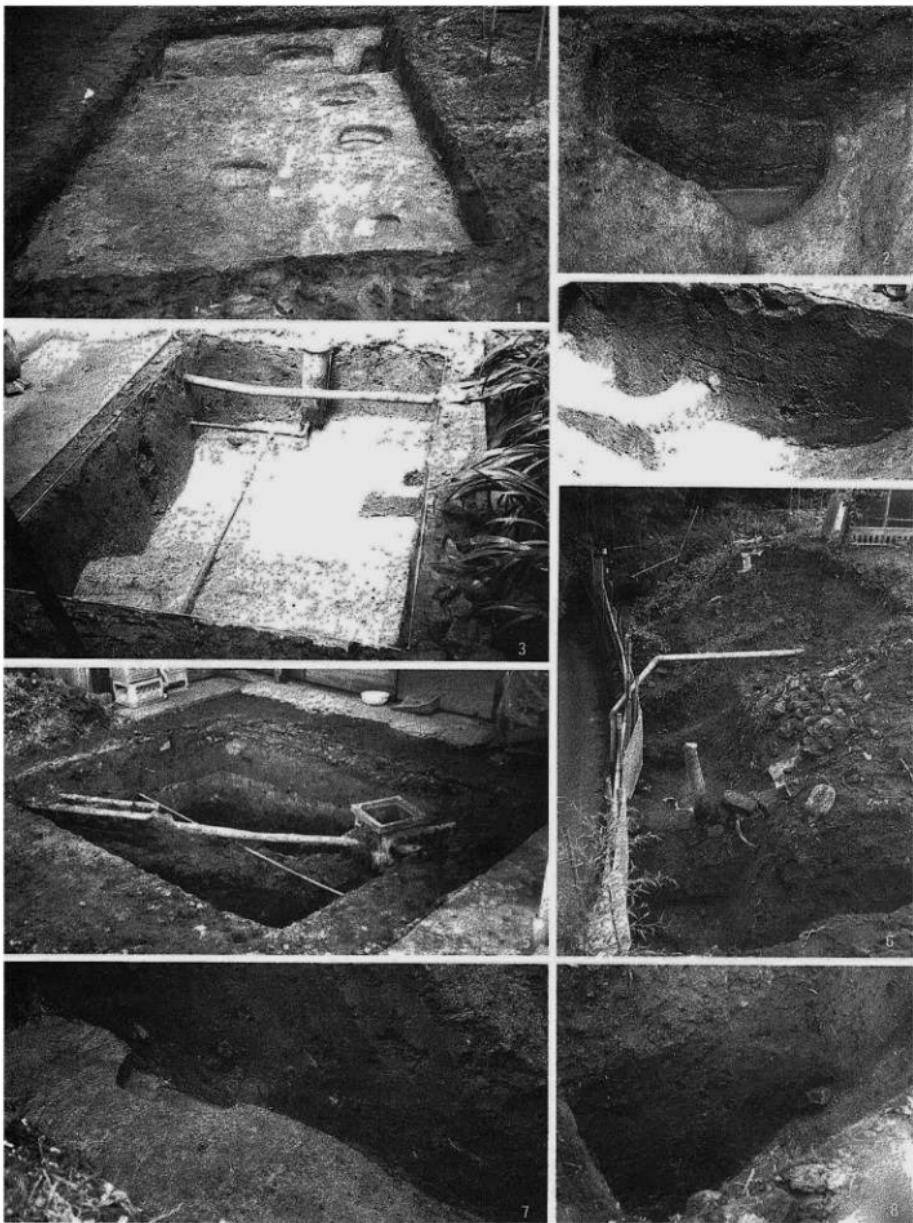
参考資料(赤井遺跡出土須恵器:11・12、SE2101B 井戸跡出土須恵器:13)

1. 第57図1-R27(ネB8544) 2. 第57図6-R1(ネB8545) 3. 第57図16-R3(ネB8520) 4. 第58図1-R49(ネB8522・8563)

5-6. 第58図2・3-R53・43(ネB8617・8618) 7. 第58図4-R11(ネB8613・8614) 8. 第59図5-R2(ネB8621・8622)

9. 第59図2-R7(ネB8546) 10. 第59図8-R5(ネB8543) 11. ヘラ書き「舍口」天本町赤井遺跡(ネB8633)

12. ヘラ書き「舍人」矢本町赤井遺跡(ネB8635) 13. 墨書き「石園」SE2101B 井戸跡-R12(ネB8638)



図版28 鈴木清任・菊池信一・佐藤ひさ子・菊池一夫宅の調査

1. 鈴木清任宅の調査区(ネG1549-14)
2. 同P.3柱穴(ネG1551-21)
3. 菊池信一宅の調査区(ネG1534-14)
4. 同P.1柱穴(ネG1535-19)
5. 佐藤ひさ子宅の調査区(ネG1535-20)
6. 菊池一夫宅の調査区(ネG1539-3)
7. 同西側調査区の柱穴(ネG1538-35)
8. 同東側調査区の堆積層(ネG1538-36)



図版29 佐藤秋雄宅の調査

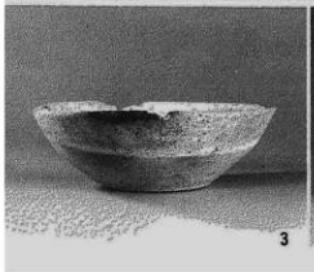
- (1. 発掘調査区全景 北西から(ネB8298)
2. 調査区北西部の柱穴断ち割り状況 南東から(ネB8299)



1



2



3



4

図版30 奏社地区の調査

1. 発掘調査区全景 南から(ネB8301) 2. SE2287 井戸跡 南から(ネB8303) 3・4. SE2287 井戸跡出土土器
3. 須恵系土器壺 第32図2-R3(ネB8547) 4. 土師器大型壺 第32図3-R2(ネB8548)

作貫地区
空堀露出展示
覆屋外観（北西から）

B8429



作貫地区
空堀露出展示
覆屋外観（西から）

B8430



作貫地区
空堀露出展示
覆屋内部（西から）

B8431





作貫地区
総合説明板

B8433



作貫地区
園路・木橋

B8438



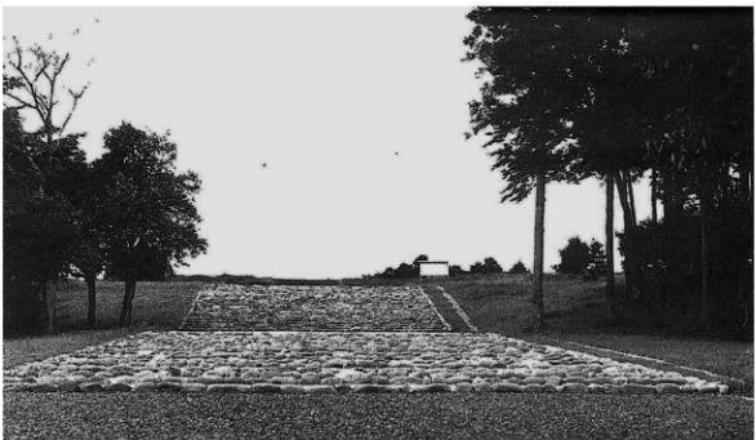
作貫地区
休息展望所（北から）

B8434

図版 33

政府南地区
政庁南面大路跡表示
(南から)

B5697



政府南地区
政庁南面大路跡表示
(南東から)

B8439



政府南地区
総合説明板

B8441





北辺地区
総合説明板

B8442



北辺地区
木道

B8443



北辺地区
オーバーデッキ

B8444

北辺地区
休息展望所（東から）



北辺地区
木道・展望デッキ



北辺地区
石敷広場・縁台
(南西から)





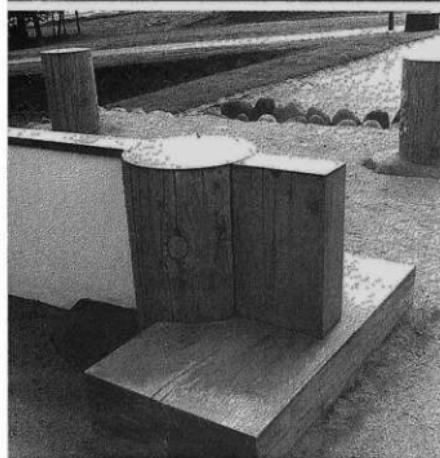
外郭東門・大畠地区
奈良時代の外郭東門跡
表示（西から）

B8450



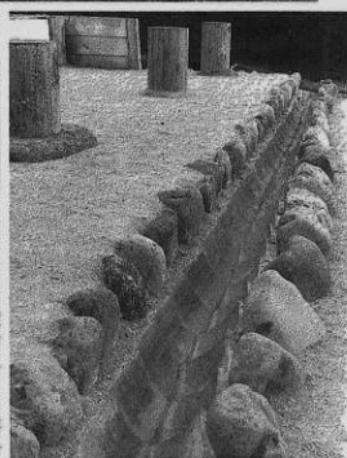
外郭東門・大畠地区
奈良時代の外郭東門跡
表示（北から）

B8451



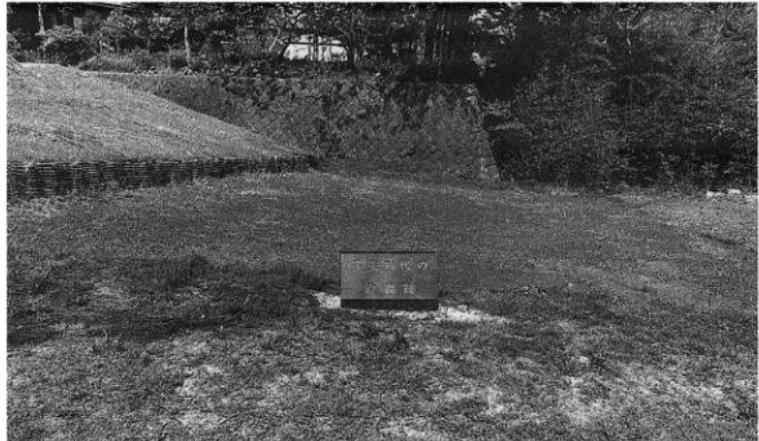
外郭東門・大畠地区
奈良時代の外郭東門跡表示細部

左 柱表示
B8453



右 瓦敷きの石組
溝表示
B8454

外郭東門・大畠地区
平安時代の道路跡表示
(西から)



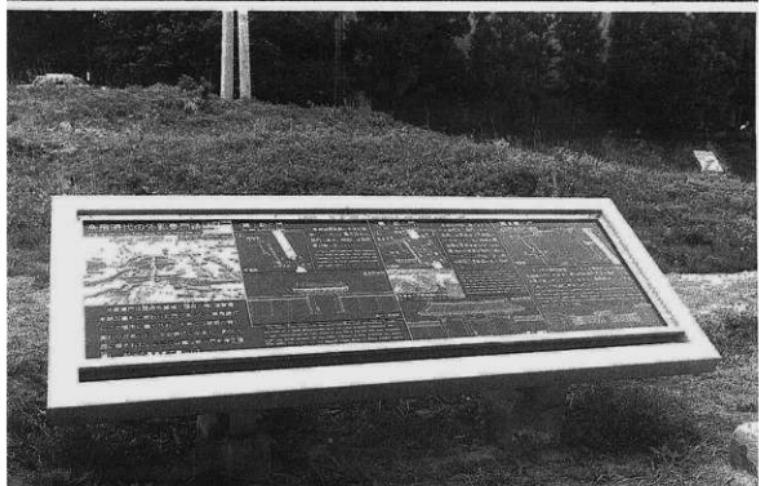
B8457

外郭東門・大畠地区
奈良時代の掘立式建物
跡表示



BS459

外郭東門・大畠地区
遺構説明板



B8455



外郭東門・大畠地区
公衆便所 (南東から)

B8461



外郭東門・大畠地区
あずまや (北西から)

B8462



外郭東門・大畠地区
誘導標識

B8464



緑釉陶器碗

宮城県多賀城跡調査研究所年報 1994

多賀城跡

平成7年3月25日印刷

平成7年3月31日発行

発行者 宮城県多賀城跡調査研究所
多賀城市浮島字宮前133
TEL(022)368-0101
印刷所 東杜印刷株式会社
